

THE INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE – ONE HUNDRED YEARS

国際オリンピック委員会の百年

The Idea - The Presidents – The Achievements

理念—会長—事績

I

デメトリウス・ビケラス会長（1894—1896）と
ピエール・ド・クーベルタン会長（1896—1925）の時代

イブ・ピエール・ブーロンニュ著

...

アンリ・ド・バイエーラツール会長（1925—1942）の時代

カール・レナンナルツ著

穂積 八洲雄 訳

国際オリンピック委員会

ローザンヌ 1994年

【翻訳版 PDF ご利用にあたってのお願い】

本 PDF ファイルのコンテンツは、IOC による「国際オリンピック委員会の百年」第 1 巻の和訳版であり、NP0 法人日本オリンピック・アカデミー（JOA）会員の穂積八洲雄氏のご厚意により、氏が IOC から著作権を許諾され、翻訳された作品を JOA 公式ホームページ上にデジタルファイルとして公開するものです。

本文を参照または引用される場合は、NP0 法人日本オリンピック・アカデミー公式サイト（<http://www.olympic-academy.jp>）デジタル・ライブラリー掲載、「国際オリンピック委員会の百年 第 1 巻」（穂積八洲雄訳）●●ページ等の文献註を付記していただくようお願いいたします。

【訳者による人名表記についての注記とお願い】

人名については世界各国の人物が登場し、英語版からだけでは正確な表記が分からない人も多くいます。日本でも知られている人については国士舘大学田原淳子先生、中京大学来田享子先生にご相談しましたが、その他の人については「国際オリンピック委員会の百年」の著者の一人で現在コブレンツェ・ランドウ大学スポーツ科学研究所所長のオットー・シャンツ博士に聞き、訳者がカタカナで表記したものです。IOC 関係者のあいだではこのように呼ばれているということですが外国人名表記についてはいろいろ難しい問題があります。識者のご指摘をいただいて改善できればと思っています。

英語版 ISBN 92-9105-007-5

1894-1994 - THE INTERNATIONAL OLYMPIC COMMITTEE -
100 Years - The Idea - The Presidents - The Achievements

Volume 1 English

英語版 著作権 国際オリンピック委員会 1994

和訳版 著作権 穂積八洲雄 2007

NP0 法人日本オリンピック・アカデミー公式サイトにおける PDF ファイル公開

第 1 章 : 2008 第 2 章 : 2011

国際オリンピック委員会の百年

目 次

ファン・アントニオ・サマランチIOC会長のあいさつ	1
序 言	2
略語のリスト	8
第1章	
デメトリウス・ビケラス会長(1894－1896)とピエール・ド・クーベルタン会長(1896－1925)の時代	
1. 1894年－1925年	10
1.1. 19世紀末の西ヨーロッパ	10
1.1.1 イギリス	11
1.1.2 ドイツ	12
1.1.3 フランス	13
1.2. オリンピック序論	15
1.2.1 伝統一現代性	15
1.2.2 近代スポーツとオリンピズム	18
1.2.3 神話、記憶、国内オリンピック大会	30
1.3. ピエール・ド・クーベルタン、十字軍戦士そして伝道師	37
1.3.1 彼の仕事の基礎	37
1.3.2 イギリスへの旅	42
1.3.3 アメリカとカナダへの旅	43
1.3.4 イギリスの同意を求めて	47
1.3.5 パリ kongress、1894年－オリンピックの復活	48
1.3.6 最初のオリンピック大会のための国際委員会の構成と組織	53
1.4. デメトリウス・ビケラス、オリンピック大会のための国際委員会第一代会長1894-1896	55
1.4.1 アテネの戦い、1894-1896	59
1.4.2 最初の果実、アテネ1896年	69
1.5. 少数の選ばれし仲間	76
1.5.1 同じ世紀の二人の師匠	77
1.5.2 中心的な仲間	81
1.6. 1914年以前の kongress とセッション	89
1.6.1. ミーティングーセッションー kongress 91	
1.6.2. 主題と副主題	91
1.6.3. 第2回オリンピック kongress — ルアーブル — 1897年	93
1.6.4. ブリュッセル kongress、1905年	98
1.6.5. 1906年－アテネセッション	103
1.6.6. パリ — 1906年5月	104
1.6.7. セッションと人	110

1.6.8.	ベルリン(1909)におけるIOC	111
1.6.9.	ルクセンブルグでの小休止 -1910年.....	113
1.6.10.	よいセッション、ブダペスト -1911年.....	114
1.6.11.	ストックホルム-1912年	116
1.6.12.	ローザンヌ、1913年.....	119
1.6.13.	パリ kongress -1914年.....	122
1.6.14.	1894年-1914年:総括.....	125
1.7.	大会と人について.....	129
1.7.1	パリ大会 -1900年.....	130
1.7.2.	セントルイス大会 -1904年	132
1.7.3.	オリンピックアテネ大会 -1906年.....	136
1.7.4.	ロンドン大会-1908年.....	138
1.7.5.	ストックホルム大会-1912年.....	140
1.8.	大渦巻きの中のIOC 1914-1918.....	142
1.8.1.	銃眼付き胸壁上のクーベルタン.....	142
1.8.2.	ローザンヌのIOC.....	147
1.8.3.	ゴッドフロア・ド・ブロネー -臨時会長.....	148
1.8.4.	スイスの現代オリンピック	151
1.8.5.	ローザンヌのオリンピック学院.....	152
1.9.	大戦直後の歳月	153
1.9.1.	書簡、1919年1月の総括.....	153
1.9.2.	ローザンヌセッション -1919年.....	155
1.9.3.	連合国競技大会	157
1.9.4.	アントワープセッション -1920年	158
1.9.5.	アントワープ大会 -1920年.....	161
1.10.	より民主的な方向へ.....	163
1.10.1.	国際競技連盟	164
1.10.2.	各国オリンピック委員会	166
1.10.3.	国内競技連盟.....	166
1.10.4.	執行委員会.....	167
1.10.5.	ローザンヌ -1921年.....	170
1.10.6.	地域大会.....	174
1.11.	狂った歳月 - 1919-1924.....	178
1.11.1.	第21回セッション、パリ -1922年.....	178
1.11.2.	第22回セッション、ローマ -1923年.....	180
1.11.3.	第23回セッション、パリ-1924年.....	183
1.11.4.	第八回オリンピックアードの大会-1924年	186
1.12.	プラハ1925年 -絶頂	193
1.12.1.	セッションと kongress.....	194
1.12.2.	永遠の春.....	204

第2章

アンリ・ド・バイエ・ラツール会長(1925—1942)の時代

2. アンリ・ド・バイエ・ラツール会長(1925—1942)の時代	206
2.1. クーベルタン、オリンピックの舞台を去る.....	206
2.2. バイエ・ラツール	208
2.3. IOCと執行委員会—構造的枠組み	213
2.3.1. メンバーシップ	213
2.3.2. セッション	215
2.3.3. 執行委員会	216
2.4. 女性の登場	218
2.4.1. 最初の女性陸上競技連盟	218
2.4.2. オリンピック大会における女性の陸上競技	220
2.4.3. <i>FSFI</i> の終わり	222
2.5. アマチュア問題	224
2.5.1. 憲章上のアマチュア	224
2.5.2. テニス連盟離反	226
2.5.3. 失われた収入の補償についてのIOCとFIFAの意見不一致	227
2.5.4. 「セミプロ」に対する戦い	230
2.5.5. スキーのインストラクター、ジムのマスター、スポーツライター、ステートアマチュア	231
2.6. オリンピック大会	234
2.6.1. 緒言	234
2.6.2. アムステルダム 1928年	234
2.6.3. ロサンゼルス 1932年	237
2.6.4. ベルリン 1936年	241
2.6.5. 東京／ヘルシンキ 1940年—開かれなかった大会	254
2.7. オリンピック冬季大会	256
2.7.1. 冬季大会の導入	257
2.7.2. サンモリッツ 1928年	257
2.7.3. レイクプラシッド 1932年	258
2.7.4. ガルミッシュパルテンキルヘン 1936年	259
2.7.5. 札幌／サンモリッツ／ガルミッシュパルテンキルヘン	260
2.8. 地域大会	263
2.8.1. 緒言	263
2.8.2. 極東大会	264
2.8.3. 西アジア地域大会	265
2.8.4. ラテンアメリカ地域大会	265
2.8.5. アフリカ大会	267

ファン・アントニオ・サマランチIOC会長のあいさつ

国際オリンピック委員会 (IOC) は、その歴史に捧げられた初めての作品『百周年を記念する本』の発行を心から喜んでいきます。

1894年6月23日、パリのソルボンヌにおいて、ピエール・ド・クーベルタン男爵はオリンピック競技大会を復興するための国際委員会を設立しました。第1回オリンピック大会は、オリンピズムの〈祖国〉アテネで、1896年開催されました。

スポーツと文化、体育と芸術を総合する近代オリンピックは、どのように発展してきたのか。それがこの本の主題です。ここには、オリンピック運動の発生から現在までが語られています。

オリンピック競技大会については、オリンピアドを重ねるたびにマスメディアの関心も高まり、これまで何十億という人たちに、しばしば、それも巧みな筆致で伝えられてきました。

しかし、この『百周年を記念する本』によって、氷山の隠れた部分がついに明らかにされました。ここには、平和と兄弟愛と連帯の理想の勝利のために情熱を傾けた人々の一世紀にわたる戦いのすべてが語られています。困難に満ちた一世紀でした。

単に語られているのではなく、永遠の現在として「生き返った」とさえいえます。

オリンピック運動が — オリンピックの旗の五つの輪に象徴されるように — どのようにして世界を征服したか。私たちの理解は、なお一層深まることでしょう。

一人の会長の時代から次の会長の時代へと、ちょうどリレー競技のように、指導者たちの人目に立たない仕事が続けられてきました。

長い年月の間にIOCによってつくられた委員会や研究グループ、管理運営業務など各分野における彼らの献身的な働きが、大学の教授や研究者たちの努力で、ついに日の目を見るに至りました。その客観性は推奨に値するものです。

私たちは、この本を誇りにしてよいと思います。この本は、この日常的な世界の中でオリンピズムが実際にどのように築かれてきたかを、生き生きと証言しています。

私は、IOC名誉委員でありIOC総務主事である同僚のレイモンド・ガフナー氏に、特別の感謝を捧げたいと思います。彼は、このプロジェクト全体の優れたコーディネーターです。そして、当然のことながら、この本はピエール・ド・クーベルタンに始まる391人のIOC委員に捧げられています。この391人が今日のわれわれ、今日のオリンピックをつくったのです。

1994年 ファン・アントニオ・サマランチ
IOC会長

序 言

レイモンド・ガフナー

IOC名誉委員・総務主事

国際オリンピック委員会 (IOC) のフアン・アントニオ・サマランチ会長は、この本の最初のページで、391人の人々が今日のIOCを形づくったことを強調している。

IOCの百年の歴史は、結局のところ、さまざまな出身、背景、職業、気質の、それぞれ長所と欠点、光と影を持った男たち — 最近は女性も含まれる — の歴史である。この歴史は、これまでも数多くの本や研究、論文などの対象となった。その中には優れた作品も多い。しかし、残された文献 — これについては、各著者の本文の最後に参考文献として挙げてある — に加えて、いまだに整理の終わっていないIOCの膨大な文書、とりわけ1921年に設立された理事会 (EB) の未公開の議事録などに基づいた組織的な分析の対象になったことはなかった。

そのため、1990年、IOC会長は、この新しい — しかし、この上もなく重要な — 作業に当たる研究者のグループを指名し、IOCの百年史の編纂という使命を託した。作品を形成する三つの巻のうちの第1巻の発表は、1994年6月23日、パリのソルボンヌにおけるIOC創設百周年を記念する式典に合わせて行われることになった。

作業グループは以下の人々で構成された。

- イブ・ピエール・ブーロンニュ教授 (フランス)
- ファーナンド・ランドリー教授・博士 (カナダ)
- カール・レナーツ博士 (ドイツ)
- オットー・シャンツ教授・博士 (ドイツ)
- マドレーヌ・イエレス準教授 (カナダ)
- ノルベルト・ミュラー教授 (ドイツ) — コーディネーター

作業を始めるにあたって、このグループは主な目標を以下のように定めた。

- 高レベルの歴史的資料に立脚し、時代の流れに沿った世界の変化の枠組みの中にオリンピックの組織を位置づけること。
- 学問的成果を読みやすい形にまとめること。

しかし、どんな場合でも、参考資料による裏づけには限界がある。

第一に、資料は常に不完全だからだ。資料の多くは、綿密な研究にもかかわらず、必ずしも期待に応えてくれない。また、事実を部分的にしか記録してないものもある。

議事録をとったり調べたりしたことのある人ならば、だれでも知っていることだが、時として、記録に書いてある事柄と同じように、書いてない事柄にも重要な意味がある。

どんな組織の場合でも、その歴史には舞台裏や横顔がある。記述されている出来事の政治的、社会的、経済的背景を描くことなしに、歴史は完全なものとはならない。

そういうわけで、心からの感謝を作業グループのメンバーに捧げたい。

私は、4年間、このグループの委員長を務めながら、皆が、粘り強く、情熱的に、科学的に、腕の冴えを見せながら、研究を進めていくのを見てきた。それぞれの背景が違ってもかかわらず、目的に対する共通の意識、何としても成功させようという一つの意欲、そして彼らのチームスピリットは、まことに称賛に値するものであった。

研究調査を容易にし、スピードアップするために、グループのメンバーはその同僚たちにも協力を求めた。彼らは快くそれぞれの専門のテーマに光を当てて貴重な貢献をしてくれた。このことに對しても、心から感謝したい。

私は、しばしば縁の下の力持ち的な仕事をしてくれたIOCスタッフのことに言及したい。彼らは自分たちの専門知識を提供し、この膨大で複雑な作業のために献身してくれた。彼らは多くのものを与えてくれたが、同時に多くを学んだことも疑いのないところである。私は、とくに次の人たちの名を挙げたい。アルファベット順に、パトリス・ショレー、ベティー・ギニャール、ミシェル・イラシャバル、ミシェル・ベイヤー、カレル・ヴェンデルである。

プリントやグラフィックスの専門家、ローザンヌのレユニ印刷所の協力者やパートナーにも感謝したい。彼らこそ、この作品 — 今、皆さんが手にしているのが、その第1巻だ — を立派に仕上げてくれたのだ。

最後に、どれほど多くを翻訳者に負っているかを強調しなければ、まったく公平を欠くことになるだろう。シャンタル・ジェムリの率いるIOCチームの翻訳者も、外部の翻訳者も、ともに重要な役割を果たした。実際のところ、原稿の多くはドイツ語で書かれていたが、本はIOCの公用語であるフランス語と英語で出版される。

われわれは、IOC翻訳部のルース・グリフィスに多くを負っている。彼女は、フランス語とドイツ語からの英訳と校閲をほぼ一手に引き受けたが、その能力は抜群で、しかも微笑みを絶やすことなくテキパキと対処した。英語版の読者は、彼女の仕事の素晴らしさを分かってくれるにちがいない。

IOCが作業グループと最初に合意したプランでは、4人の著者の記事を収めた2つの巻と、専らIOCの歴史のさまざまな側面に関する興味深い記事を集めた別冊としての第3巻が、同時に出版されるはずだった。

この計画は、1994年の初めに — つまり、かなり差し迫ってから — 変更された。実は、1993年12月、ランドリー教授が突然重病に倒れたのである。ランドリー教授は1972年から1994年までの時代を担当していた。教授は大手術を受け、執筆の時期が長い回復期に重なってしまったので、当初の計画のように、1994年夏に三つの巻を同時に発行することは不可能になってしまった。

IOC百周年の祝賀行事の枠組みの中で、この事業が相応しい座を占めることができるように、

最初の二つの巻だけを1994年の夏に発行し、1972年から1994年について部分は、1994年から1995年にかけての冬に出版される第3巻に収めることにした。

第2巻は1942年から1952年までの時代(レナールツ教授)と、1952年から1972年までの時代(シヤンツ教授)を、また第3巻は1972年から1994年までの時代(ランドリー教授とイエルレス教授)をあつかう。

別冊の発行があまり遅れないようにするために、別冊の記事を三つの巻に分割して掲載することにした。そういうわけで、最初の二つの巻で論じられている主題に関する補足記事は、それぞれの巻に付け加えられる。

非常に幸いなことに、ランドリー教授は、最初の段階から、マドレーヌ・イエルレス博士・教授の卓越した協力を得ることができた。イエルレス教授は自分自身の計画を思い切って変更し、歴史に関する知識と才能がIOCに一層完璧に役立つようにしてくれた。

このことに対して、われわれは心から感謝したい。チームの全員も、ランドリー教授が、同僚の協力を得て、担当する仕事を完成できるよう、必要あれば、喜んでイエルレス教授を助けた。

この偶然の事態のおかげで — 不幸中の唯一の幸いだが — ランドリー教授は、1994年6月23日という記念すべき日の当日まで、研究を続けることができた。

さらに、サマランチ会長も、もし望むなら、1994年のパリコンgresにおける議論についての最終意見を載せることができるようになった。

一つのプロジェクトを5人の著者の共同作業によって行うことは、たとえチームのメンバーが頻繁に意見交換をしても、微妙な問題を提起する。

第一に優先しなければならないのは、それぞれの著者の当然の自由を尊重することである。彼らは、自分が担当した記事に責任を負っている。しかし、歴史に対してどのようにアプローチするかについて、研究者の感性の違いを計算に入れておくことも必要である。

もちろん、われわれの仕事はIOCの百年の歴史に捧げられたものであって、それを差し置いて7人の会長の歴史に捧げられたものではない。

しかし、それぞれの会長の個性が物事の扱いに決定的な役割を演じているとき、どこに一体これを分ける線が引けるだろうか。

最も顕著な例は最初の時代、ピエール・ド・クーベルタンの時代である。

この時代、しばしば孤独な、誤解され、時代の流れに逆らった一人の男が、やがて近代オリンピックとなるものを考え出し、創造し、生かし、守り、発展させたのだった。

彼は、いかなる障害もものともせず、四半世紀以上にもわたって、彼に課せられた仕事を担い続けた。最初のころは、ある程度の混乱も避けられなかった。すべてを新しく考え出さなければならなかった。組織が未熟で、財政的な裏づけを持たず、行政当局の支持も全然ないIOCは、クーベルタンの卓越性と欠点の入り交じった予言者的な決意と、全き献身によって生き残ったのであ

る。

この初期の段階を描くには、研究者が研究対象と一体化することが不可欠だった。

ブーロンニュ教授は、このことを深く理解していた。

教授はクーベルタンの歩んだ道を辿り、テーマに内側から光を当て、時にはクーベルタン自身になり、自己をクーベルタンと同一視するよう試みた。このアプローチは、著者にとってもテーマとしても、恐らく最も相応しかったのだろう。

ブーロンニュ教授のテーマは、IOCの波瀾に満ちた青年期を生き生きと蘇らせることだったからだ。クーベルタンが、まだ人が足を踏み入っていない道の可能性を探る〈斥候兵〉（クーベルタン自身が使った表現）としての冒険を続けていた時期である。

しかし、明白なことが一つある。どの時代にも、その時代特有のスタイルがある。

1925年、クーベルタンが去ったあと、オリンピックは変わり始めた。その時以来、IOCは理事会（EB）という形の〈政府〉を持つようになった。

1921年、クーベルタンの冷やかな同意のうちに発足したEBは、ゴッドフロア・ド・ブローネー議長（クーベルタンはこの職を望まなかった）のもとで、直ちに成功を収めた。

クーベルタンのオリンピック競技は、華々しい成果を挙げた。いまや世の尊敬を集めるようになったIOCは、しっかりした構成を持つ組織として徐々に発展し、継続性を重視し、社会のなかに確実に根を広げていった。そして、虚構の相手ではなく、しかるべき具体的なパートナー（国際競技連盟、各国オリンピック委員会）との間に、安定した関係を築くことが可能となった。

カール・レナーツ博士は、この第1巻で博士が担当する1925年から1942年までの時代（バイエラツール会長の時代）にIOCの内部で起きた変化を、完全に把握している。博士は、ますます政治の揺さぶりに直面するようになったIOCの紆余曲折に富んだ歴史の隅々まで、研究者としての記憶力と飽くことを知らぬ考証に裏づけられた、正確で、厳密で、わずかの隙もない、確かな洞察力をもって見渡した。

この第1巻に肩を並べている二人の著者が、それぞれの仕事を通じて示された、こだわりのない広い心と互いに尊重し合う気持ちに、私は大きな喜びを感じている。それはこの作業をすすめるわれわれを大いに鼓舞した。なぜなら、これこそが、IOCが近代オリンピズム百年を祝うにあたって頼りとすべき、最も確かな価値だからである。

われわれがIOCから与えられた任務を果たせたかどうかを問うのは、まだ早すぎる。それに、その問いには読者が答えるべきだろう。

しかし、この一連の作品は、われわれの前に一つの基本的な疑問を提起した。そのパートナーとともに最大の重みを持つ社会的存在となったIOCは、そのまま存続できるのだろうか。存続するだけにとどまらず、影響力を増大させることさえも可能だろうか。

この目的のために、その歴史を彩ってきたプラスやマイナスの教訓を全面的に役立てることはできるのだろうか。そして、とどのつまり、この目的を達成することの根本的な意味は何なのだろうか。

私の意見では、その鍵は、人間社会に奉仕する際にIOCが示してきた独立性、独創性、有効性の強さにあると思う。

この救いがたい世界の中で、オリンピックを象徴する五つの輪が、真に確信と希望の光を放ち続けるならば、その影響は計り知れないものがある。

虚しい言葉だろうか。そうかもしれない。そうでないことを証明する責任は、われわれの肩にかかっている。

サマランチ会長が言及した391人のIOC委員の半数以上を、私は個人的に知っている。だから、私にとって、IOCの百年の後半の歴史は、彼らの顔、彼らの声、彼らの振る舞いと切り離すことはできない。1994年3月の『オリンピック・レビュー』に以下の文章を書いたとき、私の心の中にあったのは彼らである。

「すべての人間には、限界がある。しかし、ごく限られた稀な瞬間かもしれないが、仲間助けられて、自分の限界を超えることができる。だから、ある種の状況が創り出されたならば、集団は構成員の総和よりもよい仕事を行うことができる。仲間の中にいれば、自分自身を超えることはたやすい。

私は、このことをIOCの中で何度となく確かめることができた。これは、IOC委員が就任の際に述べる誓いの言葉と、無関係ではないだろう。

そもそもの始めから、IOCは、IOC委員がその義務を果たす際に、自分自身を超えようとする気持ちに目覚めるよう、また、その機会を持つように意図してきた。すべての人間社会は、その弱点と欠点を持つことを理解していたからである。

クーベルタンは、常に、歴史的な新委員選出システムを守り、それから利益を引き出すために闘い続けた。クーベルタンは『IOC委員は、それぞれの国や競技団体の中でIOCを代表するのであり、その逆ではない』という立場を堅持してきた。

クーベルタンはIOCをつくる際に、躊躇なくいろいろな身近な例を参考にした。

その中には、ヘンリーレガッタ委員会も含まれている。これは、クーベルタンにとって好結果をもたらした。

今日、われわれも、伝統維持への配慮と変化への意志との間の実り豊かなバランスを十分にとった上で、われわれの政策をよりオープンな考えを反映するものにすべきかどうかよく考えてみる必要がある。

これを達成するには、IOCの構成を現代社会の基本的な構造に遅滞なく適応させなければならない。そして、これまでの新委員選出制度の利点と、オリンピックムーブメントの中で活動する他の勢力を結び付ける、新しい委員選出制度を考え出さなければならない。」

伝統維持への配慮と変化への意志、この野心的な政策実現へ向けての一つ一つのステップが、この作品のページに記録されている。オリンピックの世界は、そこから靈感を引き出すことができるだろうか。これに対する確かな答えはない。しかし、われわれは、既に百年を経た意志—成し遂げようとする意思—が存在していることを知っている。

この意思は、未来の歴史に刻印を残すことのできるほど強いものであろうか。過去に起こったことについての知識は、IOCの次の世代が答えをつくりだしていくうえで助けとなってくれるにちがいない。

略語のリスト

AAA	アマチュア体育協会
AAC	アマチュア体育クラブ
AAU	アマチュア体育連合
EB	理事会
EC	執行委員会
FIFA	国際サッカー連盟
FIG	国際体操連盟
FINA	国際水泳連盟
FIS	国際スキー連盟
FISA	国際漕艇連盟
FSFI	国際女性スポーツ連盟
FSFSF	フランス女性スポーツクラブ連盟
IF	国際競技連盟
ILTF	国際ローンテニス連盟
IOC	国際オリンピック委員会
ISU	国際スケート連盟
NOC	国内オリンピック委員会
NSDAP	国家社会主義ドイツ労働者党
USFSA	フランス競技スポーツ協会
YMCA	キリスト教青年会

デメトリウス・ビケラス会長(1894－1896)と

ピエール・ド・クーベルタン会長(1896－1925)の時代

バルドマルヌ県クレティユ市(フランス)

パリ大学教育学部研修研究科

イブ・ピエール・ブーロンニュ名誉教授

1. 1894年—1925年

1.1. 19世紀末の西ヨーロッパ

18世紀末にスコットランドで始まった経済変革は、伝統的に農業の地だったヨーロッパ大陸に急速に広がっていった。

産業革命は新しい生産方式を生み出し、文明に新しい視野を開き、新しい政策をもたらした。資本主義の出現と共に、1789年のフランス革命が引き起こした文化的衝撃波は、経済の面にも浸透し始めていた。

科学が進歩への道をきり開き、国際貿易がすぐにも平和な世界を実現してくれるように見えた。由緒正しい人々と尊敬すべき国々によって成し遂げられることに限界があるようには見えなかった。

昔ながらの農民国家では、住み慣れた土地を追われた人々が、大波のように国を揺るがしていた。鉄工場主や工場主のくびきのもとにある惨めなプロレタリアートが、屋根裏部屋や路地の奥の空き地などで、折り重なるようにして暮らしていた。

マルクスは、そのロマンチックな唯物論的社会主義を象徴する具体像として、この飢えに苦しみながらも決意に満ちて立ち上がったプロレタリアートを利用した。

技術革新は、搾取された農民労働者を、時代の波にもてあそばれる冒険者に変えようとしていた。激動期には、この種の悲劇的な社会の動揺が必ずといっていいほど起きる。

歴史が大きく展開しようとしていた。

ヨーロッパは、イデオロギーと経済の十字軍の先頭に立ち、前進と後退、征服と〈武装した平和〉によって、消すことのできない刻印を地球上に残すことになる。

工業化の波は、まずイングランドと大英帝国に広がってアングロサクソンの世界を形成し、ついでヨーロッパ大陸をのみ込み、日本やアジア、そしてアフリカ、オセアニアをも征服する。

1911年、ヨーロッパは世界貿易の押しも押されもせぬリーダーだった。イギリスは最大の植民国家であり、最強の貿易国家だった。ヨーロッパの科学、文学、文化は、比肩するものがなかった。至るところで、初等教育 — フランスの場合は義務教育になり、宗教の手を離れていた — が著しく普及し、それなりの成功を収めていた。

機械を扱うには、読み書きができなければならない。それは人間としての尊厳を保つためばかりでなく、啓蒙の時代の要請でもあった。

中等教育は上流階級の特権だったが、それは〈古い連中〉 — 古典的な人間関係の信奉者 — と、教育を民主化して資本主義的な生産に適応させようとしようとする〈新しい連中〉 — 台頭する小市民階級の息子たち — の対抗の場でもあった。

進歩は一樣ではない。経済や産業の発展の度合い、長年の習慣、文化の伝統などを反映し、

国によってニュアンスが異なる。

イギリスの高校教育は、若者に進取の気性を植えつけるため、学内に閉じこもりがちな若者を、団体を通しての協力や慈善事業などに引き出し、実社会の空気を吹き込もうとした。これにはスポーツが大きな役割を果たした。

フランスの高校は陰鬱で、まだナポレオン時代の束縛から解放されていなかった。

プロシヤ時代の伝統を受け継ぐドイツの高校《ギムナジウム》は、早い時期に科学教育や技術教育への扉を開いた。労働組合や教会、社会運動などの呼びかけに応じて、成人教育や一般人を対象とするクラスが至るところに設けられ、夜の講座や図書館が開かれた。途方もない情熱に駆られて、インテリは民衆に引きつけられた。世紀末、ヨーロッパのインテリは度量が大きく、ユートピアンでもあった。ヨーロッパは強力で、その創造的分野はダイナミックだった。旧大陸は世界をリードしていた。

しかしながら、この力は脆弱な土台の上に載っていた。ヨーロッパの民族と文化の多様性は、その豊かさと魅力の源泉だが、ナショナリズムの悲劇的な病の原因でもある。

昔から続く英仏両国の争いに、英独の紛争が加わった。

バルカン情勢はロシアの汎スラブ主義と重なり、一段と複雑になっていった。

アフリカでは、植民地獲得が敵意をあおった。ヨーロッパの〈武装した平和〉は、虫に食われたボロボロの衣服を身にまとい、次から次へと危機に遭遇しながら、あのサラエボの運命の日に向かって進んでいく。

1914年を迎える前夜、互いの貿易上の利害が緊密に絡み合い、その文化が極めて似ているにもかかわらず、そして、著名人や雄弁家たちが強調する一体性にもかかわらず、ヨーロッパは、文化的にはバラバラで、政治的にも統一性のない国と民族の集まりであった。

近代的なオリンピックとスポーツ振興へ向けてのムーブメントは、このように肥沃で極めて対照に富んだ西ヨーロッパ — 特に英独仏の3カ国 — の土壌から生まれた。

1.1.1 イギリス

19世紀、大英帝国はビクトリア女王の治世下にあり、その最盛期を迎えていた。

わずか百年の間に、イギリス本国の人口は1,000万から3,700万に増えた。

ブルジョアの子弟はパブリックスクールに入り、政治権力を求めるようになっていた。

王室は人気があった。ロンドン在住のマルクスは、労働者を押しつぶす資本の身勝手さを糾弾していたが、リベラルな議会制政治と伝統的な人身保護令への尊敬が、社会的なバランスを保っていた。港湾労働者や鉱山労働者、工場労働者にとって、社会は不安定だったが、資本主義の生産体制を周期的に襲う危機が、不安定の度合いを一段と強めていた。

イギリスにとってかかとに刺さったトゲのようなアイルランド問題は別として、経済力のある地主と中産階級は快適な生活を送っていた。彼らにとっての快適な生活の中には自然の中での遊びやスポーツも含まれていた。

伝統的な文化活動に、パブリックスクールで身につけた近代的なスポーツが加わった。やがてスポーツは仲間集合の合図となり、権力の象徴となる。

イギリスの中産階級は“功利主義”の正当性と神の存在を信じていた。それ故、フットボールの素晴らしさ、女王の偉大さ、そして帝国の将来に対する彼らの信念を、何ものも揺り動かすことはできなかった。

何事も自分たちの権利だと思い込み、その商才と艦隊を誇りとしたイギリスは、世界征服に乗り出した。広さにおいて世界一の植民地帝国に加えて、北アメリカ、ニュージーランド、南アフリカ、オーストラリアからなる巨大なアングロサクソン支配圏の形成は、イギリスの経済と文化の拡張を示すものだった。

イギリス人の海外移住は帝国主義的で、良心の呵責のかけらも見られなかった。

まさにイギリスの愛国歌『ルール・ブリタニア！』（ブリタニアよ、統治せよ！）そのものである。人々の心にあったのは、富と冒険と自由に満ちたアングロサクソンの世界のイメージだった。

少数民族迫害や、官憲や政治の抑圧、そして貧困に追われ、黄金郷や自由の夢に引きつけられて、古いヨーロッパからの移住者たちは未開の処女地へと急いだ。

未開の地に群がった彼らはオールドボーイと称される先輩たちや、聖書というイデオロギーに身を固めた聖職者に助けられて、新世界を築いた。

歴史的に先例のないことだが、ヨーロッパは、自分自身のイメージによって、海の彼方に文化の出島を創ったのである。この出島は、土着の文明に時には拒否され、時には吸収された。ヨーロッパを中心に据えた帝国主義的な19世紀は、1945年以後に反植民地闘争となって爆発する爆弾の萌芽を、すでにその中に含んでいた。

ナポレオン戦争によって生まれたばかりのベルギーとオランダでは、議会制君主制の展開がイギリスと驚くほど似ていた。ベルギーとオランダの産業人は、自由交易と植民地征服の先駆者、熱心な旅行者の先達として大きな可能性に恵まれていた。働き者で強固な意志をもつ彼らは、大きな河川の河口に位置し、鉱山資源に近いという地理的な利点をフルに活用した。しかし、この家父長的な反動的な雇い主は、やがて、よく組織され闘争心に満ちた港湾や鉱山や工場などの労働者の反抗に遭遇しなければならなかった。

1.1.2 ドイツ

ドイツは、19世紀の後半、その統一を固めるのに懸命だった。

ドイツの統一は、地域的な排他主義の中から、難産の末に生み出されたものだった。

ドイツ人としての国民意識は、歴史と学問の力に支えられて形成された。やがて、ナショナリズムの目覚めは、リベラルな運動よりも力を得るようになる。

締めつけの厳しい関税同盟と、急速に発達したドイツ横断鉄道の路線網が、ドイツを事実上の統一国家へと導いた。矛盾に満ちた政治状況の中で、絶対主義が自由主義と張り合った。そして、ある種の自由主義が民主主義の台頭を妨げた。

プロイセンは、支配下に置いた関税同盟を通じて経済関係を支配し、1848年以降はドイツを産業革命へと導いた。1862年、ビスマルクが首相に就任した。

1866年7月3日のサドヴァの戦いは、プロイセンの軍事力をヨーロッパと世界に見せつけたが、それ以上に、プロイセンの工業力と優秀な鉄道存在を誇示した。

1870年戦争の結果、1871年1月18日、ベルサイユ宮殿の鏡の間で、ドイツの統一が宣言された。50億ゴールドフランに達する天文学的な賠償金と、アルザスとロレーヌの一部（ベルフォールを除く）の割譲、最恵国待遇などを定めたフランクフルト協定（1871年5月10日）によって、ヨーロッパにおけるフランスの覇権は、事実上、終わりを告げた。

この結果、ドイツは列強に名を連ね、ビスマルクの武装平和体制が確立した。人々の心を第1次世界大戦（1914～1918）の大動乱へ向けさせる下地づくりだった。

1.1.3 フランス

フランスは、まず敗戦に直面し、次いでパリ・コミューンの蜂起（1871年3月28日から5月28日まで）に見舞われた。最初のハードルは容易に越えられたが、2番目のハードルは難度が高く、精神的にも政治的にも深刻な影響を残した。

パリや幾つかの都市にとって、パリ・コミューンは社会主義のあらゆるユートピアの結晶であり、愛国心に燃える未組織の下層階級の人々を一致団結させた。

蜂起した人々は社会の秩序を転覆しようとしたが、行政長官ティエールの〈血まみれの一週間〉と呼ばれる弾圧により、蜂起は失敗に終わった。

奇異なことだが、地方ではパリ・コミューンと敗戦とが同一視された。地方の住民にとっては、国家間の対立だけが問題なのだ。

1814年と1815年の危機とは、まったく事情が異なっている。あの時は、革命と旧体制（アンシャン・レジーム）という二つの政治思想が、武力衝突を引き起こした。

フランスの政治勢力は、たとえ政治的には激しく対立していても、共通の敵を前にすると、その対立については沈黙した。「記憶にある対立よりも、もっと遠い昔を見つめなければならない」ということである。臨時政府は、国家再建に大きな努力を傾けた。

それにもかかわらず、蜂起による傷は血を流し続けた。フランス革命は、コミューンの終焉とともに、この国の歴史の歩みに別れを告げたが、その記憶は有産階級の心から永久に消えることはなかった。彼らにとって、革命は絶対悪の権化である。

残忍な、時には流血を伴う対抗手段も、社会主義 — 過去、現在、未来を問わず、いかなる姿の社会主義であれ — に対する戦いでは正当化された。

しかし、一見皮肉なことだが、外国軍隊による王政復活への恐怖が、穏健な共和国の出現を促した。1815年の王政復古直後の悲劇的な白色テロの記憶と、傷つきながら固く結ばれている国民の真剣な集団心理に押されて、王党派と共和派はしぶしぶ手を握った。

ブルボン家、オルレアン家、ボナパルト家の支持派は、後継者問題で互いに対立していたが、共和制や道徳的な秩序の維持には賛成で、1870年以降、その点では手を結んだ。

当時の世相は、リベラルな星雲のように混沌としていた。当初は単なる行政概念だった共和制は、相次ぐ危機と事件 — 最も深刻なものは「ドレフュス事件」だった — の中で、政治の形態として考えられる唯一の体制になっていった。共和国は、フランス革命の旗印のもと、人々から正当性と権威を与えられたが、その革命とは、国王を殺害した1792年の革命ではなく、穏健で、理性的で、人間的な、1789年の革命を意味している。

このように、恐ろしい二つの試練を通り抜けたフランスは、その運命に勇気を持って立ち向かい、中庸と理性の道を選んだ。悪意に満ちた敵(その数に不足はなかった)の見方とは反対に、フランスは凋落の道に迷い込まなかった。そのことは、1914年の世界大戦勃発とともに直ちに証明される。

フランスは、隣人たちよりも遅れて技術革新の道に乗り出した。それにもかかわらず、半世紀近く続いた平和の時代に、注目すべき工業力を育成していた。

この国の初等教育のレベルは、西欧では並びないものだった。シャルル・ペギーが〈共和国の黒衣の軽騎兵〉と呼んだ教師たちは、一世代のうちに非識字者をなくし、「ボーージュ山脈の向こう側にある」失われた地域の回復を誓う愛国心を人々の心に植えつけた。

教師たちの努力はまた、共和国軍を支える予備役将校の組織づくりに役立った。これが、後日、ベルダンとマルヌの戦いにおいてフランスに勝利をもたらすことになる。

フランスの教師は左翼的なことで定評があったが、植民地主義者であることには変わりなかった。彼らは、人種問題に対する当時の科学万能思想に基づいて、平等の原則の名のもとに、劣等人種を、歴史と天運によって白人に付与された特権的地位にまで引き上げるべきだと主張した。アフリカとアジアで世界第2の植民地帝国を築き上げようとするフランスの企ては、かくして道徳的にも正当化された。

1789年の大革命の原則によって、植民地主義者の恐ろしいまでの貪欲さは和らげられ、植民地化された側には自由な心意気が生み出されるようになるということなのであろう。知的で小市民的な、ある種のヒューマニズムにとっては納得いく考え方であった。

裕福で教養ある大ブルジョア、社会の進歩を望んで共和制を支持しながら気楽な生活を送っている中産階級、国際主義者でありながら愛国心に燃え何よりも尊厳を守ろうとする喧嘩っばやいプロレタリアート、大地に根を下ろした昔ながらの多数の農民……。

例のない経済的な繁栄の上に、驚くほど革新的で生き生きとしたフランス文化が開花したのは、こうした社会の中でのことである。

フランスは強力で、尊敬されていた。その才知は四方に光りを放っていた。当時のパリは、芸術でも、文学でも、科学でも、世界の都だった。

1.2. オリンピック序論

1.2.1 伝統—現代性

1896年。記念すべき年！ アテネの廃墟の中から、近代の第1回国際オリンピック大会が誕生した。ギリシャにとっても世界の国々にとっても、このような大胆な企てを正当化したのは、古代ギリシャの歴史そのものだった。

1896年。一つの時代の夜明け！ スピリドン・ルイスの勝利は、古代オリンピック最初の優勝者コロエボスの偉業にこだました。

大胆な企てだった。オリンピズムは明らかに天地創造の神話に淵源を持つものであり、役割を演じる人々の心の最も深い部分を揺り動かし、現代人を、自分の身体のイメージや民族のイメージに正面から向き合わせ、夢と情熱、栄光と力、生命と不死といった多くの幻想を呼び覚ますものである。これは、部族の物語を伝える西アフリカの楽人グリオの領域である。ホメロスとパウサニアスは、伝説こそオリンピック大会の母であることを教えてくれた。その淵源は、まことに儚い・・・。

ウラノス、ガイア、そして彼らの息子クロノスに、またポセイドン、アフロディーテ、レアに捧げられた奉納物は、エンデミオンやヘラクレス、あるいはギリシャ南部の半島ペロポネソスにその名を残すペロプスらによってオリンピアで始められた競技大会の神聖な性格を導き出し、強調するためのものでしかなかった。

伝説の語るところは定かでない。しかし、勝者 — たとえ王子であれ王であれ — の決定は、常に神聖なる審判の結果であったことを我々は知っている。

このようにして、オリンピック競技者は神の祝福を受けた者であるという根本理念は、歴史の深淵から呼び起こされ、幾世紀もの歳月を超えて伝えられていくことになった。

事実、古代の大会は、イフィス（884 B.C.）からコロエボス（776 B.C.）、コロエボスからテオドシウス（A.D. 395）まで、常に、ゼウスとオリンポス山の神々に捧げられた盛大な奉納の祭りであった。もっとも、ローマの占領時代には、それに皇帝崇拝が加わっていたが・・・。

優勝者や都市国家の代表は、己の身体と心の美を天地創造の神々に捧げた。ゼウスにとって〈オリュンピオニケー（オリンピックの勝者）〉による捧げ物ほど喜ばしいものはなかった。

ピンダロス、テオクリトス、サッフォー、悲劇詩人エウリピデスやソフォクレス —

いずれも大会に参加 — や、プラトン、アリストテレス、テオフラストス、エピクテトスのような哲学者たちも、皆、その崇高な影をオリンピアのスタジアムに投げかけた。

しかし、そのころから既に、選手の強欲さ、飛び交う札束、政治家の悪意、出世の口約束、倒錯の罪などが、エウリピデス、ソフォクレス、サモスのルキアノスなどによって批判されている。オリンピック精神そのものが否定されたわけではないが、古代オリンピックも、実際面では既に批判されるべき習慣に染まっていたのである。

この点、オリンピックの社会学的な限界を探るには、大ざっぱではあるが、事物の発生や進化のあとを辿って相関関係を探る系統発生学的アプローチが適切かもしれない。

ここでは、ハリカルナッソスのデニス、プルタルコス、パウサニアスのような古代の歴史家が特に注目に値する。彼らの作品は、伝説の霧を通じて、後世の考古学者や歴史家が参照する拠り所となり、オリンピックの歴史を新たに作る証人の役割を演じてくれる。

最近のドイツやアメリカの学者の研究の多くには、これらの歴史家の影響が感じられる。例えば、インゴマール・ヴァイラーは、古代オリンピックの墮落についての数々の仮説を集めた。これらのうちには、宗教儀式の放棄、キリスト教を含む新しい哲学思潮への関心、オリンピアを中心都市とするエリスの経済危機、選手のプロ化などが含まれている。ヴァイラーはまた、共同体精神の衰弱、洪水や地震などの自然災害、都市国家の政治的衰退、ローマの征服、文化的な理由によるスポーツの価値の下落、そして人口の移動についても触れている。

これらの点を個々に考察しても、オリンピックの頹廃を説明し尽くすことはできない。さらに、幾つかの点については反論もある。そういった反論に対しては、ヴァイラーも特に異議を唱えていない。

このようにして、二つのパターンが次第にハッキリしてくる。その一つは神話の流れを汲む個体発生論的なもので、オリンピック大会とオリンピズムの今の世における再現を重視する。しかし、ブルデューの「本文だけを重視し、本文を支える周辺の状態を無視している」という主張は顧みられない。

もう一つのパターンは、あらゆる宗教的な信条を退け、オリンピックの出現と創造の条件を見極めようとする。このようなアプローチはまだ揺籃期にあり、人文科学の発展とともに成熟するのを待たねばならないが、いずれ、オリンピックの現場に同時代的な目を向けさせ、たとえ科学分析に背を向ける者たちが何と言おうと、オリンピズムの偉大さと正当性をますます強く印象づけるものとなるにちがいない。

とはいえ、歴史を直線的に読んではならない。古代ギリシャの大会は何世紀にもわたって無視されていた。すべての大陸で、大会の存在は顧みられなかった。

いつの時代のことにせよオリンピックの理念の出現について探るのは、本当に魅惑的な仕事だが、ここでは、この現象の分析を、近代オリンピックの創設に大きな役割を果たした三つの国に限定したいと思う。この三つの国は、時を同じくして、古代オリンピックの復興に向けて努力し、近代オリンピックの基本理念形成に貢献した。

三つの国とは、ギリシャ、イギリス、フランスである。

ギリシャ

現代のギリシャ人は、自分たちが古代ギリシャの後継者であり、ヨーロッパ文明の旗手であると主張する。ギリシャ人は、大会が何世紀にもわたって、多かれ少なかれ定期的に開かれたと考え、その歴史の継続性を誇りにしている。

ギリシャ人にしてみれば、オリンピック大会は民族の記憶によってこそ命脈を保ってきたのであり、いま再び生命を取り戻さなければならない。そして、それは必ずギリシャで起こらなければならな

った。

何世紀も経て、オリンピックの火は揺らぎ、まるで消えてしまったようにも見えたが、ギリシャの人々にとって、古代オリンピックと近代オリンピックとの間には、断絶などあり得なかったのである。

しかも、独立したギリシャは現代性を身につけようとしていた。1896年のオリンピック大会の組織委員会のメンバーは、1860年代から1870年代にかけて開催された通商博覧会での試行錯誤の経験を生かして、近代オリンピック大会を定期的に — それもギリシャだけで — 開催するための条件を創り出すべく、懸命な努力を開始した。

ドイツの考古学者たちが示した例は、大きな影響を与えた。彼らは、チャンドラー、ブルエなどのあとを追うようにして、オリンピアに押し寄せた。彼らは、古典文学を利用しながら、失われた歴史上の一時代を再生しようとしたのである。

彼らは、神話の場所をよみがえらせ、文化的、政治的、経済的な冒険に参加する、ロマンチックな歴史の申し子でもあった。これが、オリンピック大会の復活へとつながった。

イギリス

イギリスの例も、同じように示唆に富んでいる。古代オリンピックを支えていたスポーツマンシップは、一種の文化的な香りとして、昔から貴族社会の教育のルールのなかに受け継がれ、イギリス人のメンタリティーに刻み込まれてきた。

とはいえ、それだけでは、オリンピックの理想を語るまでには至らない。

しかし、スコットランド大会、それより以前から大衆の間で行われていたアイルランドやウェールズの競技会、ノルマン人の競技会などは、新しいスポーツに門戸を開き、これが伝統的な競技会の中で主流となっていくた。

人間の体の個々のイメージや集団的なイメージと結びついた、新しい形の個人行動や集団行動のパターンが生まれ、スポーツ連盟に引き継がれていった。

メンタリティーの変革を目指したトーマス・アーノルドや〈筋肉的キリスト教〉主唱者の目標達成も、これによって容易になった。

このように、伝統を今の世においても忠実に守ろうとする動きの一方で、ある分野では新しい試みが現れますます複雑になっていった。イギリスにおけるスポーツ・ムーブメント誕生の条件は、こういった状況の中で次第に整っていくた。

フランス

近代オリンピックの出生証明書が最終的にサインされたフランスでもこの二重のビジョンが見られる。一方には、歴史と記憶の高貴な殿堂によって守られる、ギリシャの伝説に根を下ろしたオリンピアの永遠の思い出があり、一方には、体育館、スタジアム、シンダートラック、自転車競技場などに加えて、献身的なボランティアや賢い商人の活動が繰り広げられる新しい社会の現実があった。こうして、オリンピック大会の復興に必要な条件は整いつつあった。しかしまだ二つの重要な要素が掛けていた。

復興は、原型の単なるコピーであってはならない。そのためには、非凡な人物、ピエール・フレ

ディ・ド・クーベルタン男爵が産婆役を務めること、19世紀の技術的成果を総動員することが必要だった。

1.2.2 近代スポーツとオリンピズム

天才が歴史の推進力であることは認められている。しかし、アイデアは決して一人の人間の頭脳のなかで形を整え、飛び出してくるものではない。どんな誕生にも、創造力に満ちた場、豊穠な畑が不可欠である。

そこでは人々が集い寄り、異なる者が交わり、勝利と敗北が重なり合う。そして、多かれ少なかれ認識可能な記憶の流れに潤される反面、近代化の過程のなかで社会の矛盾対立に引き裂かれている。その畑は、さまざまな要素を含む生きた腐葉土で、肥沃であると同時に脆くもある。そこから一群の木立と茨が生え出る。

こうしたイメージでとらえると、近代スポーツは、脆い枝や枯れ枝にもかかわらず、力強さと美しさを何世紀にもわたって保ってきた樫の老木に似ている。

ヨーロッパにおいて、ネオ・オリンピズムは、この逞しい幹に接ぎ木された。

しかしもちろん、闘いなしには不可能だった。

畑は空き地ではなかったからである。ドイツの体操が既にその場所を占めていた。

ドイツの体操は、軍隊訓練の考え方に密接に結びついていて、器具を使うものと使わないものがあった。ドイツにおける最初の体操クラブ《ハンブルグ体操協会》は、1813年に設立されていた。

近代スポーツは、ヨーロッパの学校やスタジアムで、またアメリカの大学のキャンパスで、その影響力を次第に拡大していたが、その過程でしばしば厳しい闘いが展開された。この闘いは、近代オリンピックの組織委員会の場にもこだました。しかしながら、もはやスポーツ・ムーブメントの成長を止めることはできなかった。

1863年に《スイス・アルパインクラブ》設立。1871年、スキージャンプとクロスカントリーの第1回競技会が、ノルウェーのクリスチャニアで開催された。1872年、フランス最初のフットボールクラブ《ルアーブル・アスレチッククラブ》が設立された。1883年、ブカレストにオリンピック協会が組織された。同じ年、キールでは最初の国際ヨットレガッタが開催されている。

時期を同じくして、体操クラブも次々につくられた。1869年の《ベルギー体操協会》、1875年の《イタリア体操協会》、1889年の《ウィーン・ドイツ体操協会》などである。

このリストは十分とはいえないが、影響力の強い体操クラブを背景にして、スポーツ・ムーブメントが力強く前進していたことを示すものである。

19世紀末は、スポーツクラブが次々に生まれ、スポーツクラブの会員も社会的に多種多様で、組織も次第に複雑になっていった。しかし体操協会は社会的にも政治的にも強い影響力を持っていた。

この点で、ヨーロッパは二重構造だった。一方にイギリスとアングロサクソン世界があり、もう一方にヨーロッパ大陸があった。前者がリードし、イメージを形づくり、夢をつくりだした。後者は、伸び行く才能によってそれを模倣した。

イギリスは判断の基準であり、フランスは近代オリンピック生誕の地である。

それ故、これら二つの国における近代スポーツの出現と発展を詳細に検討することから始めるのは、理に叶っているように思われる。

ホメロスの時代からの名残か、騎士の馬上槍試合の伝統か、18世紀後半のイギリスにおけるスポーツの試合は、しばしば庶民的な雰囲気包まれていた。

興行師の集めた大勢の群衆の前で、肉体的に優れた2人のチャンピオンが対決する。それはボクサーであったり、レスラーであったり、ランナーであったりした。この極く初期の時代から、スポーツ試合と賭は切っても切れない関係にあった。

競馬場をはじめ、大地主たちの馬車で周りを囲んだ野原、キャバレー、賭博場……。こういった場所が競技会の会場に選ばれたのも、決して行き当たりばったりのことではない。どの試合も二者の対決で、思惑のある主催者が資金を出した。

そして、一対一の対決の場合には、必ず何人かの取り巻きがいた。例えば、そのころ既にトレーナーや会計係、賭屋、新聞記者の姿が見られた。

これが陸上競技の初期の姿だった。長距離の走破と、その時点の記録を破ろうとする試みが、挑戦の主流だった。1743年から1863年の間に、記録は競馬場を使って7回破られた。このころは、人間のトレーニングも馬の調教を真似て行われていた。

陸上競技だけが、楽しんだり賭をしたりする機会ではなかった。1850年代には、ボクシング、フェンシング、レスリング、重量挙げなど、パブや〈ミュージックホール〉といった小さい場所でも実現可能な、いずれも古代の民話や祭りを背景に持つ競技が、貴族や労働者、自由を求める学生たちなど、さまざまな層の観客を引きつけていた。

19世紀を通じて、昔ながらの〈ゲーム〉の雰囲気が強かったたし、狐狩りは一種のお祭りだったが、貴族でも下積みの郷土や准男爵たちは、そのころ既に新しいスポーツに熱中していた。（工業の発展は、とりわけマンチェスター地域で前例のない人口の集中を生み出し、貧困と道德の退廃を伴っていた。－この部分フランス語の原本にはない）

1830年ころ、スポーツがイギリスの生活習慣の中に入ってきたとき、社会の状況は独特だった。貴族は自分たちの文化的特性を維持しようとしていたし、労働者階級は自分たちもスポーツ試合に参加したいと切望していた。また、学生たちは自分たちの自治を守ることに一生懸命だった。

英国国教会にとって最大の懸念は、賭け事とカネが社会を、とくに若者を腐敗させつつあるということだった。一方、大英帝国はその軍隊に、身体も精神も健康な、強靱な若者を必要としていた。かくして、教会にとっても政治権力にとっても、スポーツは万能薬になっていく。

このような中であって、幾つかのグループがイギリスのスポーツ界に現れ始めた。これらのグループは、多かれ少なかれ分裂し、拮抗し、それぞれに発達しながら触発し合い、やがて複雑で高度に組織化された層を織りなしていく。

その中心は地方の郷土のグループであった。そのあとを職業軍人のグループが追い、乗馬、水泳、〈ドイツ〉式体操、射撃、そして、インドではポロやフィールドホッケーに身を入れていた。

そして、大都市に住んでいる労働者階級のエリートも、19世紀末までには、スポーツクラブに入会が認められるようになった。1865年から1895年までの30年間に、イギリスの国民総生産は倍増した。その結果、プロレタリアートでも上層の者は、大陸の同僚よりもはるかに暮らし向きがよく、余暇の一部をスポーツに振り向けることができるようになっていた。新しいタイプの社会関係が〈スポーツクラブ〉の中に育っていく。

イギリスの産業と貿易は世界をリードし、重要な役割を果たしていた。

中空の金属パイプの製造やタイヤとゴム製チューブの発明は、機械類の軽量化に著しく貢献し、自動車と航空機産業の発達を促した。

同時に、スポーツの社会的な側面も複雑になり、スポーツ用品、試合場、ボール、報酬などをめぐって、参加者とプロモーターの間に緊張が生まれた。

スポーツマンの数が増えるに従って、その人々の社会的背景もますます多様になり、それぞれの関心事やニーズも自己中心的な色彩を強めていった。その結果、一連の危機が生じたものの、これは進歩の原動力にもなった。

例えば、クラブの心地よい安楽椅子の中におさまったまま、エゴイスティックな階級意識の中に閉じこもったままの〈幸せな少数者〉のための伝統的なイギリス型スポーツを守ろうとする人々もいた。

英国国教会は、草の根の人々とのつながりから、はるかに遠くを見通すことができた。イギリスのスポーツを倫理的に支えてきたのは、この国の聖職者の功績である。

その代表的な人物が、トーマス・アーノルド師（1795－1842）である。

1828年、アーノルドはラグビー校の校長に指名された。

このころ、ラグビー校の道徳的雰囲気は墮落の極みにあった。生徒の大部分は大地主の息子で、飲酒、狩り、賭博といった気晴らしに耽っていた。彼らはまた、遠い故郷から馬や猟犬を連れてきていた。彼らにとって、教室での勉強や宗教教育は関心の外であった。

キリスト教的ヒューマニストとして育てられたアーノルドは、古典への深い造詣とストア哲学を身につけていたが、スポーツのことは何も知らず、古代オリンピアについては、読んだ書物の記憶を通して漠然としたイメージを持っている程度だった。

しかし、その一方で、青年時代の直接体験は何者にも代えられないことを知っていた。

彼にとっては、ソクラテスの「汝自身を知れ」という言葉こそ、バランスのとれた人間形成と社会的成功への鍵だった。

アーノルドの洞察は広範囲に及んだ。しかも、彼は絶好の時機に着任した。

テムズ河の運送業者も、リバプールの羊毛商人も、リーズの鉄工場主も、皆、自分たちの息子がきちんとした教育、上品なマナー、威厳、力を身につけることを望んでいたし、息子たちも、紳士階級の占有物になっていたパブリックスクールに入学しようと、躍起になっていた。

この若者たちとともにキャンパスに持ち込まれたのが、台頭する社会階級の集団としてのニーズに沿った新しい型の団体競技と、クロスカントリー（この若者は馬を持っていなかった）や障害物競走、短距離競走などの個人競技だった。

こうした競技を通して、若い征服者魂に必要なすばやい反応や耐久力が磨かれていく。

アーノルドは14年の在任期間中（1828-1842）に、生徒たちを敬虔なキリスト教徒に立ち返らせるという目的 — 彼にとっては唯一の目的 — こそ、十分に達成できなかったかもしれないが、少なくとも、生徒たちに男らしさを身につけさせ、道徳心を高め、自制心、チームスピリット、王室と教会への尊敬を植えつけることには成功した。

アーノルドの跡を追って、チャールズ・キングズレー（1819－1875）、彼の息子マシュー・アーノルド（1822－1888）、トーマス・ヒューズ（1823－1896）が〈筋肉的キリスト教〉の運動を起こした。この運動は、アングロサクソンの教育に強い影響を与えた。そして、19世紀末から20世紀初めにかけて、青年の教育に関するヨーロッパ人の考え方に大きな影響を及ぼすことになった。

アーノルドの影響力は著しいものがあつた。他のパブリックスクールは、ラグビー校を震源とする衝撃波に次々に襲われる。

1842年、ハーロー校とシュルーズベリー校が同じような教育方針を採用し、1849年にはイートン校が追随した。すぐあとに大学も続き、1850年にオックスフォード大学のエクゼター・カレッジが、その5年後の1855年にはケンブリッジ大学のセントジョーンズ・カレッジが採用した。そして、1864年3月5日、第1回オックスフォード・ケンブリッジ対抗ボートレースが開催された。

社会的騒乱の時代を目の当たりにして、何人かの敬虔な聖職者たちは、近代スポーツこそ悩める若者を助けることができると確信した。

彼らにとって、スポーツチームを結成することは教区の中の社会組織を一新するに等しかった。教会の力をバックに、キリスト教系労働者のスポーツ団体が生まれた。

これに伴って、以前から存在したゴルフや漕艇やテニスの団体も、大きく膨れ上がっていった。これとは別に、もっと自主性に富み、社会的なタブーに影響されることの少ないクラブが急速に成長し始めた。これらのクラブは、やがてイギリスの小市民階級の財産となり、シンボルとなった。

さて、スポーツクラブの増加、スポーツ行事に熱狂する民衆、そしてスポーツ・ジャーナリズムの発達によって、二つの注目すべき現象が生まれた。

第一に、試合が増えるに従って、倫理と技術の両面で、共通のルールを設けることが不可欠になった。

その一方で、自分たちは社会的にも文化的にも例外だとして、その領域を小心翼翼と守ろうとする貴族階級は、道徳の名に隠れて、揺籃期のスポーツに古臭い社会的制約の首かせをはめようとした。

ここで指摘しておかなければならないが、セミプロスポーツは、その初期から大体において世間に受け入れられていた。しかし、おおっぴらな半ズボンでの街中のランニング、重量挙げ選手の筋肉の異常発達、過度の賭、異教的な肉体の精神化やそのテクニックは、禁欲的な志向から遠く、ブルジョアの趣味と教会にとってショッキングなものであり、スポーツは一種の教養であるべきだと説くエリートから強く非難された。

1866年、アマチュア・アスレチッククラブ(AAC)が設立された。AACの規則は、イギリスの領主の館やサロンにおけるエチケットに則って定められた。

アマチュアについては、次のように定義している。アマチュアとは「だれでも参加できる公開試合に出たことがなく、競技場の入場料や他の方法に起因する金銭を得るために競技したことがなく、賞金もしくは競技場の入場料や他の方法に起因する金銭を得るためにプロと競技したことがなく、生涯のいかなる時点においても、生活の手段として、スポーツの練習の教師もしくは指導者をしたことがなく、機械工でも職人でも日雇い労働者でもない紳士」をいう。

イギリスの大部分の陸上競技クラブが加盟していたAACは、1880年、この耐え難いまでに厳しい文言をトーンダウンした。しかし、漕艇連盟は大衆に対する侮蔑的な態度を維持し、スポーツの教師や指導者、労働者、職人、日雇い労働者を締め出し続けた。

このころから、アマチュアリズムの問題は、現代のスポーツ・ムーブメントの中で常に緊張の原因になってきた。この問題が重大さを増したため、時として国際的な話し合いを行う根拠にもなった。クーベルタンが1892年6月、パリで国際コンGRESを開催したときも、アマチュアリズムの問題が口実に使われたのであった。

このようにして、貴族的な伝統をバックにしながら、資本主義時代の到来とともに生まれ、英国国教会に支持されたイギリスの近代スポーツは、商業的な圧力団体、道徳を口にする同盟、専門分野の連盟、非営利団体などが、それぞれに異なった主張をする一つの中心的なテーマとなった。これらの団体は、いずれも自立を求める声を次第に強めていた。

この状況を、もう少し詳しく見てみよう。

現代のスポーツが、技術文明と自由民主主義という、この時代の支配的な理念を反映しているのは当然である。この点で、産業部門のテーラー・システムとスポーツ部門のトレーニングを比較し、スポーツ界の上下関係の中に産業社会のピラミッド型機構との類似を探ってみたくもなる。

現代のオリンピズムを問題にする人々の中には、こういった二重写しを通してスポーツの中に人間疎外の〈究極の段階〉を見たりする者もいる。しかし彼らは、スポーツがゲームであること ― プロにとってさえもゲームであること ― を忘れている。

彼らは、人格の基本を形づくる心理的構成要素を、少し性急に脇に押しやっている。
そして、スポーツが自由な人間の自発的な集団の中における自由な人間の営みであることを、正しく認識していない。

この点で、イギリスのスポーツの歴史には、学ぶべき点が非常に多い。

紳士階級の独占は、階級闘争を反映し慣習への追従と闘う民主的なスポーツの社会集団の台頭によって脅かされる。これは、イギリスのスポーツが進展し、独自の性格を築いていくための代償だった。この独自性の故に、イギリスのスポーツは、世界各地に進出したアングロサクソンによって、先例、モデルとして受け入れられたのである。

ヨーロッパ大陸も急速にこれに従った。フランスもまた、征服された。

しかし、フランスの現代スポーツは、不毛の地から生まれたのでもなければ、同時代のイギリスの例だけをモデルにしたものでもない。フランスは、レスリング、決闘、テスの前身ジュー・ド・ポームなどで、昔から知られた国である。中世からルネッサンス、そして近代と続く長い時代に、フランスの貴族はジュー・ド・ポームの球を手で打ち、槍的を突いて戯れ、決闘をして争い、そして「水深きところで泳いだ」。

村の祭りともなれば、農民たちがスールに興じ、領主の館やベルサイユ宮殿のゲームの様子をまねた。祭りのダンスは、優雅なメヌエットではなく、テンポの速いジーや木靴で床を踏み鳴らすサボテーが専らだった。

1850年ごろのフランスは、以前から身体運動を重視してきた哲学的ヒューマニズムや教育学的ヒューマニズムにあふれていた。

ラブレー(1494-1551)、モンテーニュ(1553-1592)、ルソー(1712-1778)、百科全書派、それに控えめながらイエズス会の人々も、皆、戸外の競技と運動の徳を賛美した。

ナポレオン1世によってスペインに派遣されていたドン・フランシスコ・アモロス(1770-1848)は、帰国後、1819年11月4日にパリのアンバリッド広場に体育学校を開設した。

アモロスの労作は、1852年にエコール・ド・ジョワンビルに引き継がれた。

これが、19世紀末のスポーツ指導者を育成する苗床となった。しかし、相次ぐナポレオン戦争のおかげで、フランスの壮丁は弱体化し、数もいちじるしく減っていた。

モスクワまで徒歩で遠征したあげく、いまやフランスはびっこを引いていた。

フランス人の多くは田舎に住み、地主階級も工業化への道を急ごうとはしなかった。

民衆の競技は、その地方の昔からのしきたりに従って行われていた。いつもながらスール、屋外のジュー・ド・ポーム、ペロタ球技、それにレスリングなどが、村の祭りを盛り上げた。漕艇は、全国の至るところで行われた。フランスは水面に恵まれている。

1834年、ルアーブルの造船所で作られたボートを使って、最初のレガッタがパリのビット貯水池で行われた。

もう一つの人気スポーツは、1830年に始まったフランス式キックボクシングのサバット — 古靴を

意味する俗語 ― である。もともとはギャングが使った技だったが、やがて下町の若い労働者に広がり、下層階級との交わりを求める金持ちにとっても、絶好の暇つぶしとなった。

次いで、津波のように全国に広がったのが、自転車ブームだった。

ベロシピード ― まだチェーンのない昔風の自転車 ― は、あらゆる社会階層の心をとらえた。労働者、学生、知識人、ブティックの売り子、上流社会の貴婦人…皆が皆、ベロシピードを持っていた。世の動きに疎い父親たちがブローニュの森で相変わらず二人乗り箱馬車に乗っているとき、息子たちは側道でベロシピードのペダルを踏んでいた。

同時に、自転車競技は『ル・シクル(二輪車)』『ル・ジュルナル・ド・ベロシピード(ベロシピード日報)』『クロニク・ベロシペディック(ベロシピード通信)』『パリ・ベロ』など、スポーツ新聞を生んだ。そして、今度は、新聞が自転車人気を一段と盛り上げた。1890年にパリ学芸宮、1891年にクールブボワ、1893年にはシャラントンと、パリを中心に自転車競技場が次々につくられた。〈グランプリ〉と銘打ったレースは大勢に観客を引きつけ、優勝者は大金を稼いだ。当時の著名な作家トリスタン・ベルナルが、バッファロー自転車競技場の支配人に任命された。1903年7月1日、昼夜兼行の第1回ツール・ド・フランスが開催された。スタート地点はビルヌーブ・サンジョルジュだった。1881年以来、フランスの自転車競技は《フランス・ベロシピード連合》が取り仕切っている。

最初は自転車乗りの単なる娯楽だったサイクリングだが、そのサイクリングの名のもとに経済的、社会的、文化的集団が成長し、独自の儀式、独自の掟、独自の資格審査基準を持つようになった。怠け者の趣味だったサイクリングは、わずかの間に、文明の必然になった。産業界が提案し、世論が受け入れ、習慣が創り出され、イベントが相次いで催された。自転車競技は全国に広がり、多数の専門誌が月曜日ごとに結果を報じた。

政治雑誌の『ル・タン』や『ル・ゴローア』までが、スペースを割いて自転車競技に関する記事を掲載した。スポーツ関係のマスコミが世論や生活習慣にまで大きな影響を及ぼすようになり、教育家たちも現代スポーツの文化的意義を考えざるを得なくなった。

しかし、状況はそれほど単純ではなかった。

スポーツ界のリーダーの中には、自分たちのあり方にまったく疑問を持たずとしない人々もいた。そして、少しでも逆風が吹くと、石のように固い自分たちの信念にしがみつこうとするのだった。当時は、そういった伝統の守り手が、体操協会と射撃協会の理事の座を占めていた。

彼らが地歩を築いたのは、時代の雰囲気によって支えられてのことだった。

1870年の敗戦とパリ・コミュンの苦い思い出が、愛国意識、しばしば狂信的愛国者意識を煽っていた。フランスの学校や軍隊では、普仏戦争でプロイセンに占領されたボーージュ山脈の東側の地域を示す〈ボーージュの青い線〉に視線が注がれていた。

1903年4月26日、《フランス体操協会連合》が公益事業体として認定された。会員は50万人を数えた。

中等教育のレベルでは、まったく成果が挙げられなかった。フランスの中学生は〈学校部隊〉を体験していた。これは、木製の銃と鬼軍曹による一種の軍隊教練である。フランスの教育の中世以来の学科に付け加えられた軍事訓練の下手な模倣は若者たちにとって耐え難いものであった。退役軍人や消防士による体育の指導は、若者たちにまったく人気がなかった。19世紀末の小説家や新聞記者、ドキュメンタリー作家などは、毎週のように若者の体に加えられる虐待を、口を揃えて非難している。

教育の基本構造にはほころびが生じ始めていた。自由主義的な帝政の日々以来、大学の一枚岩に裂け目が生じ始めていた。しかし、フランスの中等教育には、1880年代までにはほとんど何の変化も見られなかった。大学は、何をすべきかについて厳しい枠をはめられ、授業は時代遅れの知性偏重に染め上げられていた。当時のフランスの若者は、文字どおりコルセットで締め上げられていた。

改革への機運が二重の流れとなって動き始めた。その一つは一部の目覚めたブルジョアジーによる政治改革であり、もう一つは中等学校の生徒たち自身による、より現実的なレベルでの変化だった。

プロイセンに対する敗戦の遙か以前に、かなり多くのフランスの知識人やリベラルな政治家は、イギリスの産業技術革命を見て、中等教育の根本的な改革を同時に行わないかぎり、フランスの工業化は失敗するだろうと考えていた。この先見の明のある人たちの中に、E・ラヴィッスやジュール・シモンがいた。改革派のリーダーは、イギリスの教育に心酔していたイポリット・テーヌだった。改革者たちが自分たちの教育プロジェクトの中で、性格形成の上で肉体の訓練を重視したのは当然である。しかし、これらの著名な学者たちは自分で運動を経験したことがほとんどなかったために、実に慎重だった。

体育は「ウイ」だが、競技は「やむを得まい」。しかし、テーヌの存在と著作にもかかわらず、イギリス流のスポーツは「ノン」だった。

1882年10月8日、パリで《フランス・レーシングクラブ》が発足した。これは、リセ・コンドルセ、エコール・モンジュ、コレージュ・ロランの各校に在籍する、一握りの生徒たちの熱意の結晶である。それまで、運動競技はサンラザール駅のパペルデュ・ホールで行われていた。

1884年、ジョルジュ・ド・サンクレールがフランス・レーシングクラブの事務総長に就任した。39才、バイリンガルで、子供時代をスイスで過ごしたあとイギリスに移り住んだ。イギリスでは、パブリックスクールで教育を受けた。サンクレールは、クリケット、ジュー・ド・ボーム、ラグビー、サッカーに優れ、陸上競技の経験もあった。

パリに住むと、彼はブローニュの森のスポーツサークルに熱心に通った。

真のスポーツ愛好家であった彼は、スポーツ界にはびこる俗悪な行為を許すことはできなかった。サンクレールにとっては、スポーツの賭も走者の異様な服装も同じように嫌悪の対象だった。それにしても、フランス・レーシングクラブがアマチュアに留まる決定をしたのは、劇的な転換点だ

った。プロはパリの競技場から閉め出された。

さらに当時として注目にあたいするのは、このレーシングクラブがオールラウンドなスポーツクラブになったことである。

それまで、それぞれのスポーツは、固有の指導者、固有の規則、固有の倫理規範に従って発達してきたが、サンクレールは幾つものスポーツが一緒になったイギリス流のスポーツクラブの概念を受け入れさせた。一つのスポーツだけに目を向けていたグループは、新しい連合体に適応し、他のスポーツと共存しなければならなくなった。

そうしなければ、新しい官僚機構にも行政や金融の機構にも溶け込めず、複合社会の新しい構造に付いていけなくなっていた。また、何よりも、スポーツの道徳的な意味合いを重視せざるを得なくなった。フランス・レーシングクラブは成年に達し、それとともに、フランスのスポーツ界全体も大人になったのである。

そのころには、既にフランスでも外国でも、国際試合が開催されるようになっていた。これらの中で最も庶民的なのは、英仏海峡に面した港での、イギリスの船員チームとフランスの船倉係チームのサッカー試合だった。1885年11月22日には、パリのスポーツ団体が、選手団をブリュッセルに派遣している。サンクレールは、イギリスのスポーツマンがフランスに遠征してフランス選手と試合するよう呼びかけた。これは、単にフランスにおけるスポーツの存在を認める以上の意義を持つ、爵位授与とでも見なすべきものではなかろうか。1886年11月1日、フランスのランナーはついにイギリスの選抜チームと競走した。

ベルギーのレーシングクラブの選手も遠征してきた。しかしながら、旅行の疲れや、ルールの違い、倫理的な考え方の違いなどからくる難しい問題が続出した。

二つの文化を体得していたサンクレールは、このデリケートな状況を十分に承知していた。サンクレールは、問題の調整に当り、規則を定める機関の設立を呼びかけた。

1887年1月18日、フランス・レーシングクラブとフランス競技場連盟の手によって《フランス徒競走協会連合》が設立された。

スポーツは、フランスの社会に普及し始めていた。学校だけでなく、一般市民の間でもこの現象は見られた。あらゆる社会階層でスポーツクラブが組織され、もはやスポーツは貴族やエリートの特権ではなくなり、広く民主化されていった。

例えば、1887年7月、パリで結成された《自由ランナー協会》は〈庶民的〉であることを売り物にした。パリ近郊のセーヌ川に浮かぶ島を根拠地とし、メンバー全員が有名人リストに名を連ねている《ピュトー島スポーツ協会》に対抗してのことである。

しかし、もっと重要なのは、スポーツが教育の場に入ってきたことだった。しかも、当局の決定によってではなく、非公式にほとんど密かに浸透していった。

スポーツ協会が次々に設立されたが、家族が反対するなどしばしば困難に直面した。

パリでも地方でも、熱心な学生たちが自分たちのクラブを設立し、学生同士の試合を実施し、市民のチームと対戦し、プレーし、審判をやった。また、彼らはサッカーやラグビーなど実際に親しん

だスポーツのルールを発行し、いわゆる〈ラリーペーパーズ〉を運営した。これは競走と謎解きを合わせた競技だが、有名人も進んで謎々の問題を提案したり、若い人たちのゲームに加わって賞品を提供したりした。時代の流れだった。

イギリス狂は頂点に達していた。フランスの学生たちは、イギリスの学生たちと、それも、できることならイギリス本土で、試合をしたがった。1888年の聖霊降臨祭に、パリのエコール・モンジュのチームがイートンに遠征した。団長はクーベルタンだった。

この段階で、フランスのスポーツの発展を支える二本の逞しい枝が育っていた。

やがてこの二本の枝、学校関係者と一般市民は相まみえ、互いに絡み合うようになる。両者とも、フランスのスポーツに行政的な骨組みや倫理的骨組みを持たせたいと考え力を合わせた。

1886年以来、ピエール・ド・クーベルタンは、他の人々と協力して、フランスにおける中等教育刷新のキャンペーンを続けていた。1883年、イギリスへの視察旅行から帰国した彼は、自分の意見を著書『イギリスにおける教育』の中に書いている。教育者の間での評判は悪くなかった。1887年8月30日、クーベルタンは『フランセ』紙上で、学校でのオーバーワークに反対するキャンペーンを開始し、体育教育同盟の設立を宣言した。もう、時は待ってくれない。

一方で、サンクレールによって設立された連合が、フランス全土のスポーツグループを傘下に収めようとしていた。そしてもう一方で、パスカル・グルッセという名のジャーナリストが、真にフランス的なスポーツの普及を図りたいと考え、そのための組織を作って世論を動かそうと計画していた。1875年、グルッセは、トーマス・ヒューズの『トム・ブラウンの学校生活』をフランス語に翻訳した。著者ヒューズはラグビー校のOBで、訳文は『ジュルナル・ド・ラ・ジュネス』紙に連載された。これは恐らくクーベルタンにも影響を与えただろう。グルッセは、あまりに極端だった。キリストの誕生を恐れて幼児を皆殺しにしたヘロデ王のようなところがあった。

彼自身もスポーツマンでありながら、イギリスからのスポーツの輸入を拒否した。

彼にとって、スポーツとはラグビーではなくスールであり、クリケットではなくジュー・ド・ポームであり、サッカーではなくバレット（昔風のフットボール）だった。

彼は『ル・タン』紙上でキャンペーンを行い、体育教育連合を設立した。

そして、教官の指導のもとに、学生たちが幅広い競技に参加する場として、中世の定期大市（ランディイ）を復活させた。

サンクレールは、明らかにクーベルタンより戦略的な配慮に疎かったようだ。

しかし、生まれたばかりのスポーツ界を混乱に巻き込んでいる旋風が、自分の率いる《フランス徒競走協会連合》にとっていかに危険なものかは知っていた。

彼は、すべての分野でスポーツが発展する現実を目のあたりにしていた。この気質と文化においてイギリス人であるサンクレールは、〈筋肉的キリスト教〉の歴史的教訓を学び、スポーツは倫理的制約の中で行われなければならないことを理解していた。大陸のスポーツより長い歴史を持つイギリスのスポーツは、既に弱肉強食の〈ジャングル法〉の時代を脱していた。従って、フランスとしては成り行きに任せず、強引に形を整えていかなければならない。そして、そのためにも、スポ

ーツマンの結びつきだけでなく、すべての競技種目の連合体を実現する必要があった。

この意見にはクーベルタンも賛同していたが、自分が主導権を握りたいと考えていた。そして先手を取った。後に書いているように、彼が設立した委員会は「何よりもまず委員長に人を得る」ことだった。それはジュール・シモン(1814-1896)である。

なぜジュール・シモンか。シモンが、1870年からしばらくの間、文相を務めたことが理由であろう。また、1874年に『中等教育の改革』と題する論文を発表していたことも、その理由かもしれない。が、何よりも、ジュール・シモンがフランス学士院とアカデミー・フランセーズの会員であり、高潔な人物として尊敬を集めていたからだ。

1888年5月29日、『教育における身体訓練普及のための委員会』が設立された。

火曜日の夕方だった。クーベルタンが事務局長に就任した。

何と凄い顔触れだろう。将軍、著名な学者、研究一筋の大学人、名門校パリ政治学院の学長、スポーツ協会の会長で爵位を持っている人々、文部省の中等教育局長・・・要するに、パリの社交界にとってもスポーツ界にとっても、まさに最高の顔触れだった。

クーベルタンは心にある計画を抱いていた。彼は同委員会に対して、サンクルー、ソー鉄道線沿い、オルレアン鉄道線沿いの3カ所に〈学校公園〉を設置するよう要請した。

ジュール・シモンは、多くの時間を割いて、改革のために奔走した。彼はブローニュの森、サンクルー公園、そしてヴィルダヴレーを駆け回った。シモンはまた、代表団を率いて、フランス大統領サディ・カルノーに会った。代表団には、クーベルタンのほかに、2人の医師とパリ学区の次長が含まれていた。この人選には深慮遠謀があった。まず世の中のよきファミリーを安心させなければならない。さらに、教育改革を実施して教育の場にスポーツを入れさせるためには、フランス教員団の後楯を得なければならない。

ジュール・シモン委員会と呼ばれるようになった同委員会は、パリ市内や郊外で数多くのイベントを開催した。その間、1889年1月31日には『フランス体育スポーツ協会連合 (USFSA)』が生まれ、クーベルタンが事務局長になった。それ以後、フランスのスポーツ界の二つの大枝は、いずれもクーベルタンが牛耳るところとなった。

クーベルタンは、1889年博覧会の期間中に開催された身体運動についての会議の主催者となった。彼のスタイルは明快なものだった。会議の参加者は、スポーツのメリットについての理論を会得できたことは勿論だが、世論に訴えるために同時ににもようされた実技デモンストレーションも効果をあげた。

1889年6月5日、会議はパリの国立土木学院で開催された。

先見の明に富み、国際感覚豊かなクーベルタンは、英米両国と英領植民地の主な教育施設にアンケートを送った。アンケートは「アーノルドの方式が各地に広がっているかどうか」を知ろうとするもので、英語で書かれていた。

数多くの回答が寄せられた。イギリスの学校、90を超えるアメリカの大学、ジャマイカ、香港、カナダ、セイロンの教育施設、ケープタウンの大学からも回答があった。

アーノルドの名前はほとんど言及されていなかったが、彼の方式が広く採用されていることは明らかだった。1889年6月6日から20日まで、一般家庭や新聞、国会議員などを対象として、沢山の学校向けスポーツイベントが催された。スポーツの素晴らしさとフランスの中等教育改革の必要性を示すことが目的であった。

イベントのプログラムには、各種のスポーツが勢ぞろいした。

会議は、最終決議で、乗馬を学校のカリキュラムに入れること、地域ごとにフェンシングの試合を創設すること、地方自治体が「体操と水治療法のための廉価な施設」の建設を進めること、男子高校生を対象に軍事教練を行うこと、卒業試験の際に体育の点数評価を行うことなどを勧告している。

クーベルタンは、彼の意見の奥行き之の深さと豊かさ、強い説得力、それにジュール・シモン委員会の政治的影響力を誇示することに成功した。スポーツの大規模なデモンストレーションは世論の反響を呼び、新聞も動き出した。1889年のイベントの中から、やがてクーベルタンが成し遂げる大事業の片鱗を読み取ることができる。

これ以降、クーベルタンのリーダーとしての才能と組織力は、広く認められるようになった。政界からも尊敬され、フランスのスポーツ界の指導者中の指導者となった。

いまや、目的への一路邁進が可能になった。その後間もなく、クーベルタンは文相アルマン・ファリエールによってアメリカに派遣された。この目的と成果は後述する。

1889年末にアメリカから帰国したクーベルタンは、雑誌『ルビユー・アトレティック』を引き受けた。64ページの月刊誌の編集責任者になったのである。同誌は、ドラグレーブ社から2年間にわたって発行される。仕事は辛かったが勝利を確実なものにするためには必要なことだと彼は思った。

1890年、フランスのスポーツ界は混乱し、微粒子が不規則に動き回る《ブラウン運動》のような動きに振り回されていた。何しろ、多かれ少なかれ競争関係にあった《体育教育協会》と《教育における身体訓練普及のための委員会》、それに《USFSA》という三つの組織が並存していたのである。

ジュール・シモン委員会は、とくに《体育教育協会》を批判した。それは若い身体に負担が大きすぎると思われる祭典（ランディ）のためだけでなく、協会が学校スポーツに対してもっていた権威主義的、愛国主義的な考え方のためでもあった。

なぜイギリスの考え方を受け入れず、民俗的な競技の殻に閉じこもるのか。

なぜ学生や生徒のスポーツ団体を、フロックコートを着た校長の支配の下に置くのか。

論戦好きで警戒心に満ちたクーベルタンは、グルッセと対峙せざるを得なかった。

グルッセは知的であったが矛盾だらけでもあった。だが、パイオニアとしての名誉に値する人物

ではあった。

ジュール・シモン委員会と《USFSA》の両方の事務総長を兼ねていたクーベルタンは、二つの団体の中であって何の困難にも会わなかっただろうと思われるかもしれないが、それは違う。二つの団体は相反した立場に立ってしまった。

一方は学生を受け入れない市民のスポーツを主張し、他の一方は市民と学生の分け隔てのない結合を主張した。結局、クーベルタンは学校スポーツを教育改革の触媒になると考えて重視する側に付き、敗北した。それにもかかわらず、1891年はフランスのアマチュアスポーツ発展にとって意義深い年となった。

重要なことに、1891年の初頭、フランスのスポーツ界は新しい人材を得た。

そもそも、アルキューユにあるアルベール・ル・グラン校の新任の修道院長ディドン神父がスポーツ改革を支持するなど、だれも期待してはいなかった。何といても、ディドン神父の前任者はクーベルタンを嫌っていたのだ。ところが、クーベルタンの見事な弁舌に引き込まれ、アルベール・ル・グラン校は、1891年1月4日USFSAに加盟した。

かくして、ディドン神父は、フランスのスポーツ史に登場することになる。ディドン神父が現代オリンピックズの誕生に演じた重要な役割については、後に詳しく紹介することになるだろう。

3月25日、クーベルタンは《USFSA》代表団を引率して、大統領官邸のエリゼー宮を表敬訪問した。彼の名声が高まったことの確かな証拠である。訪問団を前に、大統領サディ・カルノーは《USFSA》支持を保証し、そのイベントの一つに参加することを約束した。

《USFSA》の正式設立以来、その会員数と地位は確実に高まっていた。当初75のクラブと6,000人の会員であったものが、1900年までに、会員は約5万人、520のクラブを抱えるまでになる。

しかも、同連合は、フランスのスポーツ界を結びつけ、統一を成し遂げた存在として認識されるようになった。

後方の守りを固めたクーベルタンは、いまや後顧の憂いなく戦えるようになった。

1892年、彼はフランス全国の学校を回り、各地で説得に努めた。そして国際試合を行うことによってスポーツを普及しようとした。これは、困難な仕事だった。

彼は、4月18日の英仏対抗 — スタード・フランセ対ロスリンパーク・フットボールクラブ — サッカー試合に、次いで10月8日にはボートレガッタ — ロンドン・ローイングクラブ対USFSA — に出席した。しかし、1892年のハイライトは、11月20日から27日までパリで催された《USFSA》50年祭だった。新しいオリンピックズが、いよいよ視野に入ってきた。

1.2.3. 神話、記憶、国内オリンピック大会

歴史が不連続であることの証なのだろうか。そう信じる人もいるだろう。

オリンピックという名の川の流れは、石灰岩の台地を流れる川のように、紀元4世紀のある時点で姿を消し、最近の千年間に再び — それも時折 — 地表に見え隠れした。そして、19世紀末

のヨーロッパに突然、力強く、清く澄んだ姿を現した。

これを根拠として、近代オリンピックは古代ギリシャに何も負っていない、と断言できるのだろうか。史実を検証するよりも、起源を「神話化」する誘惑に駆られてしまうのではなかろうか。歴史が伝える物語を受け入れたほうが、ずっと楽ではなかろうか。

しかし、それでは現在に対する挑戦を避けることになる。

オリンピズムは、とにかく人類を救う福音であるかのように自らを装う傾向がある。

混乱、そして性急な結論・・・ネオ・クーベルタン主義も決して例外ではない。

しかしながら、古代オリンピアも、肉体を持たない靈魂のようなものではなかった。

ギリシャ神話自体は、常に、社会的な血も肉もある人間について語っている。

例えば、古代ギリシャの作家パウサニアスは、ヘラクレスが兄弟たちと一緒に最初のレースを開催したことを物語ってくれるが、同時に、その者たちが青銅の細工師であったことも知らせてくれる。こうして、われわれは鍛冶屋の儀式を思い起こすことになる。

詩人ソフォクレスは『エレクトラ』のコーラスでペロプスの戦車を使い、決闘の勝者を無罪にした神明裁判の部族儀式を彷彿とさせている。

また、アカイア人とドーリス人の武力闘争はどうなのか。彼らはエリスを — つまり、エリスにあるオリンピアを — 手に入れ、オリンピック大会開催の権利を得ようとして闘ったのだ。

クリュメニアとエンデュミオン、ペロプスとアミュタオン、ペリアースとネメア、アウゲイアースとヘラクレスは、一体どうなのか。

デルフォイの神託に従ったイフィトスの伝統回帰の裏には、何があったのか。それに、歴史家ティメアによって遅ればせながら提案された紀元前776年という年は、どう解釈すべきなのか。この年号は、あらゆる都市国家に共通の基準となり、オリンピアの勝利者の有名なリストの故に年代参照のための便利な基準となっている。

神話と物語と史実と記憶のそれぞれに相応しい場所を与えるのは容易なことではない。

しかし、オリンピック競技会が、何世紀もの間、西ヨーロッパ人の記憶の中に常に存在していたことは疑いない。キリスト教の影響が大きかった中世であれ、ルネッサンスであれ、近代であれ、絶対王政や大革命の時代であれ、オリンピックの記憶は、その時々のもっと輝かしい作家の筆を通して生き続けてきた。

19世紀の中ごろ、この記憶が急激に高揚した。教育問題への強い関心が再び高まったこと、啓蒙時代の哲学の影響で教育者の目が再び身体の尊厳のほうに向き始めたこと、ドイツやスイスの〈博愛主義者〉たちの具体的な業績、ギリシャの解放に触発された古代ギリシャへの情熱、身体教育の方法をめぐる西洋での意見の相違・・・これらすべてが結びついて過去の再発見を促し、本来は二義的に過ぎなかった現象、オリンピックを西洋文明の重要な構成要素にまで押し上げたのである。

創造的な力の胎動が感じられる。しかしながら、オリンピック大会の復興は当然だと思わせるほど強い力ではなかった。技術、経済、政治、商業、社会、文化など、数多くの分野で複雑な条件

が整わなければならなかった。もちろん、人的要素も重要だった。私欲、野心、意欲、夢見る傾向が、他の人々よりも強い個性が必要であった。

成功は、内部から発する成熟の度合いにもかかっていた。ある程度の理論づけがなければ、実際の企ては失敗してしまう。たとえ物質的条件が十分に整ったとしても、意味づけに欠けていたのでは、せっかくのオリンピックも、お祭り気分の商業的な集まりか、せいぜい単なるスポーツイベントに留まることになる。

十分な物質的条件が整ったとしても、かくあれかしという関係者の確固たる決意がなかったら、オリンピアが生き返ることはなかったであろう。

このような見方によって、われわれは、近代オリンピックを長い間かかって築きあげるようになった数多くの試みや成功、失敗の意味を把握することができるのである。

その最初は、古典文学作品の象徴主義である。

1516年、パウサニアスの著作とピンダロスの『頌歌』の初のフランス語訳が発行された。モンテーニュは、その『エッセー』の中で「大勢の人が集い寄る盛大なオリンピック大会」について触れている。そこでは「ある人々は大会で栄誉を得るために体を動かし、他の人々は利益を得るために品物を持参して売りさばく。そのほかに、決して悪いというわけではないが、事の成り行きを傍観しているだけの人々がいる。他人の生き方を見て、それを自分の生活を方向づける判断材料にしようという人々だ。ピタゴラスも述べているように、われわれの生活も似たようなものだ」。

古典文学は、伝統に正当な裏づけを与える一方、その大会をとりまく状況を描き出していた。ストイックな人々は、いつの世にもいた。

1723年、フランスのベネディクト派の僧侶ドン・ベルナルド・ド・モンフォーコンは、コルフの大司教クイリニ枢機卿に「パウサニアスの著作によれば、オリンピアの遺跡には、神聖なモニュメントや奉納された碑文が隠されている」と書き送っている。

専ら古代オリンピックの歴史について語った最初の本は、1732年にオランダのグロニンヘンで発行された、神学者テオドルス・アントニデスによって書かれたものである。

1763年、近代考古学の父とされるドイツ人、ヨハン・ヨアヒム・ヴィンケルマンがオリンピア発掘の先頭に立った。しかし、彼は1768年に早世し、プロジェクトは中断された。イギリスの科学者で探検家でもあったリチャード・チャンドラーは、エリス一帯を徹底的に探索し、オリンピックの遺跡の発見に努めた。

1787年、フランス人セバスチャン・フォーベルがゼウスの神殿を発見した。

1780年、T・B・ホルスはハーバード大学の学長ジョセフ・ウィラードに手紙を送り、「もしアメリカが“ギリシャの原則に則って”行動し、アメリカの地でオリンピック大会を再生させることができれば素晴らしいであろう」と述べた。

1831年には、イギリス人スタンホープ卿が、スタジアムとその周辺の精密な見取り図を書いている。

1829年、建築家アベル・ブルーエと彫刻家ポール・デュボワは、考古学者や科学者を交えたフランスの調査団 — モレー調査団と呼ばれた — を率いて現地入りし、ゼウス神殿の一部を発掘した。

しかし、オリンピアの遺跡の発見者としての名誉は、ドイツの考古学者たちと、その押しも押されぬリーダー、エルンスト・クルチウスのものである。クルチウスの発掘作業や発見がもたらした学問的な反響の大きさは、大変なものだった。

世界中の学会の支持を得て、大規模な発掘が1875年から1897年まで行われ、さらに20世紀を通じて続けられた。

ピエール・ド・クーベルタンは、IOCの書庫に収められている未公開のメモのなかで、1889年7月21日に、パリでポール・モンソーによって行われた『オリンピアの発掘』をテーマとする講演に触れている。この講演が1889年の「身体運動に関する会議」のわずか数週間後に行われたことは注目に値する。

オリンピアの発掘は、西洋のエリート知識人の情熱をかき立てただけでなく、世論をも刺激した。これに触発されて、世の中の動きは次第に高まりを見せ、ついにオリンピック大会の復興へとつながっていく。クーベルタン自身が、この現象を地で行くような存在だった。「・・・古代史の中で、オリンピアほど私に夢を抱かせてくれた存在はない。この夢の都市は、形の上では、厳密に人間と物質のために捧げられていながら、そこをおおう愛国主義の理想によって清められ、高められて、あたかも生命の飛躍を生み出す場所のように、私の青春の心に、列柱と柱廊を浮かび上がらせていた。その廃墟から再生の原則を引き出すことを考える遙か以前に、私のイマジネーションはその再建、そのシルエットの線を再び立ち上がらせることに満たされていたのである。ドイツはオリンピアに残っているものに光を当てた。フランスがその栄光の再現に成功しないはずはない。」

事実、16世紀以来、オリンピックの神話は、民衆レベルの競技会に文化的な光を投げかけて止むことがなかった。デイビッド・C・ヤングという作家は、これらの競技会を、ためらうことなく《疑似オリンピック》と呼んでいる。基本的にはこの考え方をとらないにしても、あまりに軽視されてきたとゆわざる得ないこの角度からの指摘を試みたい。

歴史家の注意を引く最初の《疑似オリンピック》は、ロバート・ドーバー（1575-1652）によって開催された《コッツウォルド競技会》である。カトリック教徒のイギリス紳士ドーバーは、弁護士でスポーツマン、反ピューリタンの人であった。

1834年7月14日、スウェーデンのルントにあるカール王立アカデミーの教授で、リングの弟子でもあったグスタフ・ヨハン・シャルタウが《オリンピック》大会を開いたのは、同国のラムレーサでのことだった。

1836年7月、ヘルシングボルグ・オリンピック協会後援、ヘルシングボルグ郵便協会協力の第2回大会に、シャルタウは《スカンジナビア・オリンピック大会》に参加するようスカンジナビア全域から選手の参加を募った。

ラムレーサ大会は、シャルタウの死とともに廃止されたが、この大会は近代オリンピックの考え方と組織に大きな影響を及ぼした。

1830年、ポズナンでプロのスポーツ選手が《オリンピック大会》と銘打ったサーカスショーを開催した。1853年には、ニューヨークのフランコーニ競馬場で、中世風のトーナメント、鹿狩り、障害物競走、オリンピック競技などが行われ、1万人の観客を熱狂させた。単なるサーカスだったが、ロマンチックな時代が歴史的な再現を好んだのである。

これよりも意義深いのは、1842年にモントリオールで行われた、地元ケベック州出身の何人かのスポーツマンたちによる旗揚げである。彼らは《ランニングクラブ》を発足させた。そして、1844年8月28日と29日の両日、このクラブが先頭に立って《モントリオール・オリンピック大会》を開催した。大会は総督閣下の後援のもとに行われ、28の種目で選手が競い合った。

同じころ、グルノーブルのカトリック大司教管区が、ロンドーの小神学校でプロムナード・オリンピック（オリンピック・ウオーク）を開催した。1832年に始まった。この話も記録に値する。

1832年は閏年だった。2月29日という余分な日、何人かの古典人文科学の教授たちは古代オリンピックの栄光を思い浮かべ、神学校の生徒たちは休日をどう過ごそうかと思案していた。ともにカトリックの信奉者だった2つのグループは一緒になり、「偉大にして神聖なる学問の神アポロと、賢く純潔で芸術の守護神のミネルバの名において」ロンドーのプロムナード・オリンピックを創り出した。

憲章が制定された。「オリンピアで4年に1度祝われたオリンピック大会を記念し」、ロンドーの木陰で4年に1度、プロムナード・オリンピックが開かれる。5人の評議員と1人の事務担当者が「上級の5つの学年から選ばれ、競技と儀典の管理運営に当たる」。

生徒も先生も非常に熱心だったので、この〈オリンピックの先駆け〉は、すぐ毎年のイベントになった。

1851年、アンリ・ディドンの名が勝利者のリストに表れる。彼は「教室で見せたと同じ熱烈で見事な知性を、オリンピック大会にもたらした」人物だった。

グルノーブル、ロンドーの小神学校のオリンピック大会は、フランスの宗教教育の尊大さと頹廃から逃れることができず、1906年以降衰退し1925年には完全に消えてしまった。しかし、この大会は、フランス史の変転に揉まれながらも、いかにも「ケルト風やガリア風」とされる伝統の種目を

中心に競技を繰り広げた結果、スポーツに飢えた若者たちの人気を集め、開放的で知的な社会階層に支持されて、一世紀近くも続いた。

その驚くべき長寿、偉大なギリシャの伝統への文字どおりの傾倒、生徒レベルへの分権化、教職員から与えられた無条件の支持などは、教育の場におけるオリンピックの可能な姿を如実に示した。

内々の催しではあったが、ロンドー大会は、パリにあるフランスの統一されたスポーツ関係組織の注意を引いて当然だった。さもなければ、カローやレイシエルやクーベルタンの能力に疑問を持たれたとしても仕方がない。彼らは、フランスの学校に少しでもスポーツ振興の兆しはないかと、国中を旅して探していたのだから。

しかし、USFSAの議事録にも、クーベルタンの回顧録にも手紙にも、ロンドーにおける試みについて触れた記述は一切見つかっていない。

偉大な人々の回顧録は、なぜか奇妙に偏っているものだ。クーベルタンは、イギリスのマッチ・ウェンロック大会の創始者ブルークス博士を褒めちぎっている。クーベルタンはどちらかというと褒めるより批判しがちな人だったが、これは例外である。

最初、2人は手紙のやり取りをしていただけだった。

クーベルタンが1889年の kongress への参加者を新聞広告を通じて募集したとき、ブルークスが応えた。クーベルタンは、この80代の人物の若さと、教育改革を実施して体育に正当な場を与えようという情熱に魅了された。しかし、ブルークスはその高齢のためにクーベルタンの招待に応えることができなかった。その代わり、クーベルタンがマッチ・ウェンロックを訪れ、例がないほどの丁重で行き届いた歓迎を受けた。

1890年10月25日付けの『ウェリントン・ジャーナル』によれば、この年の秋、マッチ・ウェンロックのグラウンドで、クーベルタンのために陸上競技会が特に催されている。

クーベルタンは人体模型の標的に槍を投げる《槍的》競技、パレード、閉会式に強い印象を受け、特に詩の朗読と古典文化へのつながりに感動した。

ドイツ人による考古学上の発掘と同じように、マッチ・ウェンロックのオリンピック大会は、クーベルタンの想像力をかき立てた。彼は、自分の抱いてきた国際レベルの夢が、マッチ・ウェンロックに地方レベルで具体化されるのを見たのである。マッチ・ウェンロックのオリンピック大会は、スポーツと芸術、古代オリンピズムと中世の騎士道、伝統と現代性、貴族社会と労働者階級の結合であり、近代オリンピックの復興計画 — 数年後にクーベルタンが国際世論に働きかける計画 — を導き出すものでもあった。

それにしても、19世紀の半ばにギリシャで行われたオリンピック大会に対するクーベルタンの奇妙な健忘症には驚かざるを得ない。大変なギリシャ崇拝者であり、現代史の愛好者でもあったクーベルタンが、それを知らなかったはずはない。

現代ギリシャのオリンピック大会は、これまで歴史家によって粗末に扱われてきたが、実は、もっと多くの考慮を払うに値する。

発端は、1837年の国王オットー1世の勅令だった。オットー1世は、貿易博覧会をアテネで3年に1回催すよう命じた。それは農業、工業、スポーツの3部門からなっていた。競技は正に古代ギリシャのもので、円盤投げ、槍投げ、幅跳び、競走、レスリング、戦車競走だった。貿易博覧会は実際に行われたが、スポーツ大会は20年ほど延期された。

ギリシャこそが「古代のオリンピック大会を復興すべきだ」と提案したのは、詩人パナギオティス・ストゥソスだった。

ドナウ川沿いの辺境地帯 — 今日のルーマニア — に住んでいた裕福な商人エバンゲリス・ザッパスは、熱烈な愛国者で、ストゥソスが提唱したアイデアのとりこになった。1882年、ザッパスは自分の熱意を国王に伝え、古代オリンピック復興の経費負担を申し出た。

これは無駄に終わる。当時の外相ランガベスは、スポーツなどアナクロニズムだと思い込んでいた。結局、古代の競技は博覧会の会場で、それも民間の行事として行うことを許された。1859年、最初のギリシャオリンピック大会が開催された。費用はザッパスが全額支払った。

競技は〈プロフェッショナル(本職)〉と〈プロフェイン(素人)〉の2つのカテゴリーに分かれて行われた。当時は、まだ〈アマチュア〉という言葉は知られていなかった。競技は、短距離競走、槍投げ(距離と的当て)、円盤投げ(高く投げる)、それに戦車競走で、市外のプラテイア・ロードビクー広場で行われた。

ランガベスは、ザッパスがスタジアム改修のために出した20万ドラクマを使わなかったのである。

ザッパスは1865年に死去した。その莫大な財産は、古代の儀式に則ったオリンピック大会の復活のために遺贈された。

1869年、アテネのスタジアムは修復され、しかるべき設備が整えられた。

1870年の第2回オリンピック大会では、1859年の苦い経験を生かして運営が改善され、盛大な成功を収めた。

競技者は、一定のトレーニングに参加するために、6週間前に集まった。彼らは規則を守り、不正をしないことを誓った。貧しいものは組織委員会から補助を受けた。

優勝者に対しては、次の大会のテクニカル・ディレクターに指名するという申し出が行われた。触れ役が、競技と優勝者の名を読み上げた。すべてはザッパスの遺言どおりに行われたのである。

1870年11月15日、ギリシャ中から集まった数百の選手に対して、過ぎし日のように、3万の観衆が歓声をあげた。新聞は一斉に称賛の声を送った。

ザッパスの金の余った分は、ザッペイオン「クラブハウス」の建設に使われた。クラブハウスは、ア

テネの中心にあるナショナルガーデンの真ん中に建てられた。

しかし、大会の組織委員会は反スポーツ派の手に握られていた。このことは、1896年大会の開催に深刻な影響を与えた。

1888年10月20日、ザッパスの頭部は、計画どおり、ザッペイオンに祭られた。パイロンの胸像も飾られた。しかし、スポーツ競技は行われなかった。

新しい時代が始まった。混乱はしていたが活気に満ちていた。

松明はフォキアノスに受け継がれた。彼は1875年まで大会準備委員会事務局長だった。

1889年5月、フォキアノスは自分の体育館で競技会を催し、「オリンピック大会」と名づけた。しかし、会場は狭く、役員は押し合いへし合いの状態で、観客は選手を見ることができなかった。大会は半ば失敗に終わった。

しかし、フォキアノスは屈しなかった。彼のクラブはオモニア・クラブと合併し、パン・ヘレニック（汎ギリシャ）体操協会となった。

そして、1891年にはパン・ヘレニック大会が開催され、国王が臨席した。1893年の第2回パン・ヘレニック大会は、さらに大きな成功を収めた。

新オリンピズムの時代が、ついに夜明けを迎えたのである。

1.3. ピエール・ド・クーベルタン、十字軍戦士そして伝道師

1.3.1. 彼の仕事の基礎

歴史が創られるとき、クーベルタンはいつもそこにいた。

何ものも、彼が演ずべき役割を予め用意したわけではなかった。むしろ彼は、新世紀の挑戦に応えようとしたのだ。彼のモットー、「ハッキリと見、正しく考え、断固として行動する」。クーベルタンは時代に先んじていた。

やがて彼は、創造的なイマジネーションについて書く筈であった。彼の才能を刻印するこの特質は、白昼夢を見る生来の性向、反逆的な気質からきていた。

クーベルタンはけっして傍観者の立場にはたたなかった。常に最前線にいた。

クーベルタンは、1863年1月1日、パリで生まれた。フォーブル・サン・ジェルマンのすぐ近く、ウーディノ街20番地である。

彼は豊かな地主貴族の出である。両親は年金と小作農の地代で暮らしていた。

父の名はフレディ、イタリア、ビテルボに起源をもつ古いバロア家の末裔であった。彼の祖先はルイ十一世によって貴族に列せられ、18世紀に、パリの近くのシェブリューズの谷間にクーベルタンの土地を取得した。

母方の祖先は、ウィリアム征服王の勲爵士の一人で、ヘースティンズズの戦いから帰って、領地としてセーヌ河口に近いミルビルの公爵領の森の一角をもらった。

後年彼はここに城のある農園をつくった。名誉の紳士として、礼服と剣の人として、クーベルタン家の人々は王につかえた。時として皇帝に。そして常にフランスにつかえた。

クーベルタンの父、シャルル・フレディは画家であったが、全ての審美的誘惑や政治的過激主義から遠い、形式を重んじる画家であった。

母、マリー＝マルセル・クリズノアは、教育と教養のある女性であった。このことは見逃すわけにはいかない。彼女はウェルギリウスを原語で読み、ピアノを演奏し、タピストリーを織り、貧しい人たちの面倒をみた。

クーベルタン家は正統主義者で、ブルボン家とボナパルト家を同じように憎み、ただ二人の王、フロースドルフ(オーストリア)に亡命中のシャンボール伯爵とローマを支配している教皇しか認めなかった。

四人兄弟の末っ子であったピエールは、母と姉に甘やかされた。父親は画架と自分のクラブのテーブルの間を往復するばかりで、息子の教育にはほとんど興味を示さなかった。これが、若いピエールの、母親との緊密な関係、創造的な傾向を持った心、繊細なイマジネーション、父親のマナーや社交的な礼儀作法に対する反発を説明しないだろうか。

ミルビルの家でも、断崖で有名なエトルタの海水浴場でも、ウーディノ街のルイXV世サロンでも、子供時代のピエールはなかなかの話し手であった。彼の考え深い共和国擁護論は聞く人を驚かせた。この人生の早い時期に、既に彼の将来の姿を感じることができる。

バルカン戦争がだらだらと続いていた。問題はオットマン帝国と共に古いものであった。ピエールは、自分で開かれた平和主義のユートピア王国を築きあげた。彼は歴史の流れに従って「クロアチア人」であった。

「私のイマジネーションは自由に羽ばたいた。耳に入る政治論議に大変な興味をもった」。彼は都市計画者、建築家、造園者、鉄道技師、総司令官、衣装係であり、作曲し、課税し、国歌さえつくった。

冬になると、王国の「艦隊」がミルビルの池に錨を下ろした。彼は法律をつくり、勅令を出し、「オフィシャル・ジャーナル」を発行し、賢く博識の演説をした。

彼は創造神であり、幸せであった。

学校がこの牧歌的な子供時代に終止符を打つことになる。先生が家庭教師に代わった。彼は半寮生であった。これは当時の「革命的」発明で、そのお陰で彼は毎晩自分の部屋に引き上げ、白昼夢を再び続けることができた。

両親が、高い身分に伴う義務として、彼を入れたマドリッド街の学校はできたばかりで、大きな窓があったが、なお壁に囲まれていた。

更に、ジェスイットは規律というものを軽くは考えていなかった。聖イグナティウスの訓令が適用され、生徒に対してもほんのわずかに緩められているにすぎなかった。

しかし、精神が最も美しい殿堂を築くのは束縛の下ではないだろうか？

そしてそこには、文化と社会の基礎である古典文学があって、ギリシャの歴史が教えられていた。最近のギリシャの開放も、人々の想像力をかきたてていた。

オリンピアの崇高さとストア哲学の美があった。

夢のなかで、ピエールはゼウスの神殿を再建し、ピンダロスと語り、スタジアムで競走し、エレウシスの密儀を自から主催した。

明らかに、彼のギリシャは型にはまった月並みなものであった。

アキレスやコロエボスの功績と、メソロンギの防衛軍の勇気やバイロンの英雄主義が、みなない混ぜになったものであった。

この時既に、クーベルタンにとってシンボルが非常に重要なものになりはじめていた。しかし、11才の子供にとって、自分が歴史をつくっているという感じは、とりわけ嬉しいものだったに違いない。

ヨーロッパは強力であった。18世紀以来、ヨーロッパのブルジョアにとって、パリでも、セント・ペテルスブルグでも、ロンドンでも、ローマでも、一切の文化的境界線は存在しなかった。

クーベルタン一家はその典型であった。彼らはスパの水をとり、ロンドンで晒したリンネルを使い、ドイツの博物館を訪れ、ローマで祈った。

1879年、彼らはブレンナー峠を越えてフロースドルフを訪れ、オーストリアに亡命してフランスの王権を主張しているシャンボール伯爵に忠誠を誓った。

子供心にもピエールは、ヨーロッパがフランスに、そして世界がヨーロッパに引きつけられていることを知っていた。

感じやすく、早熟な若いクーベルタンは、働く必要のない程の財産を持ったエレガントで教養のある人達の間で暮らしていた。

ミルビルやサン・レミー・レ・シェブリエーズやウーディノ街の図書館を彼は自由に使えた。彼の文化と文学に対する愛は、身体と社会の開放への渴望を伴っていた。

それは「良い家系の紳士」である彼自身の家の図書室によって証明される。そこでは古代、現代の歴史についての作品が一際目立っていた。

我々が既に見たように、1872年、ピエールは「ジュールナール・ド・ジュネス」のなかに「トム・ブラウンの学校生活」（ラグビー校の卒業生トーマス・ヒューズによって書かれた）を見つけた。それはまさに天啓であった。

彼にとって、ラグビー校の壁の外の田園を走ったり、野ウサギと犬の遊びをしたり、ボールを蹴ったり、郷士や准男爵の息子たちである仲間と一騎討ちをしたり、殴り合いをしたりするのは何と楽しかったことか。

貴族であること、真の紳士として弱き者、貧しき者を守らなければならないのは何と名誉なことか。こうしてピエール・ド・クーベルタンは育った。

自分の過去に忠実に、そして同時代の衆に抜きんでようという熱意を持って。

聡明で、ユーモラスで、教養に溢れて、彼はベルエポックのパリジャンの生活を送った。彼は上流社会の若者たちの人気者であった。

クーベルタンには、何世紀にもわたる洗練された生活の内に自然にはぐくまれた、決して学んだものではない、些細なディテールからなる控えめなエレガンスがあった。

頑固で、中庸で、シャイな彼は、フランスのための他のライフスタイルのビジョンを持っていた。

末っ子であった彼は、外交官や、士官や、母親の望んだような神聖ローマカトリックとローマ教皇の聖職者にも、なろうとはしないだろう。

1880年、拒否と不確実さに直面し、エコール・リーブル・デ・シアンス・ポリティックの非登録学生として入学した法科での、喜びのない一年のあと、彼は伝統に背を向ける。17才で、文学と科学の二つの中等学校卒業の資格を得ただけだった。

1885年、法学士の称号を得たが学問的価値はほとんどなかった。

その時以来、クーベルタンは才能の「自己教師」であることを証明しなければならなかった。彼の先生は、トックビル、テヌ、ル・プレであった。これらの人々と古代ギリシャの師たちとの間に断絶はない。

20世紀の夜明けは、ヨーロッパ文化の記憶の絆で昨日の世界と結び付けられていた。彼の友の一人というべきは、後にイギリス首相となったオースチン(アルツール?)・チェンバレンであった。クーベルタンの心はチェンバレンと共に、伝統の緑の田園と、現代の未だ洗練されていない風景のなかを彷徨した。

政治学部は因襲的な型にはまった公立大学に対抗するものとしてつくられた。そこでは、テヌが彼の知性の輝かしい力をフルに発揮して講義をしていた。

テヌと彼の弟子、アルベール・ソレル、ピエール・ルロアーボーリュ達にとって、最良の政府とは、自然の法を尊重する政府であった。ダーウィンが証明したように、適者だけが生き残るのである。テヌは社会的階級の存在することを否定しない。しかし、すべての「自然の」教育は、神聖な階層を再形成することを目指すべきである。

選ばれた、肉体的に強い、知的に聡明な貴族が設計し、導き、平民は働き、生産する。

テヌは民主主義の理想の形を、社会の階層を尊重し、未来の挑戦に直面するイギリスの議会制度とパブリックスクールの中に見た。パブリックスクールでは性格形成に重点を置き、公のために献身することを教えていた。

テヌは、クーベルタンが最も共感した教育哲学者であったに違いない。

彼は、人生の後半、重要な決定を下さなければならない時、テヌからインスピレーションを得、彼に相応しい行動を選んだ。

テヌは彼に、彼自身であることを教えた。そして同時に、自分自身の本性に忠実であり続ける

こと、自分の過去を否定することなく、未来を見つめることを教えた。

こうしたわけで、クーベルタンがメモワールに書いている通り、家族もフランスの政治家もイギリス嫌いであった時代に、テヌはクーベルタンが聖戦を進める上で守護者となるのにとりわけ相応しかったのである。

当時、仲間を説得するには、「トム・ブラウンの学校生活」を引用するより、テヌの「ノテ・シュール・ラングレテール」（イギリスについてのノート）を引用したほうが効果的であったのである。

クーベルタンのもう一人の師は、トックビルであった。彼の作品は「古き良き時代」を悼むのは無駄であることを教えた。トックビルは、クーベルタンのように国のジャコバン的中央集権主義に反逆し、財産資格に基づいた選挙権による州議会制度を主張した。

クーベルタンはトックビルの中に、自分の現代史に対する情熱と、若いアメリカの民主主義とその憲法、アメリカ人の起業精神に対する関心を正当化する根拠を見いだした。

ル・プレは新しい社会学の背後にある考え方を彼に教えた。階級の必然性、そして社会調査と研究論文の有効性を教えた。ル・プレの思想は、クーベルタンの生涯を通じて一つの導きとなる。

ル・プレとクーベルタンにとっては、社会階級は神聖な秩序の一部であった。

そして工場主にとっての至上命令は、オーナーとしての彼の義務を果たすことであった。この「家父長主義」に対して労働者は社会階級の実在を甘んじて受け入れなければならない。オーナーは、家庭での父、教区での神父のように、工場での神であった。

ル・プレはまた、行政的、民主的な安定は、村、県、なかんずく地方の生活文化のコミュニティに基礎を置いて信じていた。この中央集権排除の考え方はクーベルタンの伝統尊重と二つのレベルでの民主的实践への全面的な肩入れと軌を一にしていた。

そこでは「幸運な少数者」がその意見を提唱しなければならなかった。

この態度に、我々はいずれまたいろいろところで出会うことになる。

スポーツ運動にとって必要かつ十分な基礎、スポーツ協会、の主導性に対して押しつけられたすべての官僚的上部構造に向けられたクーベルタンの不信感、国際オリンピック委員会の委員を選ぶやり方などがこの態度の反映である。

テヌやトックビル、またル・プレ、あまり重要でない作家、プレボー・パルドゥール等と共に、クーベルタンは普遍的な歴史の理念を見いだした。これは新オリンピックムーブメントにしみ通るものである。

彼はまた、彼らの作品の内に、自分の「行動の人」としてのコミットメント、フランスの青年の教育を新しい技術的、政治的状況に一致させようとする決意に対する正当化の根拠を見いだした。

政治的模範、権威ある大学人、テヌ、トックビル、ル・プレは、クーベルタンの仕事を歴史的、社会的に尊敬すべきものにし、改革の問題についてはいつも小心なフランス人ブルジョアに知的保証と安心感を与えた。

始めから、クーベルタンは、戦術的才能を示していた。これは後に、彼のオリンピックのための聖戦で有効であることが証明される。

資産家の伊達男、クーベルタンは春秋に富む人生を前にし、十分な時間を手にしていた。このブルジョアの黄金時代、彼らは多くの時間を旅に過ごした。シャトゥブリアン、フローベール、ルナン、皆旅に出た。

より控えめではあるが、少なからぬプライドをもってクーベルタンは、トーマス・アーノルドとイギリスの教育制度を調べる旅に出た。将来の改革者、確信的な愛国者であった彼は、逆らいがたくイギリスに引きつけられていた。

1.3.2. イギリスへの旅

1883年、20才のクーベルタンは、自分で費用を払って、イギリスに旅立った。

若いときの情熱が正しかったかどうか、自分の目で確かめたかったのである。

彼は、イギリスのパブリックスクール（イートン、ハーロー、ウエリントン、ウィンチェスター、マルボウロウ）と、もっとも重要なシジェスイットのカトリックスクールを訪れた。そしてオックスフォード、ケンブリッジを含む大学を調査した。

しかし彼のもっとも重要な目的地はラグビー校であった。クーベルタンはトム・ブラウンに会いたかったのである。

彼の経験は、ル・プレの「ラ・レフォルム・ソシアル」（社会改革）に1883年11月1日と12月1日に、後に1888年の「イギリスの教育」に発表された。

クーベルタンは優れた観察者であった。彼は画家の目と音学家の耳を持っていた。

彼の描写は色彩豊かでイメージに満ちていた。しかも逸話の多い旅行記の体裁をとっていた。クーベルタンはモラリストになった。彼がイギリスへ行ったのは、明らかにアーノルドの偉大さを確かめる言葉を聞くためと、自分自身の目的を正当化するためであった。しかし彼が本当に気にしていたのは、ラグビーやハーローではなく、ジャンソンやジュイイー、トム・ブラウンではなく、フランスの学生たちであった。

イギリスの田舎にいても、彼の思いはシャルトル、パリ、ボルドーにあった。

彼はフランスで、偏見を覆し、組織を変え、スポーツ協会や、学校新聞、グラウンド、選手のためのロッカールームやシャワーをつくっている自分の姿を想像した。

20才、大きな夢を持つ年令だ！ 街に体育館をつくり、フランスの川に沿って水泳場を開設しよう！ フランスの学生たちにいろいろな人気のある団体ゲームをやらそう！

何よりも、体育が軍事教練であってはならない。スポーツと自由は分かちがたく結びついている。

我々が見るように、彼の唯一の関心はフランスであった。

1886年から1888年にかけて、ル・プレの「ソシエテ・デコノミ・ソシアル」に掲載された教育についての講義の記事と、ジュール・シモン委員会事務局長としての活発な活動、そして彼の名誉となることであるがフランス中の学校訪問によって、クーベルタンは知識階級や政界の注目を集めつつあった。

彼は25才になろうとし、政界でのキャリアが目の前に開かれようとしていた。

ルアーブルの市長、ジュール・ジグフリードが、彼にセーヌ・アンフェリール議会の議員になることを薦めた。しかしクーベルタンは頭は大事業のアイデアで一杯であった。彼は躊躇った。

慎重にことを運びながら、彼はパリに行き、ジュール・シモン委員会の会員、オーギュスト・リボーに会った。元評議会議長であったリボーは説得に努めたが無駄であった。

クーベルタンは近くのブローニュの森に行き、大きな危険から逃れたという意識をもった。彼は決して議員にはならないだろう。彼は自分にもっと高い目標を課した。

ある人々は偉大なことのために生まれてくる。歴史によって、幸運によって、或いは文化によって予め定められた聖戦のために、子供時代から準備がされている。

進む未来に確信を持ち、神の手によって優れたものになる運命を定められている。

クーベルタンは常にその人たちのトップにいた。

1.3.3. アメリカとカナダへの旅

ユニオン・デ・ソシエテ・フランセーズ・ド・スポール・アトゥ レティック(USFSA) の kongress が終わりに近づき、クーベルタンはこれまでもまして、社会に対する歴史的、比較的な視野なくしては、教育やスポーツにおいて何事も達成できないという確信を深めていた。

アルマン・ファリエール公教育大臣、後の共和国大統領も、このことを確信し、1889年 7月17日、クーベルタンにアメリカ及びカナダ視察の任務を与えた。大学とスポーツクラブがどのような活動をしているか調査するためである。

クーベルタンがこの使節を希望したことは疑問の余地がない。これは彼の1883年の調査と、強化された確信の論理的帰結であった。

しかし、彼はこのことについてメモワールの中では言及していない、偉大な人間は、自分から言いださなくても求められるのが当然であるということなのであろうか。

旅行に先立って、彼はジュールス・フェリーを訪ねた。フェリーはフランス第三共和国初期の教育大改革の先駆者であった。彼はクーベルタンのうちに「英雄的な精神」を見て、教育問題について長時間話しこんだ。そこでは特筆すべきものはなかった。

クーベルタンはそれから数週間、ミルビルで休暇を取ったようである。全家族がここで夏を過ごすのが常であった。

1889年9月23日、彼はルアーブルでブルターニュ号に乗船した。

クーベルタンは1890年 3月 1日、「公教育大臣閣下」に宛てて手紙を書いて、奇妙なレポートの結論となるいくつかのアイデアを述べた。そのレポートはすべて自分の考えの正当化からなっており、通常の公文書の謹厳さとは対照的なエキセントリックな文章で書かれていた。彼は言っている。行政当局は「体育に、それが相応しい重要な場所を与えることについての関心」に応えることができるはずだ。

調査は、「アメリカの体育教育が、ドイツとイギリスの教育方法が戦っている戦場であった」という意味でとりわけ収穫の多いものであった。「偉大なアーノルド」のレッスンはプロシヤの体操に代わ

るものであった。クーベルタンによれば、スポーツ教育は既に成果を上げつつあった。彼は付け加えている。フランスが軍事教練化された体操の代わりにスポーツゲームを選んだことは正しかった。

彼がこういう風にいうのは、彼が戦っていたからである。スポーツが教育のいろいろなレベルに浸透するには何十年も必要であり、体操の医学専門家とスウェーデン派の理論は簡単には死のうとしないのである。

旅行中に参加した、ボストンの身体トレーニングの会議も、クーベルタンにプロシヤの体操もスウェーデンの体操もフランス人の気質に合うものではないことを確信させた。

まとめて言えば、フランスの教育に必要なのはゲルマン的なアプローチでも医学的なアプローチでもないということである。彼は断固たる調子で、会議は何ら興味あるものはなかった、と結論している。

この旅の間に、クーベルタンは、1889年にパリでイッポドローム・テーヌによって紹介されたスローンと再会している。スローンは歴史家で、プリンストン大学の教授であった。これは、長く誠意ある友情の始まりであった。この友情はクーベルタンの近代オリンピックの考えに大きな影響を与えることになるので、後で再び取り上げねばならない。

クーベルタンは、アメリカでは、協会結成の自由のないスポーツはないことに気がついた。若者自身が、自分のトレーニングに責任を持っていた。

このスポーツにおける自由と責任の教訓は、彼が1883年にイギリスのパブリックスクールや大学で発見したものと同じであった。

クーベルタンは依然として、討論クラブや、慈善組織や、アメリカの学校や大学でつくられた新聞に興味を持っていたが、彼の戦略の焦点がスポーツ協会の教育的役割の重要性に移ってきたという議論をすることも可能である。

自由なスポーツ協会をつくり、運営することを通じて、青年はトライアンドエラーによって学ぶことができた。若い中学生が自由に選んでグループをつくり、その発展に参加できる一番よい方法は、スポーツチームであった。

若者のもつそれぞれの発展の権利が、お互いの助け合いと協力の至上命令によって、最もよい形で抑制されるのは、このスポーツチームの場においてであった。

クーベルタンが、そうでなければ異教的なものに止まったであろう身体活動をキリスト教文化の中に統合したのは、1889年アメリカのキャンパスにおいてであったように見える。スポーツマンのチームに対する献身は、道徳的に、中世のキリスト教貴族の騎士道精神に照応するものであった。

1889年の調査の結論を読んで、いくつかその他にも気がつくことがある。

例えば、一般に通用している常識を絶えず問いなおそうとする傾向、お喋りよりも行動の優先、すべての者がスポーツをできるようにしようという決意、体育館を日中は子供たちに、夕方は大人に開放（彼はボストンでこれを見た）すること、スポーツマンにもっと衛生的な環境を提供すること。ここに、我々はすでに新オリンピズムの実際的な教えの基礎が表れているのを見ることができる。

この段階で、我々はクーベルタンの後まで続く特性、女嫌いの最初の兆候について触れないわけにはいかない。人によっては、「物凄い、着飾った婦人」や、アメリカの小間使いの「あつかましい眼差し」や、会議に女性出席者が多すぎることや、「何という帽子だ！ とブリュドム(労働委員)氏なら言っただろう」。魅力的ならまだしも「彼女らの何人かは大変なお婆一さんだった」などという記述を読みたくないと思うかもしれない。

我々としては、クーベルタンのアメリカ文明の不安定な未熟な側面についての明快な理解に、あまり良心の呵責を感じずに言及できるというものである。

不運なヨブのわらの寝床は鉄道資本家グールドの玉座からそう遠くはなかった。

貧富の差が極端なこの国で「彼らは、ヤンキー特有の無遠慮さで、唾を吐き、鼻を鳴らし、ぶらぶら歩く」。

カナダ人には、クーベルタンは忠告を与える気などなかったが、それでも、「英語を話すカナダ人」に対して「アメリカ人の習慣を知って、それに対して自分自身を守り、イギリス的カナダ人でありつづけよ」と言わずにいらなかった。

一方、「フランス語を話すカナダ人」に対しては言った。「わが兄弟よ、君達の陳腐な学校についてよく考え、捕らわれている君達の精神を開放せよ！ 」。彼は両者に団結を守るよう呼びかけた。

我々はクーベルタンが北アメリカで学んだことに多くの時間を割いたが、このオリンピック復興直前の数年間に北アメリカ全体、とくにアメリカ合衆国がクーベルタンに及ぼした抵抗しがたい魅力—これは決して誇張ではない—を強調しておくのが重要と思われたからである。新世界への旅以後、クーベルタンは二度と教育を文化と経済の文脈から切り離すことはなかった。彼は理念の「普遍的な」歴史と、人と集団の行為について鋭敏な感覚を失わなかった。何故なら、彼の思想とオリンピックの使命において決定的な力となったのは、比較研究から引き出されたこれらの政治、経済、文化の要素だったからである。

イギリスと北アメリカの教育システムとその働きについてよりよく知ろうとする欲求と並行して、クーベルタンは、困難な戦いに直面しながら、フランススポーツの現状に注意を向けていた。そこでは目的と構造の両方に重大な欠陥があった。彼はイニシアチブを取り戻さなければならなかった。

1892年11月25日、USFSAの創立記念日に、クーベルタンは古いソルボンヌの大講堂で華々しい提案を行った。

「我々はユニオン・デ・スポール・アトゥレティックの五周年を一連のお祭り行事で祝っていると思っていた。ビルーダブリーのミーティング、フェンシング試合、ムードンのクロスカントリー、全体の締めくくりに、有名な天文学者ジャンセンが主催する素晴らしいお茶会... そして、その時、我々には文学界、科学界、政界で名を成している多くの人々、ビクトル・デュルイ、ジュール・シモン、ジョルジュ・ピコー、そして1888年、私の初めてのキャンペーンに力を貸してくれた大勢の人の協力があったから... 」

しかし、クーベルタンによれば「赤ん坊は密かに取り替えられていた」。というのは、実はそれが、ユニオン・フランセ・ド・クールス・ア・ピエ（フランス競走連合）の祭りだと分かったからである。この連合は、1887年、ジョルジュ・ド・サンークレアによってつくられたもので、そのメンバーになっている協会は一週間般には知られていなかった。

1892年、バルテレミーとかいう人物が、「カナダフランス人の正義」を刊行し、クーベルタンのフランス系カナダ人についての見方はひどく皮相なものだと断言した。

しかし、クーベルタンは物事を大きな視野で見ている。ソルボンヌ大講堂の「汚れたライラック」のシェードはフランスとロシアの旗によって覆われていた。

ロシア帝国のウラジミール大公が閉会セッションを司会し、共和国大統領がイベントのパトロンを勤めることに同意した。

プログラムは、一見、普通のお祝いのものであった。1892年4月20日から27日迄、USFSAの五周年が、スポーツイベントと上流社会のレセプションで祝われることになっていた。勿論、資産家以外に、誰が一週間も働かないでいられるだろうか？

クライマックスは11月25日、ゲストは「記念の夕べ」に招待された。

ビルーダブリーへの遠足、フェンシング試合、クロスカントリーイベント、主としてパリに住む連合のスポーツマンのために、運動クラブとフットボールクラブの会合が計画されていた。また、少数の小学生の参加も予定されていた。

しかし、連合は「難しい状況」にあった。クーベルタンは地位のあるスポンサーを探していた。彼が見つけたのは、共和国大統領、サディ・カルノー、ジョッキークラブ会長、ジャンゼ子爵、ウラジミール大公の副官プリンス・オボレンスキー、天文学者ジャンセン教授、そしてフランス上流社会の選ばれた人たちであった。

記念祭の式典の目的は、祝祭と高貴なイベントに参加することに熱心な金持ち階級であるゲストの心を、ある方向に持っていくことにあった。

この多彩な催しを提示されて、彼らは25日の夕べに出席しなければならないと思う筈であった。

その夕べのためにクーベルタンは大きな驚きを用意していた。と彼自身は考えていた。

初めて、クーベルタンは彼の計画を、仲間の前で、公に説明できることになった。

彼の計画は鳴り物入りで発表はされなかったが、教育的、社会的過程の出発点となるものであった。その反響については彼自身も押し計ることができなかった。

新オリンピズムの哲学的基礎が創りだされていた。歴史（その精神とその教訓）との関連、古典文化への忠誠、現代社会の必要と国際的目的に応えようとする欲求である。

ソルボンヌでの講演は年代順の三部作に構成されていた。

ジョルジュ・ブルドンが古代のスポーツについて「祖国のための競技」を講演。

J.J.ジュッセルランが、近代世界の身体運動について話した。

クーベルタンは、現代スポーツの中心都市が、ベルリン、ストックホルム、ロンドンの三つであることを述べたあと、「オリンピック大会を、現代の条件に合った基礎の上に、復活する」プロジェクトを

始めるアピールを行った。

彼の講演の結論はよく知られている。「ボートマン、ランナー、フェンサーを輸出しましょう。そこに未来の自由貿易があるのです。ヨーロッパの古い壁の内にそれが導き入れられた日、平和の大義が新しく力強い存在を確立するでしょう。それは貴下の召使である私に、その計画の第二部について夢見る勇気を与えるに十分です。貴下の僕は、貴方がたがこれまでと同じように力を貸してください、貴方がたと共に、現代社会の条件に合った基礎の上に、この偉大な、有益な事業、オリンピックの復興という仕事を継続し、完成することを望んでいます。」

講演と会議に、音楽と詩が加わった。文学の競技が行われた。

全てのロシア人の皇帝、ツアーの代表の臨席はプロジェクトに国際的な色彩を加えた。平和への訴えは、新オリンピズムの基本的な構成要素の一つであった。

そしてその後、何が起こったかも同様に良く知られている。反対？ 異議、皮肉？ 無関心？ 全く何もなかった...

ようやく始まろうとする理解が、まだ完全に、絶対的に欠けている時期であったのだ。

状況は悪化し、連合とクーベルタンに深刻な問題を投げかけた。何をなすべきか？

1.3.4. イギリスの同意を求めて

クーベルタンは、二つの種目について心配していた。ボートと自転車である。何故ならこの二つはフランスではプロが盛んで、イギリスの純粋主義者には悪い印象を持たれていたからである。

フランスの自転車競技は豊かであり、敬意をはらわれることを熱望していた。

その当時、そのような認定には美德証明書の発行が必要であったが、これはスポーツの純粋主義の守り手、アマチュア漕艇協会だけが発行できた。

しかし、フランスのボートマンはプロであったので、先ず最初に、立場を整理する必要があった。クーベルタンは二つのレベルで行った。

先ず、USFSA はいくつかの黒い羊と手を切り、真面目な協会にだけ承認のシールを与えた。次いで、クーベルタンは友人の仲介でロンドンのフランス大使館と接触し、フランス政府が外交的に介入するようにした。

1893年3月5日、大いにためらった末、USFSA はヘンリーロイヤルレガッタ委員会との協定に調印した。これは、フランス漕艇界とフランススポーツ全体にとって、また将来の国際オリンピック委員会の構築のアイデアそのものにとっても重要な瞬間であった。

この件については後でもう一度ふれなければならない。

クーベルタンは秩序だったやり方をした。ボートの問題が片づいたので、次は自転車の問題に取り組んだ。フランスの自転車競技を建て直そうとする努力で主要な働きをしたのは、ルイ・フィリップ・レイシエルであった。USFSA は1891年、アソシアシオン・ベロシペディック・ダマテール(アマチュア自転車協会)を承認した。これは、フランスの自転車競技には最初から存在し、広く普及し

ていたプロと戦うために創立された協会である。

力のあるイギリスのナショナル・サイクリスト・ユニオンとの話し合いは難しかったが、実りある、継続性のあるものとなり、やがてイギリス連盟によるフランス自転車承認にこぎつけた。

これに続く数年の間、USFSA はゆっくり歩を進めた。1892年冬、USFSAは100番目の加入団体を迎えた。2月、クーベルタンに引率されてレーシングクラブ・ド・フランスはロンドンに遠征した。1893年7月、プレ・カテランで開催されたフランス陸上選手権には国際イベントが含まれていた。

しかし、一般に普及しているスポーツでは未だ機が熟していなかった。

状況を分析するにはル・プレである必要はなかった。フランスのスポーツ・ムーブメントは停滞していた。国際的なスポーツイベントはほとんどなかった。あるとすればそれはほとんどイギリスのものだった。フランスの一般大衆は興味を示さなかった。

彼の努力と何人かの熱心な人達の献身にもかかわらず、クーベルタンはスポーツに意味を吹き込むことができなかった。スポーツの社会的ステータスはあやふやなものだった。

彼は、親たちや教会の不信、体操の医学専門家の敵意を相手に苦勞しなければならなかった。また公教育省の官僚主義とも戦わなければならなかった。公教育省は「輸入された」「道徳基準を持たない」スポーツは秩序を乱すものとして反対を決めた。

プロの自転車選手、重量挙げ選手、ボートマンはこぞって彼に反対した。そしてフットボール選手の反対も感じられるようになってきた。

イギリスの非民主的なアマチュアスポーツについて考え方は、彼にとって大変大きな問題を引き起こしていた。彼の立場は難しいものになった。彼は屈伏することも、漸進することもできた。屈伏？ 不可能である。その代わりに、彼は目ざましい動きをすることになる。例えそれが、さいころに重りを入れるようなやり方であったとしても。

世界的スケールで考えることに慣れているクーベルタンとしては、他の戦略は考えもしなかった。国際的共鳴を呼ぶ、大仕掛けなプロジェクトだけが、スポーツの大義を進め、大衆の気持ちをかちとることができる。そのアイデアは、「スポーツの突然の流行」を実現させるために、スポーツイベントを次第に国際化していこうというものであった。しかし経験と歴史の示すところによれば、その目的達成のためには、イベントを儀式化しなければならない。もしそうなら、ヨーロッパの今日の国際主義に迎合して、オリンピックを復興してはどうなのか？

1.3.5. パリ kongress、1894年—オリンピックの復活

「私はあまりに楽観的であったことに気がついた...」

この言葉がすべてを語っている。

クーベルタンはどうやって時勢に迎合すべきかを知っていた。否定的な世論に正面から立ち向かってはならない。出し抜いて勝利を収めなければならない。

それが、クーベルタンの新しい計画であった。彼はフランス競技スポーツ協会連合 (USFSA) の友人とともに実行にとりかかる。USFSAのファイルの中に、アドルフ・ド・パリッソウが提案した「ア

マチュアリズムの問題を解決するための」国際会議のプロジェクトがあった。このプロジェクトがファイルの墓のなかから掘り起こされるのである。

クーベルタンは自分の理想を粘り強く追求した。USFSAが殿堂の柱にならないと。基本的な憲法を制定する kongress は最初から国際的なものでなければならない。

会議についての原則は連合によって受け入れられた。

1893年8月1日、クーベルタンは準備プログラムを提出した。これは彼自身の手で書かれていた。そして「アマチュアの運動についての研究と普及のためのパリ国際会議」と題されていた。

三人の役員が準備に当たった。C.ハーバート、アマチュア体育協会事務局長、イギリス及びその植民地担当、W.M.スローン、アメリカ大陸担当、ピエール・ド・クーベルタン、フランス及びヨーロッパ大陸担当。

最初の問題は体操であった。ジョゼフ・サンブッフ、体操協会連合会長がドイツ代表团と同じ部屋に入ることを拒否した。

ベルギーでは、1894年5月15日、N.S. キュペルスがベルギーの体操家に「体操とスポーツは全く正反対のものだ」と言う理由で参加を禁じた。クーベルタンは苛立った。

クーベルタンは1894年、ベルリンの新聞「スポーツ」にアピールを発表したが、時すでに遅かった。ただ一人「ライフエンシュタイン氏」が、個人の資格で kongress に参加した。サンブッフは反対しなかった。

同時に、参加希望がニュージーランド、ジャマイカ、アミアン、ボルドー、ディエップ、ルーアンから届いた。イタリアとスペインの体操連盟、またセント・ペテルスブルグとアテネの体操協会も参加した。スウェーデンは、ビクトール・バルクの仲介で、喜んで参加すると答えた。スパルタ大公、ベルギー国王、プリンスオブウェールズ、スウェーデン皇太子、アウマール公爵など多くの政治家が kongress の名誉委員に名を連ねた。

フランスでは、カシミール・ペリエ首相が辞退したので、結局一般の人の目には外務省の人と映っていたクールセル男爵が、自分はスポーツマンではないがと断りつつ、kongress の主催を引き受けた。

クーベルタンは、ここ数年の間に接触のあった外国の人々に、数多くの手紙を送った。イエリ・グート(ボヘミア)に宛てた1894年2月24日の手紙には次のように書いてある。

「11月7日にニューヨークで、2月7日にロンドンで開かれた会議は、我々の kongress に国際的な性格を与えていますので、私はボヘミアの参加を強く望んでおります。これは私の責任範囲の問題です。」

全てが彼の責任範囲という訳ではなかったが、クーベルタンはグートへの手紙で触れた世界中の「教師やスポーツ人」にも接触したようである。これは kongress の名誉会員のリストから窺われる。

クーベルタンがどれほどの熱意を持って働いたかをみると、我々は感動しないわけにはいかない。彼は自分のやり方が正しいことに確信を持っていたが、用心深くステップを踏んでいかなければならなかった。彼はあらゆる人と相談をした。とくにイエリ・グートと相談した。どの協会を招待すべきか、その事務局長の宛て名、通知を出すべき主な新聞(スポーツそして政治の)、「能力と位置からいって特別招待に値する」市民は誰かなどについて。クーベルタンは政治、社会のあらゆる階層に入念に目を通した。

1894年5月迄に、クーベルタンのパリの住所、ウーディノ街20、ここが kongress の事務局になっていた、に届いた返事はほとんどなかった。そこでクーベルタンは最後のアピールを、返信用カードを入れて送った。受け取ったもののうち返事したのは、やっと一ダースであった。1894年の kongress は、とりあえずフランスの出来事となるはずであった。

憲章制定のための第一回オリンピック kongress は、1894年6月16日から24日まで、ソルボンヌの大講堂で開催された。最初のテーマは「アマチュアスポーツの原則の研究と普及、そしてオリンピック大会の復活」となっていた。しかしこのあと、クーベルタンは一気に攻勢にでた。最終的に、kongress は「オリンピック大会復活のための kongress」とタイトルを付けられた。

USFSA が主催、レオン・ド・ヤンツェが会長、クーベルタンが事務局長であった。

二つの委員会がつくられた。第一はミッシェル・ゴンディネ(フランスレーシングクラブ)が委員長をつとめ、アマチュアスポーツの問題を取り扱った。

第二の委員会はデメトリウス・ビケラスの下でオリンピック大会を扱った。

ビケラスはパン・ヘレニック体操協会会長で、このあとすぐに第一代 IOC 会長となる。

開会式は 6月16日行われた。フランス共和国大統領カシミール・ペリエは出席を辞退したので、大統領の外交官の友人、クールセル男爵が代役をつとめた。彼はスポーツが健康を増進し、階級間の垣根を取り払い、国際協力を推進すると強調した。オリンピック大会が復興すれば「各人民の間に平和をもたらす大きな要因になるであろう」と述べた。

祝典とレセプションは会議の最後に行われるのが普通である。しかし、クーベルタンは順序を逆にした。参加者を好意的で、ものごとを受け入れやすいムードにするために。

初日の祝典の中心は、最近デルフォイの廃墟で発見された、アポロ讃歌であった。

テオドール・ライナッハが翻訳し、ガブリエル・フォーレが交響楽曲に作曲した。

クーベルタンが「ジャン・アイカールによる高雅荘重な頌詩」と呼んだ詩は、オリンピック大会の高貴な性格を讃えるものであった。こうして、kongress の冒頭から、「ヘレニズムが巨大なホール全体を満たし、この瞬間に、kongress の成功は確定した」。

ブルーローニュの森でのパーティー、祝宴、光、屋内のコートテニス、ランチ、そしてウィリアム・M・スローン氏へのアカデミー賞授与さえ参加者を喜ばした。

空席をつくらないために、クーベルタンは数百人のパリの学童や数多くの士官を兵営から動員した。連合に参加している202の協会の会長のすべてに個人的な手紙を送った。

会議場は満員となった。

クーベルタンのプロモーションの才能のお陰というべきか、総計2,000人が出席した。

しかし kongress の役員を除いて、たった37のスポーツ団体(代表78人)しか参加しなかったことは言うておかなければならない。予測された通り、フランスが一番多く、24のスポーツ団体から58人の代表が参加した。外国からはわずか8カ国、20人の参加であった。距離と、旅行の困難さ、経費のためであった。

アマチュアスポーツ委員会には 7つの議題があった。勧告案は事実上そのまま受け入れられた。この委員会の議事録は、しばしば議論が白熱したことを示している。

参加者は、USFSA、フランス自転車連盟、フランスヨット連盟、フランス射撃協会連合、メルボルンアマチュアスポーツ協会、国内サイクリスト連盟、ベルギーサイクリスト連盟の代表であった。教育長グレアールも出席した。クーベルタンは議論に積極的に加わった。

鋭い対立が、全てのスポーツに単一のアマチュアリズムの定義を主張する者と、それぞれの種目にそれぞれの定義を主張する者のあいだで起こった。

賞金、報酬、芸術作品の価値、アマチュアの細分類、協会が選手に与えることを認められている補償金等の問題についても二つの陣営に別れた。

言うまでもないことであるが、望ましいあり方として書かれた第一項が最も激しい議論を呼んだ。アマチュア選手は台座に祭り上げられていた。アマチュア選手は本来純粋なものであり、世俗的な誘惑から守られなければならない。プロ選手とのいかなる接触も許されない。汚染からアマチュア選手を隔てるために全てのことがなされねばならない。金は汚いものである。

議論は、アマチュアリズムの厳格な定義を求める者と、社会的制約の存在を認め、開かれたスポーツを主張する者との間で、活発に戦わされた。

1894年7月に発行された、オリンピックのための国際委員会の最初のブレットインは、それぞれのスポーツ組織のさまざまな考え方と、統一した勧告を行うことの克服しがたい困難について報告している。しかし我々は、ノルベルト・ミュラーが、それでもなお、これはスポーツの世界にとって「国際的意義のある発展を示すものだ」と書いたのに賛成しないわけにはいかない。

労働者はアマチュアでないと定めたイギリスアマチュア漕艇協会の規定は、ハッキリと拒否されている。委員会の議事録は、彼らの提案を、「民主主義に対する挑戦」と呼んでいる。

オリンピック大会委員会は三回の会合を持ち、6月23日報告を全会一致で承認した。

最終決議案は、7つの項目を含んでいる。

それらは、オリンピックの文化的、歴史的基礎に触れ、大会が人間と人間性の偉大さを教育的

に、道徳的に示すものであるので、人類にとって、社会にとって、平和にとって明らかに必要なものであるという事実に触れている。

山登りを含む、全てのスポーツ種目が行われるであろう。

現代の第一回オリンピック大会は、1896年、アテネで開催され、第二回大会は、1900年、パリで開かれる。

国際委員会は、それぞれの政府の支持を確保するために、働きかけを行う。

最初、クーベルタンは第一回大会を、1900年、パリで開催することを考えていた。

1894年6月15日の「レビュー・パリ」で彼は、1900年を近代オリンピックの出発点として提案している。 kongress の間、パリは当然の選択のように思われた。しかし参加者たちには、六年も待つのは長すぎるように思われてきた。そこで1894年の計画が決議された。

結局、ビケラスとの会談のあと、クーベルタンは黙認することにした。現在のギリシャに、このイベントを受け持つ重い責任を担う能力があるかどうかには疑問があったが、クーベルタンはアテネの立候補を支持した。6月19日、ビケラスは短いメモで、第一回オリンピック大会の場所にアテネが指名される際のクーベルタンの助力に厚く感謝した。

オリンピック大会のための国際委員会(国際オリンピック委員会の最初の名前)の選挙の記録は存在しない。

メモワールの中で、クーベルタンは次のように書いている。「私は、IOCのメンバーを選ぶに当たって、フリーハンドを与えられた。提案した人達は無修正で選ばれた」。

彼は、ものの分かった独裁者のスタイルで書いている。「私はほとんどすべて、不参加者からメンバーに選んだ」。しかし、クーベルタンはこれらの人達を知っていた。或いは少なくとも、「教育者、スポーツマン」としての彼らの価値を知っていた。

最初の国際オリンピック委員会のメンバーリストはIOCの第1号「ブレッティン」に発表された。

これらの人々の多くは、既に kongress の名誉委員のリストにのっていたが、ビケラス、クーベルタン、スローン、ルケシー・パリを除いて、その仕事に参加しなかった。

ギリシャの永遠なる精神に敬意を表して、ギリシャ人ビケラスが初代国際オリンピック委員会会長に選ばれた。

1894年の第2号の委員会ブレッティンで、クーベルタンは、ルケシー・パリ伯爵をアンドリア・カラファ(イタリア)に代えた。伯爵は外交活動であまりに忙しかったからである。ブシー伯爵(ベルギー)も登場した。ドイツの代表は未だいなかったが、1895年10月、ヴィリバルト・ゲップハルト博士が指名されてこの手当てがされた。

国際オリンピック運動の発展のこの段階で、一息入れ、国際委員会の構成と組織を検証してみるのも無駄ではなからう。

1.3.6. 最初のオリンピック大会のための国際委員会の構成と組織

委員会の最初の13人のメンバーは有閑階級の人々である。中産階級、上層中産階級、貴族の軍人、金持ちの商人、そして外交官。普通の中学校長であった、イエリ・グートとフェレンク・ケメニーは例外であった。しかし彼らは例外なく高度の教育を受けており、西欧のギリシャ・ラテン文化の道徳的優越性の規範について暗黙の了解があった。

これは明らかなことだが、やや詳しく見る必要があろう。

彼らが永遠のギリシャの心酔者であることが、ともすれば、彼らがこの世紀の上層ブルジョアのメンバーであり、下層階級の貧困や迫り来る国際的危機の危険を知っていたことを覆い隠してしまう。揺籃期の近代スポーツの理論家であり、実践家である彼らにとって、スポーツとその精髓であるオリンピズムは階級紛争を減らし、国家間の緊張を緩和するものであった。

とくに「筋肉的キリスト教」運動のシンパであったクーベルタンは、その信念を分け持ち、明確な概念として捕らえていた。

この理念は、哲学的政治的相違を超えて西欧の知識人と政治的エリートの持つ、深い恐怖と平和主義的願望の反映であった。

ドイツの研究者、ディートリヒ・R・カンツの研究は、最初のオリンピック大会のための国際委員会の構成と政治的目的にこの角度からアプローチしている。

カンツは、二つのレベルで議論を進める。まず、彼は IOCの教育的目標は、当時の二つの最も重要な平和主義の組織、列国議会同盟と平和のための国際会議の目標と同じであると主張する。その活動はベルリンに本部を持つ国際平和事務局によって調整されていた。大変説得力のある議論であるが、これは19世紀後半の、多くの政治的労働組合、教育団体にも当てはまるだろう。

次に、カンツは、国際平和事務局の指導者と万国議会同盟の最も有力な議員が1894年のコンGRESの名誉委員のリストにのっていることを指摘する。

カンツは、その他にバイヤー、フェルドハウス、ヘゲリン、ケメニー、プラト、ラフォンテーヌ等の名を挙げる。しかしジュール・シモンとエリー・デュコマンもヨーロッパの平和運動のなかで尊敬される活動家で、1880年から1914までの間、大戦の災疫を防ごうと虚しく努めたのであった。カンツは、CONGRESの名誉委員の少なくとも三分の一は1890年代の平和運動の活動家であった、と推定している。そしてこれは単なる偶然の一致ではないとする彼の結論は正しい。

言う必要もないことだが、我々は IOCが国際平和事務局から生まれたものだという考えを認めているわけではない。クーベルタンは晩年に次のように書いているけれども。

「私は、人々の間で平和についてあまりしゃべらないように気をつけた。もし私が平和主義者のために役立つことができないならば、ましてヤススポーツマンの役にたつことはできないだろうと確

信していたからである。」

しかし、クーベルタンが最初から、どれほどものの分かった寛大なヒューマニスト哲学の流れと一体感をもち、どれほど IOCをすべての人々の間に平和をもたらす文化の相互理解の手段とすることを望んでいたかを強調しておくことが公平であろう。

最初の国際委員会の組織もまた分析に値する。

1894年に戻ってみよう。

2月20日、クーベルタンはヘンリーロイヤルレガッタの委員会(イギリス)に、USFSAのルダスプロパトリア(祖国のスポーツ)メダルを送った。これはまことに異例のことでクーベルタンのホットとした気持を表すものであった。これ以後、ある条件に叶えばフランスのボートマンがこのレガッタに参加できるようになった。

彼らは随分長い間待たなければならなかったし、これは一種の加入儀礼だと言うこともできようが、この長い待機の時間のお陰で、クーベルタンはヘンリーレガッタの運営組織を研究することができた。そしてある種のライフスタイルと行事のやり方を会得することができた。単なる逸話にすぎないようなものも、こうして人類学者や歴史家にとっては意味のあるものになるのである。

「オリンピックメモワール」の中でクーベルタンは書いているが、IOC は「三重の同心円で構成されている。先ず献身的で活動的なメンバーの小さな核、正しい線に沿って教育することできる、進んで協力しようとするメンバーの苗床、そして最後にいろいろな有効性を持つ見かけの立派な人達、この人たちの存在は国のプライドを満足させるし、全体の権威を高める。」

彼の著書「21年間の戦い」の中で、クーベルタンはメンバーの抜擢は「ヘンリーレガッタのモデル」に基づいていたと説明している。更に、それは「ヘンリーレガッタの主催団体のように、自己補充する団体」であった。

リュールは、ヘンリーレガッタの運営に当たる三つのサークルは、最初の IOCの創造と運営が基礎を置いた三重の同心円に見合うと記している。これはハッキリしている。

しかし、彼の言うように二つの組織の最初の円が完全に同一の性格を持つと仮定するのは性急に過ぎるように見える。この仮説は、レガッタの会長と IOCの会長とが同じ性格のものだと暗示することになる。クーベルタンは一番の推進者ではあったが、決してただ一人の舵取りではなかった。オリンピックサークルの中心には、カロー、スローン、グートーヤルコフスキー、ビケラスといった優れた人物で、信頼厚い友人たちがいた。

一方、リュールが、クーベルタンの第三のサークルをレガッタの評議員会と対比するのは正しい。評議員会は「教育されること」の可能な第二のサークルの活動的なメンバーを選ぶ貯水池であった。また、二つの組織の意思決定のピラミット型の構造と両会長の独裁者のような裁量権を強調す

るのも正しい。

我々の見方では、この構造の起源として価値のある手掛かりは、多分アングロサクソンのコモンローの中に見つけられよう。ヘンリーレガッタの委員会は、古代アイスランドの国会や、もっと最近では、ノルマンやサクソンの騎士の「バン」(招集された家臣団)と類似性を示しているように思われる。

ここで、我々が長い伝統を持つ国について語っていること、そしてレガッタのメンバーは貴族の出であることを思い出さなければならないのであろう。

それはそれとして、ヘンリーレガッタがクーベルタンにとって、政治的にまた實際上、モデルとして役に立ち、IOC が歴史の栄枯盛衰を逃れることのできる、自己補充の方式を全面的に採用することになったことを、我々は確信をもっていうことができる。

また、クーベルタンには、ヘンリーレガッタから学ぶことのできる文化的な素養があったこともたしかである。高貴な生まれのものに共通の特権を管理し、普通人を支配することを完全に許容する自己補充の方式は、クーベルタンを満足させずにはおかなかった。

彼は啓発されていたが、階級的な本能を持ちながら、師であるトックビルやル・プレの思想と折り合いを付け、財産資格に基づいた民主的なシステムを好んでいたのである。

自己補充のシステムによって歴史の変転や人類の裏切りから守られながら、IOC は重大な時を迎えようとしていた。1896年が急速に近づいていたのである。

オリンピックムーブメントをアテネの迷路の中に埋没させないようにすることは、当初大変困難に思われた。そのためには、デメトリウス・ビケラスのすべての才能と、クーベルタンの信念のすべてが必要であった。

1.4. デメトリウス・ビケラス、オリンピック大会のための国際委員会第一代会長 1894-1896

デメトリウス・ビケラス(1835-1908) は、オリンピックの天空を流星のように通りすぎた。ほとんど二年に満たない間であった。

オリンピック大会のための国際委員会第一代会長の経歴は、逆説的な不似合いなものに見えた。しかしアルバート・クライアーの最近の研究のお陰で、逆説は見せかけに過ぎなかったことが分かった。

クーベルタンは1894年6月、ビケラスをオリンピックへの戦いの最前線に送り込んだ。アテネの戦いの間、彼はビケラスの献身と誠意に敬意を表したものの、このオリンピック大会のための国際委員会第一代会長となる人物について、手放しで称賛はしなかったことを我々は知っている。

1908年 9月の「オリンピック・レビュー」に彼は、1908年7月7日に死んだデメトリウス・ビケラスを讃える弔辞を書いている。伝統に従って弔辞は厳かな強い調子のものである。

クーベルタンは、「現代のギリシャ精神の持ち主の中で最も高貴な存在の一人であった」彼の美德を強調し、彼を非常な明快さと正確さで書いた優れた作家であり、独学の、高い教養の人と呼んでいる。

当時のヨーロッパの多くの人と同じように、ビケラスは、「全ての人のための教育の普及の使徒であった」。激しい衝撃に耐えた献身的な夫であり、「異教の知恵とキリスト教の美德」とを統一した。

しかし、アテネのオリンピック大会の12年後になっても、クーベルタンは、彼が1894年 6月にビケラスに対して自らすすんで払った敬意に対して、ビケラスが同じ敬意をもって応えなかったことを完全には許していなかった。

クーベルタンにとっては、ビケラスは常に、「スポーツに全く無縁な人」であった。

そしてオリンピックを「ギリシャ愛を宣伝する思いがけない機会」として利用する以外に興味を持たない行政官のままであった。これは批判的距離を欠いた判断であった。

いずれにせよ、これがクーベルタンの主な不満であった。

1905年、ビケラスがアテネ大学の代表として、ブリュッセルのオリンピックコンGRESSに出席した時でさえ、クーベルタンの目には、1899年 7月14日、オリンピック大会のための国際委員会のギリシャ代表のポストを突然辞任した罪人と写っていた。

四折判の本の中で、54行にわたってビケラスは裁かれている。これはあまりに多すぎるとも言えるし同時に少なすぎるとも言える。これは受け入れがたいものである。

デミトリウス・ビケラスは、1835年 2月15日、シロス(シクラデス島)に生まれた。

彼の両親、父方、母方の祖父母とも、独立戦争の間にコンスタンチノーブルとオデッサからここに逃れて来たのであった。島の子であったビケラスは、生涯、旅と独立への嗜好を失わなかった。5才まで母親が躡けた。

1839年頃、父方の家族がコンスタンチノーブルへ、母方の家族はタガンログへ帰った。このような流浪は貧しい国の子供にとって珍しいことではなかった。

1848年に、彼はモデッサにいた父親と一緒に、商売の世界に入った。この間、英語とフランス語を学んだ。病気がちの子供であった彼は、1850年に、母とともにシロスに行った。彼は再び学校に行ったが、卒業はしなかった。しかし彼は沢山のヨーロッパの古典を翻訳した。

1851年の末、父の会社が破産した。6カ月後、ビケラスは再び流浪の生活に戻る決意をした。彼はマルタ、メッシーナ、チビタベッキア、リボルノ、フローレンス、マルセイユ、パリを訪ね、8月 5日、ロンドンに着いた。

シティーの裕福な商人であった、母方の叔父二人、レオン・メラスとバシリオス・メラスが彼を保護した。知識欲に燃えたビケラスは簿記と英語の知識を磨いた。

事業が繁栄し、メラス社はマルセイユとルーマニアのガラツに二つの事務所を開いた。ビケラスは叔父の同僚となり、金持ちになった。1866年に書かれた自伝によると、資本金は 2,500ポンド、年俸は500ポンドであった。

1876年にメラス社は破産するが、ビケラスにはしっかりした銀行預金があった。

彼はギリシャ人でロンドン生まれの金持ちの女相続人、カリオピス・ジェラロプウルウと結婚して10年になっていた。彼女は12才年上であった。彼は20,000ポンドの資本金を持ち、年収は1,000ポンドであったが、幸せではなかった。職業が彼に合っていなかった。

生涯の学生であった彼は学び続けた、植物学、建築、ドイツ語、イタリア語。

彼は大量に書いた。ジャーナリストとしての彼は、現在のギリシャ社会を理解するよう呼びかけ、ロンドンに住みイギリスの風習に染まったギリシャ人を叱り、アテネ政府の首相、トリクーピスと文通し、西欧の笑い物になっている行政の改革を迫った。

彼はクレタ島の反乱者のために金を集め、ロンドンにギリシャ人学校をつくった。

1872年に悲劇が始まった。妻が精神病院に入ったのである。彼は全く一人になった。

パリに戻り、サンジェルマン街で、後にはボナパルト通りで、彼は以前放棄した仕事を再び始めた。マクベスとハムレットの翻訳である。またニコポールからオリンピアへの旅行記を書いた。

1879年、ビケラスはフランスにおけるギリシャ研究振興協会の事務局に選ばれた。

彼はヨーロッパ中を旅した。オランダ、ベルギー、スコットランド、スイス、スペイン。現代のギリシャについての知識を広めるために、関係をつけ、友人をつくりながら。

祖国の将来を憂えて、彼はいろいろな教育制度を研究し始めた。

彼はイギリスのシステムを称賛し、同時にリベラルなインテリの影響を受けて「人民の中へ行った」。

彼は自分の教育哲学を、1877年、「村の学校」というタイトルの小冊子に発表した。

1882年、そして再び1885年に、教育の理想を「教育者の新聞」に発表した。

彼の目標の一つは、一般大衆のための講演を盛んにすることであった。

1887年、彼は、クーベルタンが1894年に決定的なスピーチを行うことになるパルナッソスのホールで、教育についての自分の意見を説明した。

1893年、彼はメラス機関を設立したが、これはギリシャ中に(アテネは除く)幼稚園をつくり、経営するためのものであった。同じ年、彼はセントアンドリューズ大学(スコットランド)から名誉博士号を授与された。

ビケラスは愛国者、古代ギリシャ文化の研究者、そして言葉の上の馬上槍試合と政治的論争に長けたヨーロッパのインテリであった。

クーベルタンが彼を本能的に自分の協力者に選び、あの奇妙な「選択親和力」の行為の一つとして、彼を直ちにオリンピックの仲間としたことは驚くに当たらない。

ビケラスは、1894年の kongress の代表に選ばれたとき(フォキアノスによって。元々はフォキアノスが選ばれていた。)驚き、知識人の会議に参加するか、社交界のイベントに参加するようなつもりでパリに向けて出発した。

1894年 6月14日付けの電報で、彼は、スポーツに対する献身からではなく、愛国心から、

この使命を引き受けると述べている。

彼を啓蒙するために、フォキアノスは古代オリンピックについての覚書を送った。

ビケラスはこれを翻訳し、 kongress で一部を発表した。

彼はこれを、オリンピックが復興しそうな形勢のとき、義務の感覚から行った。

「アマチュア」という言葉も知らないで、彼は第二委員会に参加した。この委員会はオリンピックを復興するかどうかを決めねばならなかった。

ヘレニズムに敬意を表して、「スポーツ委員会」の議長に指名されたとき、彼は呆気にとられた。自分がスポーツについて何も知らないことを公に認めていたからである。

しかし彼は受け入れた。或いは、出席した代表団が、彼にはギリシャのためにこの名誉を拒否する権利はないと言い募るのに、説得されざるを得なかったと言うべきか。

1895年の春にパリで行った講演で、ビケラスは次のように言った。

「紳士諸君、多くの参加者が私を議長にと発言した時の私の驚きを想像してみてください。この私をスポーツ委員会の議長にですよ。」

6月18日、彼はフォキアノスに、自分はアテネを将来のオリンピックの会場に推薦するつもりだと伝えた。

クーベルタンは彼を出し抜いた。

クーベルタンに連絡が取れなかったので、ビケラスは、クーベルタンに短いメモを送って、前もって知らされなかったことと、クーベルタンの提案を全面的に支持出来ないことを残念に思うと述べた。

彼自身の気持ちに係わらず、オリンピック大会のための国際委員会の重要なメンバーに選ばれて、ビケラスは誠実な、献身的なオリンピズムの支持者になった。

その後のことはよく知られている。彼は何よりもギリシャ人愛国者の立場を貫いた。

彼のオリンピックに対する使命感も、普遍的な親ギリシャ主義の範囲を越えることはほとんどなかった。

アテネ大会が終わったあと、ビケラスは権力の手綱をクーベルタンに返した。

そのすぐ後、国際委員会さえ辞任した。彼が思いがけず参加した委員会での仕事は、わずか一年半しか続かなかった。

生涯の終わりに当たって、ビケラスは再び、何時までも続くトルコとの紛争におけるギリシャの立場を訴える旅にでた。

しかし、何よりも彼は、全ての人に対する教育の熱心な推進者になった。

1899年、彼は「有益な本の出版のための」協会を設立した。1903年 6月から10月にかけて、彼はフランス、ドイツ、スウェーデン、ノルウェー、デンマークを旅し、子供時代を過ごしたオデッサ、コンスタンチノーブルにまで足を伸ばした。

1904年、彼はアテネで教育についての会議を主催した。彼のお陰で、教育博物館、盲人のための学校、学校の射撃場、労働者のための訓練学校など注目すべき成果が実現した。

1905年、古い友人の喝采に迎えられて、彼はブリュッセルにおけるオリンピック kongress のギリシャ代表を務めた。そこでの彼の努力によって、アテネの中間大会(1906年)が国際オリンピック大会と認められた。

ビケラスは1908年 7月 7日、デンマーク国勲爵士として、レジオンドヌール勲章拝受者として、名誉に包まれながら、アテネの自宅で世を去った。

クーベルタンとビケラスの生涯にはある類似性が認められる。同じような親ギリシャ主義、愛国主義、教育に対する献身、人間としての孤独、愛するものの悲劇的な運命、そして最後に、人生の苦痛に満ちた瞬間に直面したときの同じストイシズム。

ビケラスの本当の姿が、ようやく明らかになりはじめた。クーベルタンの影から出て、近代オリンピックの創立者たちの中に、彼は遂に彼に相応しい場所を占めた。

1. 4. 1. アテネの戦い、1894-1896

クーベルタンは「ギリシャの征服」について大げさに語る。これは誇張である。

また「ギリシャの抵抗」について語る。これは過大評価である。

抵抗はあったとしてもいずれも小さなグループである。

征服した側は、ビケラスの画策によってコンスタンチン皇太子が組織した一握りの人々である。皇太子はアテネの最重要人物であり、クーベルタンは陰の有能な策士であった。

大急ぎで行われた長い盛り沢山の kongress の最後の、オリンピック大会のための国際委員会の創立は、わざとぼかされた。祭りの華やかさ、公式の儀式、首都から遠く離れた場所に出掛けなければならないことなどが、委員会の会期中緊張と疲労のもととなった。議事録は、会議で激しい対立や議論が起こったことを示している。

クーベルタンによって指名された、オリンピック大会のための国際委員会のメンバーのほとんどが出席していなかった。彼らは「名誉」委員であり、何が期待されているかについての情報を受けていなかった。クーベルタンただ一人が、彼らを待ち受けている困難な仕事についての全体像を把握していた。彼は「総事務局」の長であった。事務局は積極的な運営の要であるので、ほとんどの委員長より重要な地位にあった。

何もないところから造り出されたオリンピック大会のための国際委員会は、最初からアテネの政界やスポーツ界の重要人物の留保、無理解、猛烈な反対に晒された。彼らは前もって知らされなかったことに怒り、特権的立場を失うことを恐れたのである。

独裁的な権力のみが、確信のない或いは敵対的な者に政治的、行政的な決定を押しつけることができた。王権の重みが役割を果たさなければならなかった。

これがクーベルタンのやろうとしたことであり、このプロジェクトを支持していたアテネの新聞の助

けを借りてやったことである。

クーベルタンはまず、積極的な協力者の小さな核を自分のまわりに集めた。

次に、アテネの世論に働きかけた。最後に、筋書きのもつれを解くことをギリシャ人の間に比類ない信用を持つビケラスに任せ、自分は争いの上に超然としてコンスタンチン皇太子に頼った。クーベルタンは勝利がまだ遠いことをよく知っていたからである。

彼は、 kongress の数日後「スローンとE.カローと私は、バビロン通りのアパートでビケラスと会った。」と書いている。我々はまた、ビケラスがオリンピック大会のための国際委員会会長になりたがらなかったこと、クーベルタンがこの事業の国際的な性格を象徴するために、会長の交代制のアイデアに固執したことを知っている。博識の体操家であったE.カローが財務担当官になった。彼の考えは、各メンバーに「絶対独立の鎧」を纏うように要求したことに既に表れている。誰であれ、どんな地位の者であれ、何かを「代表する」ことは許されなかった。何処から来るにせよ、「補助金」は拒否された。

ビケラスは、この「貧者の鎧」について、纏うことができるのは事実上金持ちだけだ、と冗談を言ったものだ。民族主義的な理由からチェコ人のサークルから援助を受けていた、ボヘミアの貧しい教師、ユーリ・グートを除いて、委員会のメンバーはいずれも金持ちか、上流人士であった。しかしクーベルタンは「もし我々が、名前は華々しいが、現実的な基礎を持たない、未だ世論によって完全に誤解されている、一つの創造物の未来を確かなものにしようと思ったら」他のやり方はなかったと記している。

クーベルタンには、自由にできる二つの出版物があった。kongress が終わると直ぐに創刊したオリンピック大会のための国際委員会の「会報」と「メッセージ（使者）」の付録、アテネで発行されたフランス語新聞で彼の目的を全面的に支持するものであった。

「会報」の第1号はkongress が終わって数日後、1894年7月に発行された。

本部は、パリ、フォーブルサントノレ通り、229。タイトル頁にはオリンピックのモットー、Citius, Altius, Fortius (より早く、より高く、より強く) が記されていた。

季刊誌として出発した「会報」はオリンピック復興のためになすべきことの全てについて最新情報を読者に伝えた。唯一の編集人であったクーベルタン（スタイルは見誤りようがない）の願いにもかかわらず、「会報」の公式な部分を三つの異なる言語で発行することは出来なかった。「しかし、いくつかのイギリス及びアメリカの新聞、それにドイツの“シュピール・ウント・シュポルト”に主な部分を載せる取決めができた」。

国際委員会メンバーの全ての名前が挙げられ、彼らの職業が記載された。

彼らは、それぞれの国で高名な教育者、或いは教育や学問やスポーツ機構の行政者であった。「会報」の第1号は、ほとんど全部、1894年kongress の議事録が占めた。

そこには、アテネを選ぶ上でビケラスが果たした決定的な役割、この提案に対するギリシャの新

聞の熱狂的な支持を読み取ることができる。クーベルタンは古代ギリシャ文化の普遍性、アテネの美しさ、沢山のホテルやカフェを褒めたたえたが、一方で不安の念が滲み出るのを隠しはしなかった。新聞に助けが求められた。

「政府の半公式機関」である「アスティー」によれば、アテネは「その国際スポーツイベントに集う外国人を歓迎するという名誉を与えられ、政府、市当局、市の商人、そして首都の全ての住民はその熱意を競い合うであろう。」ことは明らかであった。

アテネにおける第1回オリンピック大会のアイデアを考えついた者、その提案を受け入れた者が称賛された。クーベルタンは、シーザーのものはシーザーのものになるように、あらゆる手段を尽くした。しかし、最初の「復活したオリンピック」の基礎は脆弱であった。そこで彼は、やんごとない辺りに助けを求めた。「国王陛下とギリシャの全王族が、この祝祭を支持されるのは全く当然のことである」。

彼は声を半分に落として付け加える。皇太子殿下は、 kongress でデメトリウス・ビケラスによって代表された体操の汎ギリシャ主義協会のパトロンであり、ジョルジュ王子は名誉総裁、ニコラス王子は名誉会員である。国王に関して言えば、国王は6月のkongressに「オリンピック復興の成功」への心からの願いを寄せられた。

大枠が置かれ戦略が定まった。大きな困難が予測されたが、現場の状況とそこを覆った精神的雰囲気のおかげで、最高の政治レベルで賛同が得られ、今や全てが可能になった。

しかし赤ん坊は未だ生まれていなかった。そしてクーベルタンは鉗子を使わなければならないことを知っていた。

1894年秋、ビケラスはパリのアパートを去りアテネに向かった。彼がブリンディシに着いたとき、同胞は皆、オリンピック大会について「嬉しそうに」彼に語りかけた。

何通かの手紙と、「会報」の第1号が彼を待っていた。クーベルタンは、ギリシャとフランスの両方で彼が持つ個人関係を総動員した。彼とビケラスは直ぐに会うことになった。

10月5日、ビケラスはギリシャ評議会議長、トリクーピスに会ったことについてクーベルタンに手紙を書いた。トリクーピスは、この余計な「物事」なしでも一向に構わなかったのだが、なにしろギリシャはそれでなくても、十分に問題を抱えている！

しかし彼は「その気になった」と手紙は伝えている。

ビケラスはザッペイオンの常設委員会を招集した。これはオリンピック委員会としても知られていた。数多くの商業工業博覧会と1859年、1870年、1875年、1888年のギリシャオリンピック大会のパトロンであったザッパスを記念して付けられた名前である。

スポーツに敵意を持つ貴紳の手に落ちて廃れていた委員会は、ステファノス・ドラグーミスが議長であった。しかし委員会はまだ「オリンピック委員会」と呼ばれていた。

委員会はビケラス抜きで会議を開いた。ビケラスは思いがけずバりに帰らなければならなかった。妻が重病になったのである。彼女は彼の到着を待って亡くなった。

ドラグーミスは問題の多いオリンピックの厄介な組織化よりも、ザッペイオンのクラブハウスでのレ

セプションに興味を持っていたのだが、首相であるトリクーピスの意見には従わなければと考えた。

10月末、クーベルタンはマルセイユから船出した。彼は、ピレウス港への夜の入港と、「荘厳な夜のしじまに包まれた、甲板の上の神聖な眠れぬ時」についてのロマンチックな描写を残している。1894年10月27日であった。

翌日、彼はアテネのフランス代理大使、モルアールと「何人かの情熱的な若い友人」に迎えられた。トリクーピス首相がプロトコール抜きで臨席し、クーベルタンに、ドラグーミスが11月1日（ユリウス暦）に送った覚書のコピーをクーベルタンに渡した。

この手紙はクーベルタンが海の上にいるあいだに行き違いになっていた。

トリクーピスは、政府がアテネでの大会を開催することはできないことを確認した。

経済危機が格式高いプロジェクトへの支出を許さない、近代スポーツはこの国では知られていない、トリクーピスは、新しい世紀の夜明け1900年のパリほど新オリンピック大会に相応しい時と場所はないと思うと言った。つまり、拒否であった。

10月29日（ユリウス暦）、「メッセージ」は驚きをもって、ビケラスが失敗したことを伝えた。しかしまだ最終決定ではないと付け加えられていた。

クーベルタンはショックに対する心構えができていた。彼はマルセイユに向かって出発する寸前、ビケラスとこの問題について慌ただしく話す機会があった。クーベルタンは反撃を開始した。

1896年に、ハンガリーが建国一千年祭を祝おうとしていた。

オリンピック大会のための国際委員会のメンバー、ハンガリー政府首席チャキ伯爵の特命全権大使であったケメニーは、もしアテネが辞退すれば、ブダペストが立候補することに同意していた。これは説得力のある申し出であった。しかしこれは「最後の手段」であろう。ギリシャ人の説得をもう一度試みる方がよいだろう。

こうしてクーベルタンは、アテネ、グレートブリテンホテルに滞在することになった。そこで彼は、アテネ市長の息子、ジョルジュ・メラスと銀行頭取で王子の幼友達、アレクサンダー・メルカティに温かく迎えられた。しかしこれは代償なしにはすまなかった。

何日ものあいだ、クーベルタンはいろいろな相反する意見の間に引き裂かれることになった。彼はホテルにとどまっていた。「アクロポリスに登ることができなかったので、アテネの街を見ることもできなかった」のである。

トリクーピスはギリシャでオリンピックを開催することは不可能だと確信していたので、クーベルタンに、この事業が問題外であることを得心するために、ひまがあったらこの国のいろいろな状況を見て歩くように勧めた。

一方、野党のリーダー、Th. デリアノスはこの事業の熱心な支持者であった。

クーベルタンは大会の可能性を「研究」した。とくにギリシャの財政状況の面から。

彼は驚きを告白する。彼は、ギリシャ人はアルバニア人のように背が低く、東洋人のようだと思っていた。ところが彼らの背は高かった。アテネは、旅行者が話していたように、「大きな村」以上のもの

のではないと考えていた。ところが、彼の見た街は「首都に相応しく」、オリンピック大会はそこで素晴らしい催しになると思われた。

自転車競技場を除いて、市には素晴らしいスポーツ施設があった。スタジアムの形は古かったが、適当な費用で木製の仮設スタンドを作ることができる。

クーベルタンは「25万ドラクマくらいになると思われる」予算を用意した。

11月24日（ギリシャ暦の16日）、彼は自分の努力を政治戦線だけに限定しないために、1896年のオリンピック大会の問題を、「パルナツス」文学協会のサロンで、選ばれた聴衆に対して説明した。クーベルタンは、「政治世界の益々かまびすしくなる議論にふれること」は注意深く避け、最も熱心な支持者が「小さな商人や、アテネの車の運転手達の中に」いることを興味深く話した。

この会議の記録は、「メッサジェー」の1894年12月1日号と22日号に載せられた。

しかし、政治的にはこのタイミングは具合わるかった。

E.ザッパスによってつくられた、オリンピック大会の委員会は辞任していた。金がなかったし、ザッパスの財産はルーマニアのテッサリーに凍結されていたのである。

ギリシャ政府は、コンスタンチノーブル地震とキプロスの洪水の大被害を何とかしなければならなかった。民間に訴え、資金を募ることが必要であった。

スピーチは三つの分野に焦点を合わせていた。

クーベルタンは、古代オリンピックを再びつくろうとするのではないことを強調した。彼は、古代ギリシャ文明にスポーツを持ち込んだリクルゴスに対する忠誠を誓った。彼は、19世紀の西欧においては、身体訓練は祖国防衛の観点から実施されていること、これは「高貴で美しいこと」ではあるが、スポーツを通じて「身体と心との円熟したバランス」を追求することの方がより完全に人間的であると述べた。

彼にとっては、古代の体育スポーツは「人間を支配しようと争う二つの力の間の驚嘆すべき妥協」であった。クーベルタンは、残念なことに「サーカスの獣的な興奮」にのめり込んでしまったローマの競技が、キリスト教に異教精神や凶暴さを攻撃する根拠を与えてしまったのだ、と確信していた。

しかし、キリスト教徒の願いと身体の文化は相容れないものではなかった。

中世においては、騎士はスポーツマンであった。「現代の最も偉大な教育者」トーマス・アーノルドの英国国教会の弟子たちは正しかった。イギリスは彼らに「その繁栄と巨大な領土拡大」を負っているのである。

クーベルタンにとって、この運動は普遍的なものになっていた。

「現代のスポーツは、古代のスポーツ以上のものであり、同時に以下のものである。現代スポーツはより完全な器具を持っているが、哲学が少なく、高揚された目的と青年の祝典を取り巻く全体的な政治的宗教的枠組みを欠いている。」

現在の問題は、新しい理想の秩序の内に、如何にして「現代のスポーツが金儲け主義に陥り腐敗の泥沼に沈むのを防ぐことのできる、道徳的なカウンターバランス」を見つけるかということである。

クーベルタンは古き良き時代を懐かしむ必要はないと強調した。

現代スポーツが必要とする道徳的な枠組みは、「現在の傾向の中に」見いだされるであろう。現在のスポーツは「民主的で、国際的」であるかぎりにおいて存在しうる。

クーベルタンは上流社会の聴衆に向かって、民主主義は歴史のなかで十分に正当化されており、恐れる必要はないと保証しようとした。そして、国際主義は「人間の心の奥底から湧き出た平和と友愛への偉大な欲求から生まれた流れ」であって、言うまでもなく「国々に対する尊敬を振興するもので、その破壊を促進するものではない」と述べた。

こうして「健全なそして平和な国際主義と健康な民主主義が、新しいスタジアムに入って名誉と無私の祭りを祝い、運動競技に、筋肉の発達と共に、道徳的完璧さと社会的平和を示すことを可能にするであろう」。復活したオリンピック大会は、彼は続けた、世界の若者に「幸福と友愛の出会い」の機会を与えるであろう。そして憎しみを存続させ、民主主義社会を野蛮状態の中に投げ込んだ無知を消し去るであろう。

講演の第二部で、クーベルタンは新しいオリンピックの目的を説明した。

大会の意義は「博覧会や産業コンテストや人気イベント」の中に求めるべきではない。それらは、オリンピックの目的を傷つけるであろう。新しいオリンピックは「ある種の慎み」を必要とする。それは、アテネとアクロポリス、「この自然と歴史が二重の荘厳さを表現しているもの」を発見する喜びを、このうえなく大きなものにするだろう。

なにものもクーベルタンを押し止めることはできなかった。彼は大会プログラムについての考えを説明し続ける。彼は種目を三つのグループに分けた。

最初に、陸上競技と体操競技、スタジアム中で行われる。

次に、水上スポーツ、ヨットとボートはファレロス湾で行われる。自転車とさまざまなゲーム(クリケットとローンテニス)はアテネの平野で開催されるだろう。

第三のグループでは、ザッペイオンの中でボクシング、レスリング、フェンシング、射撃。そして騎兵学校で馬術が行われる。

講演の第三部で、クーベルタンは感動的な雄弁を振るった。

彼は山頂にあって、法を告げるモーゼのようであった。「雄々しいギリシャの戦士よ、過去によって押しつぶされるのをやめよ...未来は全ての者に開かれている。スポーツ振興のために働くとき、貴君は祖国のために働いていると知って心を安んぜよ。」

クーベルタンは永遠なるギリシャを祝福し、汎ギリシャ愛国主義を賞揚した。

IOCの書庫が初めて開かれたので今ではよく知られているが、クーベルタンの1894年11月16日のパルナツスでの講演は、オリンピックの理想の歴史の中の記念碑である。

後の世の知恵とより良い視界を持つ我々は、今や、これがクーベルタンにとって決定的な重要性を持っていたことを知っている。それは将来への舞台を定めた基本的テキストであった。その調子が明確に告げるのは、この困難な時機に、クーベルタンは聴衆を説得し、確固たる支持を勝ち取らねばならなかったということである。

講演の内容は重要である。それは見かけよりはるか深い所に達している。

それは、そこから「サイバネティックス」の発展によって、未来のオリンピックの構造が生まれる思想の母体であった。クーベルタンは後に、議論し、説明し、構築するが、いつもこの最初の核に戻るものであった。

いよいよアクロポリスから降りるべき時がきた。クーベルタンは大会準備を取り巻く地中海的混乱の中に真っ直ぐに飛び込んだ。ノルマン的な--彼の内の「アングロサクソン」的な--面のお陰で実家であった彼は、利害の衝突や宮中の陰謀にかかわりなく、オリンピックを扱うことのできる重要なギリシャ人に会ってなかったことを悔やんでいだ。

彼はビケラスが非常な「魅力」と「情熱」を備えた人間だと考えていたが、話し合った二人は、このプロジェクトを指揮するのはクーベルタンしかないことに同意した。

デイビッド・C.ヤングはこの件について、ビケラスが偉大な建築家の第一の役割を果たし、クーベルタンは大使としての第二の役割を果たしたのだと強く主張している。

しかし我々の見方では、歴史的な事実はもっと複雑でニュアンスに富んでいる。

クーベルタンはアテネに到着するやいなや、トップに会わなければならないと悟った。アテネで行われている些細な議論を知れば知るほどその他の道はなかったし、クーベルタンはこの世の偉大な人物としか対話できないのだから。

国王が不在でコンスタンチン皇太子が摂政であった。クーベルタンは拝謁を申し出た。皇太子は将来のオリンピック組織委員会を主催することに同意した。この組織委員会が

機能停止しているザッパス委員会に取って代わることをクーベルタンは望んでいたのである。最初から、二人がお互いを尊敬し、信頼していたことは確かである。

11月10日、クーベルタンはトリクープスの同意を得たが、ギリシャ政府は最初から一切の補助金の支出を拒んだ。クーベルタンは数人の友人の助けを借り、固い決意をもって、

11月11日、ザッパイオンのホールで集会を開いた。そこで彼は、彼の文化人としての、そして完全な紳士としての才能を遺憾なく発揮した。

「幸運なことに」彼は書いている。「私はそのような曖昧な会議には慣れていて、そうした会議では、聴衆におもねったり、眠らせたり、脅かしたり、さまざまなテクニックを弄して、重要なことを決めなければならない。」

クーベルタンの大義に捧げられた事務局が選出された。

大会の日取りが、1896年4月5日から15日と決定された。鉄は熱いうちに打たねばならない。競技の種目が決められた。用心深いクーベルタンは、すでに出発前にパリで、USFSA、フランス自転車連盟、イギリス自転車連盟、ソシエテ・デクー・ジュモン・ア・レエスクリーム(フェンシング振興協会)、フランスヨット連盟の意見を聞いていた。

彼の提案に反対はなく全会一致であった。今日の、国際競技連盟の頑な性格と多国籍テレビネットワークのメディアに関する要求を考えると想像もできない話である。

トリクーピスと政府を出し抜いて、クーベルタンは皇太子に直接報告した。

大会の準備は進捗した。クーベルタンはフランスに帰りたいと考えた。あー、しかし、彼は地中海の長々しい議論の伝統や「思いがけない躓き」を勘定に入れていなかった。

クーベルタンがいなくなると、直ちに陰謀が復活した。

ビケラスは皇太子に対して働きかけた、それは即座に効果をあげた。

国王はこのギリシャ的仮面喜劇とそれに伴う混乱の中止を命じたもうた。

そして、皇太子は自ら、アテネの大会を全ギリシャの行事とする立場をとられた。

クーベルタンはオリンピックの巡回の原則を守るために大変な苦勞をすることになる。

皇太子は大会の準備を注意深く見守った。政治的な対立に晒される王家としては失敗は許されなかったのである。

1894年12月29日(ユリウス暦)、「メッサジェー」は皇太子がビケラスを接見したと書いた。皇太子は国際委員会が「寄附金を集める努力をするよう」求めた。ビケラスは同時に国王にも謁見を賜った。彼の報告は「クーベルタンのものとかかわらなかった」。

裕福な商人からの寄附金が集まりはじめた。マルセイユやアレキサンドリアやロンドンのギリシャ人社会は、寄付に参加することを名誉に係わる問題とした。

クーベルタンの方では、豊かなギリシャ人の友人を募金に参加するよう呼びかけた。

1895年2月19日、フィレモンは13万ドラクマの寄附金が集まったと発表した。

ギリシャ政府は最初のオリンピック切手の発行を承認した。発案はデメトリオとジャンのスカロフオス兄弟であった。合計40万ドラクマが集まった。

財政問題は、ジョルジュ・アベロフがスタジアム再建のために百万ドラクマを寄付すると申し出た時に、きれいさっぱりと解決した。

クーベルタンは次第に、T.フィレモンにせき立てられるようになった。フィレモンは「アプローチすべき協会、連盟、グループ等のリスト」を提供した。

彼は招待状のテキストを起草した。これはアテネの組織委員会の仕事であったが、「先ず、パリに本部を持つオリンピックのための国際委員会の承認」が必要であった。

事務局は熱心に働いた。例えば、500の招待状がドイツ語で、ドイツ体操協会に送られた。翻訳者が雇われ、国際的な通信が盛んになった。

クーベルタンは全てが余りに官僚的で遅すぎると考えた。パリからクーベルタンは大会の準備を監視し続けた。オリンピック大会のための国際委員会の「ブレティン」で、彼は「予備的な承認の後には」大会の準備は国内オリンピック委員会の完全な自由に任されるという指摘を行った。

通信員をせき立てながら、彼は1896年の大会に最大限の数の国を参加させようと、熱心に働い

た。1894年秋、クーベルタンはフランスオリンピック委員会を発足させた。

共和国大統領、フェリックス・フォーレは名誉会長に就任することに同意した。

クーベルタンはクック社とメッサジェリーマリタイム社（船会社）を説得し、1896年のオリンピックを見に行く旅行者に特別料金を提供させた。しかし呼びかけに応えたフランス人は少なかった。政府の補助金が出てフランスチームの編成が可能になった。

他の国では、結果はまあまあであった。

ドイツでは、ベルリン駐在のギリシャ大使、ランガーブ氏が、ゲップハルト博士にアテネ大会へのドイツの参加のための委員会をつくるよう説得した。

ゲップハルトは主だった人々から好意的な反応を得たが、中でも帝国首相の息子、プリンス・ホーエンローエ・シリングスフュルストの支持をえた。

1894年の kongress に参加しなかったドイツに対して、反ドイツ的な立場をとってきたクーベルタンに対しては、猛烈な反クーベルタンキャンペーンがあった。しかしそれにもかかわらず、ドイツはアテネのオリンピック大会に参加することになる。

イギリスでは状況は更に悪かった。クーベルタンは沢山のイギリスの新聞に書いたが、返ってきたのは、丁重な皮肉なコメントだけであった。イギリス人明らかに、汎イギリス大会を望んでいた。

スウェーデン、ハンガリー、アメリカでは、それぞれブラック、ケメニー、スローンのお蔭で、クラブチームを結成するのは非常に容易であった。

しかしベルギーではそうではなかった。オリンピック大会のための国際委員会の新しいメンバー、ブシー伯爵は、依然としてスポーツに対して敵意を持つ体操連盟の影響を受けた世論に直面しなければならなかった。

ロシアでは、ブートウスキーが「酷い無関心」に出会った。

アテネでは大会準備が全速で走りだそうとしていた。

1895年2月7日（ユリウス暦）、勅令が委員会に予約受付を許可した。

16日、市評議会が、大会開催費の支出に賛成投票をした。

23日、皇太子は、「パリのオリンピック大会のための委員会によって起草され承認された」プログラムに一致したスポーツ委員会の設立を発表した。

皇太子は、100メートル以上の、400、800、1600メートルのレースは、古代ギリシャで「平らな土地」で行われた徒競争、スタジオン、ディアウロス（2スタジオン）、ドリコスに照応するものであると述べた。

1895年3月16日、委員会はフランス、スウェーデン、ロシア、アメリカの協会の参加の通知を受けた。そして「満足すべきニュース」をイギリスから受け取った。

1895年3月28日、「メッサジェー」の編集者はパリの「レビューアンテルナショナル」に手紙を送って、オリンピック大会復興にいたった議論の経緯について報告した。

トリクーピスの責任が強調されたが非難はされなかった。何故なら「破産の時代」だったのだから。一方、自由にできる「かなりの額」を持っていたザッパスオリンピック委員会は、ザッパスの財産はルーマニアに押さえられているという「虚偽の」口実によって一切の参加を断った。公平にいて、手紙は続けている、ザッパス委員会の目的は「その名の示す通り、国内、或いは国際スポーツ大会を開くことではなく、国内博覧会の開催であった」。クーベルタンとビケラスのそれぞれの役割が明確にされている。クーベルタンはプロジェクトの全体的デザインと国家レベルの政治的連絡に責任を持ち、ビケラスは組織委員会事務総長との合意に基づいて全ての調達補給面を担当することになった。

1895年4月13日、「メッセージ」は、アベロフの50万ドラクマの献金と、委員会がすでに受け取っている寄付の合計15万ドラクマを発表した。ジョルジュ・アベロフは後に、10万ドラクマ次いで25万ドラクマ(9月2日と3日のメッセージ)を寄付し、合計は凡そ100万ドラクマに達した。

1895年4月15日、「メッセージ」は、金庫が献金で一杯になりつつあるが、一般からの献金は、クーベルタンが皇太子に対して行った提案によって実現したことを忘れるべきではないと報じている。編集者は、不幸なことに、この喜ばしい日に、クーベルタンが忘れられているようにみえると嘆いている。「第一番に仕事をした職人は、彼の名前が触れられないことに不満をもって当然だろう。しかも、祖先の誇りと現代の精神が両立しうる形でそれが復興したのが、彼の努力と何よりも彼の確固とした忍耐によるものであったとしたなら。ド・クーベルタン氏は、パリにおける国際スポーツコンGRESSを可能にするために五年、その準備に一年を費やした。これがなければ、このような事業は決して実現しなかっただろう」。

「メッセージ」のこの記事の筆者は、続けて書いている。「我々としては喜びをもって記すのであるが、オリンピック復興の案はこうしてフランスから起こった。我々は、ド・クーベルタン氏が数限りない困難と意気阻喪させる情勢にもかかわらず担い続けた非常に長く骨の折れる仕事について知っている。かくしてフランスは1986年のオリンピック復興についての名誉に値する。しかし、大会が国民の誇りを満足させ、行事の尊厳を保つ条件の下で開催されることを保証するのは、何よりも、皇太子の確固とした態度、忍耐力、そして積極的な知性である」。

これはクーベルタンのオリンピックの使命に対して払われた最も熱烈な賛辞であった。しかし驚いたことに、ビケラスの基本的な役割については何も触れられていない。

ここには、アテネの知識人が、近代オリンピックの設立者として如何にクーベルタンを認めていたかが表れている。これはクーベルタンが受けた傷を癒すものであった。

クーベルタンは彼の本「21年間の戦い」の中に、フィレモンの下にあった委員会は、これらの年月の間、唯一の例外を除いて、彼のオリンピック復興の努力にほとんど敬意を表さなかったと書いている。それは1896年2月7日、ギリシャの委員会が、すでに言及したドイツの誤解の犠牲になったクーベルタンを近代オリンピックの設立者として公式に認めた時のことである。電報は次のように述べている。「ギリシャの委員会は、オリンピック復興の主唱者である貴方が仰ったとされている言葉

を、貴方が仰ったと信じたことはありません」。クーベルタンは書いた。「私はもう必要ではなくなった。彼らは成功を確信した。その瞬間から私の名前が触れられなくなったばかりでなく、全ての人がオリンピック大会復興へのフランスの貢献を消そうとしているように見えた。」

クーベルタンは、ギリシャ人が彼を「消そう」としていることに大いに感情を害したことは確実だが、彼は驚きもしなければ、騙されもなかった。

ソルボンヌでの kongress 以来、彼は、ギリシャ人が如何に自分たちの歴史を横取りされまいと汲々とし、自分たちのためにオリンピック大会を復興し、ギリシャの土地にそれを確保することを求めていたかを知っていた。その意味で、彼は面倒の種であった。

フィレモンの官僚主義は彼を排除し、アテネの政策決定の中心から遠ざけようとした。これが1895年から1896年の間、クーベルタンがアテネにいなかったことを説明する。

古代ギリシャのオストラシズム、陶片追放にも似た排斥の原因である。

第一回の近代オリンピック大会は陰謀の中に誕生した。組織委員会が開催のために大変な努力をした。しかし成功の程はまだハッキリしないとしか言いようがなかった。

1.4.2. 最初の果実、アテネ1896年

1894年6月の夏至の頃、逆風の中で、あまり好意的とも言えない敵に蒔かれた種が稔るかどうかは、運次第であった。第一回オリンピアードの競技大会は、1896年6月6日から15日にかけてアテネで開催された。

それは、ゲームと挑戦が民族の伝統であるような国においてさえ、まるでポーカーの幸運な手のようであった。一握りの支持者を除いて、このプロジェクトが成功すると考えた者はいなかった。支持者とは、皇太子、クーベルタン、ビケラス、そしてこの人達に比べ熱意において劣り、確固とした信念からというよりも王家に対する忠誠から支持した、T.フィレモンであった。

全てが失敗を予想させた。インフラの欠如、事実上国民スポーツが存在しないこと、世論の不一致、有能な人材の不足、政治階級の大多数の敵意、破産が続出している住民18万の小さな眠ったようなバルカンの都市、アテネ、アテネは未だ5世紀に及ぶトルコの支配の後遺症に苦しんでいた。そのような条件の下で、どうやって国際オリンピックを開催する能力を発見することができるのだろう、しかもそれは、アッティカ風の伝統を守りながら、現代の要求にも合わなければならないのである。それでもなお、大会は開催された。

この第一回の大会から、多くのものの源となったものが生き残っている。

全体として言えば、それらの品質は貧困なものである。

創始者の自己満足とジャーナリストの情念と民族主義者の熱狂に浸されていたから。

我々はこの十日間の歴史を忠実に再構成することができる。

この十日間は世界を震撼させはしなかったが、歴史的なものであった。

クーベルタンのメモワール、手紙、アテネの「メッサジェー」の増刊、「公式記録」がこの大会を歴史的な、祝祭の、オリンピックの文脈の中に理解することを助けてくれる。

「過去の全ての栄光を蘇らせるべく復元されたスタジアムに観客が入場を許され、ジョージ国王陛下が”私は第一回近代オリンピックの開会を宣言する”という儀式の言葉を正式に述べて、ついに偉大な日がやって来た。」

メモワールの中でクーベルタンは、彼の事業がほとんど失敗しそうになった、陰謀に満ちた数カ月から、やっと開放された気持ちを告白している。

彼は舵取りであり、成功した。彼は喜びを表現している。とくに、彼のオリンピズムにおける仲間が一致して無条件に彼の功績を認め、尊敬の念を表明したときに。

ドイツのIOC委員、ヴィリバルト・ゲップハルトは定期的にクーベルタンと英語で手紙のやり取りをしていたが、次のように書いた。「これは全て貴方の仕事です。」

ビケラスはハッキリとクーベルタンのカリスマを認めた。

{民衆のナショナリズム}と「世論の行き過ぎ」にもかかわらず、この事業の継続性と国際的性格が宣言された。

我々は、オリンピックが最初どれほど無関心な世論に迎えられたかを知って驚かざるを得ない。1894年、オリンピックはアテネで何の関心も呼び起こさなかった。ギリシャの田舎では尚更のことで、高級レストランでも、地方の飯屋でも同じことであった。

しかし、王室の示唆を受けた新聞は、文化と歴史の衣を着せて、古代オリンピックの象徴的偉大さの感覚に訴え、近代オリンピックに対する興味を盛り上げた。

1896年のオリンピックの祝祭的な成功を保証したのは、全てのアテネ市民のギリシャの歴史への帰属意識、例外的な国に属している名誉、オリンピック大会が古代ギリシャ文化の偉大さの象徴であるという感覚であった。

我々が「祝祭的」というのは、現代における第一回オリンピック大会が結局のところ、地中海的な祭りであったからである。この意味で、王室の人々は自らの政治的カードを首長に相応しいやり方で扱ったと言わなければならない。

パリコングレスの直後、国王のクーベルタンへの電報が基本的なトーンを定めた。

「文明揺らんの地であるギリシャはパリの決定によって名誉を受けた。かつてその地に燃えた炎を再び灯すのはギリシャでなければならない。それは奪うことのできない権利である！ ギリシャ政府はその伝統的なホスピタリティーによってオリンピック大会を主催するであろう。」と国王は約束した。

この声明は疑問の余地を残さないものであった。しかしギリシャの政治は混乱し、経済は弱体であった。ギリシャの独立は承認されていた。イギリスは1863年にイオニアの島々を返還し、クレタ島もテッサリーももはや国境線の外にはなかった。

最近統一したばかりで、山地の住民も、漁師も、港の商人も、銀行家も、英雄的な革命家も、そ

れぞれの個人的利益に関心が戻っていた。ある程度の富の流入とコリント地峡運河の開削(1882-93)が中産階級の興隆を促していた。しかしギリシャは貧しく、1894年には、この国は財政的破滅に向かって滑り落ち始めていた。

複雑な要素からなる社会と破滅的な経済情勢を前にして、王家の使命は容易なものではなかった。政府は、民衆のシラクを反映して、このプロジェクトに反対であった。

国王と皇太子は、オリンピック大会が王座を取り巻いている混乱した世論を動かせることを理解していた。従って、二重の動機があった。首相は王の指令に従うよう呼びかけた。もしそうしなければ、彼は更迭されただろう。

皇太子は、オリンピック大会組織委員会の長として全権を与えられた。

公式の儀式と祝いは、永遠のギリシャの価値を称揚し、国民のなかにこの事業の成功を保証し、国と王座の絆を固めるものでなければならなかった。

我々も知っているように、トリクーピス首相は速やかにデアニスに交代させられた。

デアニスはオリンピック大会の支持者であった。オリンピックは公式のレベルでも民衆のレベルでも成功を証明しなければならなかった。

1896年4月6日から15日まで毎日、国王と王妃はスタジアムに臨席された。

愛国的感情とオリンピックの古代の栄光を称揚するためにあらゆる努力が尽くされた。

国王と王妃は近づきたい象徴であり、一般人から遠く離れた存在であったが、ギリシャ人競技者が出場すると、密かな喜びを示された。一般人とのつながりは、皇太子の役割であった。皇太子は競技場に降り立つことを少しも躊躇されなかった。

一般の歓迎は国を挙げてのものであった。新聞が煽り立てた。皇太子の言動や、セルビア王、ウィリアム二世のような貴賓の訪問は細大漏らさず伝えられた。

外国人の宿舎や、その居心地のよさと安全、ある種の強引な商人から彼らを守ることが主催者にとっての絶えざる心配の種であった。アテネの新聞は、普遍的な態度を示すことに大いに努力を払った。とくに国際世論が「比較的冷淡な態度」を示していたので尚更であった。そうしたわけで、「メッセージ」の読者は、3月2日と9日の増刊号N0.8とN0.9でドイツ、ハンガリー、アメリカ、フランスが大会に参加すると知って、ホッとした。

成功の兆しのひとつは、「メッセージ」の広告が増えたことであった。

一般大衆の無知を考えれば、印刷物によって提供された情報の種類の多さと質は、圧倒的な重要性を持っていた。そうしたわけで、新聞が読者に提供した材料は広範囲に及んだ。

新聞は、スタジアム、射撃場、水泳場の工事の状況について伝え、競技規則を説明したが、国際自転車連盟(本部がイギリスにあった)の規則を除いて、説明に当たったのはフランスの競技連盟であった。砲丸投げは、2メートルの正方形の中から投げられた。砲丸は鉄製、重さは7.25キロ

であった。円盤を投げる場所は、2.5メートル×2.5メートルで6センチ高くなっていた(古代のBALBISと同じにするため)。槍投げはプログラムになかった。「今日、槍投げとレスリングは現代文明の求めるものに合わない。」

サッカーの規則は、増刊No.9に詳しく述べられた。競技場の広さは、182.5メートル×91.4メートルか、91.4メートル×45.7メートル。

ギリシャに競馬場と馬がないため、馬術競技は除外された。

ピレウスから吹いてくる風が巻き起こすスタジアムとサッカー場の埃が厄介な問題であった。施設は、一日1万ドラクマかけて日に3回水で洗い流さなければならなかった。

3月24日、「特筆すべき後援者」アベロフの像の除幕式がスタジアムの入口で行われた。

アベロフは病気のため参加できなかった。ケメニーが率いるハンガリーの代表団が「エイロスの高貴な息子」を讃えた。

3月25日、ギリシャの休日、神を讃える歌の後、主賓席に王家の入場が行われた。

スタジアムへの入場は「魔法のように魅力的」であった(公式記録による)。公式記録は、さまざまなドレスと髪形をした多くの美しい女性の観客とその扇の揺れ動く様の素晴らしい効果に触れている。

コンスタンチン皇太子が儀式スピーチを行った。この「異教的」な開会式に熱狂的な歓声と「アンコール」の叫びが上がった。

そして国王が第一回近代オリンピックの開会を宣言した。

公式記録は、時間を追って非常に詳しく、大会の式典と競技の十日間を記述し「第一回オリンピックアードの競技大会参加者の名簿」を作成している。数字について知りたい読者には、この膨大な、華やかな面もなくはない報告書を参照することを勧めたい。

アメリカが大学生のお陰で、陸上競技で勝ったことが注意を引くだろう。

ギリシャの民衆は、外国人を歓迎する古代ギリシャの伝統に従って、彼らに称賛を送った。しかし、クーベルタンが1896年4月12日のオリンピックレターに書いているように、「野蛮人」の勝利は、「大変な騒ぎ」と「残酷な怒号」を引き起こした。

ドイツ人は体操に勝利を収めた。ハンガリー人はほとんどの水泳競技に勝った。

ギリシャ人は射撃と砲丸投げで好成績をあげた。10日間に、311人(全て男性)が43の競技に出場した。13カ国が参加、ほとんどがヨーロッパの国であった。

新聞の惜しみない賛辞によって前もって注意深い準備がされていたので、民衆は1896年4月10日のマラソン優勝者、スピリドン・ルイスに熱狂的な歓声を送った。

ルイスは贈り物の山に覆われたが、彼はそれを返した。

クーベルタンは褒めそやした。「1896年の輝かしい勝利者、羊飼いのスピリドン・ルイスは素晴らしいスポーツマンシップの持ち主で、この種の贈り物を受け取らなかった」。

公式記録は、主としてフィレモン、ポリティス、クーベルタン自身によって書かれた記事のおかげで素晴らしいものになっている。奇妙なことに、高い教養の持ち主であるビケラスはこの報告書の起草に参加していない。

ティモレオン・J.フィレモンは長い序論を書いて、次のオリンピック大会が「同じアテネ市」で開催されるよう訴えている。

修復されたスタジアムの設計者であったN.G.ポリティスは、古代のパンアテナイア大会とパンアテナイアスタジアムについて学術的な論文を書いて、ヘロデ王のスタジアムが「物惜しみしない点でアテネのソフィストと競う偉大な愛国者のおかげで、ごく近い将来に完成される」ことを望むと述べた。

ピエール・ド・クーベルタンは序論の一つで、オリンピック復興について果たしたフランスと国際的背景を跡付けた。

彼は、「フランスが事業の産みの親であること...」を強く主張し、その中で「世界の若者が平和を愛する心と生命に対する畏敬の念を見いだすだろう」と述べている。

クーベルタンは、第一回近代オリンピックの競技大会を冷静に、全体的に検討した。スポーツが普及するためには、国際化されねばならない、と彼は書いている。

国際化？ 目的は達成されただろうか？

三つの大陸が参加したが、ヨーロッパが圧倒的であり、オセアニアは大英帝国の植民地が参加したに過ぎなかった。アングロサクソンのスポーツとドイツの体操の代表が参加したという方が明らかに正しくであろう。ギリシャ人が一番多かったが、これは当たり前である。

参加の最低基準といったものはなかったので、クラブチームと独立の個人が登録された。国内予選もなかったのである。盛り上がる愛国的な感情にも係わらず、また民衆の感情が最も高まったときにも、一種の普遍的なムードが支配的であった。国王と皇太子の態度に鼓舞されて、ギリシャの人々は長い伝統である客へのもてなしを続けた。外国人は至る所で温かい挨拶を受けた。しかし、頭脳明晰で冷静なクーベルタンは、熱狂的愛国主義がスポーツにとって脅威であり、最も大きな困難が前途に横たわっていることを知っていた。

しかし当面は、オリンピック大会がギリシャ人を燃え立たせたことを喜ぶべきであった。

一握りの体操家、射撃手、自転車乗り以外スポーツマンのいない国で、大会に対するギリシャ人の熱狂のおかげで、競技スポーツが古代ギリシャの運動競技の精神を蘇らせた。

オリンピック大会は、現代スポーツの世界へのギリシャの参入を画するものとなった。

もう一つの希望の源は、大会中にソフォクレスの「アンチゴーネ」が完全な形で上演されたことで

ある。授賞式では、イギリス人ロバートソンが古代ギリシャ語で自ら書き、「ピンダロスの歩格」で作詩した頌歌を朗読した。国王は彼を温かく祝福した。

ギリシャの色、白とブルーの紙の巻物が参加賞として全ての競技者に与えられた。

全ての種目の一位と二位に、銀と銅のメダルが与えられた。フランス人、ミッシェル・ブレアルが提供した銀のカップは美しい工芸品であった。大金持ちのジャン・ランボスが奉納した古代の壺（ヘラノディカイ・審判員の目の前を走るドリコドローム）は、スピリドン・ルイスに与えられた。オリンピアの岡のオリーブの枝と月桂樹の葉がオリンピックの勝利者の冠を飾った。たいまつ行列、ハーモニーの波、そしてピレウスで行われたベネチア祭りが、アテネの夜の民衆の熱狂に調和した。

クーベルタンはブラスバンドは好きでなかったが、ラスキンの忠実な弟子であったので大喜びした。善きものを生む美がオリンピックの祝いの中には現れなければならない。

かくして、歴史、文学、芸術全てがスポーツの栄光に貢献した。

この生きたシンボリズムは忘れてはならない。即ち、もし人と国との間に調和があるとするならば、精神と筋肉、霊と肉体も調和するにちがいない。

スポーツの面では、1896年の大会の競技結果は、当時としてもまあまあといったところであった。これは主としてスポーツ施設がよくなかったからである。水泳プールはなかった。ゼアの小さな湾にしつらえられた原始的なプールであった。古代オリンピックと同じようにつくられた競走用の砂のトラックはとてもよい記録がでるようなものではなかった。

大会が行われたのは春で寒かった。海水は約摂氏13度、そして嵐がボート競技の開催を妨げた。アメリカ人だけが、良い気象条件と屋根のあるスポーツ施設に恵まれて適切なトレーニングをすることができた。その結果、彼らは易々と勝利を収めた。

クーベルタンは、マラソンを除いて「何もセンセーショナルなもの」はなかった、と記している。「達成されたのは…さまざまなスポーツの間の協力であった。」

彼は将来をより明るく見ていた。しかしそのためには国際スポーツ連盟ともっと緊密に仕事をしなければならない。ルール、器具、材料の標準化を緊急に行い、古代オリンピックと現代スポーツの中から種目の選択をしなければならない。

過去への愛着だけではだめだ！

イギリスとの間の蹟きの石、アマチュアリズムの問題もようやく提起された。

この問題はアマチュア競技者の定義が受け入れられたことに言及するに止まった。

これらはオリンピック運動が発展する段階のなかでは、当たり前の問題であった。

或る者はオリimpiズムの背後にある哲学を、他の者は儀典や技術の問題を心配した。

どれ一つ重要でないものはなかったが、多くは容易に解決することができた。

しかし、一つ、深刻な、困難な問題が残った。即ち、将来のオリンピックの会場は「巡回」すべきかどうかという問題である。

大会の世俗的な成功（過去の栄光の生きた幻として）は、ギリシャの世論をかき立てた。

そして国王は、多くの政治的、知的サークルが求めているイニシアチブを取った。

1896年3月31日、宮殿の大ホールで優勝者、新聞社やオリンピック大会の国際委員会のメンバーを招いて昼食会が催された。国王はその集まりで、ギリシャ語とフランス語の二つのスピーチを

行った。ギリシャ語のスピーチには以下の言葉が含まれていた。

「古代の体育大会の産みの親であり、護り手であるギリシャは、ヨーロッパと新しい世界の前で今日再び大会を開催し、その成功はあらゆる期待を越えた。ギリシャは、大会に臨席し、大会を名誉あるものにした外国の賓客が、世界の国々の平和な集まりの場所、オリンピックの何時までも変わらぬ会場として、わが国を選んでくれるものと期待する。」

組織委員会の事務総長、フィレモンは引用に値する即席の見事な返答をした。

「ル・フィガロ」の記者、ユグ・ル・ローは国王のために乾杯を提唱した。

アメリカの選手は同じ趣旨の請願にサインした。

クーベルタンは、彼自身の言葉によれば、「まるで阿呆のように振る舞う」決意をした。

「なんとしても、私は国王の意に従うわけにはいかなかったのだ。」

クーベルタンは屈伏することも、下りることもしない。それにそこには彼の考えを支持する強力な味方がいた。皇太子である。皇太子は「復活したオリンピック大会のギリシャの独占」が、如何に非現実的で、失敗に終わらざるを得ないかを知っていた。

つまり、ギリシャの行政とスポーツ界が「その人材と財源を規則的に若返らす」ことができない以上、アテネが4年毎に新しい大会を催すことはできなかった。

二つのテキストの違いを口実に、クーベルタンは理解できなかったようなふりをして、国王の願いには全く触れず、国王に対する感謝の公開書簡を書いた。

しかし、彼の「オリンピックメモワール」では、「この事業の継続とパリで開かれる第二回オリンピックの大会を仄めかすことによって、国際委員会の永続性をハッキリと記したこと」を確認している。

組織委員会と国際委員会のメンバーは分裂し、当惑した。「フィレモンは、困惑して顔を覆った」。

いつも妥協の用意のあるクーベルタンは、皇太子の同意を得て「ギリシャにとって、はるかに有利なパン・ヘレニック大会の創設」を助言した。

国王はこの提案に賛成し、クーベルタンを「救世主の上級勲爵士」に任じた。

この敬意の印にも係わらず、新聞はクーベルタンの不敬な示唆に激しい非難を浴びせた。

クーベルタンは非難の手紙を受け、盗人と呼ばれた。しかし彼は「露ほどの自責の念も感じず」、オリンピック大会は「巡回」を続けることになるであろうと確信していた。

大会閉会の1896年4月15日、彼の5通目の「オリンピックレター」で、クーベルタンはこの件についてハッキリと書いている。「新しいものの運命が、過去の栄光と等しいものであるためには、オリンピックは深く民主的で、厳密に国際的でなければならない。」

第一回の国際的オリンピック大会の結果で最も重要なものは何であったか？

ピケラスが、クーベルタンへの1896年5月19日付けの手紙で、要領よくまとめている。

先ず第一に、彼は書いている「国際的なオリンピック大会の運命は保証されたようにみえる」。し

かし、現在持ち上がっている問題ーギリシャが公式のオリンピックの間に「アテネで国際オリンピック大会」を4年毎に開催する権利があるという問題ーも重要で、重大なものになるであろう。

このために、ピケラスはオリンピック kongress の開催を要求した。彼の立場の正当性を信じて、彼は「この手紙のコピーをIOCメンバーに送り、回答を貴殿に寄せるよう要求した」。ボールはクーベルタンのコートに打ち返された。クーベルタンがどう対応したかは知られていない。しかし彼が困っただろうことは疑いない。

第一回オリンピック大会は陰謀や、兵姑の欠如にも係わらず開催された。

敵意を持つ競技種目も一時的に矛を収めていた。しかし国際委員会は弱体で、ほとんどクーベルタン一人がその肩に支えていた。将来は不確かであった。クーベルタンは次の世代を考えなければならなかった。

ピケラスはオフィスを譲った。こうしてクーベルタンは、ひとつのオリンピアードの間だけ、オリンピック大会のための国際委員会の会長となった。

1.5. 少数の選ばれし仲間

仕事は続けなければならない。しかし今や熱狂は過ぎ去り、足りないものが表に出始めた。クーベルタンにとって、アテネでの困難な戦いを背後に押しやるべき時であった。

そのために、彼は演壇から遠ざかり、役者であることをやめ、批判的な自己省察を始めた。今は息をつくべき時であった。

クーベルタンは忍耐強く、世界中の関係者と知己のネットワークを作り始めた。

オリンピック大会のための国際委員会を、彼は思い切ったやり方で設立したが、この委員会が深刻な幻滅を避けるためには、哲学的な、物理的な凝集力が必要であった。

危機の時、1896-97年の間、彼は彼が指名したそれぞれの国でIOCを代表する使命を持った人達、オリンピックムーブメントに直接巻き込まれた人達の間に、炎を燃え続けさせることを始めた。

また彼は、師と選んだ偉大な良心のもとへ回帰した。ストア学派の巨匠やトックビル、テーヌ、ル・プレなど、彼に道を示し、彼が何時も対話していた人々のもとに帰ったのであろう。それは彼の図書室の蔵書が証明している。しかしクーベルタンは彼の世紀の人間であった。そして彼が力を引き出したのは彼の世紀からであった。

クーベルタンと彼のオリンピックに哲学的、道徳的影響を及ぼしたのは、卓越した二人のフランス人、ジュール・シモンとディドン神父であったことはほとんど知られていない。

確かに、オリンピックムーブメントの歴史編纂員は、教育に於ける体育実践の普及委員会会長(1888)であったシモンによって果たされた指導者としての役割を思い出している。

またディドンによって作りだされた、「より早く、より高く、より強く」がどうなったかを我々は知っている。しかし、オリンピック復興のそもそもの始まりにおいて、この二人の偉大な人物によって演じられた役割には、もっと光が当てられてしかるべきである。

1.5.1. 同じ世紀の二人の師匠

1.5.1.1. ジュール・シモン

1888年、シモンは体育振興のための委員会の役員達の小さなサークルに参加した。

この委員会の目的は、ゲームスポーツの導入によって教育を改革することであった。

彼は、全ての総会、全ての集会、全ての活動の場に姿を表した。

シモンは74才であった。彼はその肉体的、精神的バイタリティーを賛嘆され、道徳的高潔さによって尊敬されていた。

クーベルタンはその時25才であった。そしてこの最も素晴らしい共和主義的美徳を体現した人物に対する尊敬の念は止まるところを知らなかった。クーベルタンはシモンに会い、仕事について相談し、彼を自分の精神的アドバイザーと見なした。

ジュール・シモンは1814年、ほどほどの資産家の家に生まれた。父親は「ブルー」であった。つまり共和派であったために、白色テロを伴った王政復古が始まったとき疑いの目で見られていた。彼は非常に幼いときから、教区の親切な神父の世話になった。「プティショーズ」(ちびさん)とあだ名され、同級生の面倒を見る役目をした。

エコール・ノルマル・シュペリユールの優秀な学生であった彼は、アカデミーに仕事を得た。彼は教訓的な模範であり、共和派であったクーベルタンも民衆教育の必要を確信していたので、シモンは彼の好みに合った。

シモンは信念の人であった。彼はルイ・ナポレオン・ボナパルトのクーデターに反対してソルボンヌを追われた。1851年12月9日、国民投票の前夜、彼の言葉はマスカット銃の銃声のように、大学のホールに轟いた。

「私は倫理の教授としてここにいる。今日私は君達に授業をする義務はない。そうではなくて一つの例を示す義務がある。もし明日、国民投票を非難する投票が只一票しかなかったとしても、それは私が投じたものだと前もって君達に告げておく。」

彼の言葉は歓声をもって迎えられ、彼は付け加えた「私は君達の歓声を誓いと取る」。

クーベルタンはシモンの内に、「真の共和派で、真に保守的な」性格を見た。彼は活動的な政治生活の変転にもかかわらず、「ハッキリと民主的で、頑固にリベラルな」共和黨員であり続けた。彼は輝かしい思想家、揺るぎなき共和黨員であるばかりでなく、勇気ある改革者であった。短命な政府の間、大学における重要人物であった彼は、初等教育の義務化、無料化を望んだが、虚しかった。この立場に、クーベルタンは同意していた。「民主主義の正当な要求の範囲」である。クーベルタンが疑いを持ち始めた時、助言と慰めを求めたのは、いつもシモンであり、彼の作品の内であった。

逆説的なことに、シモンが改革について支援を求めたのは、スポーツを知らない政治家だった。この人物は、1891年1月15日パリでUSFSAによって催された宴会で、ユーモアたっぷりに、生徒で

あったころ耽った身体活動を全く欠いた毎週のぶらぶら歩きの思い出話をした。彼は、殴り合いなど全く行われぬ、洋服の破れることも全くない遊びは残念だと言った。この政治家はスポーツゲームを学校に取り入れようと企てたが成功しなかった。

何よりも、クーベルタンの中に賛嘆の念を引き起こしたのは、その人の寛容さであった。

シモンは信者でありなら、フランスにおける無宗派教育を主張した。彼は同時に、自由の名において、ジェスイットや修道会が学校を開く権利を擁護した。

スポーツ運動について連合の権利の問題が提起されるときクーベルタンが語りかけるのは何時も、「法的には存在しない省の議論の余地のない大臣」に対してであった。

ジュール・シモンは、クーベルタンが言ったように、「人道主義的事業省の大臣」であった。その依って立つ基盤が民主的な生活にしかない省の万人の認める長として、彼は進むべき道を示し、勇気づけた。彼はまた、もし自分が役に立つことを知っているのであれば政治に首を突っ込む必要のないことも教えた。

この教えは、クーベルタンのオリンピック大会のための国際委員会の設立に反映している。そして彼の、全ての国、全てのスポーツ、そして平和主義に貢献する広い国際的な運動の創造に、オリンピックと平和の「反組織」、一種の巨大な反政府組織の設立に、そして権力と人生の攻撃に平静に耐える彼の能力に反映している。

ジュール・シモンは、クーベルタンにとって死に至るまで、愛する父であり、分身であった。我々が第二代IOC会長の政治思想の中に最も強く読み取るのは、疑いもなく、この人を模倣をしようとする賛嘆の念である。ジュール・シモンのように、クーベルタンは民主的な共和主義者であり、深く伝統に帰依した自由主義者であった。

誇り高い、断固とした性格、最も深い内面の衝動が時として別の面を見せたものの、彼は対話の人であり、プロレタリアート解放に価値を置く進歩派であり、仰々しいところのないカトリックであった。彼を、(彼はジュール・シモンの不可知論を理解することができた) 穏健な、民主的な、進歩的なフランス人右派の中に位置づけても、そう大きな誤りを犯すことにはならないだろう。

それに、ジュール・シモンの弁舌と文才に対するクーベルタンの賛嘆の念が、彼の戦闘的な運動の進め方に影響なかったわけではないことを付け加えておいてもよいだろう。

彼はジュール・シモンの「緊迫した、持続する」印象をつくりだす弁舌の冴えと文章の熟達を評価していた。ジュール・シモンと同じように、クーベルタンはフランス語を巧みに操り、多くの手紙や無数の手記を書き、才能のある、説得力のある、辛辣な、ユーモアに満ちた、感動的な語り手であった。

「神、家族、祖国」、これはパリのプラス・ド・ラ・マドレーヌに建てられたシモンの記念碑に彫られた言葉であるが、クーベルタンは、この言葉にもう一度、ディドン神父の著作のペディメントのなかで、ほとんど同じ形で出会うことになる。

1.5.1.2. ディドン神父

我々はクーベルタンが語っている以外に、ディドン神父についてほとんど知らなかった。

それは、ピエール・ド・クーベルタンが彼に相応しい役柄を与えて偉大なオリンピックの冒険に参加させようとしなかったことに、デイドンは我慢ならなかったからである。

1889年、クーベルタンはアルベール・ル・グラン中等学校に行った。この学校はドミニコ派によって運営され、パリの南南西に広がる台地のアルキュエユにあった。

彼は、そこでスポーツ協会をつくらうとする企てに失敗した。カトリック教会は全体として、生徒達が間違ったスポーツに染まることよりも、非宗教学校の生徒と交際することの方を恐れるという、単純な理由のためであった。

アルキュエユで、クーベルタンは修道会の上長者ジュールダン大修道院長のにべもない拒否に会った。しかし我々が知る通り、クーベルタンは簡単には諦めなかった。

デイドン神父にとって、アルキュエユは召命の地であった。彼は目の前に、キリストの慈善と希望の精神からは程遠い、排他的な風潮に染められた子供たちの社会を見いだした。時代と場所こそ違え、彼はトーマス・アーノルドと同じように、教条主義にとらわれることなく、社会的な集団を構築することによって魂を目覚めそうとした。

最初から、彼は衛生と清潔さのルールを課した。遊び場を広げ、修道院の境界の壁に裂け目をつくり、公園を運動場にした。

1892年7月20日、彼は学校の賞品授与式で次のようなスピーチを行った。「我々は、身体的努力への信仰を維持するために、体育スポーツ協会を組織した。これは他の努力の出発点である。私は活気に満ちた意思の命令を実行することの出来ない軟弱な筋肉を信じない。頭脳は、それに奉仕する活力のある筋肉を持たない限り健全ではあり得ない。」

1891年1月4日、「全校集会」で彼は「体育スポーツの道徳的影響」と題する講義を行った。この中で彼は自分の実際的な教育の知的性格を明らかにした。「私は何も言わず、スポーツを組織し、全てのグループを混ぜることによって、それ(党派的な精神)を根絶してきた。」これがルアーブルでの会議(1897)での彼のスピーチのテーマそのものであり、後にクーベルタンが絶えず繰り返す中心思想となる。

1891年1月4日アルキュエユでの会談の後、クーベルタンはアルベールルグラン・スポーツ協会を創設した。3月7日、この協会は最初の選手権試合を行った。

デイドン神父が名誉会長、クーベルタン自身が事務総長であった。賞品授与式で、デイドン神父はドミニコ派の色、黒と白の旗を授与した。

クーベルタンはこのシーンを次のように報告している。「彼は、彼らに体育スポーツの基礎であり、存在理由である三つの言葉をモットーとして与えると言った。シティウス、アルティウス、ホルティウス！より早く、より高く、より強く！」

このモットーはクーベルタンによって取り上げられ、近代オリンピックのモットーとなった。1891年3月7日のことであった。

1月13日、デイドン神父は白い法衣を風にはためかせながら、クーベルタンと一緒に丘を上り谷

を下って、アルキュエイユを巡る15キロの徒競走を行った。

1月15日には、枝はUSFSAの晩餐会に出席し、会長ジュール・シモンの右、クーベルタンの正面に座った。彼は、志を同じくする仲間の中にいた。

ディドンはクーベルタンとシモンが学校生活に導入しようとしている「スポーツの騎士道」にキリスト教の名誉についての考え方が一致することを発見した。

多分彼は、グルノーブルのプチセミネールでの身分自身の学校生活やロンドーで活発にはしやぎまわっていた頃のことを思い出していたに違いない。そこでは彼は、我々が前に見たように、祈りや勉強よりもレースや競技会に熱中していたのであった。

クーベルタンとディドン神父の間に育った大きな友情は、近代オリンピックの物語の中の重要な要素の一つである。ディドン神父はバリ近くの郊外に住んでいた。また市内に事務所を持っていた。全ての旅に時間がかかっていた時代に、この事実は無視できない意味を持っている。彼らは頻繁に会った。そしてこの偉大な説教師は、クーベルタンに彼のスピーチの暖かさと信仰の輝きを分け与えただけでなく、世紀に聞かれたフランス教会の精神の明晰さと確信を与えた。

「アンデパンダン」の手紙で、クーベルタンはディドン神父との友情を回想し、彼の業績に対する深い尊敬の念を表している。彼はディドンについて、この世紀に参加した神父、反ユダヤ主義を非難する「現代的」「時代の人」、彼の教区民が仰天したことには、「感傷的な聖典納室係り」と「干からびた論理学者」を激しく非難する神父であったと描写している。このカトリック神父に、クーベルタンは自分が探していた一つの例、支持者、即ち興味と熟慮をもってスポーツ精神を注目してくれる信仰の人を発見したのであった。

クーベルタンが最終的に「スポーツ教」の哲学的基礎の確立に導く混合概念を明確にできたのは、ディドン神父の精神的支援によるものであった。

クーベルタンがディドン神父に与えたものは、現実の社会と若者についての新しい見方であった。フランスカトリック教会は、福音伝道のためにその種の情報を必要としていた。

ディドン神父との接触で、ピエール・ド・クーベルタンは高い精神性に憧れを抱き、過去の無意味な迷信から自由になったキリスト教の根源をくみ取った。

彼はまた、ディドンのうちに閉ざされた冷やかなローマカトリック教会の世界におけるかけがえない盟友を見つけた。ディドンの方は、クーベルタンとの接触で、彼の信念を広げるより良い方法と手段を見つけた。お互いに手を携えて、相手を通して、新しいオリンピズムを理論的、实际的に洗練していった。

1896年にディドン神父は、「アルキュエイユのキャラバン」を率いてオリンピアへ行った。彼はオリンピアのゼウスの神殿の廃墟で自分自身の写真をとった。

復活祭の日、ディドンはアテネで、ギリシャ正教の主教を前にして復活したキリストへの自分の信仰を宣言した。彼は「古代ギリシャの天才」を思い起こすことを忘れなかった。

そして「彼らの子孫である我々西欧人とラテン民族は自分自身の中にその天才を見いだしたいものだ。」とのべた。

「私は、ギリシャがかくも完全な模範を我々に示している、体育の発展に自分自身を捧げたいと念願してきた。それはますます人間の教育にとって重要なものになるに違いない...つまり、私は私に託された若者たちにこの国際同盟の運動に参加するよう教えたい。

この運動は諸国民の友情と道徳的統一の最初のステップであり、キリストが主であり、創始者であり、揺るぎなき支持者である精神の王国の、偉大なゴールとして、キリストが最初に定めたものへのステップである。」

この長い引用は、新しいオリンピズムの哲学への鍵の一つである。

デイドン神父は、1897年のルアーブル kongress の三人の偉大な演説者のうちの一人であった。彼は1900年、パリ大会の年に死んだ。彼のオリンピズムにおける分身、ジュール・シモンが1896年、アテネ大会の年に死んだように。

ジュール・シモンとデイドン神父は、クーベルタン哲学と道徳の殿堂の二つの基礎的な支柱である。しかし、クーベルタンは、同じ世代の気心の知れた仲間の連帯もまた求めなければならなかった。

1.5.2. 中心的な仲間

1896年のオリンピック大会直後の懐疑と内省の時期、クーベルタンはIOCメンバーのすべてと相談することを考えたことは疑いない。しかし国際委員会がつくられたときの経緯と何人かのメンバーが遠くにいること、また経験に乏しいメンバーが何人かいることを考えると、彼がすべての委員と直接相談したとは思えない。

IOCの資料室にはブートフスキー、ヘルバート、カフ、クールシー・ラフォン等の手紙が残っているが、アテネの熱狂が冷めていった後のこのオリンピックムーブメントにとって重大な年のものはほとんどない。

その一方、この時期、クーベルタンはウィリアム・スローン、イェリ・グート、クールシー・ラフォンらとはたくさん手紙をやり取りしている。

1.5.2.1. ウィリアム・M. スローン

スローンは強力なスポーツ愛好国、クーベルタンが大好きだった国からのIOC委員だった。クーベルタンの仲間のうちでウィリアム・ミリガン・スローンは特別な位置を占めていた。スローンは政治家としてあるいは偉大な説教者として社会的地位があるわけでもなかった。“ただの”大学教授にすぎなかったのだが、その知性、オリンピックの理想にたいする忠誠、信頼性、そして中間階級としてのしっかりとしたバックグラウンドが彼をかけがえのない友、味方にしていた。

スローンは1850年11月12日に生まれ、1928年の9月半ばに死んだ。

中流の家庭の出である。父は牧師で神学の教授であった。

コロンビア大学を卒業したあと、1872年、ライプツヒ大学とベルリンの大学に入学した。1876年

には博士号を得た。そして歴史哲学の教授に任命された。

1896年3月、彼は「ナポレオン・ボナパルトの生涯(4巻)」を書き、1901年には「フランス革命と宗教改革」を著わした。ジョン・A. ルーカスによれば、第一次大戦中のスローンは“苦しむ孤立主義者”であった。

クーベルタンがスローンに会ったのは1889年、彼がアメリカを旅し、自分のまだハッキリと形の定まらない計画にたいするしっかりした人物の積極的な助けを求めている時であった。彼らの対話は広い範囲に及び、政治、社会的な出来事、教授のサラリー、アングロサクソン文明の諸相まで話し合われた。

クーベルタンは得がたい友をえた。彼の直感めったに誤ることがなかった。

マカルーンはこの出来事がアメリカにおけるオリンピック運動に及ぼした影響を強調しているがそれは正しい。この出会いのうちに築かれた友情は、三十年に及ぶ協力の年月を生んだ。ルーカスはスローンを「クーベルタンの兄」と見ている。そしてクーベルタン自身は、アメリカへの旅についての著作の中で、スローンについて、スローンは大西洋を挟んだ大学のサークルのうちに友人を持っていたが「それがアメリカのスポーツ界を支配していた。それなくしては、何事も成しえなかったらう。」と書いている。

1893年後半に、クーベルタンはスローンの招きでアメリカへいった。そしてプリンストン大学で三週間を過ごした。スローンはクーベルタンを案内し、11月27日、ハーバード、エール、プリンストン、コロンビアの各大学の代表に会わせた。

話し合いは、丁重なものであったが、アメリカ人達には他の関心事があり、クーベルタンのオリンピックについての使命に余り大きな関心は示さなかった。

その時、大学はアメリカスポーツ連盟と戦争状態にあり、国際スポーツイベントにほとんど関心が無かったのである。スローンだけがクーベルタンのキャンペーンを支持した。

1894年6月6日、クーベルタンの強い要望で、スローンは「三人のメンバーから成る不動の三人組」に参加した。

1897年、クーベルタンは「アメリカとギリシャの思い出」をスローンに捧げ「私のアメリカの大学についての理解とオリンピック復興を助けてくれた親愛なる友人に」と記した。

クーベルタンの真の仲間のうち、スローンは彼が最も重んじたメンバーの一人であった。

1.5.2.2. イェリ・グートーヤルコフスキー

イェリ・グートとクーベルタンの関係の発端は、クーベルタンの若いころの中央ヨーロッパに対する興味にまで逆上る。1891年の夏、クーベルタンはパリでイェリ・グートに会った。

二人の共通の友人、チェコ人のフランティセック・ドルティーナが会合をアレンジした。

グートはパリでフランスの教育制度を学ぶことになっていた。

1881年のチェコスロバキア独立の後、イェリ・スタニスラフ・グートーヤルコフスキーの名をとった

イエリ・グートは、1882年に、プラハのチャールズ大学の博士号を得た最初のチェコ人となった。哲学の教授で作家、翻訳者であった彼は、大したスポーツマンとは言えなかったし体育教育について何も知らなかった。しかし、彼は乗馬ができた。シャウンブルグーリップ王子の家庭教師が生徒たちを馬による遠足に同伴したときに覚えたものである。

グートはごく普通の出自であって、1890年代には田舎のグラマースクールの単なる校長に過ぎなかった。しかし地方のオーストリア貴族との付き合いで彼はブルジョアの上品さを身につけていた。これがピエール・ド・クーベルタンを喜ばしたことは疑いない。

グートはマナーの教本を書いたし、1918年以後、チェコスロバキア共和国大統領の儀典長にもなった。

グートは愛国者であった。オーストリアハンガリー帝国の中で、チェコ人が民族的、文化的、公的なアイデンティティーを持つことを熱望していた。

彼はクーベルタンに、オーストリアハンガリー帝国に閉じ込められた民族の状況について明確な情報をもたらした。クーベルタンはお返しに、教育の高貴な形態についてのビジョン、そして何よりも、「スポーツ地理学」の考えを提供した。これが諸国民の奪うことの出来ない自決の権利と完全に一致した。

イエリ・グートは1894年のパリコンGRESには出席できなかった。「私は金がなかった。そしてほとんど知られていない突飛なことのために休暇を与えられるチャンスはなかった。更に私はギリシャと小アジアに旅行する計画を立てていた。だから私はコンGRESに挨拶の電報を打つことで満足した。」

しかし、単にクーベルタンが望んだというだけの理由で、彼はオリンピック大会の国際委員会のメンバーになった。

彼は非常に謙虚に、クーベルタンが国際委員会を設立するにあたって、ボヘミアに対して抱いている同情からチェコの市民を入れたと思ったのであろうと想像した。

グートは、クーベルタンが知っている只一人のチェコ人であった。

グートが国際委員会の活動に本格的に参加するようになったのは、1896年の大会が終わった後であった。アテネのセッションでは、彼はオーストリアハンガリー帝国内のいろいろな国がそれぞれ独白の国内オリンピック委員会を持つべきだという提案に成功した。

勿論、オーストリアの側からは反対があった。

チェコオリンピック委員会は1899年6月18日遂に設立された。これは1916年、オーストリアによって廃止されたが、1943年自ら厳然と復活するのである。

この困難な時期を通じて、グートーヤルコフスキーはオリンピズムとクーベルタンに対して忠実であった。戦争直前の時期においても忠実さは変わらなかった。

彼は1943年に死ぬまでIOC委員として止まった。クーベルタンは、チェコとイエリ・グートに対する固い友情から、オーストリアの1905年と1911年の、グートを国際委員会から下ろそうとする動きに反対した。イエリ・グートの地位がクーベルタンのオリンピック思想によって鼓舞されたものであるこ

とは事実である。というのは、彼がIOCメンバーとして要請されたのは、ボスニアの代表としてだけでなく、オーストリアハンガリー帝国に力によって併合されたシスレイタニアのドイツ人、ポーランド人、スロバキア人、スロベニア人、クロアチア人をも同じ権限をもって代表するものであったからである。

ボヘミアは、我々も知る如く、公の妥協策によってストックホルム大会(1912)に参加を認められた。既に1896年に、オリンピックにおける勝利は彼の独立運動を強化することを認識していたイエリ・グートにとっては喜ばしいことであった。

しかし、コンGRESSは、1916年大会ではチェコの選手がオーストリア以外の旗の下に参加することを拒否した。

1919年、チェコスロバキアのIOC委員になっていたイエリ・スタニスラフ・グートーヤルコフスキーはクーベルタンによってIOC事務総長に任命された。信任厚い者の地位である。

この地位の責任は重く、クーベルタン自身への如才なさと共に、以前の敵対的な勢力に対する外交技術を要求された。グートは見事にその責務を果たした。彼はオリンピック憲章の起草に積極的な役割を果たした。1921年には第1代理事会に選ばれた。

若いチェコスロバキア共和国の中で、彼は重要人物になった。しかしIOCの目的のために働くことを止めなかった。1923年以後は、過労のためにオリンピックに関する活動を制限せざるを得なかったが、それでも彼は、1925年のプラハコンGRESSの重責を担った。

イエリ・スタニスラフ・グートーヤルコフスキーは、変わることもない、一つの理想への献身、そして一人の人間への忠誠そのものであった！

1.5.2.3. ビクトール・グスタフ・バルク

ビクトール・G.バルクとクーベルタンの間に交わされた手紙はとくに量が多い。

これはクーベルタンがスウェーデンとスウェーデンの体育教育に示した興味を物語るものである。IOCの資料館には1894年3月17日から1921年3月12日までの間に、バルクからクーベルタンに宛てられた手紙17通と電報2通が保管されている。

その上、我々はクーベルタンからバルクに送られた手紙32通と電報1通を知っている。

これはスウェーデンオリンピック委員会に保管されているもので、1894年から1919年の時期にわたっている。

クーベルタンはスウェーデンという国と人々を愛した。彼はグスタフ・アドルフからベルナドッテまでのスウェーデンの歴史に10頁を割いている。彼のうちの地政学者は、ナポレオン三世がセバストポールのあと、ストックホルムを中心に強力なスカンジナビア連合をつくらなかったことを惜しんでいる。

この興味はどこから来たのか？バイキング文化の深層から来るのか？

彼の母方の祖先の住んだミルビルはセーヌ河口の近くにあり、ノルマンのロングシップが数多くやって来たものだが....

人々の間の調和と国々との間の平和に熱心なヨーロッパの人文主義者の関心からか？

疑いなくそうであろう。しかしもっと具体的には、19世紀後半「スウェーデン体操」がかち得た名声からであった。現代スポーツのあらゆる要素を連合しようとしていたクーベルタンがこれを見逃す筈はなかった。

何故なら、我々が既に見たように、彼とアーノルドの考える教育的スポーツの振興が成功するかどうかはまだ確かではなかったのである。

歴史的(文化的、軍事的、愛国的)理由から、「体操」は当然のこととして政治家に受け入れられていた。そしてスウェーデン体操は、とくにヨーロッパの医師や学者にほとんど無条件に支持されていた。

クーベルタンは隊形を組んでやるタイプの身体訓練には距離を置いていた。それはフランスの中学の古臭い規則に権威主義的な教練を付け加えるだけのよう思えたからである。

しかし彼はスウェーデン体操ムーブメントの強力な国際的アピールを無視することができなかった。更に、このムーブメントの中にスポーツを推奨する少数派がいたので尚更であった。ビクトール・グスタフ・バルクはこの少数派に属していた。

ビクトール・G.バルクは、1844年4月25日に生まれ、1929年5月31日に死んだ。

スウェーデン商船と海軍で、いかにもスカンジナビア人らしい思春期を過ごしたあと、1861年、カルルスベルグミリタリーアカデミーに士官候補生として入った。

1886年、彼は陸軍少尉となった。1891年以後、彼は軍籍にありながら体育教育の教授に全身を捧げた。

その間、1866年から1870年まで、ストックホルムの中央体操学院で物理療法を研究した。

彼はこの学院で1868年から1870年まで助手をつとめた。そしてミリタリーアカデミーとストレームホルム乗馬学校で過ごした後、1885年にここへ戻った。1907年まで留まった。

大佐に昇進して、1905年、体操学院の校長になった。その時、彼はこの施設のカリキュラムにスポーツを取り入れた。例を示して説得しながら、彼は若い体操家をスポーツについてのイギリス的な考え方に引き入れた。

1880年以後、スウェーデンの現代スポーツは著しく発展した。これは疲れを知らぬビクトール・G.バルクの功績によるところが少なくない。彼は、1881年にスウェーデン漕艇協会、1891年にスケートニングクラブの誕生を助けた。

1891年に、これもバルクのお陰で、スウェーデン体操協会ができたが、大変意味深いことに、すぐにスウェーデンスポーツ体操協会に変わった。

バルクは、スウェーデンスポーツの国際スポーツへの参加にとって「思い掛けぬ教いの神」であった。1891年に彼はストックホルムで国際体操スポーツフェスティバルを主催した。1892年にはスケベニングンで、国際スケート連盟の設立に参加し、1893年から1925年まで、活動的な、尊敬を集める会長をつとめた。

そのころまでに、彼はスポーツを教育カリキュラムの中に導入するのに十分な力を蓄えていた。それ以来、彼はスウェーデンスポーツの父と考えられている。

1894年、パリコンGRESで、彼は最初のオリンピック大会のための国際委員会のメンバーになった。彼はまた、北の大会のための組織設立の陰の立役者であった。

バルクとクーベルタンは最初にどこで会ったのか？

クーベルタンは、ストックホルムの体操家達が、1889年のパリ世界博覧会の間にシャンドマルス

の通りで行ったスウェーデン体操のデモンストレーションに出席した。

そしてバルクに会った。バルクはその時、45才であった。

当時、ストックホルムの中央体操学院の副校長、そしてスウェーデン代表団の団長であった。

彼は多作な著述家であった。生涯におよそ20冊を出版している。

クーベルタンはその著作を評価し、著者を尊敬した。当然のことながら友情が生まれ、バルクは親しい仲間になった。バルクは1894年のパリコンGRESに於いて最初に接触を受けた人々の一人であった。

「私は友人…スウェーデンのバルク司令官のような友人に支持を呼びかけた。」

1893年には、クーベルタンが友情について語るほど二人の仲は進んでいた。

1894年以後、彼らの友情に満ちた仕事上の接触は著実に緊密になっていった。これについては信頼すべき、数多くの証拠が残っている。

我々が見ることのできる最初のものは、バルクが1894年3月7日、ストックホルムから出した手紙で、1893年2月29日付けのクーベルタンの親書に答えたものである。

クーベルタンがバルクに書いているのは、彼が世界中の相手に書き送ったように、ソルボンヌのコンGRESへ出席してほしいということと、ノルウェー、スウェーデンのスポーツ指導者、そしてスウェーデンスポーツの代表と新聞社の宛て名を教えてほしいということであった。

バルクは直ちに返事を書いて、正確な詳しい情報を送った。彼が言及したスポーツ代表は全て職業軍人で、ほとんど全ての協会がノルウェー(クリスティアーナ)とスウェーデンに本部を置いていたことは注意に値する。

ビクトール・バルクは更にクーベルタンに対して、スウェーデンが1894年6月のパリコンGRESに正式に代表を送れるよう、バルク自身が軍の上層部から必要な休暇を得られるよう、ストックホルムにいるフランスの大臣、ルネ・ミレに要請することを求めている。

コンGRESには出席できなかったにもかかわらず、バルクはクーベルタンのたっの願いで、IOCの副会長になった。

1895年2月20日、バルクはスウェーデン体操連合のレターヘッド付きの書面で、クーベルタンに対して、以後スウェーデン体操連盟が「オリンピック大会のためのスウェーデン委員会」の役割を果たすと書き送っている。彼はアテネでのオリンピック大会がスカンジナビア人にとっては都合の悪い4月に行われることを残念がった。

アテネ大会の後、彼はかなりの規模のスウェーデンオリンピック委員会の設立を発表し、同時に、ルアーブルでのコンGRES開催(1897)に驚きを表明した。つまり前もって国内オリンピック委員会を作った方がよかったのではないか、ということである。

何年にもわたって、我々はバルクの影響力が国際委員会の中で強まっていくこと、彼に対するクーベルタンの敬意と好感が高まっていくのを跡付けることができる。

バルクの手紙は今や、スウェーデンスポーツリレーション中央連盟のレターヘッドを使って書かれている。その手紙は1901年5月25日のパリでのIOC会議ーバルクはこの会議に出席できなかったー、オリンピック開催都市にシカゴを選ぶ件、ノルディック大会、1904年大会のストックホルム招致撤回に関するものである。

の手紙は1902年3月29日付けで、バルクからクーベルタンに宛てられた手紙のうちで最も長いものである。国際スケート連盟会長として、バルクは沢山の旅行をした。彼は丁度ドイツ皇帝の謁

見を賜ったところであった。彼はアテネでの間に差し込まれた大会の開催に関して彼が言ったとされる言葉の「誤った解釈」について抗議している。しかし、彼はルアーブルの kongress での発言、IOCは国際スポーツ組織によって選ばれたメンバーによって構成されるべきである、そして大会のプログラムはIOCによって事前に審査されるべきであるという発言については再確認している。

二つの提案は、疑いもなく、何が何であるかを知っている技術的な経験を持つ人物によってなされたものである。彼の調子、とくにクーベルタンのルーアンでの発言「皇太子とビクトール・バルクはスウェーデン体操を現代スポーツによって置き換えようとしている。」を取り上げた時のバルクの調子は断固たるものである。

バルクとしては、スウェーデン体操を現代スポーツのために犠牲にしようとは思ったことはなかった。もしそれが彼の意図であったら「生涯を捧げ、その大使としてヨーロッパ中でした仕事は何だったのか?」。彼は、現代スポーツとスウェーデン体操が共に栄え、互いに合い補うものであると強く信ずるが故に、その経歴は不当にも凋落を見ることになるのか? 結局、バルクはクーベルタンにこの記事を書いたパリジャンデイリーのスウェーデン特派員に公式の反論を送るように求めた。我々は、1910年6月22日付けのクーベルタンの釈明を見ることができる。

1904年から1915年の間、バルクとIOCとの関係、そしてクーベルタンとの友情は極めて良好なものになった。この時期、四つの主な問題があった。アテネでの中間大会、IOCの運営、1912年大会へのストックホルムの立候補、そして大戦中、大戦後のIOCの将来である。

二人の間の友情とお互いの尊敬は明らかである。書面に見える呼びかけはもはや単に儀礼的なものではなく、極めて心のこもった温かいものになっている。

二人のIOCのリーダーの注意を引いた最初の問題はアテネでの中間大会であった。

バルクにとって、スポーツの観点からこの大会は大変に興味のあるものであった。

1896年の大会はセントルイスにおける1904年の大会よりはるかに良い印象を残していた。

1906年のアテネ大会参加のための委員会がバルクを委員長としてストックホルムにつくられた。5月に大会があれば、40人のスウェーデン選手が遠征するはずであった。

しかしそれにも係わらず、バルクはギリシャの委員会が非常に巧く立ち回って、スカンジナビア諸国とドイツ、オーストリアの支持を盛り上げていると述べている。

それらの国のオリンピック委員会がアテネの大会の準備のために余りに力と金をつぎ込んでしまっ、1908年に予定されているローマの正式のオリンピック大会までには疲れてしまう恐れがあった。

彼らの論議の第二のテーマは、IOC内部の組織であった。

秩序を重んじる軍人であるバルクは、1906年大会の際のアテネセッションにギリシャに招かれた何人かのIOCメンバーが何かを決めたらどうするつもりか、とクーベルタンに聞いた。彼としては、それは無効と考えたいと思っていたが、各国が候補を出すにせよ、オリンピックの免状の授与はIOCだけの専権事項なので、そうするのは賢明ではないかもしれないとも考えた。同じように、ノルウェーからの新メンバー(アデン大尉)選出についても、前もってノルウェースポーツ連盟に相談するよう助言している。

1912年大会のストックホルム招致問題を、バルクはクーベルタンンの要請に応じて、最初1909年に持ち出した。バルクはIOC会長に、スウェーデンの新聞に発表しても良いかどうか訊ねた。もしクーベルタンが望むなら自分は何も言わない、と付け加えた。

ストックホルム大会の準備と組織についての他の情報は、スウェーデンオリンピック委員会の記録保管所に残るクーベルタンンのバルク宛ての手紙から知ることができる。

1911年の主要な問題はストックホルム大会の準備に関するものであった。芸術と文学のコンテストの計画と国内組織が立案されたが、1906年の会議以来実行されていなかった。

1911年初めの手紙は kongress の計画に関するものであった。この kongress は「エングルンド氏と彼の協会によって始められた」もので、全ての国際競技会のルールを決めることを狙っていた。

クーベルタンはオーストリアの手が背後にあり、ストックホルム大会からボヘミアを締め出すために公開のフォーラムを利用しようとしているという疑いを持った。

この計画は潰れた。更にクーベルタンはバルクに自分はこの件について他の情報源から聞いたと書き送っている。この手紙は英語で書かれている。「私は情報に通じていたのです。」主たる目的はイエリ・グートを追い出すことだったので「ソムズ・ブラウンフェルズがウィーンサークルによって連れてこられ、グートの解任を要求しようとしていました。そのような酷いことは問題外でした」。クーベルタンは歯に絹を着せぬ言い方をしている。

1912年2月7日、クーベルタンは「旅行中に」彼の義憤を露にしている。

ヘルストレームが丁度、会長に「我々が1912年のオリンピック大会の際の芸術競技について相談した多くの芸術家はこの考え方に反対しています。」と通知したばかりであった。

「こんなことを書いてくるなんて、ヘルストレームは非常識です。芸術競技がなければ、私はオリンピック大会に対する興味を失ってしまうでしょう。私の目には無性格なもの成ってしまうからです。」

クーベルタンはオリンピックに対する自分の主権を主張することを躊躇わなかったが、自分の友情を絶えず繰り返して述べている。

バルクが1909年のベルリンセッションでオリンピックの免状を与えられた、クーベルタンは彼を「体育教育におけるグスタフ・アドルフ…」と呼んだ。

1912年にクーベルタンは「ビクトール・バルクの常に若々しい情熱」を讃えている。彼はバルクをオリンピック黎明期の働き手の一人と考えていた。

1919年以降、バルクはIOC本部で、1912年ストックホルムで棚上げされたままになっていた問題を再び取り上げる尽力をした。困難の末、彼は成功した。

クーベルタンは彼を讃えて「この件に関して貴方の担った全ての労苦に感謝します... 私は私の全ての友人の信頼すべき支持を必要としています」。

IOCの設立メンバーの一人であり、世界の体育教育の最大の砦の一つ、最も強力なアイススポーツ連盟の一つの会長であるIOCメンバー、そして更に、厳しい道德家、堂々たる体格、確固とした性格の持ち主であるビクトール・バルクは、クーベルタンにとって最も大切な人物であった。偉大さと善を強く愛したクーベルタンはそれをバルクの内に認めていた。時々波瀾はあったが、彼らの友情は、お互いの尊敬、信頼、親愛の情に基づいた長続きする立派なものであった。

次のようにまとめることができるだろう。クーベルタンがバルクをオリンピックコンサートに参加するよう招いたとき、バルクはクーベルタンがそのオーケストラの比類ない指揮者になるのを助けた、と。

一つの情熱に捕らわれた人であったクーベルタンに友人は少なかった。ジュール・シモンとディドン神父は彼の世紀の師匠であった。ウィリアム・スローン、イエリ・グート、ビクトール・グスタフ・バルクがクーベルタンの親しい仲間を形造っていた。

彼らは、文化人であり、社会的出自によってではなく、教育に対する意見によって「上級公僕」であり、IOC第二代会長の親衛隊であり、勇気を鼓舞するものであり、保護者であり、オリンピック運動にその刻印を残す確固たる信念の持ち主であった。

ギリシャ西欧文明の偉大さを信じる知識人、理想主義者である彼らは、クーベルタンが新しいオリンピズムを自由主義の、議会制度をもって連合する民主主義の流れの中に根づかせるのを助けた。徳性の高さと愛国心のゆえに尊敬される彼らは、周囲の疑念のなかで、オリンピズムを平和主義とヒューマンイズムを特色とする国際主義の文脈のうちに置くことを可能にした。クーベルタンは彼らのうちに、友情の心地よさと知性の力を見いだした。アテネ大会のあと、彼らは新しいオリンピズムを救い、IOCの権威と地位が確立することを助けたのである。

1.6. 1914年以前の kongress とセッション

クーベルタンの知的な取り組み方についてはルイ・メランが見事な分析をしている。

1914年の著作で、メランはクーベルタンを最も偉大な教育改革者の一人として描いている。より規則正しい方法で書き進めながら。(F geometrique?)

これこそクーベルタンの生涯の与える印象である。その生涯は子供時代から、卓越性への貴族的渴望によって決定されていた。それこそが、すでに存在する基準のうえに、やがてIOCが作り上げられていくやり方であった。

当初、その「精神」は海のうえを漂っていた。最初に、クーベルタンがつくりだし、西欧自由主義運動の伝統の中に、そして現代国際主義の文脈の中に置いた近代オリンピック大会があった。それは素晴らしい冒険であった。

嵐に揉まれた精神は、まだひ弱で不安定ではあったが遂に錨を下ろした。

しかし行く手には二つの障害が待ち受けていた。動物的行動主義と構造の欠如である。

スポーツを神殿の商人や人間の情熱に委ねてしまうことの危険を熟知していたクーベルタンは、新しいオリンピズムを意味の深い、神秘的な、宗教的でさえある、一種のスポーツ教にしようと望んだ。心は筋肉の奴隷になってはならない。

更に、近代合理主義の支持者である彼は、効率的な管理運営がなければオリンピック運動の存在そのものが危うくなることを知っていた。

しかし、彼は共和派ではあったが共和制に加担したカトリック王党派であった。

彼は共和国の周辺部にいながら、本質的にアンシアンレジームの貴族であり続けた。

彼は、自由民主主義の原則よりも啓蒙君主の魅力にひかれていた。彼は19世紀後半の民主主

義者であるよりも啓蒙時代の知識人であった。

彼は人民の権威を認め、その同意を得ようとしたが、人民は進歩の過程で卓越した人物に導に導かれなければならなかった。

この態度が新しいオリンピズムの二面性を説明する。

それは一方で、世界のカレンダーに記された四年ごとの巡礼の儀式であり、その不死の理想の表現に奉仕するものであり、一方で、賢人の導きの下に仲間が集まることであった。

この聖なる祭典の複雑な様式と奥義を伝えられた者の黙想、この潜在するリズムに新しいオリンピズムの本質が存在するのである。

事実、これがクーベルタンと創立者が望んだことであった。この意思のうちにこそ、オリンピック運動を洗礼盤に導いた二重の文化的影響の説明がある。つまりケルト-ラテンのリリズムとアングロサクソンのプラグマティズムである。

しかし大会とセッションの関係は機械的なものではなかった。それは社会生活の密度によって分かれていた。 kongress の決定と個人と文化の間の軋轢によって生じた内部的な緊張、政治世界が生み出す外部的な圧力が新しいオリンピズムの一義的な発展を妨げた。

運動は避けることのできない闘争や押し止めようとする力に応じて、前進し、立ち止り後退する。アイデアが現れ、育ち、衰退し、そしてまた現れる。成功の微光が白熱の輝きになり、そして次第に輝きを失って、煙となる。

長い間には、オリンピック運動の揺らぎは支配的な思想と繰り返し起こる問題の影響の下に、ある振幅の内に収斂していった。

歴史家の役割は、事実の年代的な報告だけではない、それらが生起し歴史の中に入っていった条件を書き記すことでもある。日付を付けることは重要だが、我々の問いかけは常に、源に逆上らなければならない。

歴史は単なる一覧表ではあり得ない。それははるか遠い過去の出来事と関係する秩序のうちにある。歴史は選択によって進行する。つなぎ合わせることによって過去に光を当て、現在の光の焦点を過去の上に合わせながら。

歴史は中立ではない。

だから、IOCのセッションと kongress を調べるに当たっては、注意深くあらねばならない。我々の関心は、初めて我々の自由になる知識の源を見るに当たって、現代との対比によって今日のオリンピックの舞台に立つ主役達に役立つようにする観点から見ることであった。

歴史はまた、知恵の同義語でもある。

1.6.1. ミーティング—セッション—コンGRES

そうしたわけで、セッションとコンGRESに番号を付けるシステムをつくることは有効ではあろうが、我々は年代記を絶対視する落とし穴に嵌まってはならない。

より重要なのは、この番号を付けるシステムが問題になったのは何故、何時なのかを示すことである。

クーベルタンはパリのオリンピック設立コンGRES(1894)を数えず、ルアーブル・コンGRES(1897)を第一回としている。しかしIOCのリスト(1920)では、1894年のコンGRESが「第一回」とされている。同じように、我々は1894年のセッションについても語るができない。

セッションは当初ミーティング以上のものではなかった。1906年のオリンピックを芸術と文学とスポーツの大会にするための諮問コンGRESを、クーベルタンは「一種のコンGRES」と呼んでいる。

1906年、アテネでギリシャ人が組織したセッションがクーベルタン抜きで開催された。バーゼルでは、1911年に一委員会のミーティングが開かれたただけであった。

1914年以前は、技術に関するオリンピックコンGRESと教育に関するオリンピックコンGRESの間に区別はなかった。

1918年以後は、1925年のプラハを除いてIOCはオリンピックコンGRESだけを主催した。

事実が回答の鍵を握っている。考え方の混乱を反映した言葉の不正確さには、国際委員会のようやく生まれたばかりの自己認識のレベルと直接の関係があるように見える。

長い時間かかって徐々に、委員会の物質的、哲学的基礎が固まるにつれて、言葉の意味の上にかかっていた霧が晴れはじめた。成功が確実になってようやく、クーベルタンは憲章にうたわれた責任と手続きを実行することができた。

1.6.2. 主題と副主題

セッションは委員会の機能的な働きの主要な構成部分となった。セッションは毎年開かれ、コンGRESに時間と空間の連続性を与えた。

セッションは構造化され、会長の意思とカリスマに従って、オリンピック運動の戦略に影響を与えた。中立というには程遠く、セッションは記録に残る内部的、外部的紛争を隠れた形で反映している。

次第に自立性を獲得し、発展するにしたがって、この組織外組織はオリンピック運動の進路に影響する問題を提起し、利益と野望を喚起した。

最初のセッションは、1894年のコンGRESそのものであった。第二回目は1896年の大会の組織に吸収されてしまった。第三回は、問題があるが公式の順番によれば、ルアーブルの教育コンGRES

レス(1897)に組み込まれた。第四回は1901年パリで開催された。

パリで聞かれた1901年と1903年のセッション、そしてとくに1905年ブリュッセルで聞かれたセッションは、以下に見るように、1900年のパリ大会、1904年のミズーリ州セントルイス大会を見舞った困難と失敗の影響を被った。

最初から議事録に繰り返し現れるテーマは、アマチュアリズム、オリンピック大会、会場、プログラムである。競技と組織に関する技術的な問題はほとんど議論の中に出てこない。1896年には、スポーツの実際とスポーツマンについてあまり知らず理論にも疎い文化人のミーティングで、二三のアイデアが提出された。このことはIOCメンバーの現会長による新会員指名という貴族的なシステムの採用にも見られた。

ルアーブルで開催された第二回コンGRESSはクーベルタン一人の意思によって、教育に関するコンGRESSとなった。

1901年5月21日から23日まで開催されたパリセッションでは、大会とIOCの組織に重点が置かれ、プロトコルが強化され、オリンピック表彰メダルがつくられた。

シカゴが1904年大会の開催を希望した。

もっと重要なことは、政治とビジネスとオリンピズムの関係の問題が提起されたことである。シカゴ市は組織委員会に1万2千ドルの保証を提供した。クーベルタンの要請によって組織委員会はプロの競技より、アマチュアの競技に重点を置いた。

ギリシャは1902年に計画された中間年大会にオリンピックの名称を与えられなかった。

1894年パリでの決議によって、ウィリアム・ミリガン・スローンはIOC会長の座を提供されたが辞退した。スローンは、クーベルタンを終身会長にすべきだと提案した。クーベルタンは固辞したが、十年の任期を受け入れた。

ドイツ、スウェーデン、アメリカの代表はルールの確立を主張した。国際競技連盟の用心深い態度が表面化した。

1901年のパリセッションは危機と、知的な興奮と新しい発意の時期に聞かれた。

何時も取り上げられる問題が再び取り上げられた。大会の場所、オリンピズムと金との関係、IOCと国際競技連盟の関係、アテネでの中間年大会。アマチュアリズムは主な問題ではなくなった。

1903年のパリセッションについて語ってよいかどうかは疑問である。セッションについての記録文書はない。おそらくまたまパリにいたIOCメンバーのミーティングがあったというのが真相であろう。

1904年6月20日から22日までロンドンで行われたセッションはあやふやなものだった。

結局、大会はセントルイスで開催された。クーベルタンは1889年にセントルイスを訪れ、ひどく失望していたので、大会には参加しなかった。

ローマは1908年大会の候補であった。イタリア政府は50万リラを提供した。IOCは全会一致でローマを選んだ。フローレンスとミラノは退けられた。クーベルタンが立候補に反対したのである。クーベルタンの提案によって、メキシコとペルーの二人の新しいメンバーが選ばれた。

最初の十回のセッションの研究はIOCのバイタリティー、クーベルタンの熱情のこもった決意、た決意、彼の初期の仲間達の献身を明らかにする。

それ以後恒常的な要素となる困難な問題が現れた。同時に、緊張の源となる運営管理上、技術上の欠陥の数々があらわになった。

これらの懐胎期の年月の歴史は、二つの画期的なイベント、第二回ルアーブル kongress (1897)と第三回ブリュッセル kongressによって句読点を付けられた。

1.6.3. 第2回オリンピック kongress — ルアーブル — 1897年

アテネでの第一回オリンピック大会が1896年4月15日に終わって、出身の偏った少数の人々の一団を率いるクーベルタンは、次に何をなすべきか確信を持てなかった。

少人数の名誉ある人々、関心の程度もばらつきのある人々からなる国際委員会にそれ自体の存在感を持たすには何をすればよいのか？

どうすればIOCをより広く知られるようにすることができるか？

これがクーベルタンが答を出さなければならない問題であった。

IOCはますます輝きをますのか、無関心のうちに栄光もなく消えていくのか。

不完全ではあったが、機構は動きだした。しかしギリシャ人はそれが自分たちのために、自分たちだけのために働くことを望んでいた。

クーベルタンはオリンピック成功のために、細いきわどい道を行かねばならなかった。

ギリシャ国王と民族主義的な大衆の意見に押されて、皇太子の英知にもかかわらず、IOCは本物のオリンピック大会の間に、公式の中間年大会開催をパリ kongressで決定して受け入れねばならなかった。既に見たようにクーベルタンはこれには反対で、見当違いでうまく行くはずはないと思っていた。しかしギリシャ政府は関連法案を国民議会に提出し、ピケラスがこれを推進していた。1896年4月以来、彼は「パリ kongressの仕事を完成し」、オリンピックと「同じ性格、同じ特権」を持つ中間年ギリシャオリンピック創設を批准するために、第二回オリンピック kongressを開催することを呼びかけていた。

IOCの目的(近代スポーツを望ましいコースに向ける)に沿うこの kongressを拒否すれば、オリンピック憲章の精神に反することになり、ピケラスの会長としての権限を冒すことになる。開催を引き延ばす、或いは次の大会を待てばあまりに遅くなりすぎるし、オリンピックの将来はまだ確かなものではなかったので賢明なことではなからう。

しかし、ピケラスの提案を受け入れることは、オリンピック大会を二年ごとに開催するのと同じだ。

クーベルタンは何時も流れに逆らわなかった。そうやって影響力を行使する立場に彼はいた。彼は二つの条件をつけて、IOCが第二回オリンピックコンGRESSを開くことに同意した。第一に、1894年のコンGRESSの仕事を継続すること、「そしてとくに、オリンピック大会のための国際委員会の制度」を維持すること。これはその解散を求めたフィレモンに対応したものであった。第二に、オリンピック委員会は組織・開催の問題だけでなく、「技術的な問題、教育問題」を扱うこと。

この二つの条件は正当で合理的なものに見える。というのは、オリンピックは大きな可能性を秘め、それを何かの組織、例えばギリシャの組織であっても、その下に置くことは考えられなかったからである。

クーベルタンは自分の立場を、1901年1月の「オリンピックレビュー」の中で説明している。ルアーブルのコンGRESSの目的は、「パリコンGRESSの修正でも拡張でもなく、身体運動と健康及び教育の関係の問題を研究することであった」。

政治的事件がクーベルタンの立場を助けた。西欧の世論は、1896年夏のギリシャのクレタ島への介入を「無分別な行為」と批判した。ある人たちは、オリンピック大会が民族主義的熱狂を煽ったため、とさえ考えた。

この「災厄」のあとアテネでオリンピックを開催するのは問題外である。

IOCはこうして厄介な問題を避けることができた。次のコンGRESSは、クーベルタンの望んだように、技術問題よりは教育問題に焦点を合わせるものとなった。

「アテネでは、努力の全てが歴史的文脈のうちのスポーツの面に集中された。

会議も、会談もなく、道徳的、或いは教育的関心の印もなかった。大会の直後にその方向を取することは、人々に私のアイデアの知的、哲学的性格を思い出させ、IOCをはじめから単なるスポーツ連盟のはるか上に置くためであった。」

結果的に、クーベルタンは大いに満足であった。彼が望んだのは、オリンピックを制度として強化することではなかった。彼はもっと高い望みを持っていた。彼はオリンピック運動にもっと野心的な教育的な計画を思い描いていた。

オリンピック大会は青年教育の全体的改革の一部に過ぎず、コンGRESSはその目的に焦点を当てねばならなかった。

しかしオリンピック運動はまだ若く、余りに華々しい宣伝は害にしかならなかった。

そのため、コンGRESSは街の灯や、世論や、今日的問題の圧力から遠く離れた場所で開催された。ゲップハルトが提案したベルリンは問題外であった。実はクーベルタンは1896年6月22日に同意していたのだが。バルクが望んだストックホルムや、ケメニーが求めたブダペスト開催も可能性がなかった。

IOCメンバーとの相談なしにクーベルタンが押しつけたルアーブルという選択は、偶然ではなかった。この町は、フランス、ノルマンディーにあった。クーベルタンの第二の故郷である。

IOCの新会長は、啓蒙された少数派の控えめな尊敬を受けてはいたものの、ほとんど自分が知

られていない国では、慎重な配慮が必要であった。

彼はまた、安全を求めた。オリンピックの冒険は危ういものである。

ルアーブルは彼の母方の家族がいつも夏を過ごしたミルビルに近かった。

アメリカに向かった港が開け、フランスの田園にしっかりと根を下ろしたルアーブルは中規模の町であり、そこでは、クーベルタンは信頼できる町からの兵たん補給と文化的な連帯を呼びかけることができた。

ここで彼は望んだような控えめなコンGRESを開催することができた。

1896年6月25日、クーベルタンは思い切って市長、ポール・マレに要求を出した。

市議会は、クーベルタンが前年の秋ルアーブルで行った一般教育についての会議を多として、1896年7月1日承認を与えた。この会議は現代史、東洋、大英帝国、アフリカ、極東の歴史の問題に触れるものであった。

コンGRESは1897年7月23日、市庁舎の会議室で開かれ、31日まで続いた。十日は長かったが、議論の合間には大がかりな祝典が予定されていた。

1895年1月以来フランス共和国の大統領となっていたフェリックス・フォーレはルアーブルの出であり、このイベントのパトロンとなることに同意した。

参加者は主にフランス人であったが、およそ60人。十カ国、ボヘミア、フランス、ドイツ、イギリス、ハンガリー、イタリア、ロシア、スペイン、スウェーデン、アメリカの代表が集まった。4人のIOC委員が、遠路はるばる駆けつけた。グートーヤルコフスキー（ボヘミア）、ゲッパハルト（ドイツ）、バルク（スウェーデン）そしてケメニー（ハンガリー）である。

クーベルタンが議長をつとメラングスタッフがイベントの調整をした。

六人の地元の人物が組織と事務局を引き受けた。クーベルタンの近しい友人三人が演説をした。有名なスウェーデン方式の支持者で、自分の方法にスポーツを取り入れているティシエ博士が、スポーツの実践に反対する医学と衛生の専門家からクーベルタンを守った。

ディドン神父はその雄弁をもって、若者の道徳水準を上げる方法としてスポーツを推奨した。これは親たちに安心感を与えた。

ガブリエル・ボンバローは若い中央アジアの探検家で「パリからチベットの秘境を通してトンキンまで」（1892）から帰ったばかりであった。

彼はコンGRESにオリンピックムーブメントを特徴付ける国際的な彩りを与えた。

コンGRESはよく構成され管理されていた。クーベルタンがしっかり手綱を握っていたのである。

議題は「参加者が全ての問題に簡単に触れ、それから離れ、また戻ってくることを可能にした」。それは「融通性のあるもの」であった。

議論は三つの分野に集中した。教育、衛生、スポーツである。

教育についての議題は、身体運動の心理、これは有力な生理学的なアプローチとして大変に新しいものであった。自由なゲームと義務的運動の間の差異、中学における身体運動の組織をとりあつかった。

衛生についての議題の中に、生理学的なアプローチが再び取り上げられている。

「運動のそれぞれの形態に特有のルール」。議論は、衛生と衣服と水治療法(シャワー)などの問題に集中した。

スポーツについての議題は、アマチュアの定義、国際イベント開催の頻度と一般的条件、世界オリンピック連盟と世界オリンピックブレティンの創設、19世紀の身体トレーニングの復活などで順不同で取り上げられた。議題のこの部分はややごたごたの感があるが取り上げないわけにはいかなかった。クーベルタンはメモアールのなかで書いている。

「プログラムのスポーツの部分は、ほんの軽く触れられた程度であった。これは形を整えるためであった。世界オリンピック連盟と数カ国語でのブレティンはハンガリーの同僚、ケメニーを喜ばすために議題に入れられた。彼は野心的な傾向があった。」

バルクと二人のスウェーデン人代表は議題から離れることに抗議した。「バルクは我々が時間を無駄にしている、論議されているテーマは'我々の仕事に関係ない'と感じた。彼は一時、辞任さえ考えた。」

技術的問題(手続きのルールとスポーツの規則)を議論するためにルアーブルにきた代表は、スポーツとその中等教育への導入のための情熱的な訴えを聞く羽目になった。

ノルベルト・ミュラーは、クーベルタンは「代表の三分の二がフランス人なので、参加者の頭を飛び越えて政治家、大学、フランスの家庭に訴えたのだ。」と考えた。

この解釈は多分あまりに一面的だ。クーベルタンは国際的支持がなければオリンピック運動は失敗すること、そしてこのオリンピック kongress では出席している国際的な代表に話しかけねばならないことをよく知っていた。

積極的なスウェーデンの代表団、ハンガリー、ボヘミア、ロシアの教育省の代表は彼にこのことを思い出ささずにはおかなかった。

7月23日に予定されていた kongress は26日まで始まらなかった。重要な議論の前に参加者は丁重にもてなされた。松明を灯した体操祭、キャブドラエーブ崖の上での焚き火、参加者が集合したルーアンからのセーヌ河下り。

フォーレ大統領、政治家、大学教授の歓迎は、外国人にもフランス人にも強い印象を与えた。地元紙(四紙)は素晴らしい歓迎レセプションを褒めそやした。

公的な補助とクーベルタン個人の支出で経費は収支合い償った。

7月26日、クーベルタンは開会演説をした。議題はオリンピック大会の問題には少しの時間しか割かず、その代わりに教育心理とスポーツ精神に焦点を当てていた。

クーベルタンは体の具合が悪く、あれ程重要視していた祝典には出席しなかった。

しかし彼は kongress にはほとんど出席した。彼は最初から最後まで自ら取り仕切ったのである。

二つの委員会がつくられた。一つは教育と衛生、一つはスポーツについての委員会であった。スポーツ委員会の方はほとんど会合しなかった。「 kongress は...オリンピック大会の問題にはほとんど触れなかった。」

スポーツについての論議が少なかったことについてクーベルタンは、ルアーブルにきたのは「主に教育者と衛生専門家で、スポーツ専門家はほとんどいなかった」と記している。

議題の最初の二つの部分は同じ委員会によって同時に扱われた。我々はそのに、当時の教育者、衛生専門家の不断の関心を見ることができる。つまり身体運動と水治療法が人々の厚生に役立つ筈だというものである。身体運動、水、日光が19世紀の社会的疫病、アル中、肺病、道徳的類廃に対する勝利をおさめるであろう。

フランス公教育省の代表であるティシエ博士は、身体運動と個人個人の道徳の関係を子供たちのグループによって示し、説明するように求められた。

スウェーデン体操とゲームの歴史的妥協の産物であるフランス方式の擁護者である彼は、若者に対する身体教育のレッスンも指導した。

代表団は二つの方法のそれぞれの利点を長い時間をかけて議論した。そしてスポーツの道徳に対する積極的な効果について全会一致の合意がなされた。

これがディドン神父の仕事をもたした。kongress の四日目、彼は熱のこもったスピーチをして聴衆を感動させた。「そうなのだ」、彼は宣言した。学校におけるスポーツコミュニティは生徒を社会化するので、スポーツは人格を陶冶する。目覚めよ「汝、無気力な、優柔不断なインテリたちよ」。新聞はこの演説を全文掲載した。

後に、クーベルタンはしばしばこれを引用するようになる。

しかしディドン神父はフランスの問題だけに限定した。彼が演説を終えたとき、「誰も次に発言しようとはしなかった」。

沈黙を破るために、クーベルタンは英語で聴衆に語りかけ、チェルテンハムカレッジの

校長で、イギリスの学校の校長の代表であるクールシー・ラファン牧師に「何か発言を」と促した。クーベルタンは彼のうちに、オリンピックの大義の最も忠実な僕の一を見いだしていたのである。

ルアーブルのkongress からIOCはどんな利益を得たか。結果は複雑であった。

いくつかの結論は満場一致で採択され、フランスとその他の国々で実践されうるのであった。体操とスポーツの調和的結合に代表される身体教育の強調は、当時フランスで盛んであった「方法についての戦い」にフランスの教育者が決着をつける勇気を与えた。

それはまた、多くの国々の体操家にスポーツマンとの協力を訴えることにもなった。

ベルギー、フランス、アメリカでは、両者の協力は必ずしもうまくいっていなかったのである。

中等学校、高校の生徒に、学校側から独立して学生スポーツ協会を組織する自由を与えよという要求は、フランスの学校長に彼らの義務を思い起こさせ、世界中の教育者にラグビー校とトーマス・アーノルドの例に従うよう誘うこととなった。

中等学校、高校に衛生の向上と十分なシャワー設備をという呼びかけによって、コンGRESはたんにフランスの学校にこびりついた不潔さと戦うだけでなく、当時の国際的な健康会議と歩調を合わせようとしたのである。

そうしたわけで、これらの全会一致決議にはあまり独創的なものはなかった。

コンGRESはそれ以上のことができただろうか？

その他の議案、フランスのスポーツ指導者の訓練とその報酬についての提案などは、却下された。組織の構成に関する提案も注意しておく必要がある。オリンピック大会のための国際委員会はコンGRESでの決定の適用を保証するために年に二回開催すべきであるという勧告である。

決議には至らなかったが、定期的にセッションを持つべきであるという考えが生まれた。

ルアーブルのコンGRESは時間の無駄であっただろうか？

ある者は、クーベルタンの度重なる方針変更を批判し、彼は既に十分とはいえなくなっているその力を余りに広げすぎたと非難した。

クーベルタンは「カメレオンのように演技することによって」国際委員会はより捉えどころがなくなり、脆弱でなくなった、と答えている。

彼の見方によれば、望んだ成果は達成された、オリンピック大会のための国際委員会は「彼らに安定と団結の両方の感覚を与える条件の下で会合を持った」。

わずか6人の委員がルアーブルに出席したに過ぎないにもかかわらずである！

クーベルタンはこの文章を11年後に書いたとき、事実を飾りたてていた。

共和国大統領フェリックス・フォールが近代における第二回オリンピックコンGRESのパトロンとなり、儀礼上の先例をつくったにしてもである。

ルアーブルのオリンピックコンGRESの目的は教育に焦点を合わせており、スポーツに教育学的、道徳的祝福を与えることにあった。

クーベルタンは一石二鳥を狙った。即ち、第一に、彼の聖戦に新しい支持者を獲得する

こと、そしてオリンピック運動の目的を一般大衆により分かりやすくすること。第二に、1896年の大会のあと幾分動揺しているIOCのメンバーを、彼らの使命を守るよう勇気づけることであった。

全体としては、コンGRESは成功であった。世論の関心を集め、クールシー・ラファンのような優れた教育者がオリンピックの大義の味方になった。

しかし、オリンピックムーブメントの組織と構成に関する問題は一つも取り上げられなかった。厳しい試練が始まろうとしていた。

1.6.4. ブリュッセルコンGRES、1905年

やはりクーベルタンが取り仕切る

第三回オリンピックコンGRESは、1905年6月9日から14日まで、パレ・デ・アカデミーでベルギー

国王、レオポルド二世後援の下に聞かれた。国王は1901年のパリ訪問の際に招請されていた。議長はクーベルタンであった。

スポーツと身体教育の関係を明確にしなければならなくなっていた。

スポーツと身体教育に関することという kongress のテーマは、十分に漠然としており、クーベルタンが全ての人を喜ばして、自分のカードを存分にプレーできるものであった。

この焦点の定まらないテーマは、クーベルタンのポジションの脆弱さを反映していた。

1905年はオリンピズムにとって良い幕開けをした。クーベルタンは国際 kongress の古いプロジェクト、1901年、1903年、1904年に議論されたスポーツ規則の統一を実現することができた。

三つの提案があった。一つはドイツの委員から、一つはスウェーデンのいろいろなグループから、一つはアメリカ競技連盟(AAU)からであった。

最初の提案は、「将来の全ての競技に強制されるスポーツ規約の作成」を呼びかけていた。これはあまりに独裁的であった。

結局IOCはスポーツの技術的な面に関する法を定めることができるのだろうか？

以後長きにわたって存在することになるオリンピック大会と「通常の世界選手権」との間の混乱は既に感じられ始めていた。

IOCメンバー自体には、自分たちで技術的問題を扱う能力は与えられていなかった。

第二のスウェーデンの提案は、クーベルタンが「余りに単純化されすぎ、挑発的に論理化されたやり方」と呼んだ方法で全てのペンディングになっていることを解決しようとするものであった。

その提案者によれば、思い切って古代のオリンピック大会に帰らなければならない、現代スポーツ、或いは現代のスポーツの実践に似たものはすべて消し去らねばならないというものであった。この提案は、「実行不可能」で「破壊的」であった。

クーベルタンは激怒した。

「第三の提案だけが問題にする価値があった。」

それはAAUの代表、L.P.シェルドンによって提案され、主張された。

彼はIOCに対して「スポーツ競技の規則を定める問題に関心を持つ全ての関係者の間に意見の交換を奨励し、得られた合意を [IOCの] 権威をもって全面的に支持する」ことを呼びかけた。民主主義者は喜び、IOC会長は更に喜んだ。彼は何時も、オリンピック競技の技術的責任はそれぞれの競技連盟に負わせ、究極のコントロールと道徳的権威はIOCが握っていたと思っていた。兵たと実務は競技連盟に、戦略はIOCに。

第三回オリンピック kongress を意味あるものにしたのはこの第三の提案であった。

1901年から準備の始まっていたこの kongress は、1902年にセントルイスで開催が予定されたが、輸送の問題のために延期されて、結局、ブリュッセルで開催された。

1902年4月クーベルタンはアマチュアリズムと競技規則についての意見を確かめるために、全て

の国内競技連盟と国際競技連盟に質問状を送った。

回答はほとんどなかったが彼は驚かなかった。競技連盟の多くは規則の固定に反対であった。国際コンGRESSを成功させるために、クーベルタンは主要なテーマを「スポーツと身体教育」に変更した。

代表団は、各自の国の学校の三つのレベル、初等、中等、高等教育で、身体運動と競技スポーツの分野でなし遂げたこと、成功例を発表するよう求められた。

そして初めて、社会生活のいろいろな分野、田舎、都会、刑務所、矯正センター、女子刑務所での例、また国際的レベルでの成果の発表が求められた。

コンGRESSの規約は、競技連盟のイニシアチブで招集されたことを示そうとしている。

しかし中心のテーマ「スポーツと身体教育に関する問題の検証」を見れば、クーベルタンが再び事態を掌握し、自らの教育者としての性格を優先させたことは明白である。

しかし同時に、社会の変化を反映し、以前は教養ある特権階級の青年に限られていた新しいオリンピズムの場は、今や、いつの時代も疎外されていた女性を含む全ての社会階層、そして全ての国に開放された。

コンGRESSには、21の国、14の政府、9の大学、54のスポーツ組織を代表する205人が参加した。28人のIOCメンバーのうち15人が出席した。そして3つの国内オリンピック委員会代表が参加した。参加者の最も多かったのはフランスとベルギーであったが、アメリカと南アメリカの国々も代表を送った。

コンGRESS事務局は、世界中の40の大学及びスポーツ組織から、好意的なメッセージを受け取った。このメッセージのいくつかには通信文が含まれていた。この時代にとっては、関心は非常に高く、国際的な参加度も異常に高かった。

招待状はベルギーの在外使節団を通じて送られた。ブリュッセルコンGRESSの組織は称賛すべきものであった。

コンGRESSを素晴らしい市庁舎で開催したいという要請は、もう少しで社会的騒動を引き起こすところであった。コンGRESSは結局、科学アカデミーの一部門であるパレ・デ・アカデミーのレセプションルームで開かれた。

コンGRESSは1905年6月9日開会した。厳かな式典にフランス文学者協会会長、マルセル・プレボーのスピーチが華を添えた。彼は「スポーツ学校における精神」について話すため、わざわざパリからやって来たのであった。

マルセル・プレボーの話は基本への回帰を代表するものであった。即ち、スポーツは自分自身を知ることを可能にするものであり、人間は一つの全体であって、二元性によって知覚されるものではない。

ゴールは6つの主要な演説のうちに設定された。

ジョルジュ・ストレリー、ルイルグラン高校(パリ)の教師、かつての秀れた体操家は「古代の体育」について話した。ジョルジュ・リーブは「現代の体育館」について。C.ボナモウは「YMCA国際トレーニングセンター」について。グランダスは「いろいろな国のセーリングのさまざまな形態」について。

カミングス伯爵は「馬術競技の将来の形」について。最後にドッズ将軍が「植民地における体育」について話した。

教育についての第一委員会は「初等、中等学校、大学における体操、そして女性のための体操」を扱った。

第二委員会は「田舎、都会における体育、諸国間の体育」を担当した。

第三委員会は「刑務所、植民地での受刑者教育としての体育」に焦点を当てた。

小委員会もまたつくられた。唯一議論されなかった議題は、女性のための体育であった。

事実、ヨーロッパの代表団はこの問題について、クーベルタン以上におさなりの考慮しか払おうとしなかった。クーベルタンはアメリカの代表に「ゆっくり急ぐように」と忠告した。アメリカ以外では、未だ女性のスポーツは無視され、せいぜいのところ淫らな冗談の口実に使われるのがせいぜいという状態であった。

最初の項目、諸国間のスポーツ試合は、ワーキングセッションでは検討されなかった。

開会演説でクーベルタンは、原則が確立されねばならないと思うと言った。

kongressの参加者は、挙手によって全会一致で賛成した。

委員会の勧告が全て革新的というわけではなかった。例えば、発育のための体育を毎日行うこととか、学生がスポーツ連盟をつくる自由とか、「各教区」にスタジアムと体育館をつくる義務とかについては新しいものは何もなかった。

一方、多くの社会的要求が発言された。田園地域のための特別の教師のトレーニング、刑務所内で運動ができるようにすることを義務づけること、医学学校に物理療法コースを設けること、病院内に特別の施設を開設すること、そして冬のスポーツ、スキーの発展に特別の関心が払われた。

結局、一つのスポーツに絶対的な優位を与えるということはなかった。各人の生理学的必要に応じた運動をということである。同時代のラグランジュ博士の仕事と同趣旨である。

しかし、サッカーがスポーツの王と讃えられた。「サッカーは経費をかけずにすぐ導入することができる。全ての社会階層の若者のあいだに広がるのが望ましい。」

教育改革成功の印として、スポーツ連盟と協会は当局に対してその利益を守れるよう、組織的な方法を取るよう呼びかけが行われた。これはスポーツの分野に対抗勢力を造りだすことになった。施設の長はスポーツ教師と一緒に行動できるよう、もし必要なら町の議会に逆らって働けるよう、教師たちのためのセミナーを開くことを求められた。

これは独立精神の顕著な前兆となるものである。

クーベルタンは満足であった。会長としての彼の提案は全会一致で採択された。

しかし国際情勢には困難なものがあつた。ドイツはタンジールに上陸し、フランス外務大臣、デルカッセが辞任した時機であつた。ノルウェーは突然スウェーデンからの分離を宣言した。軍事的緊張が至る所で高まっていた。

しかしIOCは、教師、教授、士官、医者、ジャーナリスト、科学者、作家、外交官、スポーツ管理者を動員する力のあることを証明した。

彼らの大部分はヨーロッパから来た一オリンピック運動が長い間主としてヨーロッパ人のものであったことは事実だが—しかし何人かはその遠い距離にもかかわらず、二つのアメリカ大陸からやって来た。その上、好意的なメッセージが全ての大陸から来た。

普遍性の種が蒔かれたのである。

国際的に大きな反響があった。アメリカのスポーツとの出会いは大きな利益をもたらした。アメリカの体育教育の実践はヨーロッパが見習うべき模範であることが確認された。

受刑者のスポーツに関する勧告は、クーベルタンがどの程度社会民主主義者であったかを示す指標になる。

アマチュアスポーツの定義や中等教育の授業へのスポーツの導入については、何も新しいものが生まれなかったとはいえ、体操とスポーツの間の論争は勢いを失い始めた。

儀典と象徴的な行事と慣例は強化された。オリンピック運動のために、国家元首だけでなくビッグネームを味方にしようとする努力が続けられた。

1901年に制定されたオリンピックディプロマがはじめて授与された。授与は個人のスポーツの能力に対してではなく「彼が自分の能力によって行ったこと」に対して与えられた。

ディプロマはアメリカ合衆国大統領、セオドア・ルーズベルトに与えられた。

同時に感謝状が、時間と空間におけるスポーツと冒険の三人のパイオニアに送られた。

フリジヨフ・ナンセン、アルベール・サントス・デュモン、ウィリアム・イボリット・グレンフェルである。

何時ものように、感謝状の芸術性に責任を持ったのはクーベルタンである。

世界中からの教師、士官、医師、コーチ、文学者、ジャーナリストの出席は、IOCの影響力がいかに大きくなったかを示すものであった。

1905年の kongress は、IOCの技術的、教育的役割の成熟過程における方向の変化を記した。クーベルタンは大満足であった。

ブリュッセルにおけるセッション

クーベルタンの立場は、セッションに参加したメンバーの賛同を得て強まった。

彼はIOCがアテネオリンピックの成功のために協力することに同意していた。皇太子の勧告で、このオリンピックは1906年第一回がはじまった。

IOCは「アテネ国際オリンピック大会」の名の使うことに同意した。ギリシャの大会は公式のオリンピック大会の間に挟まれることになる。

もう一つの満足の理由は、クールシー・ラファン牧師によるイギリスオリンピック協会の創設とドイツとIOCの論争の終結であった。

実のところ「ドイツ問題」というのがあって、何年ものあいだ、残念な状況が続いていた。クーベルタンとしてはオリンピック運動のなかでの強力なドイツを望んでいた。全体の利益のためにもこれ

は解決しなければならない。

1894年以来、フランスとドイツの険しい政治関係の中で、疑いもなく、IOCとドイツのオリンピック運動の間には相互の理解不足が起きていた。

「1894年の棄権、1896年大会の際のプレスキャンペーン、1899年のベルリンでのミーティング、1900年パリが残した悪い後味...」。

しかしそれでも、ドイツにはオリンピックムーブメントが生き残り、盛んであった。

ドイツはアテネ大会でヨーロッパの中で最も強力な選手団であった。ドイツオリンピック委員会は、ゲッパハルトの指導の下に活動的で、数千の体操クラブ、スポーツクラブが帝国中に散らばっていた。

しかしクーベルタンによれば、ドイツのIOCメンバー、タレイランとサルムーホルストマルはあまりに外交と軍事に関する義務に縛られていた。

その上、サルムーホルストマル王子は引退に当たって、フォン・アッセブルグを後継者にしようと図った。IOCだけがそのメンバーを選ぶことになっているにもかかわらずである。ここに解消しなければならない緊張があった。

フォン・アッセブルグは礼儀正しい知的な人物で、結局はIOCメンバーによって委員に選ばれたが、彼こそはクーベルタンと共に全ての人が待ち望んでいた融和の人であった。

ここに、IOCとドイツオリンピック運動の実り多い協力の時代の始まりが予感された。

1.6.5. 1906年－アテネセッション

不幸中の幸い

1906年4月、大成功であったアテネ国際オリンピック大会のおりに、ギリシャ世界の首都アテネで一つの会議が聞かれた。クーベルタン会長は、パリで芸術、文学、スポーツに関する会議があることを理由に欠席した。これが口実に過ぎないことは誰もが知っていた。

ギリシャの委員会との関係は再び大変よくなっていたが、あまりに多くの問題が未解決のままであった。

一つおきにアテネで大会を聞く案は消えていたが、十年毎に開催する案が議論されていた。しかしこれは、1916年の公式のオリンピックと重なってしまう。状況は危険なものであった。準備不足のセッションに会長が出席すれば、困った状況になったであろう。

国際委員会の秘書、ブルネッタ・デュッソウが一人で出席するほうがよいだろう。

クーベルタンは幻想を抱いてはいなかった。

ブルネッタ・デュッソウはギリシャの強い政治的圧力を受け持ちこたえることができなかった。IOCメンバーはたった十人が出席しただけで、何か影響を及ぼすには明らかに不足であった。

二つの提案がクーベルタンを苛立たせた。ひとつはIOCを再編成すべきだというもの。

ひとつはコンスタンチン皇太子を名誉会長にしようというもの。原則として、後者だけが会長の承認を必要とした...が、クーベルタンは全体に異議を唱えた。

後に、クーベルタンはパリで、コンスタンチン皇太子に説明し、皇太子は不本意ながら従った。

IOCのギリシャ化は、新しいオリンピズムの国際的使命感を損なうことになるだろう。

クーベルタンはアテネ国際オリンピック大会に焦点を当てた第二の国際ネットワーク作りに賛成できなかった。また、クーベルタン欠席のままに行われた、1908年の大会をローマからロンドンに移すという予期せざる決定は、オリンピック運動の歴史のなかで全く例外的なものであった。初めて、クーベルタンの権威がないがしろにされた。

クルシー・ラファン、バイエラツール、ド・ブロネー、スローンなどオリンピズムの指導的な人達はアテネに欠席していた。

この「セッション」の意味は主として、クーベルタンに対する反乱の兆しが表面化したということである。

1.6.6. パリ —1906年5月

神々の印の下で

徹底したヒューマニストであったIOC会長は、あまり重視していなかった組織的問題の解決をアテネの技術屋に任せた。彼は1906年5月25日から23日までパリで開かれる芸術と文学とスポーツについての諮問会議の組織と開催に没頭していた。これは「一種のコンGRES」となるものであった。

アテネ大会から十年、オリンピズムが単に大会の競技的な面にかかわるだけものとなってしまっではならないことを思い起こすべき時であった。

美と徳の調和に基づいた個人と社会の快いリズムをもった動きを追求する点において、オリンピズムはヒューマニズムの一形態であった。

芸術、文学、スポーツは算術的並列によってではなく、深い相互浸透によって全体を形作る。日々のオリンピズムの実践によって、人は良き人生と人類の知恵にとって不可欠なより高い精神生活を達成できる。

クーベルタンにとって、オリンピズムが「ライフスタイル」として文化であることにまったく疑いの余地はなかった。そして、自由民主主義の時代にあってこの文化が全ての人に、最も恵まれない人々もふくめて、行き渡るべきことは論を待たなかった。

クーベルタンがラスキンの追従者であったことは驚くに当たらない。

今日、ジョン・ラスキン(1819-1900)のクーベルタン及び民主主義的なエリートに及した影響については過小評価する傾向がある。

詩人、芸術批評家として、ラスキンは1860年以後、イギリスの産業社会に対する挑戦に生涯を捧げた。

当時のヨーロッパの改革者達は、彼を芸術批評家としてよりは社会の不正に対する戦いの故に評価した。ラスキンは目の前に起こりつつある社会的悲劇に心を痛めて、子供も大人も同じように、全ての人が無料の教育を受けられるように主張した。

この教育を効果有らしめるために、彼は、人々が生き、動き、自己教化するより広い空間を、と

呼びかけた。庭園、社交のための家、図書館である。

こうして社会正義が行われ、最も貧しいものにも、創造の喜びと美を芸術家と共に味わうことを可能にするであろう。産業の醜悪さ、そしてその当然の結果としての経済的不平等に対しては、自然の秩序に反するものとして戦いを挑まなければならない。

人々が働き、休み、余暇を過ごす環境は、個人の個性を尊重し、社会のコンセンサスを助長する陽気な「文化的都市化」の法則に一致しなければならない。

即ち、生活こそが人間の恵みであり、「賛美と希望と愛が、人類を利己的でない行動に導かなければならない」。

クーベルタンがパリに「芸術と文学とスポーツについての会議」の招集を決めたとき、ラスキンの仕事に心にあったことは間違いない。しかし彼は難しい時を選んだ。

これに先立つ、アテネ、パリ、セントルイスの大会、そして神聖な芸術の都でありながら1908年の大会開催ができなくなったローマの先例は、けっして明るい見通しを与えるものではなかった。

これまでのオリンピックの会場には芸術と文学の姿はなかった。

アテネでは「アンチゴーネ」が上演されたとはいえ、利他主義より利己主義が、芸術よりスポーツが優勢であった。

クーベルタンの夢見たオリンピックは「ただの世界選手権ではなく、教養ある若者の四年毎の祭典、[人類の春]、卓越した努力と多彩な野心の祭典」であった。

彼の心にあったオリンピックの会場では、単にスポーツが芸術に付加されているのではなく、芸術家の創造的な精神が選手や観客の魂を圧倒するのであった。

彼は、古代オリンピックのように、芸術とスポーツの結合が卓越性の新しい形をつくりだし、新しく生まれつつある20世紀の生活の一部に成らなければならないと主張した。

そのような発展のために機は熟していただろうか？

1906年6月、早くも彼は、ロンドンセッションのあと、「ル、フィガロ」に「更に次の段階に進み、オリンピックアードにその本来の美を蘇らせる時が来た。」と書いた。

事実、彼はオリンピック大会が「芸術と文学がスポーツに調和して結びつくだけでなく」、オリンピックアードの四年間のインターバルの間に行われる名もない町の無名のスポーツマンの生活を彩る最も素朴な競技会にも、芸術が浸透しなければならないと主張したのである。

このような会議をこれより前に開くことは時機早尚であっただろうと彼も認めている。

スポーツが先ず息を吹きかえし、生きていけるようにならなければならなかった。

「通常のミーティング」が開催され、道を開いて、「新しいオリンピックアード」の運命が定められなければならない。忍耐が必要であった。

しかし最後の目的は確固としていた。「最初から、我々はこの理想を時代の要求に合った形と条件で完全に蘇らせることを目指していた。」

どんな困難があろうと、どんな戦術的制約に出会おうと、クーベルタンはその教化の意図に揺るぎなく、大会が頂点であるオリンピックアードを人類の精神生活の重要な瞬間の一つにすることを目

指していた。

IOCはあまりにぐずぐずしていたので、クーベルタンは自分で手綱を取る決心をした。

彼は1906年4月回状を送り、1906年5月23日から25日までパリで諮問会議を招集して「芸術と文化をどの程度、またどのようなやり方で近代オリンピックの祝典に含めることができるかを研究する」という既成事実を kongress のメンバーに突きつけた。

彼は、IOCのメンバーにそれぞれの国の著名な芸術家と作家十名の名を挙げて回答するよう要求した。

この野心的な試みの舞台として、コメディーフランセーズより相応しい場所はなかりう。

開会式は最長老、ジュール・クラレッティが出席してコメディーフランセーズの広間で5月23日行われた。委員会の会合は、場所が狭かったので、コンコルド広場のツーリングクラブ・ド・フランスの豪華なレセプションルームで行われた。

IOCメンバーの挙げた世界中の芸術家に沢山の招待状が送られた。しかし出席した人は少なかった。あまりに急な招待であったのは事実である。

イギリス王立芸術アカデミーのサー・アーサー・ポイター、ローマ(ビラメディチ)のフランスアカデミー会長、ロダンの競争者で有名なノルウェーの彫刻家、グスタフ・ビーグランド、セルマ・ラーゲルーフ、その他何十人もの人が、招かれたことを喜びながらもパリにはこなかった。

ロマン・ローランは欠席を告げるために1906年3月25日に手紙を書き次のように言っている「会合には非常な興味を持っています。それが人間の力の健全な調和をつくりだそうとしており、私の心に特に近い、民衆劇場、野外劇場の運動に関係しているからです。」

作家リシュパン、ポピュラー音楽の作曲家ブールゴー・デュクードレー、プレスコ画家ボアルポは喜んで参加した。しかし彼らは若い世代が問題にしない不人気な古典主義の代表であった。

クーベルタンは「オリンピックメモワール」の中で冷静にこの事実を書いている。彼の唯一の後悔は、フランスの芸術家を主に招待し、他の国に公式の呼びかけをしなかったことである。会議は、結局フランス人の集まりであった。

60人が参加し、30人が芸術家、一ダースほどの外国人がいた。IOCメンバーの出席者は5人だけであった。この数は委員がこのテーマを議論することを躊躇していること、或いは既成事実を突きつけられたことに対する気乗りのなさを示している。フランスの政治家は一人も参加しなかった。

討論の二つの主題がハッキリと定められていた。クーベルタンは一方で「復興したオリンピックにおける芸術と文学との世の注目を集める共同作業」に道を開くことを目指し、一方で、「地方の普通の規模の体育文化行事で、全ての人が[芸術と文学]に参加することを確実に」しようとした。

第一のテーマについては反対はなかった。会議は全会一致で、建築、彫刻、絵画、文学、音楽の五つのコンテストが大会の一部として「スポーツ競技とおなじレベルで」オリンピックに付け加えら

れることを提案した。

そして更に、「スポーツ精神」が作品に靈感を与え、作品は国際審判団によって審査され、もし可能なら、大会中に使われた表現様式によって出版、または上演されると決めた。

選ばれた五つの芸術の競技はワーキンググループと総会で検討された。

建築については、二つの派が対立した。問題はギムナジウムとスタジアムを「古代」のスタイルで建てるべきか否かであった。

結局、「古代のギムナジウム」派が勝ちを制した。可能な限り、全ての種類の競技を一堂に集め、回りを自由に利用できる建物に囲まれたオープンスペースから成っていること。

しかし古代のスタジアムは結局、ギリシャ考古学の論争の領域に葬り去られた。

「真の近代的スタジアムは花を飾ったエレガントで広いスタンドを持つ緑に囲まれた草地に成るだろう。」クーベルタンは体育館の設計図を建築家の参考に供するため提出した。

地方の体操、スポーツ連盟における演劇とスポーツの関係について出された勧告は、最善の意図がどれほど誤解されうるかの見本である。

人々の混乱は、クーベルタンが1906年10月に早くも、会議の出した宣言を撤回しなければならぬと感じたほどであった。その宣言は「体操、スポーツ協会は芸術種目に見本を示す危険について警告されねばならない。」と述べていた。

振り付け(入場行進、式典のプログラム?)は厳密に考えられたものではなかった。その見出しの下に式典のパレードと行進のリズムに関する美的な(そして潜在するモラルの)性格についての考察のいくつかが纏められていた。「最もバランスの良い」選手が名誉を受けるであろう。順序は選手達が「そのユニフォームで、使用する剣やラケットなどを持って、或いは自転車に乗って」現れる姿に応じて決められるであろう。

賞の授与は、古い中世のやり方、優勝者が賞を渡す淑女の前にひざまずくやり方が相応しいと考えられた。或いは更に良いのは「昔行われていた、試合の前の競技者のオリンピック宣誓の復活で、これはその動きの単純さ、効果の深さを容易に表現する機会となる。」

クーベルタンの目標はスポーツの儀式を、宗教的とは言わないまでも、文化的な儀式に高めることにあった。オリンピック宣誓が水平線上に姿を表したのである。

俗悪さに身を屈することは問題外であった。スタンドはトルコ赤や赤いビロードや金の飾りやカンバスに描かれた紋章入りの楯等で飾られることはないであろう。

事実、コンフェレンスはこうしたいかがわしい美を非難するのに「非常に熱心」であった。「オール、打球槌、自転車の車輪、ボール、ラケット」が葉と花と「かなりの大きさの椰子の葉」の中に散りばめられるであろう。

繰り返し現れる困難にもかかわらず、スポーツと芸術の統一は第一の目標であらねばならなかった。有名な詩人である、ジャン・リシュパンがスポーツと文学を結び付ける一つのイベントの開催

の案を提出した。スポーツ競技のあと、競技者が音楽とともに行進し、クーベルタンの提案したスポーツの祭典をうたった詩のコンテストへ導かれる。

そしてその日は劇の上演で終わる、というものであった。

造形美術については多くの議論があった。絵画には果たすべき役割があった。

即ち、プログラムと賞状の図案と彫版である。

スピーカーの一人は、市の通りを「美しい男女」が行進すれば、その光景は画家や彫刻家に靈感を与えるだろうと力説した。

彫刻に関して、委員会は現代の彫刻家はバルトルディー（自由の女神を造ったフランス人彫刻家）のプロジェクトに帰よう勧告した。

クーベルタンはオリンピック復興十周年のために、バルトルディーに、現代の特性を示す「肉体のルネッサンスの賛美」に捧げられた記念碑のモデルを造るよう依頼していた。

このプロジェクトは「古代のスタジアムの祈り返し点を示す柱を回る、全ての現代スポーツの姿の一群で、四隅には現代スポーツの主要な四力国、イギリス、ドイツ、スウェーデン、フランスの像があり、入口には古代ギリシャの像...」から成っていた。

音楽は生理学と芸術の観点から考えられた。体育館と野外での歌は呼吸器の発達的手段になるであろう。スポーツ協会と合唱団は近づかなければならない。新しいレパートリーは頌歌とカンタータを中心としてつくられるであろう。

「この目的のために、高貴さを求める豊かなクラブーコンクールイピック、レーシングクラブ、オートモビルクラブ、国際レガッタコミッティー—は芸術、文学の協会と協力しなければならない。」このクーベルタンの提案は全会一致で承認された。

そして「現代の花火技術が大きな可能性を開く夜の祭典」が残っていた。クーベルタンはそのような祭りが非常に好きであった。クーベルタンと火の心理分析学的関連は研究してみる価値がある。「炎」「光」という言葉は彼の演説の中にしばしば出てくる。

我々は、ラスキンがラファエル前派の光と陰の効果に興味を持っていたことに留意しておいてもいいだろう。クーベルタンは「新しい見ものとなる松明スポーツ」を夢見ていた。

クーベルタンは「安い撮影機を作ること」を呼びかけた。それは「芸術とスポーツ」にとって有益であろう。

コンファレンスの勧告はクーベルタン影響を非常に大きく受けている。新しい世紀の夜明けに行われたこのコンファレンスはオリンピック運動に何をもたらしたか？

第一に、それは人間と人間性に奉仕する文化の優越性を再確認した。

例え教訓的な理由のためであるにせよ、スポーツが芸術や文学と同じレベルに置かれ、古典的な二分法に疑問が呈された。

コンフェレンスは人間のユニークさに光を当てた。このユニークさはクーベルタンが知識よりも直観によって理解したものである。

第二に、このコンフェレンスはIOC会長の役割を確かなものにした。

IOCメンバーの中で、クーベルタンただ一人が、古典的ヒューマンイズムの伝統につながる開かれた新しいオリimpiズムのビジョンを持っていた。

今日も意味があるとはいえ、この勧告は我々には単純で古風な、牧歌的な過去に属しているように見える。しかしそれは丁重な微笑以上のものに値する。

それはヨーロッパの教育の誇りであり、喜びであった19世紀末の大衆教育の文脈に属していたのである。

諮問会議の一つの成果は、それがクーベルタンにとって法的な基準点として役立つことである。今や彼は芸術競技をオリンピック大会に含める要求を法的な決定の基礎の上に行うことができた。

彼はイギリスオリンピック委員会、後にはスウェーデンオリンピック委員会に対して、それぞれの1908年、1912年の大会のプログラムに文学、音楽、造形美術の競技を含めるよう訴えることができた。

こうして、パリの諮問会議の結果は無視できないものとなった。

第一に、IOCは五つの芸術競技を大会中スポーツ競技と並行して行うことを決めた。

建築、音楽、絵画、彫刻、バレエの振り付けである。

最初の具体的な成果は、世界のスポーツ協会に対するスポーツの中への芸術の統合の呼びかけであった。第二の成果は、1910年に「現代のオリンピア」の発展のテーマの下に始まった国際建築コンテストであった。パリ建築大学の監督下に行われ、二人のスイス、ヴォー州の建築家に賞が与えられて1911年5月に終わった。

コンフェレンスはまた、バルトルディープロジェクトの実現のために臨時委員会をつくることを決めた。

数カ月後クーベルタンはIOCメンバーに回状を送った。奇妙なことに、そのようなものは一切記録に留められていないのだが、彼はIOCメンバーに「大学、世界のスポーツ連盟、スポーツクラブに対して、全ての大規模なスポーツイベントには詩の競技或いは適切な芸術的催し、そしてとり分け野外での合唱を加えることによって文学的、芸術的性格を吹き込むよう訴えること。スポーツクラブが自分のコーラス部門を持つことのさまざまな利点を強調すること」を要求した。

ひとつのオリンピックイベントが芸術の催しなしに終わることは許されなかった。

それは1906年5月26日の午後、ソルボンヌの大講堂で行われ、2000人が参加した。

オリンピックディプロマが与えられ、コメディーフランセーズの俳優がその場に相応しい古典を朗読した。プログラムには合唱とフェンシング試合と科学会議が含まれていた。

パリが第二回コンGRESのルアーブルにつながった。オリンピズムの三つの柱、スポーツ、科学、芸術が確認された。それは「スポーツと芸術の素晴らしい祭典であり、その目的を達した。復活したオリンピズムの憲章がいま完成した」。

「こうして恩寵の年1906年は、かつてのパートナー、筋肉と心が一つになった統一の祝典を見たのである。」

IOC会長は満足した。前途には別の戦いが控えていたが、クーベルタンは道徳的に武装した。祝典の調和と均整は彼に消しがたい記憶を残した。

1.6.7. セッションと人

ハーグ、1907年 – ロンドン、1908年

第9回IOCセッションは、1907年5月23日から25日までハーグで開かれた。

コンソール王子が後援を引き受けた。クーベルタンは10年任期の会長に再選された。

ヨット競技においては、「地元の有給のセーラーが乗っていても」ヘルムスマンが金を貰ってなければその艇はアマチュアであると宣言された。

イギリスの代表によって見事に準備されたロンドン大会のプログラムは全会一致で評価された。初めて、国際ボート競技がテームズ河で行われる。テームズ河はひどく外国人嫌いなアマチュアローイング協会の神聖な河であった。

沢山の外国人「競技監視員」に付き添われたイギリス人審判が登場するであろう。

セッションは、もし国籍についての難しい問題が起これなければ平凡なもので終わったであろう。これは初めてのことであった。「武装した平和」がオリンピックの領域に入ってきた。

オーストラリアは大英帝国自治領であったが、その遠距離のために最初からIOC委員を持っていた。イギリスはこれに反対しなかった。

しかしロンドン大会(1908)の機会に、カナダ、南アフリカ、ニュージーランドがイギリス女王に忠誠を誓いながらも、それぞれ国家としての明確な地位を得ようとするのは確実であった。

問題はこみ入っていて、IOCの法律専門家を困難な立場に追い込んだ。

スポーツ上の国籍の考え方を採用すべきなのか、これには移住した国の国籍という考え方が含まれる。それとも中央集権的な、帝国の国籍を維持すべきなのか？

ボヘミアは、イエリ・グートの説得力のお陰で、クーベルタンがスラブ体操協会の伝統を考慮して1894年に認めた特別の地位を守ることができるのか？

しかし、どうやってこれを、苛立ちを見せているオーストリア人やオーストリア皇帝やドイツ皇帝やロシア皇帝に説明できるのか？

IOCは超国家的団体として、既に爆発寸前の政治状況を更に複雑化する権利はあるのか？

イギリスの特殊性から起こったもう一つの難問はメートル法に関するものであった。

メートル法は英仏海峡の向こう側では拒否されていた。押しつけるべきか、挑戦を許すべきか？イギリスの選手か外国の選手のどちらかが不利をこうむらねばならないのか？

結局、我々も知るとおり、メートル法が勝利をおさめた。しかしこれは長い議論の末であった。イ

ギリスの名誉は傷ついた。

最後に、IOCは激しい攻撃に晒された。強くなってきた国際競技連盟は自分のたちのスポーツを自分たちで組織する権利を要求した。

しかし、大会プログラムは二つの部分に分けられることが決まった。

冬の競技がアイススケートの形で登場したのである。

1908年7月13日から16日まで行われたロンドンセッションは力の均衡には何の変化もたらさなかった。広報関係を主として扱った偵察のラウンドであった。賞状やカップが授与された。

これは必ずしも問題を避けようとしたのではなく、会長がオリンピックムーブメントに密度を増すことを望んだ現れと見るべきであろう。

ストックホルムは1912年の大会に立候補した。その後すぐベルリンが続いた。

大会の優勝者と最も模範的なスポーツ協会に与えられた芸術トロフィーは本部に帰ってくるまでに時間がかかった。

目録作成のために委員会がつくられたが、何十年も宙ぶらりんのままであった。

当時IOCメンバーは36人であった。彼らが明らかに冬眠している内に、IOCは拡大し、しっかりと確立し、力を得た。IOC会長は相変わらず決意に満ち有能であった。

1.6.8. ベルリン（1909）におけるIOC

これは「オリンピックメモアール」の中ごろに現れる第10章のタイトルであるが、安堵の叫びのように響く。

IOCは難しい時期を経験していた。成長するに従ってIOCは或る者を苛立たせ、敵をつくった。国際競技連盟はIOCと大会組織委員会の間で適切な仲介者として行動することが余りに少なかった。揉め事は厄介なことになりそうであった。

会長はこの下り坂に歯止めを掛け、状況を見直す時だと感じた。ベルリンセッションは、振り子の原理で、「技術的なもの」でなければならなかった。

新オリンピズムの歴史の初めから、ドイツは全ての努力に加わっていた。

例えそれが大国主義的、官僚的な理由からであったにせよ。

ドイツは kongress の創立からは除外されていた。しかし先ずゲッブハルト博士、次いで将軍ホン・デル・アッセブルグ伯爵、そしてヴァルテンスレーベン伯爵がドイツオリンピック委員会のしっかりした枠組みをつくった。

セッションはプロイセン貴族院の大レセプションホールで5月27日から6月2日まで、ドイツ皇太子後援の下に行われた。1908年7月20日ロンドン大会中に亡くなったデメトリウス・ピケラスのために

短い弔意が表された。

セッションを準備したホン・デル・アッセブルグ伯爵も3月30日に亡くなった。

彼を継ぐことは、ヴァルテンスレーベン伯爵にとって易しい仕事ではなかった。

組織は完璧であった。真剣な組織的なアプローチとドイツ委員会の熱心な仕事が素晴らしい結果を生んだ。

セッションのプログラムは延長された。

会議が始まって2日目、スウェーデンが1912年大会の開催都市に指名された。ベルリンは立候補を取り下げ、非公式に1916年大会に立候補を延期した。

再び、大会のプログラムが問題になった。新しいスポーツを加えるべきか？ 大会の種目は個人競技に限るべきか？ 大会から女性を排除したままでよいのか？ どの種目をやめるのか？ 結局、問題は1910年のセッションに持ち越された。

年代記作者は、開催都市がプログラムの問題を取り上げたのは、オリンピック復興から15年経った1909年のことであったと記している。成長の印であった。

しかし彼はまた、競技連盟と各国オリンピック委員会が不十分であったので、憲章上は権限のないIOCが決定しなければならなかったと記している。

1909年には各国オリンピック委員会はほとんど存在していなかった。そしていくつかの国内スポーツ連盟がその代わりをしていた。ボヘミア、スウェーデン、イギリス、ドイツだけが高度に組織された国内オリンピック委員会を持っていた。

ベルリンセッションでは、アマチュア問題はストックホルム大会のプログラムと一緒に問題になった。どの種目を受け入れるべきか、大会期間はどうか？

フランス人メンバーであった、クーベルタンの従兄弟、アルベール・ド・ベルティエ・ド・ソーヴィニー伯爵がイギリス紙「スポーツティングライフ」の提供した記録に基づくレポートを発表した。

際どい闘いであった。手に入れた記録に基づいて、ベルティエは率直に語ってもよいと考えた。彼は「問題の四つの主要な要素」を持ち出した。金、「接触」、コーチング、そして選手と選手の所属する協会の関係である。

彼の調子は攻撃的で、何人かはあまりに急進的であると考えた。とても過半数の賛成を得ることは無理であった。苦い薬を口当たりよくするために委員会がつくられた。

スローン（アメリカ）、クック（イギリス）、ムサ（ハンガリー）がメンバーとなり、世界中のスポーツ連盟、協会に質問状を出すよう求められた。

ベルリンでの第11回セッションは、委員会のなし遂げた仕事と、プログラムを削減し期間を短縮して大会の巨大化に対して戦う決意を表明した点で重要である。

初めて広大な極東の他を代表するメンバー（日本）が加わった。

IOC会長は確固たる支持を得て、今や更にペースアップできることになった。

1.6.9. ルクセンブルグでの小休止 -1910年

「オリンピック・レビュー」に載せられたこのセッションの議事録。

ルクセンブルグでのセッションは1910年6月11日から13日に行われ、当面の問題を処理する所謂ワーキングミーティングであった。

ルクセンブルグ市庁舎で行われ、国務大臣アイシェンがIOCを讃えた。

クーベルタンは喜ぶと共に驚いて新しい決意に満たされた。—まだ多くの批判者がいたのだ—。クーベルタンはこの演説の中に「意気地のない臆病さの傾向に対して戦う」貴重な勇気付けを感じた。

次はブダペストセッションであったが、クーベルタンはハンガリーの当世風の社会生活が及ぼすだろう影響を薄々感じて、「もっと中立的な」街でIOC委員会を前もって開きたいと思った。

アルゼンチンのメンバー、マニエル・キンターナは「オリンピック大会」という言葉を個人的な広告のために不正に使用して、IOCから追放された。

倫理は笑い事ではない！

イタリアのメンバー、国家評議員アッティリオ・ブルニアッティがオリンピック大会の模範的な性格を護るために、各国政府にスポーツ競技の試合の数を減らすよう要求せざるを得なかったのは、高まりつつある矛盾の兆しであった。

クーベルタンはバルクとフォン・ローゼンがストックホルム大会(1912)で芸術競技を開催できなかったことで「厳しく」兩人を叱った。彼はそうしたコンテストが復活されないなら、大会に出席しないと脅しをかけた。

ベルリンでアマチュアリズム問題の担当に任命されたメンバーはレポートを提出し、オリンピックの類型分類に従って、ある種のカテゴリーの競技に単一の定義をつくる意見を委員会に再付託した。

ここでIOCの現会長の意見と問題全体の結論を考察するために小休止してみるのもよいだろう。

クーベルタンは、アマチュアリズムの問題がとくに気になることはないとしばしば繰り返していた。それは単なる「スクリーン・ふるい」として役に立つというわけである。

しかしクーベルタンはここでは、「斥候」として振る舞わなければならなかった。

スポーツマンの大多数は一般大衆と同じようにこの問題に強い関心を抱いていた。

彼は従って、接触を失わないためにとりあえず同意の振りをしなければならなかった。

クーベルタンにとってスポーツは「宗教、教会教理礼拝を伴う宗教であった…何よりも大切なのは宗教感情であった。」

「私にはスポーツ選手が5フランを受け取ったかどうかで全てが決まると考えるのは、教会を守る聖堂番がサラリーを受けとるので直ちに不信者と考えるのと同じように子ども染みたことに思える。」

膨大な「スポーティングライフ」のファイルは彼の興味をひかなかった。

全ては以前に言われたことであった。答えは質問から推論することができるものであった。

人は既にそこにあるものから先へ進むしかない。ベルリンで作られた委員会(1909)はイギリスの厳しい定義を採用した。

クーベルタンは怒った。これは「社会防御の一つの形であり、階級制度の名残だ」。

IOC会長にとって、イギリスの立場に疑問を投げかけることは、オリンピックファミリーに対してサベリスすることになる。

プロと競技したからといって、或いは「全ての人に開かれているイベントに参加したからといって、また彼がスポーツインストラクターだからといって」何故アマチュア選手を失格にするのか？

ベルティエの答えは全く妥協の余地のないものだった。不幸なことに、「全ての抵抗を克服することは」できなかった。クーベルタンは公に遺憾の意を表明した。良識が無視されねばならなかった。

我々はこの大変な努力の結果を知っている。修正された質問は回答が回答者の意図を明確に示すように考えられていた。

IOC会長と彼に近い協力者(忠実なベルティエを含む)にとって、アマチュアリズムの問題は問題とはされなかったが、不幸なことにオリンピックの雰囲気毒するものとなった。回答は「ひどく矛盾」していた。そこには「単なる声明だけで、理由が無かった」。

同じスポーツを擁護し実行している者の間にさえ、同意に達する道は全く欠けていた。

IOC会長はこの時以来、それまで持っていたわずかの興味も「アマチュアリズム」に対しては失ってしまったと認めている。

嘘と偽善に対するたった一つの矯正法は「単なるショウのための形式でない、日付とサインのある」宣誓であった。クーベルタンは「追求され、非難さるべき非常に多くの贗アマチュアがいる一方、誤ってプロとされた者も非常に多い、これは救済されねばならぬ」と付け加えている。

新聞に表れたルクセンブルグセッションの記録は、IOCを非常に苛立たせた。

事務局は6月18日のミーティングで、発表された記録の「非公式」を強調した。

とくにストックホルム大会(1912)のプログラムに関して「このプログラムは1911年のセッションで決定されるものである」点を強調した。

ジャーナリストに怒りを感じた事務局は「こうしたことが再び起きない対策を取るようIOCに提案する決議をした。」

1.6.10. よいセッション、ブダペスト – 1911年 セッション、或いは委員会？ バーゼル、1912年

このセッションは1911年5月23日、議事堂で聞かれた。この年はオリンピック運動にとって実り多い年であった。「ブダペストミーティングは舞台の中央であった。」

クーベルタンは典型的なヨーロッパの河、ダニューブ河の岸に立つことを喜んだ。

ハンガリー人は古い友人であった。彼らの歓迎は祖先伝来のものであり、ホスピタリティーはそれに相応しい気前の良いものであった。

クーベルタンによれば、IOCのメンバーは今や39人になり、そのうちの20人がブダペストに出席した。

クーベルタンはいよいよ財政問題に対してハッキリした答を出す時がきたと感じた。

実のところ、国際オリンピック委員会は寄付で賄われていた。他は年会費だけであった。各メンバーは一年25フランを払った。そのうち20フランは「オリンピック・レビュー」に使われ、5フランがIOC基金に入った。IOC事務局の経費は、「世界的な存在」にしては「比較的小さな」ものであったが、クーベルタンがポケットマネーから出していた。

紳士である彼はこの額を過少に言っているが、我々も知るように、1905年に当時の金で50万ゴールドフランというかなりの遺産相続をしたにもかかわらず、彼を破産に追い込んだのである。伝統的に、祝典の費用は会長が引き受けていた。補助金は1ペニーもなかった。会長の支出は、正にビケラスの言う「貧者の甲冑」であった。

しかし臨機応変に切り抜けるのを美德と考えていたクーベルタンは断固続けた。

彼は言う、「不合理な煩雑な日常管理の重荷や、不必要な記録や、タイプライターの横暴を心して避ければ、人は何と多くのことをなし遂げられるものであろう。」

しかしIOCの帳簿はまことに原始的なものであったように見える。

華やかなハンガリー社交界もセッションが活発で実り多いものになることを妨げるはずはなかった。馬術が大会に加えられた。

アテネでも、パリでも、セントルイスでも、ロンドンでも馬術競技を行うことはできなかった。時間が足りず、偏見が頭をもたげたのであった。

しかし、「馬上の領主」の古い伝統を持つスウェーデンでは、馬術競技のないオリンピック大会は考えられなかった。

スウェーデンの第二のIOCメンバー、クラレンス・フォン・ローゼン伯爵(バルク大佐が初代であった)が、市民や軍指導者の賛成を得るためヨーロッパ各地をまわった。その結果、大会は非常に「軍隊的」な性格のものとなった。

この第13回セッションで作りに出された二つ目の新種目は近代五種であった。

オリンピックを現代的なものにしようという決意から、クーベルタンは二つの新種目を提案した。馬に乗ったフェンシングと近代五種競技である。馬に乗ったフェンシングは丁重なお座なりの興味を引き起こしたに過ぎず、実行が不可能なことが分かった。

しかし近代五種競技、「完全な競技者の真の神聖化」は、ストックホルム大会のプログラムに加えられた。近代五種は馬術、競泳、フェンシング、射撃、4,000メートルのクロスカントリーからなっている。

三つ目の新機軸は狩りと登山賞の設置である。このアイデアが初めて出されたのは1894年であった。会長は航空賞の追加を考えたが、幻想は持っていなかった。「これは全ての競技、全ての

国”の精神から出たものである」。

クーベルタンはIOCがこの改革に興味を示さなかったことを記録している。

ストックホルム大会における芸術競技の開催は問題があることが分かった。ストックホルム王立芸術アカデミーはIOCを助けるために何もしなかった。

ブダペストセッションは非常に積極的なものであった。スポーツ心理会議が1913年にローザンヌで行われることが発表された。そしてパリでは1914年のIOC創立20周年祝典の準備が進められていることが披露された。

以後競技審判は国際審判団になることが明記された。ドイツはハンガリーが独立国でないとしてオリンピックから除外することを望んだ。この問題は討議されなかった。

クーベルタンはあっさりと脇に押しやった。

大成功のブダペストセッションに続いて1914年コンGRES準備のために委員会が1912年3月27日、28日、バーゼルのハンデルスバンクの理事会議室で開かれた。

スローンが各国オリンピック委員会の代表権について重要な提案を書面によって行った。

誤ってセッションと見なされた1912年のバーゼル委員会は、オリンピズムの歴史の中でその重要性が不当に看過されているように見える。

1. 6. 11. ストックホルムー1912年

功績の後の反省の時

第14回ストックホルムセッションは1912年7月4日、8日、10日、17日リクスダグ宮殿で開かれ、31人という記録的な数の委員が参加した。

ストックホルム大会に参加したアメリカ、イタリア、ルクセンブルグに国内オリンピック委員会ができた。スイス、ロシア、アメリカ、ボヘミアの国内オリンピック委員会の重要な会合があったと伝えられている。

1911年、「オリンピック・レビュー」は芸術競技の規則をフランス語、英語、ドイツ語の三か国語で発表した。エントリーの到着が遅く、締切りが1912年 3月 1日から 4月 1日に延ばされた。

セッションとオリンピック大会のスウェーデンの組織はまことに非の打ち所のないものであった。クーベルタンが指摘したように、バラクがこれら全てを取り仕切った。

セッションの開会式はそれに相応しい、民主的な調子を帯びていた。

バルク、フォン・ローゼンそして皇太子の演説は短かった。

クーベルタンは過去十年にわたり多くの困難を克服してきたことを慶賀し、「オリンピックの星団が半年ごとに増えるのを見る満足」を表明した。

IOC会長にとって、ストックホルムセッションは「偉大な功績」に続く「反省と準備の時」であった。

閉会に当たっての会議を含む 4つの会議が、参加者の情熱的とさえいえる、盛んな関心のうちに行われた！

議事録を精読すると三つの主要な点が浮かび上がってくる。オリンピックムーブメントの原則と目的、IOCの運営と大会の組織、そして1914年パリコンGRESの準備である。

オリンピックムーブメントの原則と目的の確認はバーゼル委員会の提案にみられる。
フォン・ベニンゲン男爵が報告者となり、基本原則が想起され全会一致で承認された。

あるオリンピックアードの間に大会が開かれないことがあっても、オリンピックアードの順序と間隔は変更されないことが確認された。

「可能な限り」オリンピック大会は「全ての競技、全ての国、全ての人」に参加さすべきである。

しかし数多くの競技連盟からの申請を受けて、「全てのスポーツ」の参加は1900年以来問題になっていた。

委員会はスポーツを三つのカテゴリーに分けるのがフェアであると考えていた。即ち不可欠なもの、望ましいもの、可能なものの三つである。

議論はクールシー・ラファンが「善意の合意」に訴えざるを得ないほど激しいものであった。彼の意見によれば、「オリンピックの理想」は「IOCの高い使命」を果たすために芸術と文学競技を付け加えることによってのみ「可能な限り高く」維持することができるというのであった。

クールシー・ラファンは「全てのスポーツ」は実行不可能な理想であると考えた。

彼はプログラムはあまり広げすぎてはならないと考えていた。この点について討論を纏めて、会長は「この世界の」全てのスポーツを含めることの不可能なことを述べ、主催者にオリンピックプログラムのスポーツだけに限り、セントルイスの失敗を繰り返さないよう勧告した。

「全ての国」の問題については、セルビアオリンピック委員会がロシアのオウロウソフ王子の支持を得て、委員会にメンバーを一人送りたいと要求した。IOCはセルビアの候補者が「必要な資格」を備えているという条件でこの要求に同意した。

この問題に決着を付けるにはクーベルタンの権威が必要であった。

しかしアイスランドの選手が同じような要求を出したときには、彼らはドアの方を指さされ、デンマークの役員を通じて要求を提出するように言われた。

イェリ・グート博士は民族主義的な願いを支持して、ボヘミアを「国」として参加させることを要求した。オーストリア代表とグート博士の間に、「丁重ではあるが気詰まりな議論」の後、現状が維持された。スポーツに関してボヘミアは「チェコ委員会」の形で認められた。同じ条件はオウロウソフ王子の同意に従ってフィンランドにも適用された。

「全ての人」に関しては、スローンが提案を説明した。「我々はあまりに貴族的なスポーツの侵略を許してはならない。大衆のスポーツが何処でも行われなければならない。これは我々の仕事の

背後にある全体的哲学である。」

決定は何も行われなかった。IOCは提案を持ち越した。そのため、「全ての国、全ての競技」はある程度のニュアンスを残すという結果になった。

大会のプログラムはクールシー・ラファンの提案した区分けに照らして検討された。

不可欠なものの中には、陸上競技、格闘技、競泳、体操、漕艇、射撃、馬術、自転車(ロード)、近代五種が含まれていた。また「芸術競技、即ち建築、絵画、彫刻、音楽、文学」も不可欠のものであった。

望ましいスポーツには、ラグビー、フットボール、ホッケー、ローンテニスなどのボールゲーム、それにヨット、アイススケート、自転車(トラック)が含まれていた。

可能なスポーツと見なされるのは、主催者の希望で加えられる国際スポーツとされた。

国際スポーツとは IOCメンバーの 6つ以上の国で行われているスポーツと考えられた。

セッションは大会のプログラムに採用できる競技別の種目まで明記して、非常に細かいところまで踏み込んだ。

ヨーロッパ体操連盟は体操競技の種目を選択する。漕艇に関しては、委員会はドイツ、イギリス、ベルギー、イタリアの連盟が選択に共同責任を負うよう提案した。

セッションの第二の焦点は IOCの国際的管理運営に関するものであった。クーベルタンは健全な財政運用の必要にメンバーの注意を喚起した。

IOCの財政は「適切なもの」でなければならない。クーベルタンは各国オリンピック委員会(NOC)を訪問することが必要だろうかと問うた。

大会の運営については、IOC、NOCメンバー、審判は今後バッジを付けていればスタジアムに入れることになった。大会の後、実績評価委員会が大会中起こった難しい問題を評価する。委員会はファン・テュイール、ベニンゲン、バルクで構成される。

スウェーデンの役員が、不当に扱われたと訴えた選手の問題を処理することになった。

プロトコールに関してさまざまなことが決められた。パレード、讃歌、旗等。

これらは見かけより重要で、IOCの各国委員会や競技連盟に対する優越性を高めた。

登山競技のメダルはこのオリンピアドでは授与されなかった。

7月4日の第一回ミーティングで、ブダペストの立候補撤回に続いてベルリンが全会一致で第六回オリンピアドの1916年大会開催都市に選ばれた。

クーベルタンの要請によって、オリンピックへの女性の参加問題が提起された。

「オリンピックに女性の参加は認めるべきかどうか？」

実際のところそれまでに、女性は体操、テニス、水泳に参加しており、その数は増えつつあった。オリンピックは女性に公開されるべきか、否か？

議論は行われなかった。クーベルタンは「オリンピック・レビュー」を参照するようにメンバーに勧

めた。この問題は1913年のミーティングで検討されることになった。

1912年3月28日のバーゼルでの決議に基づいて、 kongress の構成がクールシー・ラファンによって提案された。kongress の参加者は、IOCメンバー、各NOCから10人以内の代表、この数はその国のスポーツの重要度に応じて決められる。そしてNOCのない国からは外務省の代表が出席するという条件で各国 3人が認められた。

出席した代表だけが投票権を認められる。この提案は全会一致で可決された。

この時、1914年のパリkongressの準備が残っていた。イギリスのメンバー、クックが三か国語(フランス語、英語、ドイツ語)で告示の手紙と多くの提案を含むテキストを提出した。IOC委員会の報告者、フォン・ベニンゲン男爵が承認された。

それからクーベルタンは IOCメンバーへの「告示の手紙」を読み上げた。そのためクックの提案の第一点が無効になった。

結局、IOCメンバーはパリkongressの準備書類を1913年2月1日までに受け取るようになった。この仕事のためにベニンゲンが細目にわたって指示を受けた。

セッションは成功であった。一方では、ほとんど完全にIOCと大会の活動と構成に関する技術的問題を扱ったにもかかわらず、ストックホルムセッションは芸術競技についての決議の更新に見られるように、オリンピズムの究極の目的に沿ったものであった。

セッションの議事録は「オリンピック・レビュー」に発表される。

次のセッションは1913年のkongressの間にローザンヌで開かれることになった。

1.6.12. ローザンヌ、1913年

鍛えられた肉体を好む男たち

第16回セッションは1913年 5月 6、7日、スポーツ心理学kongressの前に開かれた。オリンピックに関しては新参者である、ドイツ人のカール・ディームが1916年のベルリン大会の事務総長に選ばれた。

クールシー・ラファンは IOCの会議に三回続けて欠席した者はメンバー資格を失うという提案をしたが、これには三分の二の賛成が必要で、セッションの採択するところとはならなかった。

IOCメンバーは「オリンピック大会」という呼称の誤用について懸念を表明した。

将来は、IOC主催の大会とアテネの中間大会だけがこの呼称を使用することができる。

このセッションは、大きな動揺を引き起こすことになる重大な決定をした。

ストックホルム大会の古典五種競技と十種競技の優勝者、アメリカのジム・ソープ選手を「プロ」として失格にし、メダルの返還を求めたのである。

クーベルタンはソープは他の多くの者より悪いわけではないと認めたが、規則は規則であった。クーベルタンはついであるが、このケースの扱い方が完全であったことを誇った。清く、妥協のないアマチュアリズムの刃が振り下ろされたのである。

スポーツ生理学と心理学のkongressは、当初、1911年にローザンヌで計画されていた。ドレスデン万博とkongressの主催者への配慮から、IOCはルクセンブルグセッションの際に1913年まで

延期することを決定していた。

kongressは1913年5月8日、木曜日、ローザンヌ大学の講堂で開かれた。

クーベルタンは「オリンピックメモアール」の中で、大きな喜びを持って、このイベントを描写している。「街は旗で覆われた。階段のところで小さな子供たちのボーイスカウトが儀仗兵をつとめた。合唱連盟とローザンヌ男性合唱隊の素晴らしいコーラスが盛大な拍手を浴びた。」翌日の夕方、ドラルク寺院のテラスで22人のレスラーが競技した。木々の間に隠された松明の光を浴び、羊飼いや牛飼いの拍手を浴びた。「牧者のホルン」が響き、「忘れがたい」夜であった。

三日目の夜、カジノで楽しいレビューがあった。祝典にはウーシーのベニス祭り、ド・ブロネー男爵夫妻主催のグランドソン城におけるレセプションと舞踏会も含まれていた。

ヴォー州の評議会主催のシロン城ホールでの昼食会もあった。

セレモニー好きのクーベルタンは大変に満足であった。彼は「過去には重要な役割を演じてなかったが、大きな未来を持ち、世界の文明国に対する試験場としての役割を静かにはたしている小さな国」で居心地よく感じていた。

kongressは適切なスピーチで幕を開けた。IOC会長は丁重に感謝された。この kongressは最高に重要なものであると述べられた。

クーベルタンは次のように応えた。「穀物は急速に成長しています。紳士諸君。収穫は満足すべきものであることが今や確かになりました。」しかし「スポーツマンは自分たちが持っているお守りの価値を知りません。」人がかつてないほど努力を求められる時代にあって、「スポーツこそ努力の初等学校です。」肉体と心と精神を鍛えよ。「鍛えられた肉体を好む男たち！」。

kongressは「スイス連邦評議会の手厚い後援の下に」開かれた。国家評議員デコペが組織委員会の名誉会長であった。そのメンバーには、初めてゴッドフロア・ド・ブロネーのような高官が含まれていた。彼は後にオリンピック運動の中で大きな役割を果たすことになる。多くの著名な学者、科学者がIOC会長の招待に応じた。とくに医師、医学教授が多かった。凡そ100人が参加し、そのうちの70人がスイス人であった。

ストックホルム大会の大成功に続いての kongressであった。競技スポーツは新たな高まりを迎えた。以前にはなかった問題が起きてきた。クーベルタンはそれが迫ってくるのを感じていた。「スポーツには過度に陥る傾向がある。より早く、より高く、より強く... 常により以上を目指す。これは人間の平衡という観点からは明らかに行き過ぎだが、それはまたその高貴さ、その詩的性格でもある。」

1897年のルアーブル kongressで、スポーツの心理的側面はすでに議論の中心となっていた。しかし、当時、彼らは単に「身体運動の心理学」に取り組んだにすぎない。

ローザンヌでは、議論は「スポーツ生理学、心理学」に焦点が合わされていた。もっともこの言葉は必ずしも今日と同じ意味ではない。事実、もし我々がこのテーマをよく吟味すれば、議事録の32の項目に見る如く、 kongressの主題は教育であった。

kongressは初めて、興味を持つ全ての人に公開され、参加が許された。

400人が大学講堂で行われた開会式に参加し、平均75人が作業委員会に出席した。

クーベルタンの確信は揺るがず、取組はシステマティックであった。彼は一切の萎縮させるような機械的「生理学主義」に、普遍的で開かれた、反実証主義的精神性をもって対峙した。即ち、人間は単なる筋肉の集まりではない。

三か国語で出されたプログラムは論理的な考え方に従った。スポーツ活動の起源、継続、様式、結果である。これらのテーマは幅広い論議を引き起こした。

国際的な貢献の中に郵便で送られたセオドア・ルーズベルト大統領のものもあった。

イタリアの歴史家、フェレロは「スポーツの限界」の冒頭でスポーツを知的活動に対する解毒剤と見ている。

ローザンヌの医師、ラルギーエは子供の中に競技本能の存在することを示し、非常に早い段階で刺激を与えれば、子供はスポーツ本能を発達させるだろうと主張した。

オランダ人、ファン・布林ブールはスポーツ本能は、身体の法則、人間に生得の戦う意思、そして感情的な卓越への絶えざる努力に依存していると強く主張した。

スポーツ本能の定義が激しい論議を呼び、結論をみないまま後の論議に委ねられた。

第二のテーマは、論者にそれぞれのスポーツの教育的価値を強調する機会を提供した。ルイス・ドゥデの論文は大変興味深いものであった。ドゥデによれば、プレーを通じて青年は性格を発展させ、社会的に積極的な人材になるというものであった。

彼はスポーツに関する文脈のなかでチームについて言われていることは全て、必要な修正を加えれば、全体としての社会生活に当てはまると主張した。

その他のスピーカーのうちで注目されたのは、海軍大尉、ジョルジュ・エベールとジャン・フィリップ博士であった。

クーベルタンは多くの論文は「興味深いが、厳密には主題との関連に難点があった」。提出された論文の質はまちまちであった。しかしその学問的水準は、1897年のルアーブル、1905年のブリュッセルのコンGRESのものよりも高かった。

論文のいくつかは大変質の高いものであった。それらの一つは機能心理学の創始者、エドワード・クラパレードのものであった。クラパレードは「本能」という言葉、同じく「ド・クーベルタン氏によるスポーツの定義」に疑問を投げかけた。彼はこの定義は「やや狭く」、スポーツ活動の深い起源に十分な重要性を与えていないと考えた。文学や科学における創造はときとして「スポーツの生むものと知的に同じ価値をもつもの」と考えることはできないのか？

すでに、スポーツについての本能主義と行動主義の対立が始まっていたのである。

1913年のローザンヌコンGRESは全体として成功であった。ここでスポーツ心理学が誕生したというのは早計にしても、認識論的意味においてスポーツ心理学が始まったとはいえるのである。またオリंपイズムと生理学主義との決別もここに記された。これ以後、クーベルタンは科学研究と大会の構成要素にたいする彼の取り組みを支えるものを持つようになるのである。

当時の心理学の発達段階では、コンGRESは文学的考察に限らざるを得なかったし、その議題にもかかわらず教育的な事項に偏向せざるを得なかったことの説明もつく。

しかしそれにもかかわらず、このコンGRESは近代オリंपICKの重要な時期を画すものであり、

スポーツ心理学とスポーツマン心理学の歴史の里程標になるものであった。

1913年のローザンヌは1914年のパリへの道を開いた。

1. 6. 13. パリコングレス – 1914年

20周年記念祭典

パリでの諮問会議(1906)とストックホルム大会の大成功のあと、ローザンヌコングレスはIOCがアカデミックな認知を受ける過程での里程標となった。

スポーツは新しい意味を持ち、ある種の尊敬を勝ち得た。近代オリンピズムは人類にとっての一つのモデルとなった。

スポーツマン、学者、政治家、宗教家、良識の士をローザンヌに集めることによって、IOC第二代会長は暗黙のうちにスポーツ心理学に対する尊敬を示した。

ローザンヌコングレスは、国際オリンピックムーブメントが発展の揺籃期から脱して、以後、スポーツが大学の取り扱う対象となったことを示した。

新しいオリンピズムはその20周年に近づいており、当然のことながら、1914年 6月パリで祝われることになった。

実は、フランスに対する感謝の念から、オリンピックムーブメントの20周年を、1894年にそれが誕生したソルボンヌ大講堂で祝うことが、1911年ブダペストで合意されていた。

オリンピズムは成年に達していた。その成功は多くの者の食欲をそそるようになっていた。各国オリンピック委員会と各国国際競技連盟がそれぞれの権限を明確にされることを要求していた。彼らは大会進行の過程に係わる権利、プログラム、大会参加の条件を決定する権利を求めた。1905年以後決定は延ばされていた。その時がきたのである。

コングレスの準備は注意深く行われた。計画をたて、同意された主題に関して一つの議案を作るために委員会が作られた。即ち、大会のプログラムと参加についてである。

参加者の参加プロトコールが公布された。コングレスの構成が1913年の決定に基づいて慎重に決められた。

29の各国オリンピック委員会が 120人の代表を送った。IOCは各国オリンピック委員会の力の増大を無視できなかった。コングレスは、彼らが出会い、気持ちを語り合う機会を与えねばならなかった。20人のIOC委員が出席した。

1914年 7月15日から23日迄の間に、ノルベルト・ミュラーによれば14、クーベルタンによれば15の作業委員会が開かれた。数多くの特別委員会が開かれた。

組織委員会議長のクーベルタンは何時ものように、参加者を独特のスタイルで迎えた。

共和国大統領、外務大臣、パリ市長の外交社交儀礼に続いて、17の式典と祝典が行われた。何時ものように、クーベルタンは参加者が知的、精神的に寛げるよう細心の注意を払った。しかしこれも何時ものことだが、彼の相手にしたのは限られた貴族的なサークルだけであった。コングレ

スのメンバーは「フランス挙げての」歓迎を受けた。

「オリンピック・レビュー」は特別号でパリの最も有名な場所の紹介をした。
「今日のフランスについて」と題した豪華な本がコンGRESメンバーに配られた。
数多くの偉大な人物、科学者、文学者、政治家、スポーツマンが出席した。
クーベルタンは何をしようとしていたのか？

彼は「オリンピックメモワール」のなかでハッキリした答えを与えていない。彼は世界大戦が差し迫っているとは考えていなかった。しかし同時に、もし戦いが起きるとすれば、彼が同胞の間に感じた「自己に対する蔑み」、精神的な弱さ、それが引き起こす恐れ、であろうと思っていた。

クーベルタンにとって、フランスは強くあらねばならなかった。待ちあぐねる必要はすこしもなかった。

1914年のセレモニーは豪華であった。6月17日、国家元首臨席の下に行われたソルボンヌの記念式典は、とりわけ素晴らしいものであった。

IOC旗、クーベルタンが考え、おそらく自分でデザインした、世界の五つの部分をシンボライズした旗が初めて登場した。

百以上のメッセージが世界中から届いた。有名なスウェーデン歌手のコーラスが美を添えた。祭典は、ド・ポリニャック侯爵の招きでリームズへ移り、ジョルジュ・ヘベールの経営するコレージュダトレット(スポーツ中学)で閉幕した。

議題は大会の組織に関する数多くの技術的問題を扱った。即ち、大会への参加資格、参加の条件、エントリーフォーム、競技のプログラム、競技の統一規則、審判問題、国の分類等。勿論、1916年に予定されたベルリン大会の準備と構想が審議の背景にあった。

ベルリン大会のプログラムが長い時間をかけて論議された。しかし何も最終決定とはされなかったのはCONGRESメンバーの知恵の証であった。彼らは単に以下のガイドラインを勧告するに止まった。

スポーツは二つのカテゴリーに分けられる。

必須種目は、陸上、体操、ウエイトリフティング、自転車、防衛スポーツ、射撃、馬術、水上スポーツ、複合スポーツ、ゲーム。

選択種目は、ラグビー、フィールドホッケー、アイスホッケー、アーチェリー、ポロ、ゴルフ、フィギュアスケート、スキー。

ウエイトリフティングは最初除外されていたが、4日後にプログラムに復帰した。

陸上のプログラムが国際アマチュア陸上連盟(IAAF)の事前承認を得ていたのは時代の流れ

を示すものであった。16の国内連盟がリヨンでこの件について論じていた。

付け加えられたのは綱引きだけであった。

体操のプログラムはドイツ代表とIAAF会長ジークフリート・エドストレームの間に深刻な議論を引き起こした。ドイツ帝国オリンピック大会委員会は「ドイツ六種競技」を陸上種目に加えることを要求した。IAAFは、それは独立種目とすべきだと主張した。

妥協策として、六種競技は例外措置として、ベルリン大会の体操競技に加えられることになった。

アマチュアリズムの問題は、国際競技連盟に投げ返された。IFだけが参加者のアマチュア資格を保証できる立場にあったからである。

参加者の年齢制限の提案は拒否された。

女性は水泳、テニス、スケート以外の全ての競技から締め出された。

各国国内オリンピック委員会が選手の大会参加に責任を持ち、国際競技連盟が審判に、主催国が上告審判委員会に責任を持つことになった。国による分類は廃止された。

以上はパリ kongress (1914) の決定であった。この決定についてパリプレスに多くの意見が載った。「ル・フィガロ」の記者フランツ・ライシエルは、ムーブメントの忠実な支持者であったが、プログラムに新しい種目が追加されたことを大いに残念がった。

戦争が終わった1919年まで、パリで1914年に採択された決定は「オリンピック・レビュー」の特別号には載らなかった。

我々はどうしても、このkongressを1914年 8月という文脈のうちに置いてみたくなる。kongressの最終日、6月28日、サラエボの暗殺が起こったことを考えれば、全てが無益なことに見える。

しかしクーベルタンは、自分は戦争を予期していなかったとハッキリ言っている。

そしておそらくkongressの参加者の大部分もそうであったろう。

もしこのkongressをIOCの意図に照らして考えれば、オリンピックムーブメントにとって成功であったと言えるだろう。そしてその成功はIOCのおかげであり、勿論、クーベルタンのおかげであった。

それまでに固有の病になっていた多くの問題、女性の参加、アマチュアリズム、大会プログラムの削減に解決を見いだすことはできなかったが。

歴史家にはkongressに二つの傾向が見て取れる。NOCとIFの力の増大、そして実際問題として、スポーツとその技術的規則の限界のない発展である。

この点で、基本的な変化があったと言えるだろう。

当座しのぎのオリンピック大会の時代が終わったと言うこと。スポーツの世界化とそれがもたらした多種多様の利益がその中に巨大化の種を宿していたこと。

クーベルタンが学んだことは、kongressがたまたまいくつかの簡単な技術委員会を伴う、教育的な「盛式ミサ」の一形式にすぎなかった時代が終わったということであった。

1925年のプラハでは、一つは技術的、一つは教育的な、二つのkongressが開かれる。

1. 6. 14. 1894年－1914年：総括

主要な行事と理想

パリのオリンピックコンGRESは1914年 7月23日に終わった。丁度その日、オーストリアはセルビアに最後通牒を送った。

バルカンに限定される筈であった戦争は、世界大戦に発展した。

大戦勃発のとき、オリンピックムーブメントの姿はどのようなものであったろうか。

象徴的な意味合いにおいて、クーベルタンただ一人が新しいオリンピズムの責任を負っていたといっても間違いではなかろう。

ここまでの頁で、私たちは彼がどれ程、言葉とシンボルを扱うのに長けていたかを見てきた。三位一体、サークル、聖火、五輪の輪のようなシンボルを作り、頌歌、宣誓、行進のような儀式については言わずもがな、彼は制度を作り、構造を定め、十字軍を出発させなければならなかった。手短かに言えば、彼は統治しなければならなかった。

我々が光を当てようとしたのは、この神聖なものと政治的なものと複雑な相互作用、宣言された夢と避けがたい現実との生きた対立であった。

この夢とビジョンの氾濫と遂行された力の政策から、どんなアイデアが生まれ現実の軌道を決定し、構造を変え、組織の性格を決めたのだろうか？

1894年から1914年の間のIOCの構造と組織を決めた主な思想と出来事は何だったのか。

子細に見れば、物事のいろいろな面をカバーする沢山のイニシアチブがあったことが分かる。即ち、芸術、文学、スポーツ、衛生学、歴史、心理学、精神、地勢学、旅行、祭典、儀典、観衆、宴会、メダル、カップ、賞状、賞、一連の随伴現象、その中にはアマチュアリズムの問題が特別な位置を占め、これらの過程の本質を包み隠していた。

この過程におけるクーベルタンの役割を理解するには、彼の人となりを理解しなければならない。彼は誇りの人であり、自分の独立と卓越性をあらゆる手段を尽くして守った。彼のイメージの中では、IOCはいかなる外部の干渉も許さず、一切の凡庸さを避けるものでなければならなかった。

見て取れるのは、IOCが堂々たる非妥協性を保持し、完全な独立性を享受することを確実にしようとするクーベルタンの意図である。この独立性は、政府やスポーツの協会、連盟からの独立、そして人とその些細な利益の凡庸さからの自由を意味するものである。

設立のそもそもの始めから、国際オリンピック大会委員会は、これは1897年にIOC(国際オリンピック委員会)になったのだが、その設立者によって財政的、政治的不測の事態から守られていた。

その憲章は委員会を安全なところに置いている。時代錯誤の憲章は、民主的基準に合わず、歴史の流れに逆らうものであった。

我々が見たように、IOCの大いに誇示されている自由は、貧しくあることからの自由であった。政治的な自由は絶対的なものでなければならなかった。

その結果、メンバーは知的、道徳的、経済的独立性を唯一の基準に、選ばれたり、選ばれなかったりした。

この自ら宣言した指導者は、そのような人物は卑俗な経済的窮乏から自由な、上流社会の特権階級の中でのみ見つかると考えていた。

メンバーの任期は制限がなかった。更新や選挙のプレッシャーはなかった。

先ず選挙で選ばれたのではないので、彼らは感情的な反応が当てにならない移り気な一般市民に報告する義務がなかった。

彼らの唯一の機能は、優れた人々から成る超国家的経営陣への代表として行動することであった。彼らの役割は、それぞれの国の顧問として振る舞い、地元のスポーツ協会や連盟を鼓舞することにあった。

彼らは現存のスポーツの組織に巻き込まれることは控えたが、国内オリンピック委員会を設立することを奨励した。

彼らは上から送られてきた。言わばIOCという神の使節であった。

IOCと外部との関係の全ては、細部にわたって独立性の典型的な性格を反映していた。

IOCは国際競技連盟、各国国内オリンピック委員会、そして大会組織委員会から距離を保った。

IFとの関係は階層的なものではなかった。IOCは論議されているスポーツ分野の問題に突然決定を下す「上位の評議会」ではなかった。

現代は、スポーツに適用された商業活動の時代である。従って、IOCは共通の大義の利益のための自由な協会であった。

規則の統一はIFの責任であった。過剰な愛情は避けなければならなかった。つまり、国際主義が優越すべきで、これは(貧弱な四海同胞主義や人間愛よりも)競争の精神を前提とし、競争関係を受け入れるものであった。

同じことが、IOCとNOC及び大会組織委員会との関係にも言えた。IOCは「全ての完全な自由」を享受し、NOCと組織委員会は提案の自由をもった。

IOCの独立を更に主張し拡充するために、大会が巡回して開催されるようにした。

つまり、大会はある一つの国の占有物ではない、ということである。

「オリンピックのギリシャ化」は息の根を止められた。

結局、憲章公布と一連の儀式の導入－毎年のセッション、周期的なコンGRES、儀典、国王や大統領の公式会見－などによって、オリンピックムーブメントは、国際主義の超越した精神によってその独立を確かめた自立した国際組織であり、それ自身で一つの世界(文化)であることを示した。

しかしIOCの独立は、本質的にはそのメンバーの非常な卓越性によって動かぬものとされねばならなかった。

クーベルタンは例え自分の同僚をメンバーに指名することを避けても、この高いレベルを維持しようとした。

IOCのメンバーは理想に仕える「働く外交官」であり、また「強力な団体の不屈の働き手」であった。彼らはNOCをつくり、信頼できるものを集めなければならなかった。彼らが尊敬に値することが、尊敬を招くことになるだろう。

彼らの仕事始めとより以上の教育のために、IOC会長によって発行される回状と「オリンピック・レビュー」(全てクーベルタンによって書かれた)を自由に使うことができた。「オリンピック・レビュー」の教育的な記事は「瑣末なレポートとニュース」を含む「オフィシャルパート」によって補完された。

メンバーは回状とオリンピック・レビューの配付に個人として責任を持たされた。

彼らは新聞に対して注意深い、時として対立する関係を維持した。

独立と卓越性！クーベルタンの願いによって考え出されたIOC全体の組織と構造は、この相関する二つの文化概念の現実的な適用の結果である。

しかし特別の注意に値するもう一つの重要な事項があった。それはIOC創設以来付きまとっていた問題であるという理由からだけでも重要であった。

即ち、「アマチュアリズム」の問題である。

それは繰り返し発生する問題であった。そしてこの世紀の終わりを特徴付けた西欧社会の階級闘争と民主主義の発展の影響のもとに展開したものであった。

それは金銭問題に直面したときの、人と社会の独立(或いは疎外)と卓越性(或いは純潔性)の概念の矛盾を暴き出すものであった。

この問題に、我々は1914年以前のオリンピックムーブメントの研究の最後の部分を当てるであろう。

「この問題が決して私を悩まなかったことを、今日、私は認めることができる。」

これは1932年に行われた、重大な告白である。しかし、これは年老いたスタイリストの単なる気まぐれな流し目といったものではないのか？

彼がどう書いているにせよ、クーベルタンはいつもアマチュア問題についての対立の最前線にいたのではなかったか。とくに1894年から1914年の間？

「この問題」に関する介入と干渉の長い歴史が、我々にそう思わせずにはいない。

まず、1894年の kongress があった。更に重要なのは、西欧でのスポーツの発展の時期にはプロとアマチュアの競技者を区別することが難しかったことである。

クーベルタンにとっては、スポーツの普及はスポーツの国際化を意味した。

そして国際化とは世界一のイギリススポーツとの結びつきを意味した。そしてそれは必然的に、イギリスアマチュア体育協会の規則に対立することにならざるを得なかった。

ロイヤルヘンリーレガッタの主催者が遭遇した困難と、お祭り、エキジビションの線で組織された第一回オリンピック大会におけるプロ選手の存在は混乱を招き、情勢をハッキリさせ、何らかの合意を見つけないければならない状況に追い込んだ。

1892年と1894年の記念すべき年の間、1893年のUSFSA総会の声明で、クーベルタンがアマチュアリズムの問題に強硬路線を採用したのは偶然ではなかった。

それは、フランスのスポーツマンにとって「全ての不純なものを避けることが重要である。」というものであった。

1894年の kongress を招集するに当たっての、各協会に対する彼の呼びかけの中では、「スポーツに対する決して両立しえない二つの態度のうち何方かを選び、アマチュアとアマチュアリズムについての」複雑な規則を改めるように要求した。

しかし、kongress 開催の数日前に、彼は態度を和らげ、非妥協的な態度では何も解決されないだろうと言った。

例え、「アマチュアリズム、この現代防腐技術の見本としてブーラック博物館に飾るべき素晴らしいミイラ」が1894年 kongress を招集する第一の理由ではなかったにしても、この簡単な観察によって、この問題が如何に世論を動員することができたかを知ることができる。多分、このことが翻って、クーベルタンのこの問題に対する態度を説明することになる。クーベルタンはアマチュアリズムの罠に捕らわれた。

最初のアマチュア憲章は、豊かな階級に非常に有利なもので、IOCを社会的な禁止条例の網の目のなかに閉じ込めてしまった。

そして、スポーツが今や労働者に開かれ、もはや働かなくてもよい財産を持つ人だけのものではなく、無視して、オリンピックムーブメントをイギリスのカースト制度に見合うものにしようとした。

こうして「アマチュア」は、「全ての参加者に」開かれた競技会には出場したことがない者、賞としての現金や賞金を受け取ったことがない者、プロの選手と試合したことがない者、スポーツ指導者、コーチとして給与を受け取ったことがない者と定義された。

他にも、失格や資格、賭の禁止、競技会の利益の配分についての多くの条項があった。しかしこれは僅かな譲歩であった。IOCは本質的にイギリスアマチュア体育会の反動的な観点に従っていた。クーベルタンはこの決定に対して戦った。

この決定の影響はそれ以後の四分の三世紀の間、IOCに重くのしかかることになった。

1902年にクーベルタンはこのことに関して全ての協会に質問状を送ったが、回答したのは僅かであった。1904年に「スポーティングライフ」がもう少しうまくやり、150の回答を得た。

フランス人IOC委員、ベルティエがこの回答を纏めたものをベルリン kongress で発表した。しかしクーベルタンは「アマチュア問題は行き詰まったままだ。誰も、時代後れの規則と不十分で挑発的な言葉のために起こっている行き詰まりを敢えて打破しようとはしなかった。」と記している。

1906年に彼は、アマチュアとは何であるかについての「より知的で、広範囲の、より正確な」定義をつくることを呼びかけた。彼は状況を完全に理解した上で行われる個人的な宣誓の制度の創設

を提案した。

1907年、アテネ国際オリンピック大会に引き続いて行われた多くの国際会議のあとに、利益と旅費の支給の問題が表面化しはじめた。

クーベルタンは1894年の決定に疑問を呈し、「社会階級的性格の」考慮は全て排除するように提案した。

アマチュアとは「直接にも、間接にも、身体的運動の競技或いは展示から些かも経済的利益を得たことのない者」となった。

勿論、この提案は「社会階級的性格の考慮」を完全に排除したものではない。

クーベルタンはもう一度、宣誓の導入を提案する。彼はこれを究極的な解決策と見ていたようである。

1913年、アメリカの選手ジム・ソープの失格のあと、クーベルタンは「アマチュアリズムを管理する規則の見直しが絶対に必要である」と主張した。

規則がしばしば無視される理由を分析して、彼はスポーツの観客を「アマチュアリズムの大敵」と非難した。そしてオリピズムによって発生した「愛国的プロフェッショナリズム」の危険を警告した。

彼の解決策は簡単である。即ち、国際的な免許と（またしても）個人の宣誓であった。

この悪を緩和しようとするクーベルタンの戦いは、第1次世界大戦によって起こった社会的な動乱に助けられて続く。やがて見るように、1925年プラハの kongress で彼は、このテーマを社会問題のレベルにまで持ち上げることが主張することになる。

1.7. 大会と人について

パリ、1900年 – セントルイス、1904年 – アテネ、1906年 – ロンドン、1908年

オリンピックムーブメントのなかに二重の正弦曲線の流れが展開した。

一方には、セッションと kongress の流れ、複雑な、時として対立する創造力が生み出すものがあつた。

一方には、これらの物事を決める因子と共存して、四年ごとのオリンピック大会、息をつく空間、休止があつた。この時教育的な改革の枠組みのなかで評価がされ、宣言が出されたが、実行に移されることは困難であつた。

この二つの流れは決して接触を失うことはなかった。二つはしばしば合流し、オリンピックムーブメントを強め、新しい弾みを与えた。同じ使命感に満たされていたのである。

記述の方法上の理由でオリンピック大会をセッションと kongress の生きた相互作用の織物から引き離すことは、理論と実際、夢と現実のつながりを破壊する危険を冒して即物的なアプローチを

することになろう。

大会をその構造的な基礎から引き離せば、我々は首尾一貫性を欠くことになることを承知している。それでもなお我々がそうする理由は、新しいオリンピズムの正当性によって立つ基盤を分析したいという願望のためである。そしてそれによって現代のオリンピズムが辿った道をより明らかにすることが可能になるだろうからである。

1.7.1 パリ大会 —1900年

官僚主義と凡庸さ

子供は1896年、未熟児として生まれた。頑丈な体質のお陰で何とか生き長らえた上、なくてもすんだかもしれない兄弟のギリシャ大会と共に祝福を受けることになった。

アテネは、地中海の祭りの中に素朴な音楽をとぎれとぎれに響かせた。

子供には生きる力があつたが、大変な世話と注意を必要とした。沢山の医師がそのゆりかごの回りに集まった。

1900年、子供は生き残り、今や、大きな都市が彼を待っていた。

これこそクーベルタンが望んだことであった。象徴を好んだ彼は第二回近代オリンピックを新しい世紀の零年に、世界の首都、彼の生まれた街、パリで開催されるようにしようと決心していた。歴史はつくられつつあった。

1889年の身体運動 kongress の経験が1900年大会の組織委員会に役立つはずであった。クーベルタンはそう考えた。しかし大いにがっかりしたことには、彼は目の前に政治的な争いと官僚的愚劣さの壁が立ちふさがるのを見なければならなかった。

委員会から委員会へ、会議から会議へ、オリンピックの計画は官僚的形式主義の網の目に絡め取られていった。

多くの紆余曲折の後、1897年のルアーブルの kongress が終わって初めて、「我々が第二回オリンピックアードについて考える時がやって来た」。

公式な委員会は二年間開かれていなかった。プログラムもコミッショナーのプランも何も知られていなかった。

博覧会の中の格付けを見れば官僚たちが如何にスポーツを軽視していたかが分かる。

怒ったクーベルタンは、「私的な委員会によって、一切の外部の干渉から自由な1900年オリンピックを組織する」ことを決める。ロシュフーコー子爵が会長に指名された。

シャルル・ド・ラ・ロシュフーコーはクーベルタンの幼友達であり、学友であった。

誰も彼のように「気高く威厳ある態度でフランスのオリンピックアード」を代表することはできない。

委員会が組織されるやいなや、クーベルタンはその目的を発表した。

大衆は「競技と博覧会の祭り」を見ることになる。オリンピック大会はエリートのために開催される。即ちエリートは世界の最も偉大なチャンピオン達からなり、観客のなかには「社交界の男女、外

交官、大学教授、将軍、学士院会員」がいる。

ゼネラルコミッショナーは、コンピエーニュ市長でコンピエーニュスポーツクラブ会長R.フルニエーサルロヴェーズになるであろう。

クーベルタンの考えによれば、博覧会行事の競技はその会場と会期全体に広がって行われなければならない。プログラムはアテネ大会のものに、貴族のスポーツ、ボクシング、ポロ、そしてアーチェリーが加えられた。

フランス・レーシングクラブやコンピエーニュスポーツクラブなど、首都の好意的なクラブがグラウンドや施設を貸してくれる筈であった。

いろいろなスポーツの世話役は最も高貴な家柄の若者がつとめるであろう。社交界のレセプションはフォーブルサントノレの個人の館で行われるであろう。

その間に、スイス、ベルギー、オーストリア、イギリス、アイルランド、スコットランドから、心強い知らせが届いた。

クーベルタンは自分の計画が大それたものだとは思わなかった。しかしパリ市当局はラ・ロシュフーコーの委員会は余りに貴族的すぎると考えて反対した。

政府は予算を削減した。

シャルル・ド・ラ・ロシュフーコーは委員会の会長を辞任し、「うんざりし、悩みながらも」クーベルタンが後を引き継いだ。

結局、最終的に公式の委員会の有能な事務総長としてメリオンが浮かび上がった。

クーベルタンは与えられた条件を最大限に利用した。

1899年 6月 5日にメリオン、クーベルタン、ビケラス、ブルネッタ・デュッソウが出席して会議が持たれた。

IOCが審判を提供するだろう。そしてクーベルタンは「将来のヨーロッパ」の「独立したベルギー人」のために中央ヨーロッパで行った調査を利用して、そこで会った人々にパリ大会が迫っていることを思い出させるであろう。

歴史家は、もしこの全く国内的な次元での典型的な「パリ風」の右往左往が、スポーツとオリンピックを悲惨な闇の中に置き、パリ大会の開催に破壊的な影響を及ぼし、スポーツの国際的な発展を妨げる、パリのお偉方の典型的なやり方を示すためでなければ、恐らく物語ることを差し控えるであろう。

外国人は相変わらず不機嫌で苦情が続いていた。ドイツ人は「選手たちの道徳的な安全性を」を恐れ、スローンはしかるべき責任者から何も返事がないのでアメリカチームを送らない、と脅しをかけた。

イエリ・グートは失望し、オーストリア人はIOC委員の席を要求した。

あるアメリカ人、H大佐は「アメリカ委員会の下にスポーツ博覧会」を開催することを提案した。

時間は差し迫っていた。メリオンは心配した。

クーベルタンはすべてのIOC委員に、1900年大会の開催がIOCの目的に叶っているという点で

確固として楽観的な回状を回した。各委員はエントリーを促すよう求められた。競技は 5月15日から10月15日までの期間に広がって行われるであろう。

この時間と人的エネルギーの浪費にもかかわらず、大会は1900年 7月14日、陸上競技で始まった。彼らはやり遂げた。

辛うじて受け入れることのできる妥協によって、第二回オリンピック大会は救われた。「博覧会の競技」はオリンピック大会として扱われた。

円熟した外交官であったクーベルタンは、7月19日のレスリングに出席した通商大臣、アレクサンダー・ミエランに対して、自分の内心の苦渋をおくびにも出さなかった。

幻滅した彼は後に、当時の政治家はスポーツの本質と実際について全く知らなかった、と書いている。

クーベルタンは他の出来事については、何も言わず、ただ「多くの善意が寄せられた」と慰めに書いているだけである。

選手はベストを尽くした。クーベルタンはこの失敗から、また彼らのアイデアが使われたが粉々にされた事実から教訓を学んだ。決して、二度と再び「オリンピック大会が大きな博覧会に依存したり、取って代わられるようなことを許してはならない。そこではオリンピックの哲学的価値は空中に消え、教育的価値が無に帰してしまう」。

最後に、彼は「スポーツの組織に公の権力が介入しようとする、必ず無能と凡庸さが入り込む。」と主張した。

1900年のパリ大会が凡庸なものであったことには疑いがない。

1.7.2. セントルイス大会 -1904年

博覧会と新世界

クーベルタンは二度と同じ間違いは繰り返さない、そして将来オリンピズムが「パリで嘗めたような屈辱的な役割を演ずることはない」と心に誓った。

それでもなお、更に二つのオリンピアドが同じ危機を経験しなければならなかった。まだ世の中にほとんど受け入れられてないオリンピック大会は、世紀の大商業博覧会のポピュラーなアトラクション部門に格付けされていた。

1904年の大会も例外ではなかった。

ソルボンヌのコンGRES(1894)以来、ある暗黙の了解があった。それはクーベルタンがあれほどに賛嘆した新世界の鏡、スポーツが確立されつつある広大な大陸アメリカで、近代オリンピックがなるべく早く開催されねばならないということであった。

それによって、フランス・ヨーロッパで発案されたオリンピックが世界的な次元の広がりを持つことができる。

クーベルタンは彼の創造のプロセスを「最初の三位一体」の上に置いていた。

彼がアメリカの代わりにイギリスをこの最初のグループに入れなかったのは幾分不思議である。多分彼は、永遠のギリシャと自分の国フランス、そして彼が心から賛嘆する北アメリカに名誉を与えたかったのであろう。

しかし何故彼はアーノルドとブルークス博士の祖国を忘れることができたのだろうか？ 戦略的アプローチを行おうという彼の決意だけが、その選択を説明できるようである。即ち、IOC会長ははるか遠くを見通し、イギリスの現在の力よりもアメリカの政治と経済の長期的な未来に賭けることを選んだのである。

オリンピックムーブメントを導く際に、クーベルタンは地政学的なアプローチを見せるのが常であった。それ故に、彼はオリンピックが大西洋を渡るのを喜んだ。

シカゴが直ちに候補市として名乗りを上げた。早くも1900年 7月には、パリ発の「ニューヨークサン」の記事がこの可能性について報じている。

1904年にシカゴは「数人の勇敢な猟師達がこの地に建てた丸太小屋の一群」を記念して市の創立百周年を祝う。

シカゴ市当局、大学総長ハーパー博士、博士とはクーベルタンは1893年のプレオリンピックツアーのときに会っていた、「熱心な宣伝家」でクーベルタンが好意を寄せていた数少ない外交官の一人、フランス総領事メルレー、そして法律家で米仏友好協会会長チャールズ・ブレアルの息子、ヘンリー・ブレアル。これらの人達はIOCが調査段階で主催者に期待する真剣なアプローチの完全な保証となった。

クーベルタンはハーパー教授に特別の敬意を抱いていた。彼はハーパーが百万長者プルマンの寄付のおかげで設立された大学をどのように経営しているかを知っていた。

新世界では時間は無駄にされない。1901年 2月13日、宴会がハーパー博士主催で開かれた。1904年大会にシカゴが立候補するための臨時委員会ができ、H.J.ファーバーが委員長になった。1901年 5月10日、シカゴの立候補届けはクーベルタンの机の上に置かれた。

大学の競技場が無料で大会に使えることになった。詳細な予算が作られ、大会、芸術イベント、コンGRESのプログラム原案の制作が進められた。

全ては能率よく行われて、四年前のパリで起こったぐずつきは見られなかった。

しかし何ということか、誰も、アマチュア体育連盟事務局長、ジェームズ・サリバンとの扱いにくい態度を考慮に入れていなかった。彼は1900年の「ニューヨークサン」の記事に既に反応を示していた。1901年彼は宣戦を布告する。インタビューで彼は、1900年の大会の時にパリで、ある国際連合が結成されていたことを明らかにした。

設立者は、アメリカ代表がジェームズ・サリバン、フランスがジョルジュ・ド・サンクレールとピエール・ロア（パリに住むケベックカナダ人でアルザスの学校のスポーツ協会設立者）、スウェーデンがベルグ中尉であった。

そしてクーベルタンは、次のような通告を受け取った。彼はもはやIOC会長ではなく、スポーツ界において何者でもない。次のオリンピックは1901年、バッファローで、サリバンがスポーツコミッションを勤める博覧会と同時に開催される。

1900年12月12日既に、W.M.スローンはクーベルタンに、何かが起こっていると警告していた。

ベルグはそのような陰謀に加わったことを否定した。サリバンはニューヨークの新聞で非難された。この件がしばらく続いたという事実は、オリンピック大会がアメリカに来ることによって引き起こされた歴史的、経済的な関心を示す一つの例にすぎない。

IOCは、5月21日シカゴをオリンピック開催都市に指定した。オリンピックセッションはパリの自動車クラブのレセプションルームで開かれた。

シカゴは選手の旅費の負担に同意した。

セントルイス市が委員会に対して、博覧会の開会を1904年に延期したと通知していた事実があった。これはオリンピック大会と同じ年の開催となり、もしシカゴが断念すればセントルイスで大会を引き受ける意思があることを示すものであった。

しかしこの決定の明朗さに影をおとすものがあるようには見えなかった。

クーベルタンは次のように記している。「全ては上々のスタートを切った。」

シカゴ選択の発表に市は大喜びした。大学のマーシャルフィールドキャンパスでは学生たちが巨大なかがり火をたいた。

1901年 5月28日、クーベルタンはマッキンリー大統領にオリンピック大会の主催者になってくれるように頼んでいる。大統領は引き受けそうにみえた。しかし彼は 9月 6日、バッファローのパンアメリカ博覧会の開会式で狙撃され八日後に死去した。

セオドア・ルーズベルトが後継者となった。ルーズベルトはボートマン、ハンター、きこり競技者であり、本物のスポーツマンであった。

彼はクーベルタンの友人であり、親しい手紙のやり取りを続けていた。

そうしたわけで、彼はIOC会長の求めを受けるものと思われた。

ところが彼は、1901年12月 7日に正式の依頼を受けたとき「オリンピック大会と政治の関わり」をつくる印象を避けるために要請を断った。

そのころ、シカゴのギリシャ総領事サロプーロ某が熱心の余り、大会はギリシャ国王によって主催されるであろうと発表した。これは如何にギリシャ人が近代オリンピックの祝典に文化的な存在を示したいと望んでいたかの証左であるが、アメリカの大衆は怒った。大会はアメリカ合衆国の大統領によって主催されなければならない。

ルーズベルトの断りを受けたクーベルタンは、組織委員会会長ファーバーの 5月 6日付けのアメリカ大統領の好意的な態度を伝える手紙に励まされて、もう一度トライしてみることを決心したようにみえる。

クーベルタンによれば、セオドア・ルーズベルトは1902年 5月28日、「自らアメリカのオリンピアドを開き、陸軍と海兵隊を参加さす」ことを約束した。

情勢はひどく曖昧であった。休暇中のクーベルタンはアルザスのロタンの家にファーバーを迎

えた。ファーバーは心配しているように見えた。

11月26日、ファーバーは長い親書を送った。またもう一度最初から始めなければならない。セントルイスが動きだした。

二つの都市の間の長いライバル関係にもかかわらず、シカゴとセントルイスは何らかの合意にたどり着けそうに見えた。二つの委員会の協定でシカゴ大会の観客はセントルイス博覧会にも行けるようにできると考えられた。

しかしセントルイスにとってはこれでは十分でなかった。セントルイスは大会を開催することを要求し、選手に「莫大な賞」を約束した。

困惑したファーバーは、大会は1905年まで延期し、シカゴで開催されるとして両者を説き伏せた。アメリカ大統領がIOCの同意を得るために詳細な説明を受けるであろう。

ボールは今やIOCのコートに投げ返された。クーベルタンは、1893年に訪れたときのセントルイスの悪い記憶と大会が貿易博覧会の付属物になることへの嫌悪感にもかかわらず大会を移すことに同意した。

用心のために、彼はセントルイス博覧会とアメリカ体育連盟の責任者にオリンピック大会の自主性を保証するよう求めた。何よりも彼はパリ大会での前例が繰り返されることを避けたかったのである。

用心深く、彼はセオドア・ルーズベルトの意向を打診し、そして―これは進行中の民主化の重要な印であるが―1902年12月23日、IOC委員に移行についての意見を聞いた。

彼の報告によれば、26人のメンバーのうち21人が投票し、14が賛成、2が反対、残りの5が棄権であった。

この結果に勇気づけられて、クーベルタンは1902年12月23日、この件を非公式にセオドア・ルーズベルトに提案した。ルーズベルトは「移行に賛成した」。

一件は落ち着いたように見えた。ルーズベルトの決定は自発的な確固たるものであった。

バーニーはこの説明に抗議している。バーニーの発言は注意に値する。

彼はクーベルタンのところに届いたのはIOC委員のうちの7人、ブロナー、リボピエール、デュッソウ、グート、デル・カンポ、メルカティ、ブラックからの回答であったと主張している。他の7つの回答は不賛成であった。

さらに、クーベルタンは26人のメンバーと言っているが、1902年12月にはIOC委員は28人であった。

1903年12月2日、クーベルタンはファーバーに電報を打った。「開催地変更は受け入れられた」。ファーバーは返信で同意を知らせた。

その間、2月11日にクーベルタンはシカゴの組織委員会に手紙を書いた。

彼は遅くなったことを詫び、IOCのメンバーに相談しなければならなかったと述べた。そして大会を1905年に延ばすことは不可能であることを確認した。

彼は組織委員会のメンバーの理解に感謝した。そしてゲップハルトとケメニーを「大会の組織委

員への我々の願いの秘密の使者」としてアメリカからのIOC委員として加えた。「秘密の」というのは、IOCはアメリカの組織の弱さになるべく注意を引きたくなかったからである。

何故、クーベルタンはセントルイス大会に参加しなかったのだろうか。

彼は、1904年 3月13日に、11月の閉会式に出席する意図を表明していた。彼は交通手段が整うのとドキュメントの発行を待っていたのだと言っている。彼が行こうと思っていたことは確かなようにみえる。それでもなお彼はセントルイスへの旅をしなかった。

26年後に書かれた本の著者クーベルタンの、旅行者としてこの旅ができなかったのは本当に残念だったという言葉を受け入れるのは難しい。

また我々は、あれ程アメリカを愛したクーベルタンの欠席を人種差別への抗議の姿勢を示すものと解釈すべきなのだろうか。「人類学の日」が大会の公式プログラムにのっておらず、彼が抗議したときの理由は人種がまぜこぜにされているからということであった。

この年、クーベルタン一家は夏のバカンスをバイロイトで過ごした。彼らはワグナーを非常に好んでいた。

アメリカ大陸で初めて行われたセントルイス大会はスポーツ行事として成功で、世界博覧会に参加した人々の利益にもなった。しかし残念なことに、彼らの記憶は「人類学の日」のために汚されてしまった。それが公式プログラムではなかったにもかかわらず。

しかしそれはアメリカ合衆国の、まだ1904年のことであった。

1.7.3. オリンピックアテネ大会 – 1906年

ヘレニズムと近代性

それは意思の戦いであった。

一方はギリシャ人の、というよりはギリシャ世論と王室の。そして一方はクーベルタン自身の。

前者は相続権と歴史的権利に基づいて、古いブドウの木に新しい血統を継いでオリンピック大会をもう一度永久にギリシャのものにしようとした。

後者は自分の仕事を国際化しようという意図から、オリンピック大会を四年ごとに、五つの大陸を巡って世界で開催されるものにしようとした。

クーベルタン一人が考えだし、組織し、指揮した1894年の kongress は、勿論のこと、この国際化の原理を受け入れねばならなかった。

しかし1896年大会の成功の後、ギリシャのジョージ国王とその内閣は、我々がすでに見たように、オリンピックが四年ごとにアテネで開催されることを望んでいた。

1896年と97年の劇的な出来事がこの件を背景に押しやっていたがまだ強く生きていた。

1901年のパリセッションで問題はもう一度持ち出された。

ドイツ代表団は、アテネを恒常的なオリンピック会場とすることに賛成であった。

結局、クーベルタンからの提案で、アテネのオリンピック大会は四年ごとに公式のオリンピック大会の間に開かれることになった。

トルコとの戦争が終わり、ギリシャの世論は新聞に煽られて再び盛り上がった。

アペロフの莫大な遺産のお陰で、アテネ競技場は1900年に改装されていた。

同じ年10月、その競技場で古代オリンピックに則った学生たちの競技会が開催された。同じような大会がオリンピアでもエピダウロスでも開かれた。

アテネでは学生の大会に加えて、「パン・ヘレニック大会」が四日間にわたって開かれた。国王は毎日臨席し、愛国的感情が盛り上がるなかで「新しいオリンピックの問題は委員会会長コンスタンチン皇太子によって解決されなければならない。」と述べられた。トゥルナー博士によれば、1901年のイースターに、ドイツ、デンマーク、スウェーデン、アメリカの体操家たちはオリンピックは四年ごとにアテネで開催されるべきだと合意していた。そして1903年のジョージ一世戴冠40周年を記念して1903年に開催されるアテネオリンピック大会に参加することを決めていた。この大会は開催されなかった。

1905年にアテネのスタジアムで行われたパン・ヘレニック大会は、1901年のパリ合意に基づいて開催される1906年のアテネオリンピック大会のいわばドレスリハーサルであった。

この1906年大会は例外的な注意深さで組織された。献身的な側近たちに助けられて、コンスタンチン皇太子はギリシャ王室に対する民衆の支持を固めるという狙いに最大の注意を払った。国は40万ドラクマを献金し、14の記念切手の発行を認めた。

1905年12月、プログラムが発行され、1894年の大会に参加した国々に発送された。委員会があったメラハウスの火事で第一回大会の記録が焼失していたにもかかわらず。

スタジアムへの入場券が作られ、75フランで売られた。これをもっている者は全ての競技を見ることができ、乗り物とホテルの割引を受けることができた。

スタジアムのトラックは古代のデザインは保持したまま、イギリス人、フェリーの監督のもとに再舗装され、シンダートラックになった。

競技のプログラムはいわゆる重要なものだけに整理され、11競技77種目になった。

917人の選手が20カ国から参加した。彼らはザッペイオンに泊められた。独創的かつ適切なアイデアで、ここに我々は後のオリンピック選手村の芽を見ることができる。

競技は完璧な秩序をもって行われた。審判の質は高く、抽選で選ばれた。

三位までの選手の国旗が三本の旗竿に掲げられた。不平は全く聞かれなかった。

儀式は古典的な文化と王室典礼に見合うものであった。

ジョージ国王は1906年 4月22日、6万人の観客の前で開会を宣した。同じ数の群衆がアテネの通りとアルディトスの岡に群がった。ギリシャのもてなしは素晴らしかった。

国王が範を示された、「ギリシャはその腕を開いて、体育教育において優れた人達、文明世界の隅々から集まってきた人達を歓迎する」。賞は最後の日、ジョージ国王によって与えられた。そこにはイタリアのウンベルト国王、フランスのアルマン・ファリエール大統領が臨席していた。

大会の結果は極めて満足すべきものであった。世界の新聞はこぞって褒めたたえた。

スポーツの重要な要素である巨大な観客、公正な審判、王室の歓迎、アッティカの人達の歓迎が、クーベルタンに反対にもかかわらず、1906年のアテネオリンピック大会を近代オリンピックムーブメントの偉大な瞬間の一つにしたのである。

1.7.4. ロンドン大会－1908年

フェアプレーの意味についてのさまざまな議論

IOC委員に送られた回状の中で、クーベルタンは「ローマで起きた、秘密にしておかなければならないある特別の困難」のために、IOCは第四回オリンピック大会(1908)をロンドンで開催する認可をイギリスオリンピック委員会から得た、と発表した。

クーベルタンはロンドン大会についていくつかの文章を書いている。

1908年 8月の「オリンピック・レビュー」と「21年間のキャンペーン」で、彼は失望したことを強調している。マラソンのドランド・ピエトリの失格、何人かの自転車選手の制限時間後の到着、陸上のトラックへの侵入が絶えなかったこと、外国代表の「名誉委員会」に率いられているにもかかわらず国内審判が経験不足だったこと、ポイントによる競技種目の区分け(国の区分けでなく)があったこと、この区分けのシステムに関して競技種目のグループごとの不平等、そして芸術競技の開催に対する軽蔑的な態度！

しかしクーベルタン自身が指摘しているように、全ての国からの予想を超えた大勢の選手の参加を考えれば、これらのできごとが意図的なものでない限り、たいしたことではないとすべきだろう。それ故、彼はしっかりと肯定的であろうと決心した。

彼はマラソンの完璧な準備について、体操の七種競技の素晴らしさについて、第四回大会を真の国際競技会にした優勝者の普遍性について記す。

このオリンピアードは「アマチュアリズム」の観点から見て純粋なものであったか？

クーベルタンは「心から」そう望んだ。もしそうでなかったら、責任は大国主義的な世論にある、と彼は付け加えている。

「オリンピックメモアール」の中でクーベルタンは、1906年のコンフェレンスで決められた芸術コンテストを組織委員会が実施しないことを知った時にIOCが感じた失望を強調している。しかしそのコンフェレンスが希望したものの一つ、選手の行進は実行された。しかし「もし軍楽隊によって演奏された大衆的な調子でなく、あの比類ないヘンデルのカンタータがイギリスの優れた大合唱団によって演奏されたのなら、どんなにか完全な効果を上げただろう」。

陸上競技では、アメリカとイギリス選手の争いが激しく、ほとんどの種目でアメリカが勝った。帰国にさいして、アメリカの選手はボール紙製のイギリスライオンを引っ張ってパレードし、憤激を買った。

ジェームズ・サリバンはこの機会を捕らえ、もう一度変節して、IOCの解体を呼びかけたが、誰も相手にしなかった。IOCはすでにあまりにも強力になっていた。

水上競技はやや興味に欠けていたが、ヘンリーとワイト島沖で行われた。

ロンドンの夏の大会には冬のおまけが付いていた。ボクシング、アイススケート、サッカー、アイスホッケーが1908年10月に行われた。

沢山のパーティーがあった。記録的な数で、これは破られることがないだろう。「250人から300人の大宴会が6回、大舞踏会そして至る所でレセプション」。

最初の日曜日、セントポール寺院で礼拝が行われた。ペンシルバニアの主教が今日まで残る有名な説教を行ったのはこの時である。「オリンピックで重要なのは、勝つことではなく、参加することである。」

絶えず引用されるこの言葉は間違ってクーベルタンのもものとされている。

確かに、クーベルタンはイギリス政府のレセプションで行ったスピーチでこの言葉を取り上げ、更に補って言った。「人生で重要なのは、勝利ではなくて戦いである。大切なのは、勝ったかどうかではなく、よく戦ったかどうかである。」

IOC会長であり、オリンピック大会の創立者であった彼の心の中で重要なのは、疑いもなく、「良く」戦うことであった。

IOCの仕事はオリンピックの理念を維持することであった。その理念は善に仕える男性的な力の騎士道の理想を思い起こさせるものであった。

選挙による民主主義の時代に、それは時代錯誤の団体ではなかったか？

イエス！ しかしそれは必要な団体であった。献身的な努力を確保するために政治の争いから守らなければならない小さな島であった。その創立者にとって、IOCはオリンピックの理念の守り手であった。

クーベルタンはロンドン大会の成果を歓迎した。初めて、組織上の規則が発表された。組織委員会はよく機能した。フェアプレーとアマチュアリズムが勝利を収めた。

いくつかの国家主義的な熱狂の行き過ぎがあったにもかかわらず、IOCの権威は今や疑問の余地がなかった。

イギリスオリンピック委員会の組織委員には時間がなかったが、王立芸術アカデミーの会長サー・エドワード・ポインターによる準備報告は、将来の芸術競技の基礎となる筈であった。

何故なら、目的は未だに、そして常に「スポーツをするラスキニズムの形をした習慣と本能を全ての国民の間に広げることである。もし大胆な表現が許されるならば。」

もし「スポーツ教育学」が行動と道徳観に変化をもたらす上で大きな助けとならないなら、オリピズムは何ものでもないだろう。「私はそれ故に、私の信念と希望の一かけらたりとも放棄しなかったのだ。」

ロンドン大会とその成功はクーベルタンが生涯を捧げた教育改革を助ける筈であった。

1.7.5. スtockホルム大会ー1912年

より早く、より高く、より強く

IOCは強くなった。アメリカではサリバンが消えた。アテネでは、中間大会が基金の不足のために消滅しつつあった。一度は反旗を翻した自転車とボートが復帰した。

全てがストックホルムにとって良い兆しであった。ブラックとローゼンが大会に対する全責任を負い、効率良く組織するであろう。

しかし、最も愛らしい薔薇も刺を持っている。ロシアとオーストリアがフィンランドとボヘミアの存在に抗議した。というかむしろ、彼らがフィンランドとボヘミアの旗の下に参加し、国別選手団の順序で行進することに抗議したのである。

「スポーツ地図」の支持者で、ポーランドとアイルランドの参加を望んでいたクーベルタンは、ロシア皇帝とオーストリアーハンガリー皇帝と相談して、なんとか受け入れ可能な解決策を生み出した。つまり、チェコ人は彼らのオリンピック委員会の旗の下に行進し、優勝した場合はフィンランド或いはチェコのペナントをそれぞれロシア、オーストリアの国旗に付け加えるというものである。

これは「刺」であった。しかし何と美しい花が咲いたことであろう。

「スウェーデンの夏がこれほど美しかったことはない。」

クーベルタンが喜びをもって記しているように、大会は参加者の数でも、参加国の数でも、観客の数でも大成功であった。

更に彼は、オリンピックのモットーが単なる建物の正面の飾りでなく、IOC委員の日々の行動に浸透したと思われるとまで書いている。

いくつかの大会は後戻りを示したけれども、ストックホルム大会は新しいオリンピズムの発展の上で一つの里程碑となるものであった。

成果を見てみよう。まず、スタジアムの建築である。ビオレルデュックの弟子の才能豊かなスウェーデン人の作品であった。近代オリンピックで初めて、多目的建築の概念が適用された。

いくつかの「ショウチーム」がいたものの、選手の数には印象的であった。

比較的に観客の数は少なかったが、これは間違いなく入場料が高すぎたためである。

組織は完璧であった。ブラック大佐と事務総長、J.S.ヘルストレーム、「強い個性をもった」この二人は、皇太子の「積極的な関心」のお陰を被った。成功の核心は疑いもなくオリンピックの大義のための最初の戦士の一人、ブラック大佐にあった。

スポーツ精神についてはどうか？

ほんの二三の事件があったにすぎない。寛容の精神の印として、大陸の体操家はそれまで「非妥協的なスウェーデン方式の主張者によって断固として拒否されていた」バーを設置することができた。

また選手たちの間に非常に友好的な関係を見るのは心励まされる光景であった。

「オリンピックの平和」はまだ、圧倒的ではなかったが、支配的になってきた。

初めて、マラソンで選手が死んだ。明らかに日射病の犠牲であった。

オリンピックの新種目で、先ず何よりも教育者であったIOC会長を喜ばせたのは、近代五種であった。この五種目からなる競技は、古代オリンピックに靈感を得たクーベルタン自身の発明であった。これは最初多くの反対を受けたのであった。

彼は、今回のこの提案の成功を褒めるに言葉に窮するほどであった。

42人のエントリーがあり、スタートラインに並んだのは10カ国を代表する30人であった。クーベルタンは「素晴らしいスタートを切った」と考えた。彼は戦慄を覚えた。

信仰の人クーベルタンが更に感動したのは、観客が一斉に繰り返す祈りで大会が開かれるのを心静かに見守ることができたときであった。

その祈りは、人々の間に平和と善意を広げるために、騎士の戦いに参加するよう地上のすべての子らに呼びかける神への、普遍的な祈りであった。

芸術と文学の競技は対照的に失望に値するものであった。

更にその結果は、スウェーデンの芸術家が彼らだけで、仲間うちの第二の小さな競技会を開催しようとしたので余計貧弱なものとなった。

クーベルタンはジョルジュ・オーロードとM.エッシュバツハのペンネームの下に書いた「スポーツへの讃歌」に対して賞を受けた。これは「高度に文学的で非常にスポーツ的な形式のうちにスポーツを讃えるもの」であった。

何故クーベルタンが仮名を使ってとはいえ、自分でそのような文学競技に出たのかは謎である。彼はスウェーデン側、特に王立アカデミーがそのような競技を開くのに積極的でないのを見て、必要な作品の数を満たそうとしたのであろうか？

それとも単に、詩を書くことによって得られる心の平安を求めたのであろうか？

いずれにせよ、この競技が「素晴らしいものだとは言えなかった」にしてもそれは「第一歩」であった。

それが肝心なことである。我々はストックホルムで芸術競技を実現するためにクーベルタンが戦わなければならなかった困難なとげとげしい戦いを忘れるべきではないだろう。

組織委員会の議事録にこうした論争の証拠が見える。クーベルタンは芸術と文学の競技がプログラムの入らなければ大会に参加しないと脅しをかけたことを思い出そう。

閉会に当たっての王室の宴会のスピーチで、クーベルタンは大会が素晴らしいものであったと褒めたたえた。ストックホルム大会は「ショウマンシップの芸術と技術的完全さへの志」が最も素晴らしいやり方で結び合わされていたが故に、歴史に残るであろう。

ストックホルム大会は、スポーツが「古代から引き継がれた人間的な平衡を達成するもの」と「騎士の時代から引き継がれた社会教育に資するもの」という二つの役割を果たすことを示したという

意味で、大成功であった。これらの言葉は長い中世の伝統の継承者であるスウェーデン人の耳にとりわけ快く響いたであろうことは間違いない。

クーベルタンは古代のギムナジウムだけでなく、「あまりに無視され、理解されることの少ない中世の騎士の試合」にも目を向けるよう求めた。

慣例に従ってゲストは「第六回オリンピアードを祝して」グラスを上げた。

多分我々は「平和の時代における実り多き努力」という習慣的なアピールを、あまりに文字通り解釈することは避けるべきであろう。ヨーロッパには暗雲が立ち込めようとしていた。しかし平和主義者として、また人々と国々との間の平和を守ることをその目的とする超国家的文化団体のスポークスマンとして、クーベルタンは心の底から自分自身、そしてオリンピックの理想に対して忠実であったのである。

既に見たように、1913年、ローザンヌでオリンピックコンGRESSが開かれた。

1914年には空を満たす雷の閃光にもかかわらず、パリでは、オリンピック復興20周年を祝う盛大な祝典が行われた。

これはクーベルタンの基本的な態度を示すものであった。どんな歴史の変転があろうとオリンピックは不滅である。

1.8. 大渦巻きの中のIOC 1914－1918

1.8.1. 銃眼付き胸壁上のクーベルタン

1914年 8月 3日、第1次世界大戦が勃発した。

国際オリンピック委員会はどう行動すべきか、そしてとくにクーベルタンは？

平和を目的とする国際的、非政府組織の会長で、しかも疑いもなくフランス人愛国者であるクーベルタン自身はどう行動すべきであったか？

民族主義の高まり、バルカンにおける戦争の前兆、武装した平和の危険－こうしたものは一切、彼のオリンピックに関する書き物のなかには表れていない。

彼はヨーロッパの良識を信じていたのか？ 彼は心を安らかにする神秘的な世界に逃げこんでいたのか？ 彼はオリンピックムーブメントと彼自身を隔離することによってオリンピックを守ろうとしたのか？

「オリンピックメモアール」にも、彼の手紙にも、彼のスピーチにも、1914年 6月のパリコンGRESSへの寄稿にも、更にそのコンGRESSに参加する外国代表団に配付された「今日のフランスについてのメモ」の序言にも、彼は僅かな不安の気配すら示していない。

これらのテキストを基に、現代のオリンピックは同時代のドラマとは全く無関係であったと考えられるかもしれない。しかし実際は以下の報告に見られるように、クーベルタンは心の底から揺り動かされていた。

20周年の祝典は、リーム体育大学の人気スポーツの競技会で幕を閉じた。

1914年6月28日の夜、スタジアムのテントで夜を過ごすことを決めたクーベルタンは眠れなかった。「私は眠れなかった。不安に苦しめられ、一人で庭園を歩きつづけた。大火災と破局の幻影が私に取りつき、私は家々の上に浮かんでいる大聖堂のシルエットから目を離すことができなかった。水平線は美しく静謐であったが、私には水平線のあらゆる点から火の線が走って大聖堂の上に集中するのが見えるような気がした。」

この文章は、クーベルタンはこの偶発事件を知ってはいたが、心のなかに押さえ込むことを選んだのだと想像させる。オリンピアにおいては、彼は外の世界を完全に脳裏から消した。他の時には、彼は少なからぬ熱意をもって自分の世紀に参加した。彼は二つの顔、二つの生涯を持つ極めて特殊な個性であった。

そしてフランスが参戦した瞬間から彼の個性が表れた。彼は心底からの国際主義者、オリンピックの守り手でありながら、同時にドイツに対するフランスの戦争に肩入れする愛国者であった。

戦争の第一日から、彼はフランスに身を捧げ、軍隊に参加しようとした。

彼は高齢の故に断られた。公共教育相アルベール・サロウは、クーベルタンに「全フランス」を代表してフランスの小中学校を、宗派教義に基づく学校、基づかない学校の区別なく、訪問する役割を与えた。

このアイデアは「前線にあるもの」との愛国的連帯の感情を作りだすためであった。

お返しに、クーベルタンは「身体教育の改善と発展」という報告を書いた。

この報告書に、まだ動員されていない若者を軍事化するための、兵士としての身体準備の初歩的なポケットガイドのようなものを想像したとしても、おかしくはあるまい。

ところが全くそうではなかった。

クーベルタンはフランス政府に、長期戦略を作り上げるように提案している。

彼はあくまでオリンピズムに忠実であった。

クーベルタンによれば、今日そして明日の状況の中でキーマンは小学校の先生であった。彼らは臨機応変に、スポーツを広げることを教えなければならない。そしてこの使命に対して「国家体育教育基金」から賞金を出して、彼らを励まさなければならない。

彼は学校スポーツ協会の再活性化を勧告した。この協会は過去二十年間休眠していた。

彼のアイデアは、全ての生徒がジョルジュ・エベール中尉の等級証書に自分の成績を書き込むことであった。

クーベルタンは平和の人であった。この時たまたま戦争の人となっただけであった。

だから彼は、神と人の前に解き放たれたこの大変動を、文明は、いずれにせよ確実に乗り切るものと信じていた。

彼のこの地上での使命はオリンピズムにルネッサンスをもたらすことであった。
彼の義務は嵐の中でIOCの舵をとることであった。彼はコースを守らねばならない。

戦争中彼は責任を引き受けた。オリンピックに関する沢山の手紙が彼の親密な協力者ード・ブロネー、ド・クールシー・ラファン、スローンーとの間に交わされた。

これを我々は今日読むことが出来るが魅力あるものである。これによって、初めての世界紛争の重苦しい日々の、あまり知られていないIOCの日常に光を当てることができる。

彼は最初の数日間、ブロネーに対して、その時アッパーアルザスに足止めされていた継母、マダムロタンと身体の弱かった彼の息子ジャックがスイス経由でフランスに帰れるよう、ベルンのドイツ領事と共に骨折ってくれるよう頼んでいる。しかしその後、自分の財政的懸念に言及した一通の手紙を除いて、クーベルタンの1914年から1918年までの手紙は、1915年が一番多いのだが、全て戦時中のオリンピックムーブメントの管理と運営の問題に当てられている。

1914年に彼はド・ブロネーに、あるIOC委員がムーブメントの継続と制度の存続に懐疑的になっていると知らせている。名前は上げていない。彼は1921年に予定されたローザンヌ kongress の準備について心配している。

彼はブロネーに、ドイツ人委員、ベニンゲンが数日前に前線で死んだこと、リヨンが1920年乃至1921年の大会開催に興味を示していること、そして1915年にオリンピックセッションがベルンで開かれるだろう、と知らせている。

その間、ド・クールシー・ラファンはクーベルタンの近くに留まろうとしており、IOCの戦略がどうなるか心配していたようにみえる。

20周年記念のkongressが終わると、クールシー・ラファンはパリにおけるkongressと祝典の成功について満足を持って記している。彼はパブリックスクール以外のイギリスの世論は今やオリンピックの理念に対してより好意的になったと主張している。

嵐に直面して、彼はクーベルタンにIOCの会長を続けてくれるよう求めた。

秋の始めに、クールシー・ラファンはフランスの軍事情勢に懸念を表し、フランスの学校におけるクーベルタンの役割に興味を示す一方、戦争は長期化しそうなのでクーベルタンが会長職に留まってくれることに満足の意を表明した。

しかし彼は、クーベルタンが余りに騒乱から超然としすぎていると考えたのではなかろうか？いずれにしても、彼とイギリス人は1915年にスイスでIOCの会議を開くのは「危険」であると考えた。そのような場合、ドイツとオーストリアの同僚にどのような態度を取ったらよいのだろうか？クーベルタンは多分、アメリカ人の態度に力を得て、計画に固執するだろう。

スローンは、アメリカは1916年のベルリン大会開催をそのままにしておくのに賛成であるとクーベルタンに告げ、フィリピン of 極東オリンピック協会を紹介してくれるように頼んでいる。これはアメリカのスポーツ界がオリンピックkongressの決定を適用しようとしている印であった。アメリカもまだ平和であったのだ。

またクーベルタンがIOCを紛争の外に置き、その運営を司ろうとしている印であった。彼はスローにサンフランシスコ世界博覧会で公式に自分を代表してくれるよう頼んでいる。

しかしクールシー・ラファンは明らかにイギリス世論を反映して、クーベルタンに更に強く迫った。彼にとってドイツがベルンのセッションに参加するのは全く「考えられないこと」であった。圧力を強めて、彼はベルンセッションのキャンセルを呼びかけ、更に戦争が終わるまで会議を開かないように要求した。

彼には第六回オリンピックのベルリン開催はもはや考えられないことであった。

「通常の戦争」と「脅迫と皆殺しの戦争」との間に微妙な区別をする彼には、敵ドイツと「接触するのは不可能」と考えた。さらに彼は一ヵ月後、IOCの目的と理想は「ドイツの戦争遂行における野蛮な振る舞い」と全く相容れないものだとはっきり述べた。

もしドイツ人が固執するなら、IOCは不賛成を表明すべきであろうとクールシー・ラファンは続けた。そうでなければ、彼と委員の一人、クックは辞任を申し出るであろう。

それにもかかわらず、クールシー・ラファンはIOC会長の中立性は理解しうることを、暗黙のうちに示唆していた。

クーベルタンは、自分が断固として反ドイツの立場をとっていたので、クールシー・ラファンの議論に動かされたが、誰からも教えを受けようとはしなかった。

例えばイギリス国教会の聖職者の教えであっても。

彼は「名誉の授業」を断り、IOC会長の職を捨てることは論外である、と素っ気なく告げた。

こうしてクーベルタンは平和な時と同じようにIOCを運営していった。

同時に故国の戦線では、「兵士」でありつづけた。連合軍の大義の正しさを信じながらなお、オリンピックヒューマニズムに忠実な彼は、1915年初頭、フランスの若者に「十戒」を与えた。

勝利するフランス、文化的業績の人類への寛大な分配者へのアピール、憎しみと復讐の念の全く欠如した奇妙なアピールであった。

しかしIOCのは次第に難しいものになってきた。戦争の現実を無視しようとしても、彼は未解決の問題を解決しなければならなかった。とくにベルリンでの第六回オリンピックの大会開催という厄介な問題があった。

もしフランスへの献身に専心しようとするならば、彼はIOCの揺るぎない中立性を確立しておかなければならなかったし、会長職の辞任さえ考えねばならなかった。

アメリカとイギリスの圧力を受けて、クーベルタンはベルリン問題の解決から始めた。

スカンジナビアオリンピック委員会、ジョン・サリバンに率いられたアメリカオリンピック委員会、そしてイギリスのIOC委員がベルリン大会のキャンセルを呼びかけていた。

しかし「その頃戦争の早期解決と勝利を信じていた」ドイツ人はオリンピック開催返上を求めているはいなかった。従って混乱を避けるためには、時間稼ぎが大切であった。

原則の名において、クーベルタンは引き延ばしを図り、「オリンピックが祝われなくても番号は残る」ことを思い出させた。反対者は次々に去り、クックはIOCを辞任した。

クーベルタンが解決を迫られている問題が二つあった。第七回大会をどこで開催するか、そしてIOCの本部をどこに置くか。

第七回オリンピックの大会はどこで？ オリンピズムの間近な未来が問題であった。

決定は象徴的で、変転激しい歴史の中にIOCの存在を断固として主張するものとならなければならない。しかし「このような時に将来の祝典の開催に係わることは不適當であり、不作法なこと」ではなかろうか。

1914年のパリ kongress はアントワープとブダペストの立候補に決定を下すことなく解散した。クーベルタンは1914年10月リオンを訪問した際に、エドワール・エリオ市長に1920年か1924年の大会にリオンが立候補するよう説得していた。

1915年 9月 6日、エドワール・エリオのオフィスで、もしアントワープが第七回オリンピックに固執するのならリオンは立候補を撤回するという協定がサインされた。

アメリカからも申し出があった。

クーベルタンは1916年の大会をベルリンから移すことに反対していたので、「1920年大会か1924年の大会を他の地にしっかり根づかせること」が望ましいと考えた。

それで彼は新世界からの申し出に注意深く耳を傾けた。「アトランタ、クリーブランド、フィラデルフィアが何でも受け入れると約束していた。」

すぐあと、ハバナがアメリカオリンピック委員会の支持を得て立候補に加わった。

クーベルタンはこれをキューバのオリンピズムにとって利益であり、南北アメリカの南の部分にオリンピックの理念を広げる好い機会であると見た。そして彼らの願いが自分のものと一致したことをことのほか喜んだ。

南アメリカへのフランスの宣伝に責任を負っていた彼は、IOCの決定によって自分の愛国的使命が補完されるのを見て、やや曖昧なところがなくなかったが、率直に喜んだ。

我々が1917年のスペイン語の小冊子「オリンピズムとは何か？」とその表紙に三色旗の色をしたフランスの雄鶏を見ることになるのはそのせいである。

IOCの首脳として、クーベルタンはオリンピックの未来を守っていた。

オリンピズムは一時、ヨーロッパで地歩を失うかもしれないが、世界の他の場所でそれを補わなければならない。サンフランシスコの博覧会によってアメリカで。フィリピンそして広大なアジアで。

いずれにしても、「第六回オリンピックは祭典なしに過ぎ去るが、古代のやり方に従ってオリンピックを数えつづけるという考えに我々は慣れてきた。」

彼らは「待つて、成り行きを見守る」だろう。これこそアングロサクソン、ノルマン、そしてクーベルタンの真の美德である。

しかしもう一つの戦線では、クーベルタン自身が、IOC の生き残りにとって深刻な打撃となりかねない、具合の悪い状況に置かれており、迅速に行動しなければならなかった。

国際委員会の本部が戦争をしている国の首都に置かれていてよいものだろうか？

1.8.2. ローザンヌのIOC

以前1894年に、オリンピック大会のための国際委員会 (IOCの最初の名前) の本部は巡回することとし、大会を開催する国に置かれることに、全ての委員が合意していた。

クーベルタンの会長としての任期は1917年まで延長されていたが、ドイツが1916年からIOC本部をベルリンに置くよう要求することは考えられた。これは予想しうる危険であった。そして戦争中は、どんな小さな危険でも大事に至りかねなかった。

クーベルタンはIOCが生き残るためには静かさと安定が絶対必要であると考えていた。中立国への移転はオリンピックムーブメントにとって利益になる。

証拠の示すところでは、IOCをスイスに移す決定はクーベルタンが一人で行ったようである。ゴッドフロア・ド・ブロネーへの手紙で、クーベルタンは自分の後継者と目している人にこの「有益な小クーデター」について前もって知らせなかったことを詫びている。

彼はド・ブロネーが後でこの決定の共同責任を問われることを望まなかったのである。

明白な政治的、文化的 (中立、言葉と文化の共通性) 理由を別にして、何故スイスだったのだろうか？ 何故ローザンヌなのか？

このアイデアはパリの彼のオフィスの静けさの中で突然沸いたわけではなかった。

スイスはクーベルタンにとって常に、彼の夢見る文明のすべての美德を備えた土地であった。静けさ、美しさ、高貴さ、卓越性、慎ましさ、そしてスポーツのある生活。

根っからのヨーロッパ人旅行者であった彼は、ローマやバイロイトやクリスティアニア (オスロの旧称) から戻ってきて、よくローザンヌ、ジュネーブ、ノイシャテル、グスタードなどに滞在した。彼はスイスの郡や町レベルの中央集権的でない民主主義を評価していた。トックビルの教えに叶うことであった。

1915年 4月10日、市役所の会議場で地方行政官、ポール・マイレファールがIOCの本部と資料館のローザンヌへの移転を正式に登録した。

会長はパリにいて委員会を運営した。彼は同僚に対して、1915年のオリンピックカップを「最も傑出した」フェンシング協会の一つ、ゲントのサンミッシェル協会に与えるよう求めた。

同時に、彼はIOCメンバーにオリンピックの大義に対する「彼の全面的な献身」を保証することによって自分の存在を示しつづけた。

11月に、彼は軍隊への参加を希望した。彼は52才であった。彼はIOCの事務所を再編成するつもりだとド・ブロネーに示唆した。彼の立場は難しくなっていた。

戦争が終わる兆しが見えないので、彼はIOC委員に従軍の意志を伝えた。彼は兵士がIOCの会長であるのは「適当」でないと考えた。そしてスイスのIOC委員、ゴッドフロア・ド・ブロネー男爵を「臨時会長」に指名し、委員会の事務局を「親愛なる事務局長ブルネッタ・デュッソウ」の手に委ねた。

彼は委員会のメンバーにド・ブロネーを信頼するよう、オリンピズムの将来、全ての人の献身によって復興した「一時的ではない、何世紀にもわたる制度」に忠誠を尽くすよう求めた。その時以降、

少なくとも戦争が続いている間、新しいオリンピズムの管理センターはローザンヌに置かれることになった。

1.8.3. ゴッドフロア・ド・ブロネー —臨時会長 オリンピアのリベラルな文化人

ブロネーは近代オリンピズムの偉大な構築者の一人である。彼の重要さはクーベルタン自身の例外的な偉大さのために光を奪われてきた。

今や彼の思い出のために歴史は貢ぎ物をすべき時である。

ゴッドフロア・ド・ブロネーは長い間、喧嘩別れするまで、クーベルタンの最も忠実な、最も親しい友人の一人であった。ヴォードアの貴族の出で、彼の家系はクーベルタン家よりも古い家柄であった。クーベルタンは彼を尊敬し、尊重せざるを得なかった。

彼はゴッドフロア・ド・ブロネーを自分の特別アドバイザーとし、自分の跡継ぎとして大事に育てた。

ブロネーは上流階級出身者の器量と余裕を身につけていた。古典的教養人で、一切の経済的、政治的束縛から自由であった。彼は財産の生む利子で生活している19世紀ヨーロッパの名誉と資産を形作る特権的な「幸福な少数者」の一人であった。

クーベルタンとブロネーの往復書簡はIOCの資料館に保管されているが、量と質の点で例外的なものであり、非常にな知的やり取りを例証している。これが最近整理されたのはIOCの若いフランス人研究者、パトリス・ショレーのおかげである。

1904年当時、大会をシカゴからセントルイスに移す際、すでにクーベルタンはブロネーのアドバイスを求め、それに留意している。1905年以降、彼はブロネーにIOC内で存在を示すように励ましている。しかしブロネーの気持ちは定まらなかった。貴族でジレタントであった彼は、ロンドンセッション(1904,1908)にも、ブリュッセル kongress(1905)にも、アテネセッション(1906)にも、ブダペストセッション(1911)にも出席しなかった。

彼は1908年12月、辞任することさえ考えた。もし「運命が彼に不正な仕打ちをしていたら... もし彼がベルリンのセッション(1909)に出席出来なかったら、誰も彼の善意を信じなくなっただろう。」

事務局をしっかりとものにしなければならないと考えたクーベルタンは、ブロネーにIOCの財務担当官になるよう勧めた。彼はカロー氏(当時の財務担当官)が気を悪くしなければ、という条件で引き受けた。

1910年 6月27日、「秘密の」手紙で、クーベルタンはブロネーを後継者に指名した。

「もし私がこの[オリンピックの]仕事から離れなければならないとしたら、私を引き継ぐのは貴方次第だ。貴方が会長になり、ムシャを事務局長、ベルティエを財務担当官にするのが、この事業の将来を確かなものにする唯一の方法でしょう。」

1911年 1月25日、ブロネーは、役不足ではあるが、人が「ある役職をつくった」のだから、将来

はその役職が人をつくるでしょう、と答えている。

彼は現在の状態はそのままだが、「組織だったきちんとした事務局の設立」によって「ある日、本部の組織の多少の変更」が考えられるかもしれないと仄めかした。（これは将来の執行委員会の最初の暗示であったのであろうか？）

1913年のローザンヌ kongress については、ブロネーは組織委員会のメンバーであった。1915年1月10日、クーベルタンはブロネーに、戦争が彼の財産の三分の一を既に奪ってしまったと打ち明けている。

1915年 4月10日、ブロネーは IOC本部のスイス移転に際してローザンヌ市役所のオフィスにクーベルタンと一緒にいた。彼は今や一人前のIOCリーダーであった。

前に見たように、クーベルタンは戦争が続いている間の臨時会長としてブロネーを指名していた。彼は次のように明記している「一度戦争が終われば、クーベルタンは一時的に譲渡した責任の主なものを再び担うであろう。」

1916年から1918年まで、クーベルタンの手紙はほとんど全て、ゴッドフロア・ド・ブロネー一人に宛てられ、勧告とアドバイスの形をとっている。

彼はブロネーに、まだIOC本部に返還されていないチャレンジカップのデリケートな問題を注意深く扱うよう、委員の家族が死んだ場合IOCからお悔やみを送るのを忘れぬよう求めている。彼はブロネーの回状の原稿に手を入れ、スイスに帰ることを発表した。

ブロネーは彼に委託された責任の更新の問題を提起した。

1921年は二人の関係の決定的な転換点であった。些細な問題が厄介なことになった。

モンベノンのカジノの中にIOCを置く問題—そのための出費—とくに1921年のローザンヌでの kongress 開催のための出費。

摩擦が起こった。多少堅苦しいところのあるブロネーは、次第にクーベルタンの干渉に異議を申し立てるようになった。クーベルタンの方はブロネーがあまりに融通がきかないと非難した。それでもなお、彼はブロネーに執行委員会の委員長になってくれるよう頼んでいる。この件については次章で取り上げる。

1921年から1925年の間、揉め事は絶えることがなかった。それは主として二つの重要な分野で起こった。

第一は執行委員会であった。執行委員会は、後にクーベルタンが指摘するように、会長不在の際にそれを補うものとして、彼が勝手に作りだしたものであった。

紛争はカービー事件を巡って公になってしまった。アメリカ人、カービーが第七回アントワープ大会について一冊の本を書いた。彼が世論に対して「オーバーに飾りたてて」提供した報告は kongress とローザンヌセッション(1921)の批判で終わっている。

クーベルタンは、ブロネーに対し執行委員会の委員長の資格でグートーヤルコフスキーを含むメンバー二三人の小委員会を設置し、カービーの「だいそれた」エッセーに一つ一つ反論するよう

に求めた。

クーベルタンはブロネーを前線に押し出した。しかしブロネーは犠牲の羊になるつもりはなく、執行委員会の権威とその委員長の独立を確立するためにこの機会を捕らえた。

1月8日、彼はクーベルタンにきっぱりとした返事を送った。彼は一方でクーベルタンがローザンヌでカービーを「彼を苦しめる厳しさで扱い、それが多くの厄介な問題の原因となっている」と断言し、一方で、クーベルタンによって執行委員会に提出された説明は役に立たないと言った。つまりそれはただ火を煽るばかりで、アメリカオリンピック委員会とIOCとの関係に取り返しのつかない傷を与えるだろう。

彼はクーベルタンからの手紙で十分であろうと付け加える。「私が信ずるように貴方の手紙が物事を決着するのに十分であれば、私は執行委員会を危険に晒すようなことはしたくありません。」

手短に言えば、かつての忠実な仲間がカリスマ的なボスを非難し、自分の独立を確認するためにこの機会を利用したのである。

クーベルタン宛の1922年 1月20日の手紙でブロネーは歯に衣着せぬ言い方をしている。「貴方は断固として執行委員会の設立を主張された。貴方は kongress の最後の瞬間に設立を発表することさえされた。」「今日、貴方は ' 時計を戻そう ' としている。貴方は ' 不愉快な事件 ' を引き起こそうとしている。」

1月23日、クーベルタンは返事し、結論を下した。「執行委員会は私がいけない間IOCを運営するために作られた。IOCを改造するためではない。」

揉め事は表に出た。しかしそれにもかかわらず、パリセッションでブロネーはIOC副会長に選ばれた。

1924年、オリンピック行政に不十分なところがあるのを知っている執行委員会はIOC会長に付属する有給の事務局を提案した。

クーベルタンは反発した。「この点については来年[プラハ kongress の後]なら好きなようにしたらよい。しかし、30年間私がやってきたやり方を最後の数カ月に捨てろというのなら、私は断固として拒否する。」

クーベルタンはこうして彼の孤独な道を歩んだ。

1925年 5月、コップは遂に溢れた。彼は、アムステルダムがもし1928年の第九回オリンピックアードの大会を返上した場合、ローザンヌ市が立候補する案を突然持ち出した。

1925年5月7日、ブロネーはクーベルタンを非難した。

彼は「いささか傷つけられた」驚きを表明した。スイスオリンピック委員会会長として、ローザンヌの立候補は彼自身が届け出るべきであったから。

彼は、スイス政府とヴォー州を除くスイス全体に対して非常に困った立場に追い込まれたと言明した。彼らは直ぐにもこの不公正について私を非難するでしょう。

彼は詳しく説明することを躊躇しなかった。「私は貴方が私に押しつけようとしている会長職のことをどう考えてよいのか分かりません。貴方が私の国の市に対してある種の約束したことによって、

会長職の権威は前もって傷つけられているのですから。貴方は現にこの国に住み、市当局や新聞と関係をもっているのにこうしたことをするのは私の人格を傷つける以外のなにものでもありません。」

1925年 3月17日、クーベルタンはプラハから手厳しい返事を送った。「貴方の記憶は間違っている... 貴方は私の後継者になることをきっぱりと止めるとだけ書くべきだった。もし貴方がバイエのために下りるといふなら、私は真先に貴方にお祝いを述べる。」

反目はいまや動かしがたいものになった。

ブロネーは定款が変わってIOC会長自身が執行委員会委員長を勤めるようになるまで、委員長の地位に止まった。

その時以来、彼は執行委員とIOC副会長の二つの役を続けた。副会長には1935年のオスロまで何時も再選された。

袂を分かつまで長い間、オリンピズムへの奉仕にかたく結びついていた二人の友は、同じ年、1937年、死によって再びひとつになった。

1.8.4. スイスの現代オリンピア

最近まで、クーベルタンはオリンピック巡回制度の揺るぎなき擁護者であると思われていた。彼のギリシャに対する初期の戦いがこれを疑いの余地なく証明するように見えた。

しかし現在、一人の若いローザンヌの研究者がこの確かさに重大な挑戦をしている。

1906年、近代オリンピック開催のプロセスに対する外部の葛藤の影響を嘆いていたクーベルタンは次のように書いている。「もし何時か '新しいオリンピア' がヨーロッパの何処かに置かれるとすれば、その殿堂が聳えるのは多分間違いなく、スイスの湖の岸辺であらう。」

1906年10月19日、彼は友人でヴォー人の中では著名なモラクッス博士と共に、ジュネーブ湖畔のモルジュの町を訪れた。

クーベルタンは「技術的な設計書」を書き上げた。

1908年、「ガゼットドローザンヌ」のエド・スクレタン記者は「モルジュでのオリンピック大会を組織するに相応しい」ヴォー人何人かの名前をあげた。

したがって、よく事情に通じた人たちの間にも混乱があったように思われる。

一回限りのオリンピック大会か？恒久的な競技場か？

しかし1908年5月6日、モルジュの行政官、フレデリック・シャブルは、彼が呼びかけて招集した町議会に対し「IOC会長が我々の町がオリンピックを開催する唯一の場所としての条件にあうかどうか知りたがっている... 」と告げた。

結局、政治的な力関係が変わって、モルジュの町はこの話を更に進めることは止めた。

しかしそれでもクーベルタンは諦めたようには見えない。1911年と1912年の建築コンテストで、彼は再び「現代のオリンピア」のテーマを提案している。

1911年の入賞作品「ジュネーブ湖右岸のオリンピア」はその趣旨を十分に帯し、クーベルタンが如何に自分の戦略に固執していたかを示すものである。

同じ建築家、モノドとラベリエールによる同じ建築プロジェクトが、「現代のオリンピアのスタジアム」というタイトルの下にストックホルムで再び賞を得ている。

「これは凡そ十年もの間彼の主要な関心事の一つであった。しかし20世紀の夜明けとともに消えていった。」

1.8.5. ローザンヌのオリンピック学院

今やIOCが中立国に置かれ、管理運営の点では生き残りに確信が持てたので、クーベルタンはIOCの資料館をシャトー・ド・グランソンに移した。ここはド・プロネーが住んでいたところである。そしてクーベルタンは、彼の夢見た模範的な教育施設を実現することになる。これがローザンヌのオリンピック学院である。

都市(都市国家)の中の、芸術と社交の中心が会う場所としての「蘇った古代ギリシャのギムナジウム」のアイデアは、クーベルタンの仕事の中に繰り返し表れるテーマである。彼はこの問題を1890年に一般的な言葉で提起している。1912年後半にフランス体操協会総会でもこの問題に戻っている。1913年のローザンヌ kongress でも再び言及する。

この学院ではスポーツが価値の基準としての役割を果たす筈であった。その回りに基礎的な知的学科が置かれる。この家の主は「精神」へのもてなし役であり、「貴賓に対するように」その前に跪拝する。それは古代ギムナジウムの現代への投影、「芸術と知的文化と公衆衛生と筋肉活動の協力」に基づく町の社交センターの原型となるもの、であった。

オリンピック学院では、クーベルタンのローザンヌ滞在に合わせて、スイスに拘留されていたベルギーやフランスの兵士のためのトレーニングセッションが組織されたが成功の程度は様々であった。それが1917年(3月から7月)、1918年(1月から4月)、そして1918年秋から1919年春のことであった。

より実際的なカリキュラムへの変更や一般教育を目指した公開講義にもかかわらず、一般と地方の有力者の関心は薄れる一方であった。

郡の観光やホテル業界の関心を引こうとした最後の試みも失敗であった。

クーベルタンの企てた「スポーツ治療」にも全く反応がなかった。

1918年から1922年の経済危機とスペイン風邪の流行がクーベルタンのユートピアに止めを刺した。

ローザンヌのオリンピック学院は厳密な意味でのIOCの運営には影響を与えなかった。

これは1925年にクーベルタンがIOCの会長を止めてからも絶えず浮かび上がる政策と戦略の、エピソード風の現れにとどまっている。

とかくするうちに、戦争が終わり、IOCは不確実さに満ちた時代に直面しなければならなかった。

1.9. 大戦直後の歳月

1.9.1. 書簡、1919年1月の総括

1919年の始め、クーベルタンは再びIOCの指導者の地位に復帰した。
ド・ブロネーは背景に退いた。

クーベルタンは記念日と式典を大変好んだ。オリンピックムーブメントの20周年は1914年にパリで祝われた。25周年はオリピズムが大洪水を生き抜いたこと、ローザンヌが新しいオリピズムの恒久的な本部になったことを宣言する筈のものであった。

1919年1月クーベルタンはIOC委員一に手紙を送り、戦争がもたらした社会の大変動から引き出したいくつかの結論を書いた。

「オリンピアン」は彼らの臨時会長、ゴッドフロア・ド・ブロネーと、彼らが25年以上にわたって共になし遂げた仕事を誇りに思うべきである。

その評価は非常に高いものであった。五つのオリンピアードが輝かしく、ますます成功の度を高めながら祝われた。しかし残念なことに、ベルリン大会はキャンセルされなければならなかった。世界を平和なスポーツの祭典に招待する代わりに「ドイツ帝国は恐るべき戦争の手綱を解き放ち、青年と平和のためであるべき日付を血によって塗りつぶした」。

オリンピックコンGRESは体育教育に豊かな可能性を開き、政治家や学者や芸術家を新しいオリピズムの成功に寄与するよう招いた。この強い知的な雰囲気を反映して、百号以上の「オリンピック・レビュー」がオリンピックムーブメントの哲学を広めた。

オリンピックカップは戦争の間も、毎年この理想の擁護に最も貢献した人に贈られた。

二人の南アメリカ人を含む新しいメンバーが委員会に参加し、IOCに新しい刺激と影響力の広がりをもたらした。

至る所にスポーツは普及し、前線や戦争捕虜の収容所でさえスポーツが行われた。

IOCは大いに満足してしかるべきであった。

しかし尚、重大な災いが迫っていた。

競技の濫用が受け身の道徳意識のない観客層を作りつつあった。それは賭けと、スポーツ連盟に大いに責任のある商業主義と、極端な愛国主義の悪しき結果であった。

「基本的に排他的な参加資格」によって強化された「狭いサンジカリズム」に動かされるスポーツ連盟は歴史と共に歩むことをせず、時代後れのアマチュアリズムに閉じこもっていた。その結果、一種の「スポーツの破門、軽蔑すべきというよりはむしろ滑稽な破門」が流行になっていた。

不幸なことに、競技連盟が時代の変化を理解する兆しは見えなかった。

包容力のある新しいスポーツが考えられなければならなかった。しかしクーベルタンは、何よりもオリンピックムーブメントと競技連盟が広い心と寛容な態度によって、労働者階級がスポーツの良さを楽しむのを助けなければならないと信じていた。

IOCは下層中流階級が民主的にスポーツ教育と競技に参加できるよう戦ってきた。これはイギリスの紳士階級の考え方に対立する、積極的な意味を持つ業績であった。

大衆が勝利に貢献した戦争の後、全ての人にスポーツの喜びを分かち合うことは緊急かつ重要であった。なぜなら「神聖同盟」はこの戦いが「国家の政治の自由と個人の社会的な平等」をもたらすという確信に基づいていたからである。

もし大衆がそのために戦った大義の、後段の部分が忘れられたら、文明は「安全弁を奪われたボイラーのような」爆発の危険に晒されるだろう。

そういうことであるなら、クーベルタンが1918年2月にローザンヌの自由ギリシャ協会の招待で行った講演の中で述べたように、運動競技そして全体としてのスポーツは、個人の社会的平等を発展させる上で大きな貢献ができるであろう。何故なら「スポーツのグループはある意味で民主主義の基本的な単位」なのだから。

クーベルタンのなかで、教育者と哲学者は手を携えて歩んでいた。

事実、彼がIOC委員の注意を喚起したように、スポーツの集まりは「人間によって導入された人工的な不平等」が消えても、「自然の生んだ」不平等が残る唯一の場であった。

しかしスポーツの「美德」はそれに止まらない。スポーツは悪魔的本能の解毒剤、「結核を駆逐するもの、身体的、道徳的清潔さの要素」であるばかりでなく、「観察、批判的精神、自己抑制、努力とエネルギー消費の際の判断、そして失敗における実際的な哲学の種を蒔くものである。」

ここに我々はクーベルタンの信念の全てを認めてよいだろう。

スポーツムーブメントの役割は今やこうした恩恵にまで拡大されなければならなかった。

全ての国ばかりでなく、下層階級を含む全ての人に。労働者は全ての形のスポーツを行えなければならない。

戦争が終わった今、スポーツ界は自分自身を再生する任務を負った。その基盤を広げ、「全ての人のために全てのスポーツを」の原則を包含する機構に改革しなければならない。

我々はこの理想の変革、事実上のイデオロギーの変革に際して、クーベルタンがIOCを動かした活力に驚嘆せざるをえない。この上流階級の一員が自分自身の階級に衝撃を与える危険を冒しても働く大衆に幸福の扉を開こうと奮闘する様を見るのは素晴らしい。

クーベルタンがいかなる種類の人民主義の追随者でもなく、いかなる社会主義者の派閥にも属していなかったことは疑いない。

彼は単にスポーツの社会文化複合体とオリンピズムを古典文化の「不滅の」領域に統合したいと願っただけなのである。

従って、スポーツ連盟はなんら見返りを期待することなく「大衆への奉仕」をしなければならない。大衆は「払う金もなく、費やすべき時間」もないのだから。

国際オリンピックムーブメントにとってその頑な伝統に決別すべき時がきていた。

「あまりに窮屈になりすぎた制限を緩め、時代遅れの区別を廃止し、何よりも利己的な計算や身勝手な付属物を拒否するために。」

もしIOC委員が、終わったばかりの世界紛争の、計算できない、予見不可能な結果に心を開き、「戦争が不可避なものにした社会変革」、彼ら全てが「喜びと忠誠」をもって歓迎すべき変革に効果的な協力をする事ができるならば、スポーツは素晴らしい未来を期待することができるだろう。

1.9.2. ローザンヌセッション —1919年

国際オリンピック委員会の25周年

IOCは1919年4月5日から7日まで、ローザンヌでセッションを開いた。

クーベルタンの開会演説は民衆への訴えであり、オリンポスの知恵の授業であった。

クーベルタンにとって、オリンピズムは「スポーツ中心主義」を含み、それを越えて、はるか上にあるものであった。

それは「沈着な自信に満ちた若者の宗教」であった。

全ては人間の魂の中にあった。自信と落ちつきは、戦争を挑発する恐怖を消す美德であり、「嵐の中に生まれようとしている若い明日の文明」が強く必要とするものである。

スポーツ中心主義がそのような勇気の発達したある段階である一方、オリンピズムは自信と落ちつきを生むものであり、人類のためにははるかに優っている。これが共に破局を生き抜いた者に教えなければならないIOCの夢である。

クーベルタンは付け加えた。1914年6月、文明はその頂点に達し、オリンピックの理想もその絶頂に達したように見える。しかしこれを信ずることはオリンピックの理想のダイナミズムを見誤ることになる。今日、世界は新しいオリンピズムの再生を目の当たりにしている。それが全ての社会階級に開かれたからである。「もし少数の者だけが関与するのであれば何事も達成されないであろう。」

より明るい未来に向かって進むためには、人類は歴史に基礎を置かなければならない。

オリンピズムは回復期の世界が決して無視することが許されないそうした業績のひとつである。

何故なら、社会の平和を実現するためには、経済的資源をより平等に配分し、できるだけ多くの人が知的向上の機会を得られるようにするだけでは十分ではなく、「喜び、活力、静けさ、純潔の源である筋肉の快楽に、最も貧しい人々もあずかれるようにすること」もまた、必要だからである。

クーベルタンは何を歴史の転換点と考えるかについて明確な線を打ち出している！

歴史についての後ろ向きの見方からくる社会的な制約を取り払うこと。即ち「今日我々がその礎石を置こうとしている完全な、民主的なオリンピズム」、それがIOCの達成しようと努力する目標である。

太司祭クーベルタンは予言した。「まだ困難な時である。やって来ようとする夜明けは嵐の名残である。しかし昼に近づけば、太陽が照り、薄茶色のトウモロコシの穂が採り入れする者の腕を再び重くするであろう。」

「審議は、再会を喜ぶ友人、自分たちのオリンピックの骨組みの揺るぎなさを実感する友人のグループに相応しく、友好的なものであった。」

セッションには9人のIOC委員が出席した。全てヨーロッパに住んでいる者であった。

今や34カ国がIOCに一人ないし二人の委員を送っていた。

オーストラシア(オーストラリア・ニュージーランドと近海諸島)は二つに分かれていた。オーストラリアとニュージーランドである。今後、オーストラシアからは二人、一人はオーストラリアから、一人はニュージーランドから、委員が選ばれることを留意しておいたほうがよいだろう。そしてポーランドからの新しい委員がいた。

ドイツ、オーストリア、ハンガリーはIOC委員を持たなかった。

それにも係わらず、大会の組織委員会はヨーロッパの外のどんな国でも招くことができた。策は見え見えであった！招待のリストは会長の同意なしに作られた。

「1896年に導入された慣行」によって招待状の発送者は大会組織委員会会長であった。

1920年の大会は「ベルギーへの全会一致の贈り物として」アントワープ市に委託された。

「大きな困難」が予想されるので、大会組織委員会は1911年にパリコンGRESで採択されたプログラムと規則の適用に最大限の柔軟性を認められた。

「ヨーロッパの新事態」に鑑み、IOCはオリンピック事業は見直し拡大する必要があると決断した。そのためにIOCは、将来のオリンピックの技術的条件を一気に確立する目的で1921年、各国NOCの代表をローザンヌに招集した。

同じようにIOCは、戦争によって引き起こされた政治的、社会的混乱に直面して、同じ年、同じ場所で、「主な労働組合のしかるべき代表を集めて、全ての若者が将来、スポーツ教育を受け、彼らを強くし発育させる全ての形の運動の利益を得られること」を確実にする方法を検討することを考えた。

第八回大会に対するアムステルダム、リヨン、ハバナ、ローマの立候補が記録された。

1920年のオリンピックカップはスプリングフィールドのYMCAトレーニングスクールに与えられた。

4月6日、公式儀典と優雅さの問題が取り上げられた。

イギリスの委員、ド・クールシー・ラファンが全員を代表して「会長のオリンピックの大義に対する賛嘆すべき熱意」に感謝した。

クーベルタンはその賛辞を「戦争の大部分の時期、非常な熱意と能力」で彼の代わりをつとめ

たブローネーにそのまま贈った。

チャレンジカップの問題が再び浮上したが、ドイツとオーストリアの皇帝を含む対象者のほとんどがローザンヌにいなかったため、争いにはならなかった。

予算の問題がクーベルタンによって提起された。クーベルタンは当時秘密を漏らさなかったが、事実上破産していた。そして、IOCの運営費を自分のポケットから出すことはできなくなっていた。

その結果、「我々は何時にも非常に限られた財源でやってきた。我々の大義を宣伝することが必要になってきている。‘オリンピック拡大基金’を設置するのは良いアイデアであろう。」と彼は書いている。

この同じ会議で、事務局はチャレンジカップ管理のルールと1921年 kongress の規則を用意するよう指示されている。

IOCはアメリカ委員会（セッションには欠席）に対しその「宣伝活動と大学のサークルにオリンピック旗を配付した」ことに感謝した。

最後にIOCは「クレマンソー氏にIOCの25周年祝典を盛大なものにし、フランスの友情の印を運ぶために14機の飛行機を送ってくれるよう電報を打った。」

この招待が誰の発案であったかを知るのは難しい。他の所でクーベルタンは、これはローザンヌ民間航空学校によるものだと書いている。多分そうだったのだろう、そしておそらく両方であったのだろう。

というのは、1920年大会にパリが立候補しなかったことについてフランスで非難されていたクーベルタンは、頑固な民族主義者を黙らすために赤、白、青の三色の翼の挨拶を必要としていたことは疑いないからである。

1919年のローザンヌセッションは継続と変化の両方を示した。とくに戦略の点でそうだ。

IOCは西欧の難破から生き残った。その機構は無傷であり、会長はかつて以上に活力に満ち、広い心をもって復帰した。

IOCは信者獲得の使命のために広い地域を征服した—アメリカとアジアを。

その理論武装は強化された。その信念の力は強まり、その存続は保証された。

しかし変化もまたあった。とくにイデオロギー的取り組みにおいて。

これ以後、社会的階級にかかわらず全ての人がスポーツの恩恵を受けなければならない、という立場が取られる。

1919年ローザンヌにおいて、ドイツ、ハンガリー、ロシアに進行中、或いは差し迫っていた革命の衝撃波を反映して、プロレタリアートがオリンピズムの概念の場に入ってきたのである。

1.9.3. 連合国競技大会

ローザンヌのセッションの後、IOCは連合国競技大会に対処しなければならなかった。

第七回オリンピック大会の開催にのしかかる不確実さの重みを受けて、IOCはこの余計な問題にかかわらずに済ませたかったに違いない。

1919年、ヨーロッパの連合国軍の参謀総長たちは容易ならざる問題に直面していた。何万という兵士たちが兵舎でぶらぶらしていたが、彼らの除隊は危険を招きかねなかった。

兵士の間には反乱の気配があり、反抗、脱走、暴力犯罪があった。

アメリカ派遣軍の司令官、パーシング將軍は連合国スポーツ大会の開催を提案した。

スポーツは「少年たち」の意気をそらす最も良い方法であるように見えた。

パリ市はバンセンヌの森の土地を提供した。500メートルのトラックがつくられた。

建造物は複合建築で大衆を喜ばせた。パーシングスタジアムは世論に迎えられた。

この大会にIOCの名は与えられなかった。スポーツとしての結果は満足すべきものであった。クーベルタンが喜んだことには、彼らは「筋肉の価値とスポーツする情熱は衰えていない」ことを示した。これは来るべきアントワープ大会の競技の成功のよい前兆となるものであった。多くの人々は、英雄たちは疲れており、あまりにも多くのスポーツマンが前線で倒れたと考えていた。連合国競技会は悲観論者を沈黙させた。

しかしそれでもなお、IOCはその立場を守らなければならなかった。

意味論上の混乱と、おそらくはパリの代わりにアントワープが選ばれたことに対する不満から、フランスNOC会長クラリーが煽動する内輪もめの結果、パリロビーが形成され、連合国競技大会を「軍隊オリンピック」としてアントワープ大会に代えるよう要求した。

憤慨したクーベルタンは、J.J.ジュッセルランを送ってパリを通るウイルソン大統領に会わせた。全ては納まるべきところに収まり、オリンピックの順序は影響をこうむることはなかった。1919年の連合国競技大会は軍隊のための競技大会であり、オリンピックの名を付けることは避けられた。

1.9.4. アントワープセッション —1920年

セッションの準備

三通の回状が1919年末に出された。全てアントワープセッションの準備に関するものである。

1919年9月にクーベルタンは、空席になっているフランス、フィンランド、チリー、ニュージーランドの委員の候補者を提案する手紙を同僚に書き送った。

フランスNOCは「オリンピック大会のいくつかの種目の優勝者に世界チャンピオンのタイトルを認めること」と、そのために関連国際競技連盟と「これらの種目の技術的条件

について」合意するよう、IOCに要求した。

IOCの原則に忠実なクーベルタンは「ベルギー委員会は、我々の将来の同意を求めることなく、1920年に関する要求に応じることができる。そして資格を有する国際競技連盟と合意に達することができる。そのあと、1921年に招集されるローザンヌでの kongress でこの件は最終的に決定されるであろう。」と提案した。

第二の回状は1919年12月16日付けである。クーベルタンはプロボクシングの不健康な逸脱に

について論じている。彼はこの攻撃と防御のスポーツを非常に愛していた。

第三の回状は数日後地元の主だった人物に宛てられたもので、おそらくローザンヌ発—1919年12月22日にローザンヌ市庁舎で開かれる会議に参加し、公的機関の代表と共に、1921年春にIOCによって開かれる世界ポピュラースポーツコンGRESの最初のプログラムを検討するよう招請している。

彼は付け加えている「CONGRESの目的は、その重要性がすでに関係者、とくにアメリカの関心を引きつけているが、スポーツ活動の完全な民主化を準備することである。」

1920年初頭、再び回状によって、クーベルタンはアントワープセッションの重要性をIOC委員たちに指摘している。

クーベルタンはIOCの運営の遅れについて記している。これほど長い中断の後では驚くには当たらないが。彼はオリンピック機構に油を注す必要を述べ、もし可能なら第八回大会の会場を決めるように言っている。即ち全ての立候補地が検討されねばならないということである。

オリンピック大会参加者数の増加が問題になってきていた。参加国の費用負担で地域予選を行うというアメリカNOCの案は検討に値しないだろうか？

クーベルタンにとってはこのような案は願ってもないものであった。とくにオリンピックが金のかかるものであるという世論が広がるようなことがあってはならなかったから。

決定しなければならないもう一つの問題はNOCの運用であった。

あまりにも多くのNOCがいくつかのスポーツを締め出していた。

結局、IOCとIFの関係の問題が再浮上する。これは早急に処理しなければならなかった。

きちんと了解されねばならないのは、IFはその競技ルールによって大会の競技を組織するが、オリンピックを支配したり、その政治の中に位置を占めることは諦めねばならないということであった。

しかし、これらの問題はオリンピックムーブメントのスムーズな進行のためには極めて重要だが、全体の問題を隠してしまってはならない。実際面での困難が、ムーブメントの基本的な目的、つまり大戦によって傷つけられた世界が市民生活を回復するのを助けるという目的を損なってはならない。

クーベルタンは古代のギムナジウムの復活を唱えている。そこは、古代ギリシャがそう

であったように、現代スポーツが人間に、古代の調和を発見させる楽しい場所を提供するであろう。

人類が今必要としているのは社会の平和であるとクーベルタンはもう一度強調する。

「全てのスポーツを全ての人に」は今やオリンピックムーブメントの教育目標とならなければならない。

セッション

1920年8月17日、クーベルタンはセッションを開いた。何人かの古顔のメンバーが出席した。ブラック、クールシー・ラファン、ブロネー、ファン・テュイール、フォン・ローゼン、グートーヤルコフス

キー、彼はIOCの会議の事務局長になっていた。23カ国からの30人が集まってきた。

アイスランドのスポーツの自治が承認された。アルメニアは原則として認められた。

クーベルタンは国王アルベール一世の前で演説した。

「スポーツは王様である」と彼は始めた。しかし全ての王族と同じようにそれは「危険に晒されている」。IOCの義務は「その力の永続」を確保することである。そのためには「私心のない理想への断固とした献身」が必要である。

新しいオリンピズムはその誕生以来、スポーツを教育に奉仕させることによって、また常に精神の傘の下に身を置くことによって栄えてきた。

しかし教育者やスポーツ協会、連盟の役員は思い違いをしてはならない。すなわち技術的アプローチが「教育的アプローチを傷つける」ことが許されてはならないのである。

スポーツは国家に統制されてはならない以上に「心理的ジャコバン主義」に陥ってはならない。そのような手段はスポーツ教育を破壊するだろう。スポーツ教育は思想と行動の自由を要求し、スポーツマンの心理的一体性を尊重しなければならない。

IOC会長はオリンピックムーブメントのためばかりでなくスポーツ全体のために独立性を求めた。彼の目的は全ての市民が自分に最も相応しいスポーツを選び、日々実践できるようにすることであった。

しかしこれらは単に実際的な事項である。具体的な問題は比較的とりくみやすい。

最も重要なことはオリンピズムの哲学的基礎から離れないことである。

クーベルタンによれば、商業的な精神は利益と金銭をばらまくことによって腐敗を招き「遠からず騎士道精神を微塵に砕き抹消してしまう」。

「良心が時としてその権利を失い、約束が守られない時代において、実際的な騎士道精神の学校が若者のために開かれることは最も緊急を要することである。」

クーベルタンにとってこの学校はスポーツであった。オリンピック精神によって卓越したものになったスポーツの学校であった。従って、スポーツは大きな責任を負っていた。

「スポーツのグループを、断固として出世主義者の手から守れ！」

問題の解決は、新しい社会階層をスポーツの喜びに参加するよう招かねばならないので一層難しかった。

プロレタリアにとっては「復讐の時が告げられていた」とIOC会長は回顧している。

一般社会の規範に反逆する彼の魂は、そのスピーチの断固たる調子によって燃えあがっている。彼は我々に告げる「プロレタリアはこの自分たちの仕事に全く準備がない。集中した怒りを静めるために、形成されつつある地盤の危険な深層をなす積み重なった憎しみを静めるために、何もなされてこなかったからだ。」

しかし「スポーツにはこの感情や情熱を宥め、社会の平安を保つ大きな力がある」。

クーベルタンは積極論者として、スポーツの実践による民主主義の発展についての説明を押し進めた。「正しい民主主義」の構造と同じように、基本的な不平等に基礎を置いているスポーツの構造は、個人の計画的なトレーニングによって正される。

従って、「自然の尊大な気まぐれ」と「人間によってつくられた社会的差別」は自分の足で立つとする人の意志によって克服されるであろう！

スポーツはそれを助ける。オリンピズムは社会的コンセンサスの原動力である。

これが国王と同僚の前で行ったクーベルタンの開会演説であった。

イデオロギーの一致がIOCメンバーの仲間意識を固めた。セッションは最善の兆のもとに開かれた。公式議事録はすぐに出された。1920年2月の回状でクーベルタンの提起した多くの問題の全てに結論がでたわけではない。第八回オリンピックの会場の決定は延期することが決まった。

会議は競技連盟の反対に直面しなければならなかった。彼らは権利の拡大を求めた。自転車連盟が最も過激で、IFの連盟の設立を呼びかけた。

IOCは深刻な危機に晒された。混乱はクーベルタンの駆け引きのセンスと外交的手腕のおかげで回避された。彼は将来の展望は「IOC機構の民主的拡大」のうちに求められるべきであると述べた。

IOCは、世界を巡っているYMCAの代表、エルウッド・ブラウンから興味深い情報を得た。

彼は南アメリカ大会と、もし可能なら現在準備中のヒンズー大会に対する後援をIOCセッションが承認するよう求めた。ブラウンはまた極東大会について報告した。

極東大会は、IOCが1903年最初に後援をし、1913年以来規則的に開催されていた。

チャレンジカップの問題は決まらなかった。

ピュラススポーツコンGRESSは「開催の現実的困難に関する理由」のために延期されそうであった。そして我々も知る通りそうになった。オリンピックのプログラムはいくつかの点で修正された。1921年のコンGRESSが「修正し、改正し、決定する」ことができるであろう。

1.9.5. アントワープ大会 –1920年

1920年8月14日、国王アルベール一世が「華やかに」第七回オリンピックを開会した。

儀式は完璧であった。クーベルタンはそのなかに運命の手を見ていた。

「苦悩が終わりオリンピズムは無傷であった。そして世界と若者たちにオリンピズムの教育的価値についてのレッスンを与えた。」

宗教儀式は続けられたが、デプロフンディズ「死者の思い出に捧げる賛歌」とテデウム「成功と希望の賛歌」だけが聖堂で歌われた。ミサはなかった。

メルシエ枢機卿の説教は非常に普遍的なものであった。オリンピック大会は「消えゆく栄光の冠である...より高く登れ、聖パウロが我々に告げるが如く...スポーツがニーチェ哲学の生の概念の粗暴で傲慢な引写しとならないように。」

大会の成功は全ての期待を越えた。IOC会長は「負けて機嫌の悪い選手や、気難しいジャーナリストや、単に不平を言うだけが専門の人達」の不満を退けた。

「政治、経済、環境の不都合にもかかわらず」大会は「熟練と...完璧さと...そして威厳をもって」実施された。

近代オリンピックの既に長いリストの中で、これ以前の大会がしばしば「大衆」には無縁の文化現象と見えることがあったのに対し、アントワープ大会は「全体的な包容」をもたらした。

近代オリンピックは今や全ての人の記憶のなかに座を占めた。今やオリンピックは「人類統一の祝典」であるということができた。これが第七回オリンピックの貢献であった。

それは「復活し現代化されたオリンピズムの教育的、道徳的、社会的な力の輝かしい救いのうちにある世界」を示した。

クーベルタンは1920年、多作であった。我々は彼の幸福感を感じとることができる。

10月に、彼は「第七回オリンピックについて」という小冊子を発行した。

彼は先ず最初に、オリンピック大会の「骨組み」、「まだ細部においてやや曖昧であった」そのプログラムが1914年のパリ kongress でしっかりしたものになりはじめたことを思い出している。これは1921年のローザンヌ kongress で最終的に承認されるであろう。

骨組みはスポーツの五つのカテゴリーから成る。陸上競技、体操競技、防御競技、馬術競技、水上競技。そして最後に複合競技が含まれる。

陸上競技、体操、漕艇は高い水準にあった。若い人口希薄な国—フィンランド、スウェーデン、エストニア—そして他のもっと古いが関心の薄かった国—ブラジル、スイス、イタリー—はクーベルタンによれば「素晴らしかった」。

こうしてまたも証明された、と彼は付け加える「勝利の秘密は、技術的な準備だけでなく、先ず精神の状態とチームを鼓舞する一丸となった士気にある」。

従って、大会に精神性が浸透するのは正しいばかりでなく必要なことなのである。

近代オリンピックの華やかさの主役をつとめる儀式ほど観客を喜ばすものはないであろう。行進、讃歌、宣誓、これらは我々を古代オリンピアの最初の式典と象徴性の世界に連れ戻す。

オリンピック旗、「白地に五つの絡み合った輪、青、黄、黒、緑、赤、オリンピズムによって統一された世界の五つの部分を象徴し、全ての国の色を再現した色」の旗は非常な成功を収めた。

その中に、全ての人が遂に平和と国際的連帯に回帰した人間性の象徴を見ることができた。閉会はそれまで宴会で宣言されていたが、今回は外で、スタジアムで宣せられた。

厳粛さは比較にならないくらい大きかった。

不幸なことに、芸術競技は「1912年に比べて改善はあったが」まだ満足なものではなかった。「文学者はスポーツのテーマを恐れているようだし、音楽家は躊躇している。建築家は「スポーツ

宮殿’の外でうろうろしている。」

彫刻家に関して言えば、作品は良かったが、審判に専門的知識がないので判定できないと宣言された。要するに、芸術競技は平凡なものであった。これがルーベンスの町で行われたことを思えば残念なことである。

疲れてはいるが誇り高い国によって立派に行われたアントワープ大会は、出場した競技者の水準からいえば高いものではなかった。

しかしスポーツ精神によって生み出されたこの大会は、多少の難点があったものの、競技の成績を越えて、古代オリンピックの象徴性に繋がるものとなった。

再び、厳かな儀式が行われた。式は確立された公式儀典を遵守して行われた。

国別の選手の行進、国家元首への挨拶、「国王の応答、開会宣言、トランペットや祝砲、参加国の色を首の回りに付けて放たれる鳩」。

オリンピック旗、オリンピズムによって統一された世界の喜ばしい象徴があった。

そして、何よりクーベルタンにとって意味深かった選手のオリンピック宣誓があった。

IOC会長は戦慄を覚えた。

アントワープ大会はオリンピズムの喜びの大会であった。

1. 10. より民主的な方向へ

二十年代－1920年から1921年

IOCと国際競技連盟、各国オリンピック委員会、各国競技連盟、IOC執行委員会の関係。

アントワープではオリンピックの理念の永続性が示された。この成功に勇気づけられて、クーベルタンは鉄を熱いうちにうとうとした。1920年と1921年は盛んな組織活動によって特徴付けられる。

USFSAの会長、1894年 kongress の主唱者、IOC会長としての資格で、ピエール・ド・クーベルタンは兄弟間の不和を収めるために大きなエネルギーを捧げた。

いろいろな現代スポーツが互いの技術的優越性や健康増進性を妬んで、容赦のないゲリラ戦を繰り広げていた。先輩であることを誇りにする体操もその中に巻き込まれていた。

クーベルタンに帰せられる最も偉大な勝利の一つは、1894年に、更に1896年に再び、「全てのスポーツ」を一堂に集め、その後彼らが共同プロジェクトの成功のために協力するようにさせたことである。

最初からクーベルタンの心の中、或いは彼の戦術には些かの留保もなかった。即ち、競技連盟は絶対に、オリンピズムの発展に積極的に参加しなければならないというものであった。これは連盟がまだ弱体であった時にそうであったし、ましてや彼らが社会的政治的に無視できない存在と成ってきた場合一層そうである。

そして事実、彼らの力と行動する能力は、今後IOCにとって基本的な問題を提起することになる。IOC、NOC、IFの三角関係のバランスオブパワーが明らかになった以上、IFの役割と使命を正確

に規定することが緊急の課題となった。

1. 10. 1. 国際競技連盟

避けられない調整

IOCとIFの関係の波乱に満ちた歴史には異常なことは見当たらない。

現代スポーツの本質は提携と対立を包含する。スポーツ組織の発展のますますの高度化は、国際レベルでの対話の構造をつくりださずにはおかない。

クーベルタンはこの傾向を認め奨励した。しかし彼は生涯を通じて、IOCの教育的指導者としての立場を確保し、IFの役割は純粋に技術的なものに限定しようとした。

法を定めるのはIOCであり、オリンピズムの殿堂の建設に技術的な資格で貢献するのがIFである。これが彼の行動のルールであった。

最初は問題は簡単であった。クーベルタンは法を定めることができたし、IOCはいろいろな役割を演じた。当時、IFの数は極めて少なかった。あっても影響力は小さかった。しかしゆっくりとだが確実に、正に競技スポーツの法則によって、国際的な連合ができてきた。自ら形成し、自分の力を知るようになった。

個人的野心が混じり権力への欲求が紛争を生んだ。これは驚くべきことでも心配すべきことでもない。むしろ健康の印と取るべきである。全ての危機は進歩の種を宿している。

当時、最初に憲章を定め、ルールの統一、審判の法典化を呼びかけたのはほとんどIOCだけであった。しかし直ぐに競技連盟がルールを定める権利を要求し、既に我々が見たように、一種の「高等評議会」の創設を主張した。クーベルタンは拒否した！

戦いは続いた。全てのセッション、全ての kongress でこの問題は必ず持ち上がった。

1907年3月、状況は微妙でクーベルタンは次のように書かなければならなかった。「スポーツ連盟は実用主義者から支配者へと発展した。秘書の役割から警察官の役割に変わった。奨励するよりも命令し、禁止することに熱心だ。自らの力を誇示することが指導者の最終目的であるように見える。」

しかし彼はまた譲歩して「いろいろな程度があるが」と付け加える。

1918年の休戦の後、大戦によって引き起こされた人間関係の混乱の内に多くのタブー、多くのアイドルの権威が失墜した。年老いたクーベルタンはしばしば挑戦を受け、IFの側の連合した攻撃の矢面に立たねばならなかった。しかし老いたライオンはまだその咆哮を失ってはいなかった。

1920年12月 4日の回状で、会長はIFとIOCの関係の歴史を顧みて、IOC委員の独立が、神聖にして侵すべからざる性格のものであることを強調した。

彼らの特権は「非常に限られた性格のものであるので、挑戦の対象となるべきではない」。1896年の第一回大会以来、IOC委員はその役割から離れたことはなかった。その役割は「大会の規則的な開催を保証すること」であった。

彼は自分が常にIFのルールと決定が大会に適用されるよう望んでいたことを強調した。更に望むらくは、IFの権威は競技の監視と審判団の運営にまでおよぶべきだと考えていた。しかし競技連盟は単に自からそう宣言しただけで国際的な存在になったのだろうか？

1921年 9月15日の回状の中で、彼はIOC、NOC、IFの間に「実り豊かな」了解が存在すると記している。これは本当なのか、それとも戦術なのか？

新しく光が当てられた、後継者バイエーラツールへの私信によれば、疑いの余地があるように見える。

1923年 7月 3日、湯治をしていたノルウェーのバニユーロードーロルヌのホテルからバイエーラツールに手紙を書きながら、彼は危険を察知していた。IOCとIFの関係は良くなかった。

彼は、IFがオリンピックをコントロールしようとしているため、1924年のパリ大会はオリンピックとはならないだろうと書くことに躊躇しなかった。

そのため、クーベルタンはパリの祝典をできるだけ第八回オリンピックの大会から切り離すことを決意した。そして1925年のプラハ kongress でIFの野望に強力な歯止めを掛けようとした。彼はエリゼー宮でIOCメンバーだけの晩餐会を催してもらって、自分の領土を守ろうとした。

プラハに kongress を招集して「オリンピック大会を規制し、その管理権を確立」する決議をしようとする彼の意図を阻もうとする競技連盟の企てに、クーベルタンは「嵐の予感」をもった。

それにもかかわらず、彼らはドアをぴしゃりと閉めることはできなかった。クーベルタンはバイエーラツールに、IOCはIF抜きで何ができるだろうかと問うている。

「私は紛争はあまり恐れていません。私が恐れるのは分裂です。」

もしIOC代表がIFの kongress に参加すれば時を稼げるのではないだろうか。

彼がこの件についてどれほど心配したかは、更に1923年12月18日にバイエーラツールに宛てて書いた手紙に表れている。

バイエーラツールは、IOCがオリンピックに関する全ての技術的或いは規則上の問題が持ち込まれる一種の「常設で強制力のある上告法廷」に変身すべきだと考えていた。

これはクーベルタンの考えと違った。

IOCが大会開催だけに専念できるようになるよう心を砕いているクーベルタンは、「この種の責任」は何としても避けるべきだと考えた。

彼は続けて言う「彼ら[IF]の組合主義が反スポーツ的なので、私はしばしば彼らと戦った。しかし我々の観点からすれば彼らは非常に役に立つ。もし競技連盟がなかったら我々が連盟を発明しなければならなかっただろう。オリンピック大会で何かうまく行かないことがあればそれは全て彼らの責任で、我々是我々のプログラムの高尚な理想主義を褒めたたえられていればよいのである。このおかげでオリムピズムは勝利する。そうでなければ凋落する危険があっただろう」。これほどあからさまな言い方もないだろう。

ローザンヌから、1924年5月9日、クーベルタンは更にバイエーラツールに忠告する。「競技連盟を懐柔し、彼らに何か華やかな言葉を与えられよ。」

彼の「オリンピックメモアール」に、1924年のパリ大会の後「国際競技連盟に公平な分け前を与えるべき時が来たように見える」と記した。そしてより民主的な技術委員会がつくられていけない理由はないと考えた。

1925年プラハで、クーベルタンは大変な雄弁によって、全ての当事者の権利と義務を明確にする機会を持った。即ち、IOCはオリンピックアードを祝う会場に責任を持ち、伝統の尊重を保証する。NOCはそれぞれの国の大会参加を管理する。IFは「競技の技術的指揮をとる」のである。

1. 10. 2. 各国オリンピック委員会

1894年10月の「オリンピック大会のための国際委員会ブレティン」は以下のように述べている。「各国にオリンピック委員会が設立されなければならない。この委員会は自国でオリンピックを開催する時がくるまで、四年ごとにオリンピック大会にその国の選手団を参加させる責任を負う。」

1920年12月の回状でクーベルタンは、IOCはNOCのイニシアチブを許すために行動の「完全な自由」を与えていることを思い起こさせた(彼は既に1894年に宣言している)。

NOCの誕生はいくぶん無秩序なものであったが、それぞれの国に一つの委員会という要請は守られた。

最初、NOCはその国のオリンピック参加を準備するための特別委員会としてつくられた。そしてそのあと、クーベルタンの報告によれば、恒常的な委員会となった。

1911年ブダペストのコンGRESSでは、既にその数は IOCが「大会の最終的で確定的なプログラム」をNOCに任せてもよいと考えるほどに増えていた。

というわけで、1914年のパリコンGRESSに集まったNOCに対し、IOCは「1908年と1912年のあまりに多くの付属的な種目で複雑になりすぎたオリンピックプログラムを削減することが望ましい」ことを告げた。

代表団は「原則的にその意見に賛成し、これらの種目のほとんどがなくなしてほしいと思う」ことを確認しただけで、最終的な案を確定はしなかった。

従って、1921年のローザンヌコンGRESSでIOCは、その権限において、1914年以来ペンディングであった大会プログラムと「再検討を必要とすると思われるいくつかの問題」に取り組むことができた。

決定の一つは—重要なものであるが—これ以後選手のアマチュア資格に関しては競技連盟とNOCが道義的な保証の責任を持つことになった点である。

1. 10. 3. 国内競技連盟

IOCは各国競技連盟との関係については、各国の競技連盟とIOCの構造的に密接な関係は望ましくないという最初に確立された原則に常に固執してきた。これは全てにおいてクーベルタンが取ってきた立場である。彼は他のことと同じように、この点でももつれた関係になることを避けた。

これは競技連盟が加盟している国内オリンピック委員会で自らの意見を発表する機会を十分に持つことを意味した。従って、国内競技連盟が傘下に入る組織については疑問の余地はなかった。IOCは関係ない。ただ「商業的な取決め」だけが考えられた。

1920年12月4日の回状でクーベルタンは、ド・ブロネーが彼に対して示した尊敬の念を長々と引用している。ド・ブロネーは1919年に同国人に対して、IOCの精神にならって、国内競技団体に対する国内オリンピック委員会の独立を訴えている。これらの団体はオリンピック参加についてNOCがいつでも協力する用意のあることを知るべきである。

この原則はIOCの倫理システムの基礎そのものである。IOCは各国競技連盟の権利と自由を尊重する。従ってIOCへの絶えざる反目はオリンピズムの基本的無理解か卑しい個人的利害の結果であるということになる。

従って国内競技連盟に関して代表の役割は「オリンピック選手の現代的モデルを実現すること」であった。その選手とは、飛び抜けた競技成績と同じように道德、文化にも優れ「オリンピズムが人間性に付与しようと熱望している人間のモデルとなる者」である。

疲れを知らぬクーベルタンはIOCの基本哲学を打ち出す。「人々はオリンピックと世界選手権を混同している。そしてオリンピアードの価値を数秒の差或いは数センチの差で高められた記録の数で計っている。オリンピック大会は世界選手権以上であり同時に以下でもある。オリンピックは古代と同じように、若さへの礼賛、人々の集团的思考に焦点を当てる教育的行事からなり、その成功はこうした考えを発揮した行為によって計られる。」

1921年1月後半、IOC会長は委員に回状を送った。6月にローザンヌで開かれる kongress と会議のプログラムを同封し、二つの重要な会議、芸術とスポーツに関する会議と言葉の問題に関する会議があることを強調した。

文明の偉大さは「行為の華々しさと思想の力強さ」だけでなく「マナーとスピーチの洗練」にもある。IOCを運営する膨大な仕事をこなしながら、洗練されたマナーに対する尊敬を訴えることを忘れたなかったのは、この人物の素晴らしい、しかも何と典型的な一面を示すものであろうか。

1921年4月15日、クーベルタンは、国内競技連盟の代表はNOC以外からも選ぶことができるが、競技連盟とその国のオリンピック委員会の両方の代表を同時に兼ねることは出来ないと指摘した。

1. 10. 4. 執行委員会

1920年代は新しいオリンピズムの歴史の中で一番内容の充実した時期のひとつであった。これはIOCを歴史のコースに従わせるクーベルタンの能力によるものであることを記録しておかなければならない。

コースの変更は突然の逆転ではなかった。オリンピックムーブメントの中で、IFとNOCは自分たちの力の増大を意識している一方、IOC委員の方は、クーベルタンをはじめとして反動とは言わな

いまでも、あまりにも慎重な伝統主義者であり、オリンピックムーブメントが突然連合的なデモクラティックな考え方によって彩られることには抵抗があった。

それにもかかわらず、二十年代にIOCの国際スポーツ・ムーブメントへの態度が次第に民主オープンな方向に変わっていったのは、この文脈においてである。

強力な組織立った草の根のスポーツ・ムーブメントと硬直化しがちな政策決定機関との間には機械を動かす「駆動ベルト」が必要である。多くの委員がこの必要性を感じていたがなかでもゴッドフロア・ド・ブロネーが最も強く感じていた。彼はしばしばクーベルタンの貴族的やり方に苛立ちを覚えて仲介機関の創設を求めた。これはIFとNOCの不満を受け止め、その関心と必要を理解し、同時に kongress の決定を分かりやすいやり方で実行する機関である。やがて生まれる執行委員会は、つくられることが待たれていた管理機構の古典的な例である。

1921年6月6日の会合で、会長の求めにより、IOCは「会長ド・クーベルタン男爵の不在の間、執行委員会が設置される」ことを決定する。

最初、ド・ブロネー(委員長)とグートーヤルコフスキーが中心となったが、すぐこれにバイエーラツール、エドストレーム、ド・ポリニャックが加わった。IAAFの会長、エドストレームは競技連盟の声を知り、ド・ポリニャックはクーベルタンの深遠な文化感覚を分け持ち、バイエーラツールはアントワープで名を上げていた。

EC(執行委員会)はその理念と決定において全会一致でなければならなかった。クーベルタンはコンセンサスを保つことに熱心であった。

ECは、1921年11月7日、午前10時半、パリ、フォーブルサントノレ103番地のフランスNOC本部で第一回の会合を持った。驚いたことに、ローザンヌと同じようにパリにも家のあったド・ブロネーは欠席であった。チェコスロバキアのグートーヤルコフスキーも出席しなかった。彼の場合は遠さが理由であったろう。しかしパリを通りかかったド・クールシー・ラファンが、メンバーではなかったが出席した。

ECはその規則を定めた。ECはパリで開かれる。エトワールの近くで、これにはハッキリした意味があった。バイエーラツール伯爵が副委員長、エドストレームが事務局長に指名された。委員会は少なくとも年に二回会合することになった。

しかし直ぐローザンヌで秋に三日間会合することになった。「現在の問題とIOCの次のセッションの準備について検討する」ために。

これは少なくとも、クーベルタンが1924年の年次報告として記しているものである。

ECは財政問題と通信を扱う。チャレンジカップと資料館に責任を持ち、IOCの規則を強化し、オリンピックに関してそれが守られるようにするために必要な手段をとる。「会長と共に、IOCの会議の議題を準備する」。ECは機構のなかで必要不可欠のものとなった。

最初の会合から、ECはその領分を規定した。クールシー・ラファンとエドストレームにイギリスとスウェーデンからの立候補を求め、フランスオリンピック委員会に次回オリンピックの優勝者の名前を

コロンのスタジアムの壁に刻むよう手紙を書き、登山賞を設けることを発表し、1924年のパリ大会の準備についてポール・ルツソウの報告を検討した。最後に、重要なことであるが、IOCは「第八回オリンピック大会の開催が不測の事態のために最後の瞬間に不可能になった場合」に備えてロサンゼルスについて考慮した。

1921年につくられてから1925年のプラハ kongress までの間に、ECは七回会合した。
そしてマネージャー、連絡係、提案者、管理者としての役割を果たした。

1923年のローザンヌでの会議で、ECはフランス政府との間の財政協定を発表した。
1924年 1月の前に、パリ市はIOCに対し、第八回オリンピック大会の準備のためにIOCが負担する支出への協力金として25,000フランを払う。
しかしソルボンヌでの IOCの式典の費用はIOCが負担する。
ECはまたオリンピックの法的、管理上の状況とフランスの法律との関係を検討した。
オリンピック博物館についての規則を定め、今や必要になったオリンピックのショーケースをつくることを決めた。

ECの活動はIOCの構造、機能の全分野にわたった。ECはIFに対する質問を担当した。
ECはIOCのメンバーについて討論し、候補を提案した。とくにルールに従って新しいドイツとオーストリアを新会員として選出するという微妙な問題に取り組んでいる。
全体的に言って、IOCはECの勧告に厳密に従っている。例えば、エチオピア、ラトビア、アルメニア連邦の承認など。
ECはアムステルダムでの大会が望ましいかどうかについて議論し、ケンティッシュ将軍に組織委員会と連絡を保つことを要請し、1924年3月5日のハーグの会議でこの問題を第一に検討し、もし結局保証が十分でないと思われたら、第八回オリンピック大会の開催をロサンゼルスに移すことを考えた。

というわけで、ECは単なる手形交換所ではなかった。ECは聞き、記録し、議論し、決定し、提案した。そして多くの政策を打ち出した！
我々はECに付託された重要な問題に関してこのことをハッキリ確認することができる。例えば大会のプログラムやアマチュアリズムの問題である。

IOCから受けた付託に従って、ECは「各競技の指導者と大会における種目の削減について話し合った。その競技は陸上、水泳、ヨット、ウェイトリフティング、フェンシング、自転車、レスリング、漕艇、サッカーである」。

ECは、1921年にローザンヌで決定されスウェーデン体操のコンテストは復活すべきでないと考えた。その結果、IOCは「パリの準備 kongress に、プラハ kongress を予想して、オリンピック大会で今や必ず行わなければならない競技のリストを提出すること」を決めた。
ECは、IOCは「プログラムの決定者」でなければならないが、競技連盟が決める種目の数、一国当たりの参加人員、適用規則についての意見を取り入れるべきだと主張した。

また大会は二週間以上、三つの日曜日を含んで開催されるべきで、大会では三つの審判団が構成されるべきだ、と勧告した。IFの管理の下にある現場審判団、上告審判団、そしてIOCの直接管理下にある非技術的問題に関する名誉審判団である。

アマチュアリズムの問題に関して、ECは、IOC委員に宛てられ、プラハ kongress で討論さるべき15の質問をIOCに対し提案した。

この質問は単純な底意のないものばかりではなかった。この問題にはすぐ戻る。

この質問は社会の発展にできるだけ近くありたいというECの思いが表れている。

IOCは「アマチュアとは、ハッキリした物質的利益を(スポーツから)受けておらず、その点について名誉にかけて書面で宣言する用意のある者と理解さるべきである。」と考えていた。

「オリンピック」という名称を守ることについては、ECは1926年ブラッセルでの女性の大会に‘オリンピック’という呼び名が誤用されたことに不快感を持っていた。

同じ理由で国際学生同盟に対しても抗議が出された。

執行委員会はプラハオリンピック kongress のプログラムを決定し、会長によって提案された教育 kongress のプログラムを「大幅に修正」した。更にECはこれらの kongress が「スポーツの広範囲の浄化」をもたらして欲しいものだという希望を表明した。

1. 10. 5. ローザンヌ - 1921年

会議 - セッション - kongress

1921年1月はじめ、クーベルタンはIOCの各委員に手紙を送った。

これには1920年12月の回状No.4が同封してあった。既に見たように、オリンピック大会毎に接触する四つの勢力の間の関係を検討したものである。即ちIOC、IF、NOC、そして一段下がって国内競技連盟である。

彼はローザンヌの議事の意味と、各メンバーがローザンヌに滞在している間に互いに「絶えず接触」することの重要性を指摘した。そのために「特にアレンジしなおして」彼らは皆ホテルボーセジュールに滞在した。

セッションと第七回 kongress は同時に1921年 6月 2日から 7日まで行われた。これに先立って、IFの会議とIOCによって組織された三つの諮問会議、ウインタースポーツ、登山、馬術競技についての会議が開かれた。

大衆スポーツについての kongress、これは1919年のローザンヌセッション以来クーベルタンが開催したがっていたが結局開かれなかった。IOCが1920年のアントワープでこのアイデアに反対したからである。ほとんどの代表はオリンピック大会に関する事項がより重要と考えていたことは疑いないが、何人かは隠れた政治的意図を持っていなかったとはいえない。

大会のプログラム、冬の大会、馬術競技の大会など、微妙な議題を前にしてIOCは大変な戦術的抜け目のなさを示した。

前もって開かれた会議は互いの接触によって、論点を明確にする機会を提供した。

セッションとコンGRESはほとんど同時に開かれた。これによってオリンピックムーブメントは民主化の点で前進し、その結果コンGRESは比較的静かになった。

ローザンヌ会議－1921年

目的は、「IOC委員と、場合によってはコンGRESに対する準備工作」であった。出来るだけ民主的な方法で全ての代表の間のコミュニケーションを図るためであった。

IFの会議は難しいことに成りそうな兆しが見えた。クーベルタンは戦術的狡猾さを示して、IOC委員に単にIF代表としての資格で参加するよう求めた。

これで、彼らは二股膏葉であることとIOCを巻き込むことを避けることができた。

ポール・ルツソウは、上部構造の連盟をつくらうとする企てに失敗した。

代表たちは「IF事務局」の維持に落ちついた。

クーベルタンはこの事務局の「行動と力の領域」があまりに「矮小に」計られていることを嘆いている。彼はこの機構は「IOCにとって役に立つに違いない」と考えていた。

5月28日の登山に関する会議では、世界的に有名なスイスの登山家、ジャコーギラルモが報告者をつとめた。IOCの招待に応じた登山クラブは少なかった。1924年のために、エベレスト山遠征に賞を出そうという提案がされた。クーベルタンが残念に思ったことには、IOCは1928年を最後に登山に賞を出すことをやめた。

5月21日から30日にかけて開かれた馬術競技についての会議には奇妙なところがあった。この会議は「国防大臣たちに宛てられた特別招待」によって仲間うちだけの集まりになっていた。これにはクーベルタンは、抗議をせざるを得ないように思われた。

彼が遺憾に思ったのは、役人は「聡明かつ独創的な干渉」の手段によって、「‘馬に乗っていない人々’即ち自分の馬を持てないような人々の間に馬術競技を広める」ためには相応しいとは見えなかったからである。クーベルタンが大いに悔しがったことには、彼の民主的な意見に対しては全く馬耳東風の態であった。

冬の競技についての諮問会議もまた 5月26日と27日に予定されていた。カナダ、ノルウェー、スウェーデン、スイスの代表が参加した。白熱した議論がたたかわされ、妥協が成立して、コンGRESで承認された。

クーベルタンは文学と芸術に関する諮問会議と自治体の会議を考えていたが、いずれも実現しなかった。

1921年セッション

1921年6月2日から5日までモンベノンのカジノの構内で行われた。ここには第1次大戦中ローザンヌオリンピック学院のオフィスがあった。

19カ国から23人のIOCメンバーが出席した。欠席した者の中には健康を害していたW.M.スロー

ン、極東大会で上海にいた加納治五郎が含まれる。

討議されたのは、IOCの運営、オリンピック大会の規則、第八回オリンピックの会場の選択、オリンピック冬季大会についての賛否両論などであった。

これまで見たように、スポーツ界の複雑さが増すにつれて、IOCの行政の中に執行委員会が必要なものになってきていた。セッションはクーベルタンの提案を受け入れ更に細かく検討した。オリンピックメダルの形と大きさ、競技と国のランキングの廃止の確認等。

しかしもっと重要なことは将来の kongress のための規則の確立が望まれたことである。同じように、IOCが「オリंपィズム」という言葉を守ること、もっと大きな注意を払うようにという希望が表明された。

そして、カタロニア人たちは彼らのやり方を変えるように丁重に要求された。つまりオリンピックに先立って行われる彼らの大会は単にカタロニア大会となった。

オリンピック大会の規則も検討された。スポーツの異常な発達には既に難しい問題を生んでいた。とくにチームスポーツの出場資格である。

セッションはブラジルの予選システムを採用するよう提案した。それは「問題の完全な解決ではないが、疑問の余地のない利点」を持っているからである。

パリの1914年 kongress から1921年のローザンヌの kongress にスムーズに引き継ぐために、「橋渡し」の委員会がつくられ、フランスのメンバー、クラリー伯爵が委員長となった。メンバーにはパリ kongress の三人の主役、フランツ・ライヘル、ポール・ルツウ、アラン・ムールが含まれた。

第八回大会の開催都市の選択は深刻な論争を巻き起こし、イタリア代表団の劇的な退場を生んだ。

ポリニャックの提案で IOCは直ちに、6月2日投票することを決めた。

グートーヤルコフスキーは、パリとアムステルダムが「それぞれ第八回、第九回の開催都市として選ばれることを求めた」クーベルタンの最近の回状に触れた。

ローマもまた争いに加わっていたが、この立候補にはなんら公式のバックアップがなく IOCは1908年の繰り返しは望まなかった。

ロサンゼルスも立候補していた。しかしヨーロッパ人が負担しなければならなくなる出費が、当時はあまりに大きすぎるように思えた。

アムステルダムは、1919年にアントワープに、1921年にパリに譲っていたが、その立候補は「最も騎士道的、最も規律ある形でスポーツ精神を代表していた。」

イタリアのモンテューがクーベルタンの提案を嘲笑したが、この提案は投票にかけられた。14票が賛成、反対 4票、棄権 1票であった。投票の有効性が二度三度と争われたが、「正確に同じ結果が出た。会長はいつものように投票しなかった」。

その夜、イタリア代表団はローザンヌを去った。クーベルタンが自分で認めているように、それは「一つの策略」に対する抗議であった。

IOCは詳細な付属文書を出さなければならなかった。

IOCにはまだ取り組まなければならない大きなハードルが残っていた。それは冬のスポーツの問題であった。

一方の陣営はスカンジナビア世界で、長い歴史と自分たちの冬の大会に誇りを持っていた。他の陣営はアルプスの国々で、新参者ながら滑降の新しいビジョンによって意気軒昂であった。そして生まれようとしている冬の観光産業によって強力に支えられていた。

結局、エドストレームのおかげで、6月2日、4日、6日の長い議論のあと妥協が成立した。「IOCは第八回オリンピック大会の際に1924年シャモニーで開催されるウインタースポーツウィークを後援する。しかしこれはオリンピック大会の一部を成すものではない。」というわけである。

このセッションの間に他にも検討された問題があった。

例えば、クーベルタンはフランスの委員、グランダスに「1894年以来達成された全ての仕事を概括する一種のIOCの歴史」を書くことを求めている。今回の我々の研究者はこのプロジェクトに関していかなる痕跡も見いだすこともできなかった。

YMCAの使者で地域大会の先駆者である、エルウッド・ブラウンは中央ヨーロッパ大会の創設を提案した。チェコスロバキア、ルーマニア、ポーランド、ユーゴスラビアからなる一つのグループとギリシャ、小アジア、エジプトのグループ、「そして多分ブルガリア」の大会である。これには何の決定も下されなかった。

アメリカの委員、メリックは「カトリックとしてブラウン氏とYMCAの指導者に深甚な敬意」を表した。提案の宝庫とも言うべきエルウッド・ブラウンは後日、「遠い国から集まる大衆スポーツのデモンストレーションの大会をYMCAの体育指導者によってパリで開催することも可能であろう。」と示唆した。

1921年 कांग्रेस

23カ国から78人の代表が出席した。当時存在した19のIFのうち15の代表、22のNOCの代表が出席した。ドイツと第1次世界大戦におけるその同盟国は招待されなかった。

कांग्रेसのテーマはハッキリしたものであった。オリンピック競技のプログラムの修正と参加の条件。IAAF会長で将来のIOC会長、ジークフリート・エドストレームが議長をつとめ、IFとNOCを代表する二人の副議長の補佐を受けた。

三つの委員会がつくられた。アマチュアリズム、議長G.T.カービー、オリンピック大会の組織、議長フランツ・ライヘル、オリンピック体操競技プログラム、議長A.J.クッペルスであった。

三つの諮問会議から生まれたアイデアや勧告は कांग्रेसの討論に取り上げられた。

非常に議題が多かったので全てをカバーすることはできなかった。

1914年 कांग्रेसと1920年アントワープセッションからの懸案であったオリンピック大会の種目削減については、 कांग्रेसは見るべき成果を上げることが出来なかった。

削減の候補となったのは、自転車トラック競技、射撃、ヨット、テニス、サッカー、そして1914年の

パリ kongress で選択競技とされた競技である。

しかし、IFの側はそれぞれの独立を確立したいという気持ちから、ますます「多くの種目を積み上げる」傾向があった。そして大変な苦勞の末作られた必須種目と選択種目の区別は廃止された。ゴルフ、アーチェリー、フィールドホッケーがプログラムから消えた。

体操では八種競技が作られた。

アマチュアリズムの問題は、全体としてペンディングのまま残った。

金銭についてのリベラルな社会と潔癖な社会の矛盾を反映して、kongressは同時に二つの方向を向く矛盾した立場しか取れなかった。つまり国内競技連盟が自国の選手のアマチュア資格ルールに従って書面で保証し、NOCが副署するというものである。

IFは同じようなkongressを規則的に、とくにパリ大会の後、開催するよう要求した。反乱の潮が高まっていることと、IFの力が強まっていることをよく承知していたクーベルタンは、この提案に激しく反対した。嵐の討論が続いた。

ローザンヌ kongress は長いIOCの歴史の中でも一つの大きな里程標である。

戦争の世界的大洪水の後で、このkongressはオリンピックムーブメントの活力を再確認し、クーベルタンのオリンピック戦略によってなされた政治的文化的選択の賢明さを証明した。

冬のスポーツがますます重要になっていることを示し、その全てがオリンピックプログラムに取り入れられた。

スポーツでも政治面でも対抗勢力となったIFが、オリンピックムーブメントにおいて主役をつとめる範囲が理解された。この対話、実は対立、は近代オリンピックムーブメントの一面であり、その発展の要因の一つとなるものであった。

最終的に、四年毎の祭典の発展はオリンピックのルーツへの回帰を促すものであった。

二十年代には、地域大会開催に伴って数多くの重要な提案がなされた。これはその地域に住む人々の文化・習慣をより直接に反映するものであった。

1.10.6. 地域大会

場所がどこであれ、大衆的な大会は共通の特徴をもっている。何処であれ「それは彼ら自身の意味付け、彼ら自身の高貴さ、彼ら自身の偉大さを引き出そうとする努力から生まれるものである」。

クーベルタンはこの意見を「北のオリンピアド」から得た。これは地域大会とは言えないが、その地域性とオリンピック精神から我々の研究にとって見落とすことのできないものである。

しかも、クーベルタンは、この努力、「全ての文明の根源」を日常の市民生活の一部にすることを説いて飽くことがなかったから、尚更のことである。

クーベルタンにとっては、地域大会はオリンピック選手選考のための単なる機構的な一要素ではなかった。このことを心において、我々は何故YMCAの忠実な構成員であったエルウッド・ブラウンがクーベルタンとIOCによって尊敬され、人気があったかを理解するよう努めなければならない。エルウッド・ブラウンにとっては、スポーツ大会は最も恵まれない社会階層と国にとって基本的な教育の一部であった。オリンピック前の予選イベントとしての地域大会の考えは彼の計画の中にはなかった。ただ付随的に、オリンピック大会成功のために地域大会が予選の役割を果たすよう

求められているのであった。

しかし彼の地域大会は常にオリンピックの理想の息吹に包まれた勇壮華麗な競技場と見なされていた。

1921年のローザンヌ kongress の幸運な結果の一つは、地域大会発展のためのより正確な定義と新しい刺激が得られたことである。

1912年に、クーベルタンは「この支配される人種の支配する人種に対する勝利が危険な意味を持ち、反乱を勇気づけるものとして地元の世論に利用される可能性があるという偽りの思想」を非難したことがある。

彼はドイツだけが「原住民」の間にスポーツが発展するのを恐れず、イギリスが原住民たちの意志に任せっぱなしにし、イタリアはてんから地域大会のことなど考えたこともなく、フランスは何ということかそのようなプロジェクトに反対している、と嘆いている。

世界大戦は、アフリカだけでなく、ヨーロッパでも、そして事実上全ての大陸で、この問題の要素に大変化をもたらした。

ヨーロッパでは多くの国が独立を達成した。チェコスロバキア、ポーランド、バルチック諸国、アイルランドは苦闘の末自由を獲得した。領土の変更が中央ヨーロッパで起った。今や外交的均衡作用は多かれ少なかれフランスによって支配されていた。

オリンピックムーブメントは、国際政治においては均衡を回復しようとする努力の反映に過ぎないものになりかねなかった。

ローザンヌ kongress は1922年の第21回パリセッションの方向づけをした。

「スポーツ地理」の原則に忠実であった会長とほとんどの委員は、アイルランド自治法案が成立し、効力を発するやいなやアイルランドのIOC委員を認めることにやぶさかでなかった。ところがセッションの正に第一日目、法案がダブリンとベルファストの二つの議会を通過しているにもかかわらず、イギリス代表のメンバー、ケンティッシュ大佐は決定を延期するよう求めた。彼は明らかにロンドン当局に相談し、同意を得て、6月9日、南アイルランドのIOC加盟に賛成した。

新しいポーランドは、フランスの強力且つ秘密裏の応援を得て、西側勢力によって発動された生まれたばかりのソ連に対する闘争で、政治的に西欧同盟の側に立とうとした。既に物質的にも精神的にも西側に組み込まれているのに気がついていたから尚更であった。

ポーランドスポーツの代表ビッティグは、1920年以来ポーランドNOCは二年ごとの地域大会、ポーランド、リトアニア、ハンガリー、オーストリア、チェコスロバキア、ブルガリア、ユーゴスラビア、エストニア、フィンランド、ギリシャ、アルバニア、トルコ、ルーマニア、そしてダンチッヒ自由都市の参加する地域大会の開催を熱望していたと述べた。

組織委員会本部はワルシャワになるはずであった。

この計画は一種のオリンピック「防疫線」を示そうとしたものであった。

ポーランドはこの計画を申し分のない法的主張の基礎の上においた。つまり、IOCはローザンヌ

セッション以来地域大会に高い関心を示してきたではないか？

旧ロシアの委員で今はパリに住むプリンス・ウルソフは、ロシアがポーランドの提案に加わることを認めて欲しいといった。三百万のロシア人亡命者が既に自分たちのスポーツ協会をつくっている。ソビエトロシア自体もスポーツに扉を開きつつあった。1921年にソビエトサッカーチームはポーランドチームと対戦している。

情勢は、ルーマニアのカロル国王がバルカンにおける政治的リーダーシップを得ようと中央ヨーロッパの地域大会を提案したために余計こんがらがってしまった。この大会にはルーマニアに加えて、ギリシャ、チェコスロバキア、ユーゴスラビアが招待される筈であった。平行関係が印象的である。政治用語の「一寸した了解事項」がオリンピズムの「一寸した了解事項」に反映している。

セッションの間、外交上の区分けとは異なるスポーツ地勢学の信奉者と、どんな性格のものである地域的な発議を絶対に支持する者を巻き込んだ活発な議論が続いた。

前者のグループにはベルギーの委員、バイエラツール。後者にはいくらかニュアンスがあるが、モナコの委員、ゴーチエービニャールがいた。

バイエラツールは今やクーベルタンの後継者と見なされるようになっていたが、IOCは二つの政治的プロジェクトに直面しようとしており、「スポーツは政治からは切り離されてあるべきだ」と考えていた。

ポルトガルの委員、ペンハーガルシアとゴーチエービニャールはバイエラツールに賛成していたが、IOCはそのような提案を禁ずるよりは奨励すべきであり、地域大会に対するIOCの後援はその地域のスポーツの発展に貢献すると考えていた。

結局、政治的、経済的理由でIOCはヨーロッパ地域大会を拒否した。

しかし委員の「エキゾチックなスポーツ」に対する態度は全く違っていた。

彼らは「極東大会とラテンアメリカの大会は必要に応えるもの」であると考えた。

逆上って1913年から、クーベルタンは「極東オリンピック」の開始を見たいと望んでいた。その文明が非常に「洗練されて」いるので、彼は1904年のセントルイスと比較されねばならないのを嘆いた程である。セントルイスは「未開の状態からやっと抜け出たばかりの種族の代表」であった。

極東では、西欧スポーツは植民者とプロテスタント宣教師によって紹介された。

日本では、明治時代がドアを開いた。

クーベルタンは、1913年の記事でオリンピックの理念の極東への浸透の歴史を跡付けている。

1911年、アメリカ植民地省の下にアメリカ人ウィリアム・フォーブスを会長とするフィリピンアマチュア体育協会がつくられた。1912年マニラで最初の国際スポーツ大会が数十人の中国人、日本人が参加して開かれた。極東大会が創設され、二年ごとに開かれることになった。1921年の上海

大会は確か第五回大会であった。

IOCは大会後援を承認した。この大会が中国、日本、フィリピンのような大国に「教育的影響」を与えようと考えたからである。極東大会は「オリンピック幼稚園」の役割を果たした。同じことがラテンアメリカ大会に対しても行われ、リオデジャネイロで大会が開かれた(1922年9月)。

1920年、エルウッド・ブラウンはIOCのラテンアメリカ「担当官」になった。

彼は1922年のIOCセッションで任務について報告している。大変な困難があった。

距離、ナショナリズム、プロテスタントとカトリックの隠れた争い。結局、ブラジルのカトリックが最後の勝利を収めた。IOCはラテンアメリカ大会後援を承認した。

南アメリカや極東へのオリンピズムの浸透は多かれ少なかれ一貫した政策であった。

ラテンアメリカ大会、中央アメリカ大会、極東大会は、ある意味でIOCの一貫した長期戦略の論理的、漸進的な継続であった。

アフリカ大会をつくろうという企てははるかに困難であった。事実これは失敗に終わった。後に見るように、この問題は1923年のローマセッションの議論の中心となった。

1914年以前、クーベルタンのアフリカへの関心は文化的と言うよりも政治的なものであった。古典的な帝国主義的歴史観に捕らわれた植民地主義者の態度を反映していた。

1918年以後、被支配国の反乱の危険とアフリカの人々の解放の不可避なことを知って、政治から文化的な観点へ移った。この態度はクーベルタンの足取りと調和するものだ。彼は、文化がアフリカの隷属状態から独立へのスムーズな移行を可能にすると信じていた。

1914年以前、クーベルタンの関心は主としてホワイトアフリカに限られていたが、今や彼は、その過去が認められておらず、未来への権利を否定されているブラックアフリカ、しかしその権利を「要求しはじめようとしている」大陸に関心を持ち始めた。

平和維持活動に参加するために、オリンピズムは「アフリカ征服」を開始するであろう、そしてアフリカに「スポーツ活動の利益」をもたらし、人々に「現代文明の必須の基礎である体系化されたルールと比較可能な結果を伴う広いスポーツのシステム」に参入することを可能にするであろう。

1923年、IOC会長はアピールを出した。「スポーツはアフリカ征服を求めている！」

この目的を達成するために、IOCは二年毎にアフリカ大会を開催する。ヨーロッパの施設があり、役員がいるアフリカ大陸の主要都市で開かれる。この大会は「原住民だけのためのもの」で1927年、エジプトのアレキサンドリアで始まる。

内陸部の若いアフリカ人には「原住民スポーツグループ」が接触する。このグループにはIOCが「アフリカのスポーツ奨励のためのメダル」を大量に手に入れられるようにする。メダルの表面にはラテン語で「自分を知り、自分を治め、自分を支配する者は真のスポーツマンである」と刻んであ

た。

これが1923年 6月 8日に始まった第八回オリンピックの選手役員の登録と、時を同じくしていることに大きな意味を感じてもよいであろう。

寄進者のリストの冒頭はフランス共和国大統領であった。

こうした全ての努力にもかかわらず、IOCはアルジェリアのフランス植民当局の危惧と反対に直面して中止せざるを得なかった。これは当時のフランス政府が密かに手を回していたものである。反対には「植民地の成功によってフランス本土の威信が傷つけられかねないという考えが潜んでいた」。

クーベルタンはアルジェリア総督、テオドール・スティエグに抗議の手紙を書いた。
アフリカ大会は死産した。

1. 11. 狂った歳月 — 1919—1924

危機と変化—第八回オリンピックの大会

世界はかつてこのような狂乱を経験したことがなかった。

殺戮を生き延びた驚きから未だ醒めやらぬままに、男も女も新しいリズムを発明し、新しい自由を手に入れた。この旋風に巻き込まれて、オリンピックも混乱を避けることはできなかった。オリンピックムーブメントの1919年から1925年の歴史は、多くの本質的に異質の、刺激的な意見の流れに満ちたセッションとコンGRESSによって特徴付けられる。

1. 11. 1. 第21回セッション、パリ — 1922年

このセッションの特徴は大戦の地政学的影響である。

アイルランドとポーランドは独立した。ソ連に対しては「防疫線」が引かれていた。

更に「時代の空気」に加速されて、これまで多かれ少なかれ抑えられてきた問題、アマチュアリズム、女性運動、国内民主主義などが新しい力と重要性を得てきた。

1922年6月7日、パリのアウトモビルクラブ・ド・フランスで、当時リストに乗っていた52人のIOC委員のうち27人がピエール・ド・クーベルタン議長の下に集まった。

10人が欠席の断りを送り、1921年のローザンヌセッション以来 3人が亡くなっていた。加納治五郎が丁度貴族院議員に列せられ、デ・アルベアールがアルゼンチンの国家首席に就任した。

前章で見たように南アメリカ大会は時代錯誤の宗教戦争を引き起こし、中央ヨーロッパ大会は深く揺り動かされたヨーロッパの政治的混乱の内に溺れようとしていた。

極東大会はより立ち直りが早く、最近の世界大戦中のこの地域の比較的安定した状況のお陰を被っていた。従って、成功は部分的であったが、オリンピックの理念の認識は着実に根づきつつあった。

他に処理しなければならない二つの問題は、オリンピックへの女性の参加とアマチュアリズムで

あった。

モンテカルロとヴィシーで開かれる「オリンピック」女性スポーツイベントは、フェミニストの抗議という以上に役に立ちそうもなかった。

セッションは女性の大会参加問題を無視した。委員たちは女性運動の金切り声の抗議はそのうちひとりで鎮まるものと考えていた。

休戦に続く社会的混乱の中で、アマチュアリズムの問題は再浮上せずにはいなかった。イギリスの委員、ケンティッシュ大佐は「肉体労働者にアマチュア資格を認めない」

アマチュア漕艇協会の頑固さを嘆いていた。

クーベルタンは「そのような不承認は民主主義に対する重大な挑戦だ」と罵った。

しかしこれはほんの前菜だった。メインディッシュはこれからであった。つまり問題はパリ大会(1924)の進捗状況であった。

6月7日、ポール・ルツォウは、1914年と1922年の kongress の間のギャップに「橋渡しする」ための委員会の事務局長の資格で、セッションに参加を認められた。

1914年にペンディングのまま残された点のほとんどは、1921年のローザンヌ kongress で処理されたが、選手宣誓、競技種目のクラス分け、チャレンジカップの問題は例外であった。IOCはテキストを修正できなかったのか？ できなかったのである。

フランスNOCの事務局長フランツ・ライヘルが第八回オリンピックの大会の組織について報告した。

クーベルタンは「常に繰り返される困難」を思い出した。それが能率的な組織の実行を妨げる。ライヘルは「スタジアム建設のいろいろなプロジェクト、フランス議会の信用保証のための投票の経緯、選手の宿舎などについて詳細な報告」を読み上げた。

彼は優勝者の名前がスタジアムの壁に刻まれること、登山賞がアルパインクラブの提案に基づいて1919年から1923年の間のもっとも偉大な業績に対して授与されること、シャモニーに予定されるウインタースポーツウィークが関係国際競技連盟の合意で計画されることを発表した。

初めて、セッションと kongress の公式報告にECの役割についての言及を見ることができる。ブローネーが報告した。執行委員会により大きな独立性を与えるために憲章が少し変えられた。これ以後ECは本部をローザンヌに置くことになる。

オフィスの経費の問題がエドストレームとECによって提起され、参加者は準備段階の出費をカバーするために給付金を大会の予算の中に組み込むことを考えた。

メンバーの会費は50スイスフランに増額された。

エドストレームが議長で、ハーンとポール・ルツォウが委員であった kongress の規則のための小委員会が、準備中であった報告のアウトラインを提出した。

「議題の確定、招待状の発行、kongress の議長をつとめる権利はIOCにある。」

三つのカテゴリーだけが招待される。IOC委員、IFとNOCの代表である。

とくに急いだわけでもないが、三つの空席があるので、新しいドイツの委員を加えるかどうかも検討された。

シェリル將軍は、パリとアムステルダムに第八回、第九回大会をそれぞれ開催させる案はアメリカのスポーツサークルでは受けがよくない、と報告した。

クーベルタンはこの機会を捕らえて、委員会と kongress のそれぞれの役割を明確にし、「そこで真実でないことが伝達される」のを非難した。

1922年のパリセッションはIOCの成熟を示した。議論は広い範囲をカバーし、寛容と民主主義の精神のうちに規則を守って行われた。クーベルタンが望んだように「ビジネスライクなミーティング」であった。

次のセッションはモンツールの要望で、「1923年のイースターの頃」イタリアで行われることになった。

1.11.2. 第22回セッション、ローマ — 1923年

第22回セッションはクーベルタンが議長をつとめ、1923年4月7日から12日までカピトリウムの間で行われた。

ECはド・ブローネーが議長をつとめ、7日の朝前もって会合し、特に重要な議題の扱いについて準備した。

開会式は国王ビクトール・エマニュエル三世臨席の下に行われ、イタリアの主だった政治家、学者が多数出席した。

クーベルタンは「この決意の丘に立って」、歴史のなかで意志の力で敵に対抗することのできたローマの人々に敬意を表した。「ストイシズムの令名高い影」が極めて身近にある。オリンピズムの進歩に疑いを持つ者は、エピクテトスの「祈祷書」かマルクス・アウレリウスの「自省録」、「真のスポーツマンのノート」の頁へ戻れ。

読む者は心を安んじ、オリンピックの制度が強力なのは「民主主義と普遍性」の二重の保証の下にあるからだと気がつくだろう。

「全ての人に全てのスポーツを」。この言葉は現代のスポーツマンシップの民主的な熱望を定義したものである。

IOC会長は熱弁を振るった。「今日、スポーツによる世界征服を完成しようとするならば、最後の戦いの最初の作戦行動を策定しなければならない」。この「併合」はアフリカの併合であろう。そしてその範囲は「ヨーロッパ植民者の善意が及んだ所ばかりでなく、中央アフリカ、昨日まで地理さえ定かでなく、その混乱した血塗られた過去を我々はやっとかいま見ることをはじめたばかりの地域の併合、スポーツ王国への併合であろう」。

オットー・メイヤーは、パリ大会の準備が討論の最も困難なテーマであることを報告した。まさに、

時は過ぎていく。遅れが生じている。クーベルタンは苦勞して苛立ちを隠した。しかし他の問題も同じように重要である。

普通のは別にして、IOCのイデオロギー的官僚的在庫品と呼ばれるものがあつた。

アマチュアリズム、女性問題、会費、チャレンジカップ、盲目的愛国主義、ドイツの代表権等々。しかしクーベルタンがトーンを定める。ローマセッションの中心テーマはスポーツのアフリカへの浸透である。

フランスNOC 会長、クラリー伯爵がコロネスタジアムの工事について中間報告を行った。そしてヨット競技の会場と水泳プールを発表した。

オリンピック選手村(主要な革新)の運営は私企業に任される。選手は12人から15人用のユニットの2人部屋に入る。

ド・ポリニャック侯爵は芸術競技の審判を集めるのが難しい報告した。「ミューズの五種競技」という美しい名前だったが、芸術家たちには歓迎されなかった。

五つの古典的なコンテストに「工業アートとスポーツ」というテーマの展覧を含む芸術、文学行事が追加されることになるだろう。フランスの提出したオリンピックメダルのデザインは賛否両論で迎えられた。IOCはこれを1924大会にだけ使うとして受け入れた。

フランツ・ライヘルはコロネのオリンピックスタジアムの設計図を示しながら経過報告を行った。エドストレームは冬の大会はパリ大会の一部ではなく、単にIOCの後援の下に行われるべきだと主張した。スケルトンとボブスレーが競技種目になった。

オランダの委員、シャルー大尉が1938年のアムステルダム大会の準備が既に始まっているとセッションで報告した。1928年の冬の大会の場所はまだ決まっていなかった。

アマチュアリズムの問題が再び取り上げられた。今回はジークフリート・エドストレームが提起した。彼とクルシー・ラファンによれば、「収入のロス」に対する補償についての憤りを放置しておくのは適当でない。「民主主義は発達している。」

ハンガリーの委員、ムサはトレーニングの時間も補償の対象にすべきではないのかと質問した。議論は熱のこもったものになった。この結果エドストレーム、ケンティッシュ、モンツォー、ライヘルからなる小委員会が設置された。クーベルタンは1909年にベルティエが行った調査の質を思い出して、決定を1925年のプラハ kongress に延期した。

フェミニストの「悪用と過剰」に直面しながら、IOCは動かされなかった。

チャレンジカップは三つのグループに分けられた。歴史に関するもの、主題によるもの、商業的なものである。歴史の分野はオリンピック博物館にゆだねられ、他のものはスポーツの新しい区分けによって分割することが決まった。興味のないものは提供者に戻すが、そうでなければIOCに保管される。

盲目的愛国主義の問題にメンバーはいきり立った。前回1920年アントワープ大会で選手、特にイギリスの選手が「審判の裁定に反抗した」。これは許すべからざることである。委員はいろいろなNOCに警告を送ることになった。また名誉の陪審が設置された。

決定は以下の通りである。

- 1° オリンピック大会期間中IOC ECが名誉の陪審を構成する。
- 2° この名誉の陪審の仕事は、国際審判団の仕事でない非技術的性格の全ての紛争に介入すること。それが組織委員会の要請であれ、団体の正当な代表によって提出された場合は当事者の要請であれ、そして絶対に必要な場合は自主的に、介入することである。

このテキストは採択された。これは IOC憲章の一部ではないが、「運用上の規則」の役割を果たした。

ドイツの代表権問題は IOCにとって幾分、具合の悪いものであった。

一方では、休戦が成立し、平和条約が結ばれた以上、普遍的であるのはオリンピズムの義務である。しかし一方では、1924年の大会が開催されるフランスはまだ荒廃しており、多くの委員はドイツのスポーツ・ムーブメントの中にある好戦的な性格を危惧していた。

クーベルタンは困った立場にいた。彼は再び、IOCは1914年にドイツの委員を追放したわけではなく、三人のドイツ委員が死んだので、補充の必要があることを指摘した。

キャンセルされた1916年大会の事務局長、カール・ディームとマルヴィッツが1922年末会長との会談のためにローザンヌに招かれていたが、これは実現しなかった。

議論は白熱した。状況は絶望的だった。クーベルタンは議論を持ち越した。

同じように、プリンス・ウルソフもパリ大会にロシア人は受け入れられないと告げられた。亡命ロシア人は「自治国家ではない」からである。

オーストリアはもはやIOCのメンバーではなかった。しかしパリ大会には参加する。

これは寛大な措置であり、それに対する対応は目立たぬようになされた。

明らかに、これらの問題は単なる形式の問題ではなかった。白熱した議論の内に浮かび上がったのは、深層にある重要な問題の兆しであった。

それにもかかわらず、1923年のローマセッションではスポーツのアフリカへの浸透とアフリカ大会開催が、結局はただ一つ重要な問題であるように見えた。

そして先に見たようにクーベルタンもそれを確認した。

「黒人」は前線で戦った。これは明白な事実、ナンバーワンであった。

オリンピズムは普遍的なものである。これがナンバーツーであった。

アフリカは「浸透」されねばならない。言葉は曖昧でないこともないが、ナンバースリーである。この平和的な教育的な精神が植民主義者の精神と如何にして衝突したか、我々は既に見た。

華麗な祝典がクイリナリスイタリア王宮で用意されていた。

クーベルタンと IOC委員はバチカンに丁重に迎えられ、法王ピオ十一世は「オリンピズムに対する心のこもった同感の新たな保証」を与えた。

チェコスロバキア政府とNOCの招きに応じ、IOCは1925年プラハで技術、教育 kongress を開くことに同意した。パリはIOC第23回セッションを開催することになった。

1. 11. 3. 第23回セッション、パリ－1924年

IFと大会組織委員会の関係、IOCの予算及び管理運営のECとのつながり－これらの行政上の問題は戦後のセッション、1921年ローザンヌ、1922年パリ、1923年ローマで論議されてきた。議論はしばしば白熱し、時には袋小路に陥った。今やECは執行機関としての役割をフルに果たし、不満や苛立ちを吸収した。IOCは温厚な民主主義の時代に入った。

IOC委員と、現代のオリンピズムのなかで自分達の居場所を求めて声高に叫んでいたIF、NOCの代表は皆満足した。

独裁者クーベルタンの影は薄れはじめた。統治の終わりが迫っていたのである。

我々はクーベルタンが如何に自分の家政に注意を払わなかったかを知っている。

財政状態は、彼の文化的伝統を反映するものであったが、破滅に近かった。

また彼は自分が72才になったことを知っていた。彼の心を満たしている唯一の関心は傑作を完成することであった。

これ以後、彼の全ての行動は戦略的緊急性と実存的不安に支配されることになる。

うんざりするような技術的な問題についてはできるかぎり外部サークルのメンバーに任せ、彼自身は、それが神の意志であるので、神殿を完成しなければならぬ。

彼が祝福を与えたECの制度は、ますます複雑になるオリンピック創造のキーボードをクーベルタンが極めて巧みに、時には狡智に演奏するのを可能にした。

しばしば反抗的なIFやNOCの代表に直接対峙する代わりに、自分は一步退いてECに「検討」させた。同じように、クーベルタンは1925年のプラハ kongress の二重の性格を確認することによって、スポーツの技術及び官僚的技術問題の支配を出し抜くことができた。

プラハ kongress は技術、教育の問題を扱う筈であった。

競技連盟は満足し、会長はもう一度、近代オリンピズムの哲学的基礎を呼び戻すことが出来るであろう。

クーベルタンが30周年の祝いと第23回セッションの進行とをハッキリと区別したのは、IOCの独立を再確認するためであった。

6月23日、オリンピック大会の30周年記念日は、1894年 6月23日にオリンピックの復興が宣言された歴史的なソルボンヌ大講堂で祝われた。

フランス共和国大統領、ガストン・ドゥーメルグ、そして多くの著名な学者や政治家、軍人も出席した。その夜、エリゼーで IOC委員のための晩餐会が行われた。

こうして厳かに、象徴的に、IOCの卓越性と独立性が公に確認されたのである。

1924年6月25日、セッションはルーブル博物館のホールで開会した。クーベルタンが慎重に選んだもう一つの文化の象徴であった。

37人の委員が会長の呼びかけに応じて集まった。セッションは 7月12日まで続いた。

セッションの議題は極めて中身が詰まっていた。いくつかの事項はてきばきと片づけられた。それらのうちに、ECが慎重に準備したドイツの委員の選挙があった。

閣外相、レバルトとルペルティ博士が選ばれた。

劇的な頁がめくられた。明らかに時代に遅れていたド・クールシー・ラファンが二つの「現代のオリンピア」センター、一つはヨーロッパに、一つはアメリカに、をつくる必要を説いたが、メンバーを納得させることはできなかった。この提案は20周年式典の際に発見されたランスの古代競技者の学院にならったものであった。

クーベルタンは「現在の状況のなかで、このアイデアに戻るのが有益」かどうか分からない、と答えた。

女性の参加の問題は手早く却下された。プログラムを減らすという口実の下にクラリー伯爵の動議が受け入れられ、「単に現在の状態を維持する。いかなる場合もIOCは女性のフェンシングを必須種目とはしない。」ことになった。

芸術競技も問題であった。

これらは「その他」の中に入れられていた。その中には重要なものもあったのだが。

セッションは主として地域大会の発展と組織に関心を注いだ。アマチュアリズムは依然として問題であり、オリンピックのプログラムにとって刺となる問題であった。

20年代、地域大会が全ての大陸に広がった。IOCはこの傾向を歓迎した。しかし同時に、道徳的、行政的、政治的な理由で心配の種ともなった。

アフリカ大会はローマセッション以来、IOC委員の心に重くのしかかっていた。

事実、理に適った希望があったにもかかわらず、アルジェリア総督は1925年の第一回アルジェリア大会の費用を負担することを拒否していた。

大会は1927年まで延期され、アレキサンドリアに移された。それでもIOCはプロジェクトを固執した。一つの戦略が確認された。ヨーロッパ人植民者の助力が必要になるにしても、スポーツはアフリカの周辺から内部へと浸透していくであろう。

他の場所では、極東で、中央アメリカで、南アメリカで、そしてアフリカ大会には含まれないエチオピアで、状況をハッキリさせることが求められていた。

バイエラツールはセッションの間に四つの特別委員会を招集した。極東、南アメリカ、中央アメリカ、インドの委員会である。エチオピアはルクセンブルグ人のペスカトールに、この広大な国で

「前向きに」オリンピック宣伝を組織するよう求められた。

これらの大陸は同じように後進性の問題に付きまとい、植民者勢力がある程度のスポーツ自治を認めるようになるまで待たねばならないという、植民者の保護下にある国の状況が付け加わっていた。フィリピン、ジャバ、東南アジア海峡植民地などである。

しかし疑念を持つクラーとは対照的に、クーベルタンは楽天的であった。クラーは、地域大会はオリンピック大会の予備競技会にしなければならないだろう、即ち「地域大会はトレーニング大会以上の何ものにも成らないだろう」と考えていた。しかしクーベルタンはスポーツが広がるのは時間の問題であると信じていた。「全ての国民に！」

それにもかかわらず、永遠の問題、アマチュアリズムは提起されずには済まなかった。ほとんど毎日表面に浮かび上がった。クーベルタンは討議すべきポイントのリストを読み上げた。「書面による個人の宣誓の導入。教師とプロの区別。教えた競技以外の競技におけるアマチュア資格。等々」。委員は十分な時間をかけて考えた。7月8日、16項目の質問状が出来上がった。いくつかの項目はプラハの kongress で提示される。意見には相違があった。IOCは言葉を濁した。IOCは困った立場にあった。

大会のプログラム削減の辛い問題が残った。これは1914年以来問題になっていた。

問題は混乱しており、力関係を分析しないかぎり解決できないことは明らかであった。一方に、自から公布した憲章によって与えられた特権を守ろうとする IOC があつた。

他方に、大会の主役、IF、NOC、そして1924年のパリセッションの議事録で初めて名前を挙げられた選手自身がいた。

IOCは議論が許容される範囲の枠組みをつくりだそうとした。そこでカドガン動議が出され、全会一致且つ断固として採択された。

「国際オリンピック委員会はオリンピック大会においてどの競技を不可欠とするかを決定する絶対的権利を保持する。大会主催国はその責任を持つ大会において、IOCの承認する選択競技のうちから実施したいと思う競技を選ぶ。競技種目は常に当該国際競技連盟の技術的ルールの下に実施されねばならない。」

この全会一致の決定も非常に長い議論が続くのを妨げなかった。いずれ見るように、対立する利益の複雑な網の目が闇の中でうごめいていた。

同時に二重の役職を持つのを禁じようとするルールにもかかわらず、全てのIOC委員が国内の、或いは国際レベルのスポーツ・ムーブメントに加わっており、競技連盟や選手や大会開催都市当局の圧力に無頓着でいられないのは明らかなことであった。

実際には、若干の譲歩、つまり射撃、「女性の」フェンシング、トラックでの自転車、水泳チーム種目などの排除を除いてIOC委員の合意はできず、1925年に開かれるプラハ kongress に決定を延ばすことに同意ができただけであった。

クーベルタンは「自分の引退が近いことを仄めかしながら」委員会に対し、現在の憲章が許しているのは「思慮分別の限界」の内に止まることであることを指摘し、「介入主義の危険」を警告した。

彼は慎重な言い方で、パリ大会が郊外のコロンブスタジアムで行われたために、そこそこの成功に止まったことを残念に思うと述べた。「もしオリンピック大会が郊外でなく、本当にパリで行われたら、全ての人が参加しただろう。」

しかし、彼は全委員が称賛した強い調子で述べた。「基本的なルールが行政当局によって‘粉々にされ’公権力による絶え間ない邪魔は許すことのできない程度に達した。」

1924年のパリセッションは質問と討論が盛んで、新しい現代性が姿を表そうとしていた当時のオリンピックムーブメントの状況をよく示すものであった。

そしてIOCがその力を確認し、自由な民主主義の進歩のあとを追って、スポーツの世界の未知の領域の征服に乗り出す機会を与えるものであった。

1.11.4. 第八回オリンピック大会—1924年

パリ大会

その血統は曖昧、準備は困難、成功の程度は大したものではなかった。

大会は1924年7月3日から27日まで行われた。正式の開会式は7月5日に行われた。

その朝、ノートルダム寺院ではアントワープの時と同じような式典が簡素な「中立」の雰囲気の中で行われた。またプロテスタントの説教もあった。

フランス政府は大会が始まったとき些かの興味も示さなかった。

クーベルタンはフランスが「パリに集まった世界の若者に語りかけるユニークな機会」を無駄にしていると嘆いた。それにもかかわらず、パリでは真の情熱、偉大な芸術と文学の技が動員され、大会を「これまでで最も素晴らしい、最も完全な祝典とした」。

しかしすぐに失望がやって来た。創造的なプロセスは政治の駆け引きと官僚主義に巻き込まれてしまった。

クーベルタンは「オリンピックメモアール」に苦々しさと苛立ちをもって記している。

クラリー伯爵の「貴重な活力」と「疲れを知らぬ、若さのフランツ・ライヘル」が活き活きと率いていた大会組織委員会は、内務省、外務省、国防省、公教育省、農業省、パリ市評議会などの口うるさく無能力な行政と戦わなければならなかった。

オリンピックスタジアムの場所の選択はちゃちな利害と政治的駆け引きを誘発した。

3月中頃には、フランスNOCはこのプロジェクトを放棄する可能性を考えた程である。

クーベルタンは落ち着いていた。アメリカのメンバー、W.M.ガーランドに接触し、ロサンゼルスが名乗りをあげる準備のあることを密かに調べていた。

「船が沈没するのを防いだのは政府であった。」

共和国大統領、ミラン、それに次いで評議会議長、ポアンカレが、フランスが国際社会の笑いものにならないよう出来るかぎりのことをした。

ルールを尊重し、またそれを心から喜んで、IOC会長は大会準備の全責任を組織委員会が担うことを許した。そして自分は30周年記念祝典に専心した。

組織委員会事務局長、フランツ・ライヘルは本物の仕事をした。彼はコロンブの公式スタジアムが最良、最新の施設を備えるよう最新技術の成果を動員した。彼の書いた公式報告はその点について詳しい。

初めて電話網が競技場、トラック、役員を結んだ。20回線がパリのネットワークに繋がって作動した。報告書の作者が素晴らしい性能と讃えたラウドスピーカーがオリンピック会場の内外に設置された。

宣伝委員会が、国民の関心を高め大会中一般に情報を流す目的で設置された。かつてこのような規模で近代的な宣伝手段が使われたことはなかった。

いくつかの問題がプログラムに関して持ち上がった。四年前のアントワープと比べて大きな変更があった。二つの競技が落とされていた、フィールドホッケーとアーチェリーである。陸上では3,000メートル競歩、24.5キロ砲丸投げ、綱引きが消えたことに注意してよいだろう。体操では、チーム種目だけが生き残った。しかし種目毎の個人ランキングリストが導入された。

格闘技ではカテゴリーの変更があった。射撃は五つのうち三つ、漕艇では七つのうち五つが残った。水泳では男子400メートルが落ち、女子種目が増えて100メートル背泳、200メートル平泳ぎ、飛び込みが含まれた。400メートル平泳ぎは300メートルになった。馬術ではアクロバットが落ちた。選択競技ではバスケペロタとカーリングだけが生き残った。

水泳、射撃、サッカーの会場は非常に離れていた。新聞はこの会場の統一の原則に対する違反を厳しく非難した。選手も遠くまで行かなければならないので不平を漏らした。

エントリーは個人競技は1国4人、チームスポーツは1国1チームに制限された。

公式報告によれば、45カ国、6,000人の選手が参加した。世界記録が陸上で6、水泳で5破られた。サッカートーナメントは23カ国で争われた。決勝はウルガイとスイスで、6万の観客の前で行われた。場外には入場できない1万5千の観客が残された。

水球には14カ国が出場した。観衆の数は多く、忍耐強かった。

盲目的愛国主義による事件があったのは嘆かわしいことである。

アメリカのラグビー選手が襲われた。イタリア人がフェンシングの判定に怒ってファシストの歌を歌いながら部屋を出てしまった。ボクシングでも事件があった。しかし、ヌルミ、ラウア、バイスミュラーが堂々たる態度でオリンピック精神を守った。

フランスはしかし、「オリンピズムの良き、華やかな女祭司」であった。

開会式は「その目的に相応しく、パリに相応しく、フランスに相応しく豪華であった」。プロトコールは守られた。「行進、スピーチ、宣誓から高貴さが発散していた。ある瞬間、そこには宗教的な

何かがあった。オリンピズムはかつてこのような心を打つ瞬間を経験したことがなかった。」

常に叙情詩人であるIOC会長はこう書かずにいられなかった。「イフィトスの町の偉大なギリシャの日も、決してパリのフランスの日以上に豪華で美しくはなかった。」

閉会式では冠を戴いた優勝者のグループの紹介が印象深かった。次は二位のグループ、そして三位のグループ。いずれも馬に乗った人物が先導した。

演説の中でクーベルタンは挑戦した。「願わくば1928年の大会が喜びと調和のうちに開かれんことを。そしてオリンピックの火がより真摯な、より勇敢な、より純粋な人間性の善のために時代を通じて燃えつづけんことを。すべてがかくあらんことを！」

オリンピック旗は巻かれて、パリ市長に預けられた。

芸術、文学競技は3月15日から4月15日までポリニャック委員長の下に行われた。

出品作品は文学作品も含めて、悲しむべき形式主義の刻印を帯びていた。

一位フランス、二位ルクセンブルグ、三位ギリシャであった。

出品作品は全て美的な価値の乏しいものであった。

一つ新しいものがあった。最初にして最後、近代オリンピックのプログラムに子供の競技会が載った。その準備はYMCAのパリ支部に委託された。

第8回オリンピアードの祭典

クーベルタンは第八回オリンピアードの準備のいい加減さを警戒して、1921年早々、なるべく距離を置くようにした。そして第30周年式典と大会スケジュールをハッキリ区別した。彼は式典を自分自身で準備したいと思った。

6月23日からパリは異例のスペクタクルで訪問者を迎える筈であった。

6月24日、IOC委員と kongress 代表はパリ市庁舎に迎えられた。

クーベルタンにとっては、アンリ四世の時代にフランスがスポーツ好きだったとしても、現在はそうではないと断言する絶好の機会であった。しかし「スポーツの大海原には大洋と同じように満ち引きと大波があるように見える。」と言っただけであった。

7月15日、オリンピック選手達はエリゼー宮に迎えられた。

フランツ・ライヘルは大げさな称賛の言葉を積み上げているものの、パリ大会の成功はまあまあという程度のものであった。クーベルタンはもっと冷静であった。スポーツ創造の自由は官僚達によって侵害された。IOCの独立は国によって邪魔された。

しかしもっと悪いのは、オリンピズムの哲学的目的を滅ぼしかねない病菌がスポーツを侵し始めたことである。従って、重要なのは「成功からくる正当な満足に、矯正されねばならない欠陥についての意識が伴っていることである」。

クーベルタンは容易に修正できる技術的欠陥について言っているのではない。そうではなく、

決して忘れてはならない倫理目標を尊重しないことについて言っているのである。

「このオリンピックは、芸術と思想の衣を纏わせようとする素晴らしい、称賛に値する努力にもかかわらず」あまりに「世界選手権」でありすぎた。

世界中から称賛されたチャンピオンたちの間に「民族の天才、ミューズの協力、美の礼賛」が欠けていた。これらがあつて初めて、オリンピック大会は「あるべき姿に成ることができる。そして四年ごとの人類の春の祭典、その血が精神に奉仕する、規則正しいリズムを持った春に成ることができる」。

クーベルタンの訴えはハッキリしている。彼の目的はギリシャの智慧の「カロス カガトス(善と美)」を再発見することであつた。

その不完全さにもかかわらず、第八回オリンピックアードによって、クーベルタンは基本へ立ち返つた。コロンブのスタジアムで、彼は既に次の年、プラハで開かれるオリンピックコンGRESSについて考えていた。教育改革という最も彼の心を支配する情熱に立ち返つて、既に新しい教育プロジェクトを構想していた。オリンピズムは日々生き抜かねばならないからである。

我々はパリ大会公式報告の彼の序言を一種の哲学的遺言と読んでもよいだろう。

クーベルタンは結論し、再び語る。「私はオリンピック大会を一つの国、一つの人種の特権としようとして復興したのではない。またそれは、いかなる性格のものであれ、あるグループ或いは偏つた思想に依存することは許さない。」

シャモニーのウインタースポーツ週間

1923年末、クーベルタンはバイエーラツールに書いた。「シャモニーはうまく行くだろうといわれているが、我々としてはこれには距離をおいた微笑と冷徹な態度で臨まねばならない。私はブローネーと貴下が全体のトーンを定めてくれるものと期待している。そうでないと我々を笑い物にして喜ぶ人がいるだろう。」

9年後、彼は「オリンピックメモアール」の中で、「第八回オリンピックアードの大会は1924年2月、シャモニーで始められた。この雪の序曲はあらゆる点で大成功であつた。」と書くまでになっている。

二つの文章の対比は説明を要する。最初の文章でIOC会長は人々がなんというかを心配しつつ、用心深く物事を進めている。二番目の文章では、全ての留保を忘れて、この「序曲」の全体的な成功を歓迎している。

第一回冬季オリンピック大会の背景を探ってみよう。

雪と氷の上の人間輸送の発明者であつたスカンジナビア人たちは、ウインタースポーツは自分たちの独占物だと考えていた。そしてノルディック大会にそれを表現していた。自分たちの独占を

譲歩しなければならない理由はないと思っていたのである。

クーベルタンは、スポーツについて高い名声を持つこれらの国々がオリンピックの陣営から背くことを恐れていたし、ブラックやエドストレームのような強い個性の持ち主との対立を避けたいと思っていた。

彼らはそれぞれ、国際スケート連盟会長、国際アマチュア陸上競技連盟会長であった。クーベルタンはまた冬の観光がますます商業化されること、そのスポーツ倫理への悪い影響を憂えていた。そういうわけで、最初彼はローマの七丘の一つ、アヴェンティヌスの上に止まっていたのである。

しかしこの立場は守り通すことのできないものだった。アルプスでのウインタースポーツの発展、アルペン種目の多様化、そしてそれが生まれつつあるウインタースポーツリゾートへ与える影響などが対応を求めていたのである。

商業的、文化的ウインタースポーツ運動は、19世紀の第一四半期にイギリスでアイススケートが盛んになってきて始まった。国際スケート連盟は1892年イギリスで設立された。フィギュアとスピードスケートの第一回世界選手権はアムステルダムで1893年、セント・ペテルスブルグで1896年それぞれ行われた。

1980年、イギリス人たちはロンドン大会のプログラムにフィギュアスケートとアイスホッケーを入れた。同時に彼らは女性をアイススケーティング種目に登場させた。

同じ頃、カナダでアイスホッケーが文化、経済生活の一部に成りつつあった。

1897年、アイスホッケーのルールが北米大陸全体のために成文化された。1897年にフランスは最初の協会をつくり、1908年に国際アイスホッケー連盟の設立を提案した。

ノルウェーでは、第一回クロスカントリースキーレースが1879年テレマークの郊外で開かれた。最初の滑降競技はスイスのリゾート、クランで1911年1月6日行われた。スキーは次第に、最もポピュラーなウインタースポーツになった。

いずれにせよ「全てのスポーツ」を発展させることが使命であるIOCにとって、無視しつづけるには、あまりに多くのスポーツ上の、また商業上の利益があった。

その最終的な承認の前に、数多くの合法化の試みがあったが、全てがフェアプレーの精神から出てきたとは言いがたかった。

1911年のブダペストにおける第13回セッションで、スウェーデンはクロスカントリースキーを1912年のオリンピックに入れるよう要求した。アメリカはこの種目が単に「地方的」なものだという理由でこのプロジェクトを退けた。イタリアのアルプス地方出身のブルネッタ・デュッソウ伯爵はアルペン競技の採用を主張したが無駄であった。

ノルディックとアルペンが二つの陣営に別れて争うようになるのに時間はかからなかった。カナダがレフェリーをつとめるために呼ばれた。

足に奇妙な板を付けて雪のスロープを滑り降りることを好む一風変わった観光客をもてなすことが金になると最初に気がついたのはスイス人であった。またスポーツマン、業者、ジャーナリストからなる経済的な利益団体をつくったのも彼らが最初であった。

彼らのIOCの中の盟友はゴッドフロア・ド・ブロネーであったが、フランスグループの勢力の方が強かった。フランスNOC会長、ジュスティニアン・ド・クラリー伯爵はオートアルプスの出身で、IOC委員であった。スポーツ界で全ての人から尊敬されているメルチオール・ド・ポリニャックも同じように貴族的な山のスポーツへの改宗者であった。

彼らのロビー活動は、新しくつくられたフランス冬季スポーツ連盟、半世紀の歴史を持つフランスアルパインクラブ、そして国際ボブスレー・トボガン連盟会長、ルノー・ド・ラ・フレゴリエール伯爵等によって続けられた。この圧力団体は、特権的な上流クラスから商人、アルプスの谷の小さな農園主まで広い文化的、社会的階層をカバーしていた。それは当時フランスを世界文化の模範と認める国際的トレンドの文脈の中に見るべきである。ファッションが続き、スノブが後を追った。

スポーツ界の意見は、常に熱狂的愛国主義の色彩を帯びているものだが、戸惑いを感じはじめた。IOCは1920年に、第七回オリンピックの会場にパリの代わりにアントワープを選んで、フランスに平手打ちを食わせたが、同じやり方を繰り返すのだろうか？

フランス国民議会のなかで国民党は落ち着かなくなってきた。

IOCは冬季大会を扱う委員会をつくった。その役割はそれ以上明記されていなかった。委員会はノルウェー、スウェーデン、フランス、スイス、カナダを代表する五人から成っていた。第一回会議はローザンヌで1921年5月26日行われた。

1921年6月5日、スカンジナビアが投票で敗れた。スイスのメグロースがIOCによって専門家として指名され、ローザンヌの第18回セッションで総合報告を行った。

それに続いて、活発な議論が行われた。クラリー、ポリニャック、ブロネー、そしてカナダ代表がオリンピック冬季大会をつくることに賛成した。

クーベルタンは反対であった。フランツ・ライヘルは1924年のオリンピックの公式報告書の序言で次のように書いている、「IOC委員はフランスで、北の国は除いて、中央ヨーロッパ及び西ヨーロッパのいくつかの国々で雪と氷の競技を開催する事が出来るという議論を行った」。スカンジナビア諸国はフランスの提案に対し、それはオリンピック冬季大会を「何年も前に彼らが始めている冬の大会のライバルとして」設立することになる、と反対した。IOCは全会一致でフランツ・ライヘル提案を採択した。この中にはスカンジナビアの委員もいた。冬の大会の独占は、ノルディックの国々からもぎ取られた。

IOC内部の分裂の危機は大きくなった。妥協が行われた。フランツ・ライヘルがそれがどのように行われたかを告げる。

「一方でスカンジナビアの代表が提示した理由を勘案し、一方でオリンピック冬季大会に賛成する者があることを考慮に入れ、国際オリンピック委員会は、第八回近代オリンピックが祝われる際に行われる冬の大会をオリンピックプログラムの一部とはしないが、後援を与えると決定した。

そして、この精神によって1924年冬季大会が決定された。フランスオリンピック委員会は開催に際してこの精神から逸脱することはなかった。」

ノルウェー、スウェーデン、フィンランドは、自分たちの善意の見返りに、この最初の「オリンピック」冬季大会の開催を求められるものと頭から信じていた。しかし全くそうはならなかった。1921年6月2日、ド・ポリニャックはこの大会をフランスにもたらすことに成功した。この会議で最大の敗者になったブラックはIOCを辞任し、自分が支配していた国際スケート連盟の会長の座だけを維持した。

1921年6月12日から14日まで、ウインタースポーツ連盟の kongress がプログラムと大会スケジュール準備のためにパリで開かれた。フランスNOCは会場にシャモニーを選んだ。土壌の安定性が大いに心配されたが、兵たん補給の困難はフランス軍の大量動員とサボアの人々の闘争心とやる気で克服された。

シャモニーのウインタースポーツウィークは第八回オリンピアードの大会に際して行われ、IOCの強力な後援を受けて物質的に大変良い条件の下に開催された。

ドイツはまだ参加しなかったが、その同盟国、ハンガリー、オーストリアは参加した。選手416人がエントリーし女性13人を含む294人が実際に出場した。17カ国が参加した。

クーベルタンは開会式に出席しなかった。式典を主催したのはクラリー伯爵で、彼の演説はIOCの決定によって生じたデリケートな情勢を反映していた。クラリーはこの大会が IOCの後援の下にあり、オリンピックファミリーの一部であり、「1924年オリンピック大会の前奏曲である」ことを強調した。年功を経た政治家、ガストン・ヴィダルは「国際オリンピック委員会の強力な後援の下に」組織された大会の開会を宣言した。しかし式典はオリンピックのしきたりに忠実に従ったもので、誰の目も欺くことはできなかった。

オリンピック旗はスタジアムには翻らなかったが、三つの場所に掲げられた。貴賓席のリボンとして、ボブスレーのスタートに、そしてスキージャンプ台の柱に。

前夜、1月24日のパレードは素晴らしい「村の祭り」で、善良な群衆は誰一人自分たちがオリンピックに行こうとしていることを疑わなかった！

選手宣誓はこのことをさらに確認した。シャモニーの冬季大会は素晴らしい、本物のオリンピック大会であった。世論はそう決定した。プログラムの15種目は全てノルディックであった。アルペンスキーはまだ揺籃期にあった。

フランツ・ライヘルは公式報告書の中で、ピエール・ド・クーベルタンは「オリンピックメモアール」の中で、この大会が成功であったと記している。

スポーツとして見れば、結果は平凡なものであった。しかし冬の競技の宣伝効果は絶大であった。北の国の選手が大勝した。経済的には、楽天的な役員は30,000人の観客を数えたが、そのうちの10,044人だけが有料であった。結果は大赤字であった。

そしてさらに、「現代」の特色があった。つまりパリーリオンー地中海鉄道ネットワークにばらまかれたポスター、無数の新聞記事による大宣伝があった。

閉会の演説はクーベルタン役割であった。その中で、彼は大会成功を厚かましくも自分の手柄にした。彼はこれらの「最も純粋な競技」が「彼が望んでいたように」オリンピックの中に確固とした位置を占めたことを大変に喜んだ。

1925年5月27日、プラハ kongress でクーベルタンはオリンピック冬季大会を創設し、北の大会を地域大会に分類するオリンピック憲章を投票にかけた。「国際オリンピック委員会はオリンピック冬季大会の別のサイクルを制定する。この大会はオリンピック大会と同じ年に行われなければならない。大会は第一回、第二回、第三回オリンピック冬季大会と呼ばれ、オリンピックプロトコールの全ての規則の対象となる。」

テキストの構文法、語彙からいって、クーベルタン自身が書いたことは疑いない。

1926年5月6日、リスボンの第22回IOCセッションで「第二回オリンピック冬季大会」はスイスのサンモリッツの町で開催されることが決まった。

シャモニー大会は、正式に、「第一回オリンピック冬季大会」となったのである。

1.12. プラハ1925年 — 絶頂

1924年のパリセッションは長い時間をかけて、プラハ kongress のプログラムを検討した。

3月15日、クーベルタンは同僚のIOC委員に回状を送った。プラハセッションが1925年 5月27日、28日、29日開かれる。

クーベルタンは委員がこの会議に参加するよう強く要請した。
この会議は「自分が進行を取り仕切る最後のものになるだろう」。

議題は以下の通り。

- 新委員選挙
- プラハ kongress の議題
- 第九回、第十回オリンピアードの大会の準備
- オリンピック博物館
- 1926年オリンピックカップの授与
- 「オフィシャルブレットイン」の創刊
- 会長選挙
- その他

通常の議題。何人かの委員が死に、他の委員に変わる。未解決の問題の再提出。「オフィシャ

ルブレティン」は「オリンピック・レビュー」に代わるもの。オリンピック博物館は断固としてつくらねばならない。重要な議題が二つ残る。会長選挙そして kongress の内容である。

1.12.1. セッションと kongress

準備

もしかって、消すことのできない司祭の刻印を帯びたオリンピックミサがあったとすれば、それは1925年5月16日火曜日から6月4日金曜日までプラハで行われたものであったことは疑いない。

自分が主催する最後の大オリンピック集会で、クーベルタンは最後の教えを世界に発信しようとした。

忠実なグートーヤルコフスキーはその人間性と政治的繋がりによってクーベルタンを助け、プラハを近代オリビズムの歴史の中のメッカにしようとした。

1897年のルアーブルの第二回 kongress 以来、IOC会長は短期的な技術問題が長期的な教育の問題よりも優先されることを憂いていた。クーベルタンはオリンピックセッションがルールと規則についての果てし無い論争の中に埋もれてしまうことを不快に思い、心配していた。そしてまた彼は、自分の日が残り少ないことを知っていた。

それ故クーベルタンはプラハ会議を念入りに準備した。マサリック大統領との手紙のやり取りは、彼がどれほどこの会議を重要と考えていたかを明らかにする。

1923年4月23日、彼はチェコスロバキア共和国大統領に感謝し「1925年のプラハオリンピック kongress」に後援を与えてくれるよう要請した。大統領には「我々の親愛なる、そして献身的な同僚、グートーヤルコフスキー」が紹介したのである。

彼は付け加えた「1925年 kongress は恐らくオリビクルネッサンスの中でもっとも重要なステージを記念するものになるでしょう。」

1923年10月5日、モントルーで休暇を取っていたマサリック大統領への手紙で、クーベルタンは会見を求め、非常な自信を示す。「1925年 kongress は... オリビクの歴史の中で最も重要な転換点となるでしょう。」

第8回オリビアドの大会の間に「全ての人の考えは度々プラハに向かうようになるでしょう。1925年の kongress の成功は既に確かになりつつあります」。IOCは「貴下の後援の下にプラハに集うことを待ち望んでいます」。クーベルタンは歴史によって気持ちを高められていた。彼は「疑いもなく最も美しい都市の一つ、そしてそこに積み重ねられた劇的な深く人間的な変転の歴史によって最も高貴な都市の一つ」プラハを愛していた。1923年はじめに、マサリック大統領に対し彼とIOCの敬意を表す手紙を送ったときに、「常に愛し尊敬する、比類なき歴史が私の心を賛嘆の念で満たしてきた国の素晴らしい首都」に自分がいられたら嬉しいだろうと彼は書かなかっただろうか。そうすれば舞台装置は人とイベントにとって相応しいものになる。

「プラハの別れ」は「司令官」の業績に相応しいものに成るだろう。

プログラムのアレンジに伴う華麗さによって、祝典の荘厳な性格によって、オリンピック関連団体の決定に浸透する高い精神性によって、そうなるだろう。

クーベルタンは、ついに自由になって、見かけと月並みの世界に決定的に背を向ける。

そしてもう一度、彼の人生の唯一の目的であり、神と歴史が彼に書くことを命じた未完のシエフ・オニーを取り上げる。我々はこうした光に照らして、プラハにおけるアレンジの劇的な性格について想像し理解しなければならない。

執行委員会

バイエーラツールが委員長をつとめるECも成年に達していた。ECは「IOCがプラハで技術的コンGRESの議題について行う決定に」助言する役割を完全に果たすであろう。

それはアマチュアリズム、宣誓、そしてとりわけプログラムをカバーする筈である。

これまでの企てがすべて失敗に終わったことを踏まえて、IOC委員は憲章の第IV章の規定と、承認されているいろいろな競技と芸術競技のルールとの間に確立されている区別を思い出した。ECは、各競技はIFの技術的責任の下に行われる事実を強調し、オリンピック憲章の関連条項をそれに応じて修正し、この責任と「国が送る参加者」の基準を定める責任をIFに負わせることを求めた。

もしIOCが公式プログラムをさらに削減することを望むなら、ECは大会の競技を以下のカテゴリーにすることを提案する。陸上競技、体操競技。防衛競技ではボクシング、フェンシング、レスリング。水上競技では漕艇、水泳。馬術競技では二種目、一つはドレサージュ、一つは野外騎乗。複合競技では近代五種。サッカー。芸術競技では建築、文学、音楽、絵画、彫刻。

ECは、オリンピック大会ではポイントランキングはないが、「ランキング可能な競技では上位六選手の名をアルファベット順で名誉の表に書く」ことが適当であるとIOCが考える旨明記すべきであると助言した。

IOCの権威が論争によって傷つけられないようにとの配慮からECは、IFが「重大な過失を犯した選手」に対する、名誉の陪審による制裁に従うよう求めた。

論争が起きて、ECは更にIOCが憲章の第IX条に以下のように明記するよう勧告した。

「各国は国内オリンピック委員会とその統括競技団体の間に合意のない競技では代表をエントリーすることは出来ない。」

この提案が正しく適用されるように、ECは競技連盟と「団体」に調停を申し出た。ECの連絡の良さと強力なポジションの印である。

ECの広い活動範囲に含まれるいろいろな問題が検討された。大会期間の長さ、二週間と三日の日曜日。「栄光に包まれた」賞の授与、輸送、宿舎と選手役員の旅行、これについては新しい第13条が起草された。

しかし何よりも冬季大会についてである。「IOC は明確な周期を持つこのプロジェクトに賛成で

ある。第一優先権は、オリンピック大会開催権をもちオリンピック大会のプログラムに冬季大会を付け加えることを望む国に与えられる。」

ECは、オリンピック議会における政府になった。

セッション

IOCの付けた順番によれば第24回のセッションは、1925年5月26日から28日にかけて行われた。30人の委員が出席した。

蘭領インドが自分たちのNOCをつくりたいという希望は、オランダ政府の同意が得られなかったので否決された。教育体操連盟は承認されなかった。チェスは大会のプログラムには載らなかった。モーターヨット、ローラーホッケーも同様であった。

セッションはECの提案を受け入れた。選手はNOCと国内競技連盟が同意した場合のみ「大会」と「競技」に参加ができる。サッカー連盟を含むIFは申請者の立場であって、もはや最終決定権者ではない。IFは大会期間中のみ名誉陪審の採決に拘束される。

セッションは kongress に対し、選手役員の競技の際の「フェアプレー」の概念を発展させることについての緊急性を考えるよう要求する決議を行った。

オランダの委員、シャルローが1928年のアムステルダム第九回オリンピック大会の準備状況について報告した。クーベルタンはボクシング試合を見にやって来る非スポーツ的な観衆について警告した。アムステルダムでは、用心のために、そのような試合の観客は「個人的招待」となるであろう。

第一回アフリカ大会は依然として、1927年4月16日、アレキサンドリアで開催されることになっていた。ローザンヌ、ローマ、プエノスアイレスがブダペストと同じように1936年の大会に立候補していた。決定の合意はできなかった。四か国語の新しい「オフィシャルブレッティン」についても同様であった。

アマチュアリズムについての提案はIOCによって若干変更された。アマチュアとは「生活の手段をスポーツを行うことから直接得ることなく、スポーツのためにスポーツを行う者である。プロは生活の手段の一部又は全部をスポーツを行うことから得る者である。」

給与の損失に対する補償は「間接的物質利益」と考えられ、オリンピック大会に選ばれた場合を除いて一つの競技につき年に二週間以内の旅であれば、そのような補償を受けてもアマチュアは資格を失わないとされた。

「指導者」と「プロ」の間にもいささか分かりにくい区別が付けられた。

クルルシー・ラファンとド・ポリニャックも正論の守り手として参加した鋭いやり取りの後、委員会は全ての選手に以下の宣誓にサインを求めることを決定した。

「署名者である私は、私がアマチュアリズムのオリンピックルールに従ったアマチュアであることを名誉にかけて宣誓します。」我々は、時代後れのルールと変りつつある社会の現実の間に捕ら

えられた委員の居心地の悪さを感じることができる。

セッションの最後の議題が勿論、最も重要であった。それが委員の関心の的であったこと、宴会のテーブルでの第一の話題であったことは間違いない。誰が IOCの会長として、ピエール・ド・クーベルタン男爵の後継者となるのか？

グートーヤルコフスキーとシャルローが選挙管理人になった。

第一回投票では、郵便による投票も勘定に入れられた。

結果は以下の通りであった。

バイエーラツール	17票
クーベルタン	11票
ブロネー	6票
クラリー	4票
ポリニャック	1票
白票	1票

第二回投票では出席している委員だけが投票できた。ローゼンとシェリルがクーベルタンにもう一度立候補するよう嘆願したが無駄であった。ブロネーが6票、クーベルタンとクラリーがそれぞれ1票であったが、17票を得たバイエーラツールに遠く及ばなかった。

バイエーラツールはこうして、1925年から1933年まで8年間のIOC会長に選ばれた。

シェリルはクーベルタンを終身名誉会長に押したが、クーベルタンは辞退した。

しかしセッションが彼を「オリンピック大会の終身名誉会長」に指名した。このタイトルは他の誰にも与えられたことのないものである。

テクニカルコンGRES

開会は5月29日であった。

テクニカルコンGRESは、原則に定めてあるように、ECの勧告とセッションの決議に従って行われた。ランキング、審判委員会の権限、審判の旅費、大会の期間、夏の大会と分けた冬の大会のサイクルについてのプラン、プログラムの削減などがこうして決まった。

しかし永遠の問題アマチュアリズムについては、この分野の現実にはより詳しい筈と思われたIFとNOCの代表がECとIOCの提案を更に厳しいものにした。「以下の者はオリンピック大会に参加することはできない。自分の競技或いは他の競技でプロである者、或いは承知の上でプロになった者、失った給与に対して弁償または補償を受けた者。」

この決定は独断的なもので、1925年から1940年にかけて果てし無い議論と多くの問題を引き起こすことになった。

制度としてのトリオ、EC、セッション、テクニカルコンGRESはルールと規定に従って行動した。クーベルタンはしばしば制約を受けて、役職の義務の公的な枠組みの中に自分を閉じ込めた。しかし彼の関心は別のところにあった。彼の関心は、自らのオリンピックの会長としての任期を神聖化するものとして考えだした教育コンGRESにあった。

教育コンGRES

このコンGRESは5月30日から6月5日まで開かれることになっていた。

今回は行政的な留保や儀典的な慎重さは何処かへ消えてしまっていた。制度上のシステムを越え、強固に確立されている慣例を無視して、クーベルタンは「世界中の全ての国の代表」に対して呼びかける決意をした。「スポーツ活動の発展が検討を要求している教育的、社会的性格の数々の問題を彼らに提案するために。」

彼の意図は明らかである。目的は、プラハ教育コンGRESを「第一回国際オリンピック教育コンGRES」にすることであった。

コンGRESは「十人以内の公式代表」が参加することになっていたが、「それに加えて、参加を希望する者は制限なく認められるであろう。」

クーベルタンはIOCが「多くの点でスポーツ活動改善」に貢献することになるよう、故意に参加者の数を増やしたのである。

従って、コンGRESは体育教育の「より良い方法の探求とか、採用」が目的ではなく、既に存在するもの、つまりクーベルタン自身が考えだし、IOCによって定義されているオリンピズムの道を改善しようとするところにあった。

テーマのリストが何よりも雄弁に語っている。「エキジビションの過多、ボクシング試合、未成年に対する制限、女性の参加、'古代ギムナジウム'の復活、フェアプレーと騎士道精神の振興、大学の間の協力、スポーツ治療、贗スポーツマンに対する戦い。」

スピーチは四分以内、テキストは1,200語を越えないよう制限された。

プログラムは見かけはバラバラだが、全てのポイントがクーベルタンの生涯の関心を反映していた。それらは全てコンGRESが終った後、彼が押し進めようと考えていた教育の大きな構想の中にあるものであった。驚くべきことに、クーベルタンのテーマはその五十年を越える公的生活の間ほとんど全く変わらなかった。

これらのテーマの中から、永続的で同時に時事的な何を読み取れるであろうか。

まず最初に、スポーツは女性や子供など弱いものは遠ざけておかねばならない男性的な行為であること。第一に重要なことは、スポーツがヒューマニズムの一形態、人種、出身階級に関係なく、全ての人間に属する騎士道的態度であること。

道義心のないスポーツは人間にとっても社会にとっても災疫であること。

従って、市民にスポーツの場と適切な規制の枠組みをスポーツが教育改革の価値のベクトルとなる学校や大学によって与えるのは、市民共同体の義務である。ハッキリ感じ取れる目的は、オリンピズムを日常生活のなかに根づかせることである。

社会の圧力に直面して彼の論理は明快であった。

「スポーツは金銭欲が骨の髄まで腐らそうとしている社会の中で発展してきた。」

偉大な1925年の後、教育改革の戦いを続ける決意を固め、活動的なオリンピックムーブメントは後継者に引き渡すことを考えていたクーベルタンは、専門家をスポーツとオリンピズムの奥社に招いて新しい教典を發布しようとも、秘儀を授けようとしなかった。

プラハ教育コンGRESは遺言であるよりも、生まれ変わりの行為であった。

1925年5月29日のプラハ市庁舎における開会演説は、クーベルタンの最も素晴らしい演説の一つである。もはや「虚しい世辞」や「飾った言葉」のための時間はなかった。「土地は広く、時間は短い」。ここに我々は「明確で率直な個人的な報告」を聞かねばならない。それは息の長い、時の知恵に満ちたものであった。

こうしたアプローチを正当化するあらゆる理由が彼にはあった。彼のなし遂げた仕事、道徳的構造、世界と仲間の彼に対する尊敬。そして彼の年齢である。

「人が何年も住んだ実り豊かな土地、自分の手で耕した土地、成功と友情の花束で彼をかざってくれた土地を離れる時、彼は最後の日に高い場所に登って地平線まで見渡そうとするであろう。そこで彼は未来に思いを巡らし、完成していない仕事、実行できたかもしれない改善、あり得る危険に対抗する手段を思い煩うだろう。」

クーベルタンは広く分け待たれた二つの「ユートピア的な観念」を打ち消すことができなかったことを告白する。

第一はスポーツは人間の本性に固有のものだという信念。実際は、彼は言う「スポーツは、不必要な努力に対する情熱的な執着によって維持される、肉体的な秩序である」。

クーベルタンは、スポーツが如何に社会的酔狂、一時的なファッションの果実にしか過ぎなくなるか、人の心の奥底を揺さぶる文化—これこそ究極の目的—ではなく、単に観客の注視を求めるだけの虚栄心が身に纏う飾りでしかなくなるか、良く知っていた。

「宣伝や広告のより少ない、制限のより少ない組織、より寛容な連盟」を彼は望んでいた。全てのスポーツが、馬術も含む全てのスポーツが全ての人が出来るようにならなければならない。彼らは市が直接の、唯一の管理機関であるギムナジウムに集まる。

こうすることによってのみ、頭でっかちの階層制の制約から自由な、スイスに存在するような「市政主義者の」民主主義によって管理される「健康な、完全にスポーツ的な世代が作りだされるのである」。

もう一つのユートピア的観念は、クーベルタンによれば、「スポーツを、自動的に中庸と結び付けることができると想像することである」。ここに我々はクーベルタンの古い歌を聞く、この理想は彼のスポーツ哲学の根底にあるものである。スポーツは「行き過ぎてはならない。それはスポーツの本質であり、目的であり、道徳的価値である。」

トーマス・アーノルドの教育方法を取り上げながら、クーベルタンはこの狭い道を通してスポーツ

がリベラルアーツの隊列に加わることができることを示す。

もしクーベルタンが思いのままにできるなら、生理学者を舞台の前面からさげ、オリンピズムに責任を持つ者はスポーツが「心理的なもの」であることを忘れないようにするだろう。彼は更にもう一つのユートピア的理想について語る。「解剖学が十分に発達し、体育教育において、全権をもって管理者の役割を勤めねばならない」という考え方である。

クーベルタンは避けることのできない問題の機先を制した。「有名なアマチュアリズム問題」に取り組まずに教育的オリンピックコンGRESSを開くことは可能か。

大戦前なら解決策を見つけることは可能だったろう。しかし今「明白な事実を否定してもなにもならない。沢山の誤魔化しや嘘が横行している。それは道徳的墮落のスポーツの世界への反映である」。スポーツ界の腐敗は金によって腐敗した社会の反映でしかない。

クーベルタンにとってこれを救う唯一の道は、選手個人の宣誓であり、当該IFによるその保証であった。アマチュアについて只一つの定義をつくりだすことは適当でないし、実際に不可能であった。

したがって、オリンピズムは全ての社会、政治の偶発性から自由でなければならない。選挙の緊張や束縛から解き離れていなければならない。

IOCが完全に独立して進路を示すことができ、人間の情熱の騒々しい騒ぎを超越し、世界的な大動乱の衝撃波を生き残ることができたのは、IOCは自ら委員を選ぶのであって、IFやNOCが選ぶ上部構造ではないからである。それが真の力の性格である。IFとNOCにはIOCとの調和のうちにそれぞれの役割を十分に演じさせればよい。「これがオリンピック大会を望ましい水準に保つ正しいやり方であろう。」

オリンピックを、あらゆる哲学的民族的絶対主義に捕らわれないようにせよ。「大会は全世界のものだ。全ての国民は議論の余地なく参加を認められなければならない。スポーツの全ての形態が平等に扱われねばならないのと同じことだ。」

「オリンピック大会がいかなる国或いは人種の占有物でもなく、いかなるグループによっても独占することはできないことを、私は繰り返す必要があるだろうか？」

終わりに臨んで、スピーチは厳しい調子になった。「私は留任することに同意出来なかった。三十年以上の任期を勤めることは賢明ではないだろう。そして何よりも、私は私に残された時間を緊急の事業、精神的明晰さと批判的平静さを合わせ持った生産的な教育の導入に捧げたいと思うからである。」

市民の調和は個人のバランスと社会的コンセンサスに基礎をおいている。それがオリンピズムについての最上の教えであり、クーベルタンが今IOCの公的な制度の外にあって、彼の最初の目標から離れることなく探り続けようとしている道であった。

21カ国からの62人の代表は呼びかけを心に留めた。そして彼らのうちの36人が発言した。78の通信文が読み上げられ、議論された。クーベルタンは多くの機会に発言した。彼はもはや議長で

はなかったのでそれが可能になった。議長は、ソコル運動のリーダーでプラハ大学医学部教授のカレル・ウェイグナー博士がつとめた。

会議は5月29日の午後から6月4日の夕方まで、休みなく続いた。会議は報告書が証明するように情熱と厳格さと決断をもって行われた。

チェコスロバキアの代表が一番多かった。フランス代表団はガストン・ヴィダルが率いていた。ヴィダルはスポーツ次官でクーベルタンはパリ大会以来彼に友情を抱いていた。スイス代表団は非常に活発であった。七つの決議案が採択された。決議案は最初のプログラムをほとんど変えなかったがインパクトを強めるために引き締まったものにされた。

賈のスポーツマンの問題—例えば男らしい運動をしたこともなく、筋肉を鍛えたこともないくせに、スポーツ界にやたらとちょっかいをだし、自分はスポーツ界を指導していると言うような—は議題から消えた。しかし決議には「年端もいかぬ子供」と「スポーツ新聞」についてが加えられた。結局、スポーツ療法と古代ギムナジウムの復活は一つにまとめられた。書面で残っている通信文には女性の参加に関するものが沢山あった。

「年端も行かぬ子供」についての決議No.8は全会一致で採択された。

会議の勧告は次のようなものである。「幼い少年を家族からあまり長い間引き離すようなことはあらゆる努力を払って避けねばならない。国際的な性格の集会や会議に参加させぬよう、何よりもそうした場所で公に報告させたりしないよう努めねばならない。」

参加者は同じように、金を集める目的でありにしばしば開かれている競技会の数を制限する必要の緊急性を全会一致で認めた。また国内競技連盟が負う道徳的義務についても全会一致であった。国内競技連盟は「そのメンバーに、身体的、道徳的教育と肉体の合理的発達というスポーツの目的を守ることを絶えず思い起させねばならない」。

医学委員会からの動議で、スポーツトレーニングの前には医学検査を行うことが勧告された。また異なる年齢のグループの間の競技は避けるよう勧告された。

1894年のオリンピックムーブメントの創造に当たっては多くの大学が参加したにもかかわらず、1925年の時点で学校や大学のスポーツ組織はまだ萌芽状態にあることを kongress は認めざるを得なかった。そのため kongress の特別委員会は、学校間、大学間競技の組織の改善に努力することを勧告したが、何よりも衛生と医学的側面に注意を払うよう勧告した。「男性、女性生徒の義務教育は体操、ゲーム、競技、旅行において」この目的を達成しなければならない。IF、大学、学生協会の協力が求められた。

クーベルタンの情熱的な提案に基づき、「ボクシングについて会議は、ボクシング試合が、もう一度フェンシングの試合がそうであるような、ルールによって管理される単純な戦いに戻るよう全会一致で要求した。」

身体教育を毎日実施することが「身体組織を完全な健康の状態に保つ」最善の道であると認め

られた。しかしこの防御的な側面に加えて、「スポーツ療法」が治療の役割を果たすことができることも認められた。この点について科学がまだ十分に進歩していないので、「教育コンGRESは、IOCがスポーツ療法を研究する作業委員会をその管理下につくるよう要請することを決めた」。「古代ギムナジウム」の復活についてのクーベルタンの提案は全会一致で採択された。

最初の案にはなかったが、決議の中でスポーツ新聞に対し、「教育問題にもっとスペースを」割くよう、「紙面を知的な芸術的な問題に提供するよう」求められた。これもクーベルタンの心にとって大切な問題であった。

「女性の参加」の問題が残っていた。これについてクーベルタンは何時ものように、しぶしぶ、「第一に」議論すべき議題のなかに含むことに同意した。

この4番目の議題の言葉づかいは非常に漠然としていて、客観的装いをした質問に非常に多くの否定的答えが出るようになっていたので、予備知識がなくても、クーベルタンのこのことについての心の秘密が窺える態のものである。

テキストの簡単な分析は啓示的である。「スポーツ熱」と「女性的な」という言葉の間には「二律背反」がある。女性が「男性に向いている激しいスポーツ」を実行できるかどうか言えるのは「保健士」か「医者」である。更に、この問題について意見は分かれているし、もし分かれていなくても、「趣味とモラルの感覚から何かが言われねばならないだろう。この感覚はしばしば慨嘆すべき発議や見せびらかしによって傷つけられてきたのだが」。簡単に言えば、これはわざと理解を難しくした「たぐらみのある質問」であった。

しかし我々は、この態度によってどう「傷つけられる」だろうか？

完全に女性的な世界で育てられ、強い性格の女性と付き合っ、クーベルタンは生涯、古代ギリシャの女性を排除したモデル以上のものを知らなかったのである。

「頭がい骨学」として知られる贗の実証科学が彼に誤った議論をさせた。

我々は20世紀の視点から、クーベルタンの女性のオリンピック参加反対を許せないとしても、それを理解しようと努めることはできる。彼は、一方ではフランスとイギリスの婦人参政権論者の圧力を受け、一方では20世紀の西洋の女性の社会進歩に彼より開けているIOC委員或いはオリンピック代表の圧力を受けて、絶えず殿で防御的な戦いをした。

クーベルタンがオリンピック大会に女性の参加を受け入れさせられたのは、全く彼の意に反した、いやいやながらのものであった。本来、青年男子の肉体の喜びのためにあるスポーツの過激さと激しさに、女性の体を晒さないようにしようという健康上のそして美的な配慮が彼の考えを支配した。クーベルタンにとってそれは文化と文明の選択であった。

我々にとっては残念なことだが、理解できないことではない。

プラハで、クーベルタンの立場は痛烈に攻撃された。当然予想されるように、正面攻撃はチェコスロバキア女子スポーツ連盟とイギリスの女性の協会からやってきた。そしてチェコの公衆衛生体育省の代表が援護した。しかしこの攻撃は公の場では行われなかった。公式報告の付録として記録の形で出版された。最終決議は、その言葉づかいの慎重さがクーベルタンを喜ばしたに違いない非常な注意深さを反映している。

委員会は処女地を開きはしなかった。女性は「家族と社会全体のなかで創造的な要素」であるために「健康な、辛抱強い、美しい体を」持たねばならない。この目的のために乱暴な運動は避けねばならない。女性は記録を追ってはならない。そしてそのために女性は体育だけに参加しなければならない。

代表たちはクーベルタンに従い、大した議論もなく問題を片付けてしまった。

結局またしても、男性が女性のことを決めてしまった。あたかも「女性らしさが危険に晒されないように、女性の身体教育を取り仕切るのは結局女性でなければならない」ということが承認されてでもいるかのように。

これが女性のオリンピック参加について、クーベルタンがオリンピックに関して行った最後の突撃であった。

プラハ kongress は華やかなもてなしに満ちていた。グートーヤルコフスキーは儀典の質を監督するには恵まれた地位にあった。

数多くの晩餐会が催され、レセプションがプラハ市長、フランスの大臣、共和国大統領によって主催された。サッカーとハゼナのデモンストレーション、ダニューブ河の船遊び、ソコル運動による体育の実演、宴会等が、プラハのセッションと kongress の歓迎プログラムの目玉であった。

プラハはクーベルタンの実りの秋であった。そして自らの本心を省みる秋であった。

30年は人間の一生にとっては長い時間である。しかし文化のパターンの中では短い。

時間のために一部ぼやけてはいるが、スポーツ構造の誕生の争いに満ちた文脈の中に我々はクーベルタンが求めたものの不変性を見ることができる。スポーツと自由、自由と民主主義、個人と社会の調和、国際主義と平和主義である。

1925年のプラハは中断ではなかった。このイベントの底にはオリンピックムーブメントの命が流れていた。オリンピック思想は歴史のはるか上流に生まれ、未来を潤おす。

クーベルタンは仕事をバイエーラツールに残した。その仕事は人間と人の体や社会的団体との間の自然な関係に基礎を置いていた。ヒューマニズムに繋がり、民主主義に錨を下ろした耐久性のある仕事。究極の関心は人間である。

スポーツを行うカタルシスによって、人は幸福と人間性を築く。

夢見るような、優しいユートピアのビジョンは現実の厳しさとぶつかる。しかしそれは確固とした義務である。人はパンのみにて生きることはできない。

我々はこの激しい情熱の浄化のなかに、クーベルタンにとってオリンピズムが意味した夢のなかに、古典の教えと最新の感覚心理学に従って、精神分析の兆しとなるものを見てもよいだろう。さらに、肉体に付された重要性、感覚の異教的な使用への呼びかけ、創造神話への依存は、現代

人類学がやがてもたらす教えの前兆を垣間見させる。

1. 12. 2. 永遠の春

幕は下りた。引退は正式なものである。しかし情熱の人が、完全に戦いから身を引くことが出来るだろうか？ 事実、クーベルタンは堂々たる態度で去り、バイエーラツールには公正な態度で接した。公然と介入することはせず、自分は影の仕事を引き受けた。

しかし、彼の第三代IOC会長に対する私信には、苦渋と失望と苛立ちと不快が溢れかえっている。なんと多くの憤慨が、時には不当であるが、この異常な通信の文面から溢れ出ていることか。

これほどのエネルギーが人を行動にかりたてているとき、どうすればよいのか？

幸いなことに、未完成の交響曲が残っていた。名誉にかけて完成しなければならないギルド組合員の傑作であった。行政の、或いは人間の堤もこの流れを押し止めることはできない！1880年以来、この荒れ狂う、嵐のような、賢い、不合理な、一つの偉大な精神は、自分自身を創ってきた。すなわち、とりとめのない、説教好きの、創造的な、自己矛盾のアイデンティティーを築いてきた。それは死そのものによっても元に戻すことはできない。その作品は何世紀にもわたって証言するだろう。取り上げられ、誤解され、思い出され、再評価されて。

寛大なヒューマニズムとプライドに突き動かされて、クーベルタンは争いの場に再び戻ることに抵抗できなかった。彼は、振り子が戻り、未来に対する忠誠から、自分が最初に切り開いた土地に戻るであろう、この時を予見していた。プラハは終わりではなく、彼の生涯の区切りであり、永遠の始まりへの出発点であった。

全世界的な流れに支えられて、オリンピックの川は流れつづけた。

そしてその傍らに、彼その人、ピエール・ド・フレディ、クーベルタン男爵が、共に河口へと歩んでいた。

アンリ・ド・バイエ・ラツール会長（1925—1942）の時代

カール・レンナルツ

カール&リーゼロット・ディエム資料館

オリンピック研究調査センター所長

ケルン(ドイツ)

2. バイエ-ラツール会長（1925－1942）の時代

2.1. クーベルタン、オリンピックの舞台を去る

1925年のプラハIOCセッションで、IOC会長を29年つとめたクーベルタンは、それまで何度も言っていたように、次の会長に立候補しないという決意を貫いた。委員の何人か、なかでもスウェーデンのクラレンス・フォン・ローゼン、アメリカのチャールズ・シェリルが、熱心に立候補を求めたのだが...

1924年のオリンピックを彼の故郷、活動の中心であったパリで開催するというIOCの決定、そして次の年、若いチェコ政府の招待によってプラハで教育についてのオリンピック kongress が開かれるということは、一ここでは同時に技術的な面についての kongress が予定されていた— 教育全体のなかに統合されたスポーツという彼の理想、そしてクーベルタンその人に対する敬意の証であった。しかし世界のスポーツの現実、今やオリンピックの旗の下に集まり、それ故にIOCのもとにあるスポーツ界の大勢はクーベルタンが思い描いたような線に沿って発展してはいなかった。

第1次世界大戦のあと、彼の、女性のオリンピック参加そしてオリンピック冬季大会の導入についての立場はIOCメンバーの中で少数派になっていた。そして彼が1921年につくった執行委員会(EC)は、会長としての彼が居心地悪く感じるほど重みを増していた。

クーベルタンが戦争に従事していた何年かの間、IOC会長代理を勤めた親しい友人、スイスのIOC委員、ゴードフレー・ド・ブローネーさえ、もはやすべての点で喜んでクーベルタンを支持するというわけではなくなっていた。これらの理由だけでも、クーベルタンの辞退を説明するのに十分であろう。

しかし、常に自分自身をスポーツの役員であるよりは教育者であると考えていたクーベルタンにとってもっと重大であったのは、当然のことながら、重要性を増していくスポーツが教育的役割から次第に離れていくこと、IOCとその会長が反対せざるをえなくなるような挑発を伴う発展であった。

「絶えず増大する技術的機能に捕らわれて、IOCは1897年と1913年の kongress で決められた教育的な任務を果たすことが出来なくなっている。」

クーベルタンは残された生涯、その精力をこの欠落を償うために捧げることになった。1925年11月15日の国際教育連盟設立に主役を演じ、一年後には国際スポーツ教育事務局を設置して、指導者となった。

会長職とともにIOC委員も辞任したが、彼はその後も、個々の点では不満を抱きながらも自分の生涯をかけた事業に対して忠実であった。オリンピック大会の名誉会長を引受け、筆をとり、講演をし、喜んで助言をした。1927年春には、ギリシャ政府の招きでアテネに赴き、「古代ギリシャギムナジウムの再建」について講演を行った。アテネからオリンピアに足を伸ばしたクーベルタンはオリンピック大会復興を記念するアルティス(聖域)の入口の柱の除幕式に出席した。彼が「世界の若者に」と題するメッセージを発表したのはこの時である。

クーベルタンはさまざまな理由から、その都度挨拶のメッセージは送ったものの、二度とオリンピック大会には出席しなかった。しかしオリंपイズムについて多くの点で同じ考えを持つカール・ディームとの親しい関係を通して、クーベルタンは1936年ベルリン大会の芸術プログラムの準備には深い関心を示していた。

二人はスイスで何回も会った。そしてクーベルタン男爵の大会開会式とベートーベンの第九シモニーを結び付けたいという希望は時間の不足のために叶えられなかったが、少なくとも最終楽章の有名なシラーの「歓喜の歌」は、開会式の日の夜、「オリंपィックの若者」と題した音楽劇の一部として演奏された。

1937年7月29日、彼の最後の共感のメッセージがアジアで最初のオリंपィック大会（東京）の組織委員会に対して贈られた。男爵は、アジア全体がオリंपイズムの理想に親しみ、ヘレニズムがアジアの芸術文化と融合してより高い総合に至ることを求めていた。

クーベルタンが自分の仕事に背を向けることがなかったように、IOCもその長年の会長、今はオリंपィック大会名誉会長を忘れることはなかった。

1936年2月の第35回セッションで、クーベルタンをノーベル平和賞に押すことが決議され、その夏、49人のIOC委員が署名した手紙がオスロのノーベル賞委員会に送られた。

IOCはクーベルタンの物質的窮乏とも取り組んだ。彼の全財産はオリंपィックムーブメントの事業と教育、振興活動に使われてしまっていた。

後継者アンリ・ド・バイエ-ラツールは、1936年春、IOCの同僚にクーベルタンの経済的困難について告げた。スイスNOCの事務総長でクーベルタンの友人、フランシス・メッセルリはすべての国のNOCに対し、クーベルタンの五十年にわたる教育改革の業績を記念して彼に渡す基金を設立するよう提案した。

いくつかのNOC、NOCやIFのメンバー、個人的友人、国内スポーツ連盟、政府、国家元首が寄付し、「ピエール・ド・クーベルタン」基金は合計50,298.24 スイスフランに達した。しかしクーベルタンはもはやこの金を引き出す必要はなかった。彼の死後、この金は未亡人と病気の娘、ルネーに引き継がれた。

生涯最後の日々、彼の第一の関心は、ローザンヌの「モンルポ」荘につくったオリंपィック博物館であった。そこに彼は小さなアパートを持っていた。

しかし1936年、老齢のためその仕事も諦めねばならなかった。そして一人ジュネーブに移った。そこで彼は1937年9月2日、グランジュ公園を散歩中、ベンチに座ったまま死んだ。

その前年、ローザンヌ市はIOC執行委員会と話し合っ、クーベルタンが収集品を残した博物館の経営を引受け、1936年6月22日には男爵に名誉市民権を与えた。

男爵はその手稿の一部を、ディームが所長でドイツ帝国が経営しているベルリンの国際オリंपィック学院に残していた。すでに1934年、彼はディームとこの学院設立を話し合っていた。しかしそれは1938年3月まで実現しなかった。

現代のオリंपィック大会の設立者として歴史に残るこの人物の遺体はローザンヌに葬られてい

る。しかしその心臓は、遺言に従って、オリンピアに最後の憩いの場を見つけた。彼の心臓は、ギリシャ皇太子、バイエ-ラツールIOC会長そして多くのIOC委員列席の下、1927年に除幕された記念柱の下に骨壺に収められた。

2.2. バイエ-ラツール

IOC委員の多くが留任を願ったにもかかわらず、クーベルタンが1925年に会長としてもう一期留まることを拒否したために、IOCは1894年の委員会創設以来オリンピックムーブメントの推進力であり、代表者であった人物の後継者を選ばなければならなくなった。

プラハの第24回IOCセッションの議案では選挙は1925年5月28日午後に予定されていた。

第一回投票では欠席者の郵便投票も集計されたが、多くのメンバーはクーベルタンが再び立候補すると考えていたため、どの候補者も必要な過半数を得ることができなかった。40票の内、バイエ-ラツールが17票、ド・ブロネーが6票、ジュスティニアン・ド・クラリーが4票、メルキオール・ポリニャックが1票、無効票1票であった。

第二回投票では出席者しか投票できなかったが、バイエ-ラツールが27票中19票を得た。こうしてバイエ-ラツールが第三代IOC会長に選ばれたのである。

第一回投票からこのベルギー人候補者がハッキリ優勢であったことから、プラハに出席したIOC委員の中ではある種の合意があったと思われる。しかし何故最終的にバイエ-ラツールが選ばれたかについては想像できるだけである。

当然のことながら、1921年以来の執行委員会のメンバーがIOC内部ですでに重要な位置を占めていたので、彼等が最も有力な候補であった。

その中で最有力なのは執行委員会委員長、スイスのメンバー、ド・ブロネーであった。

彼はすでに暫定的にIOC会長職をつとめていた。しかし前に触れたように、彼とクーベルタンの以前の素晴らしい関係は最近陰りをみせていた。だからド・ブロネーを選んでは男爵が気を悪くするだろうという憚りがあったのだろう。

対照的に、新会長は前任者に対して常に忠実であった。バイエ-ラツールは執行委員会の副委員長、IOCの序列では三番目の地位にあった。そして残る三人のメンバーに対して、彼らよりIOC委員として少なくとも10年は先輩であるという利点があった。

前アントワープ県知事、フェルディナンド・ド・バイエ-ラツール伯爵とカロリーヌ・ドゥルトレモン・ド・デュラ伯爵夫人の子供として、1876年3月1日に生まれた若いアンリ・ド・バイエ-ラツールは、将来ベルギー国王アルベール一世(1875-1935)となる少年と一緒に育てられた。

ルーベン大学で学んだ後、彼はベルギー政府から託された沢山の外交的任務を帯びて長い旅に出た。若いころから、彼は熱心で多才な騎手であり、ベルギージョッキークラブ会長になったが、これは彼にとってはIOC会長と同じくらい重要な地位で、死ぬまで会長職に留まった。1903年、アンリ・ド・バイエ-ラツールはベルギー代表のIOC委員となった。

クーベルタンは「オリンピックレビュー」の中で彼についてこう言っている。

「同じことがベルギーの新メンバー、アンリ・ド・バイエ-ラツール伯爵についても言える。彼は秀れたスポーツマンであり、その情熱と能力はオリンピック大会へのベルギーの参加が彼の祖国と国王

の名誉となることを保証するであろう。」

バイエ-ラツールのIOCへの選出には隠れた動機があった。彼がブリュッセルでの kongress を開催できると考えられたからである。この kongress は前のベルギーのIOC委員、レイティアンがIOCを辞めたことで1903年から1905年に延期されていた。この kongress にはベルギー国王、レオポルド二世が後援を約束されていた。

実際、バイエ-ラツールはここでオリンピックに対する最初の業績を挙げる機会があった。それに彼は上に述べたクーベルタンの期待を満たすことに非常に積極的であった。彼はベルギーオリンピック委員会の共同創立者であり、その第一の目的はベルギーチームのオリンピック大会への常時参加を確実にすることであった。

それまで、ベルギー人選手が参加しなかったのは1900年のパリ大会だけであったが、バイエ-ラツールは1908年のロンドン大会、1912年のストックホルム大会のベルギー選手団団長をつとめていた。

この年、ベルギーは首都ブリュッセルで1920年のオリンピック開催を提案した。しかし二年後、アントワープが代わって招致活動をするようになった。

この決定は大戦のためIOCによって1915年まで延期されたのだが、ベルギーのスポーツ界のリーダーたちはドイツによる本土占領中もクーベルタンと接触を続け、戦争が終わったら大会を開催したいと言っていた。

1919年の第1次世界大戦後の第一回IOCセッションで、1920年大会はフレイミッシュの都市、アントワープに決定したのだが、市は部分的に戦災を被っており、わずか一年半の準備期間の短さが懸念されていた。この決定は明らかにバイエ-ラツールの影響力によるものである。彼は組織委員会会長になり、大会成功に重要な役割を果たして、ドイツによってその中立を悪用された祖国に大きな満足をもたらした。

1923年に彼はベルギーNOCの会長に選ばれ死ぬまでつとめた。

1925年にバイエ-ラツールが国際オリンピックムーブメントの最高の地位についたとき、彼はIOCにおける22年間と、執行委員会創立以来の4年間を振り返ることができた。

彼の前には直ちに担わなければならない最初の任期8年間があったが、そこには拡大するオリンピックファミリーの内部問題があった。その構造は分裂を始める兆しを見せており、彼は先ずそれと取り組まなければならなかった。

大会プログラムの作成、オリンピック大会で女子種目を実施することについての論争、そして何よりもアマチュアの定義の問題、1920年代の議論の様子は今日となつては微笑を誘うものではあるが、アマチュア問題はIOCと国際競技連盟、なかでもサッカー、テニス、スキー連盟との間の最も激しい意見の相違を引き起こすものとなっていた。

クーベルタンはIOC内部で技術的問題があまりに重要になってきたことを嘆いていたので、後継者はそれを仕事の中心にせざるを得なかった。

バイエ-ラツールは男爵と違って教育者でも哲学者でもなかった。クーベルタンなら大きな構想を

もってオリンピックムーブメントに新しい地平を開くことが出来たかもしれないが。また彼は、繰り返し、繰り返し、自分の思想や理想を公衆に訴えたクーベルタンのような著述家でもなかった。

このベルギー人のスピーチは、IOCセッションや執行委員会や競技連盟の会議の開会に当たって行ったものが刊行されているだけである。そしてこれらのスピーチの中で彼は当面の問題、とくにアマチュア問題を繰り返し話している。このことに、託された遺産を忠実に守ろうとする彼の意図が最もハッキリ表れている。

クーベルタンは日常的な次元を越えてさまざまな方向に新天地を開拓しようとしていたが、バイエ-ラツールはオリンピック憲章を守ることに専心した。

男爵は労働者のスポーツという提唱に応じて、イデオロギー的な保留なしにソ連のスポーツに非常な興味を示したが、IOCのヘッドである彼の後継者は「ボルシェビズム」の匂いのするものは一切拒否した。

オリンピックの現状に固執するこのベルギー人IOC会長はしばしば硬直した姿勢をとって敗北を喫した。例えばアムステルダム大会でのサッカーや女子の陸上競技は、1928年の彼の反対にもかかわらず導入された。しかし彼は投票による負けを彼の前任者と違って悪びれずに受け入れた。

また規則を守ることの厳格さはIOCでの彼のリーダーシップを特徴付けるもので、独裁的なクーベルタンに比べてより協力的で寛容なものであった。そして彼が主催したすべての会議は、組織と内容の両面で徹底した準備によって特徴付けられていた。

すべての点で、IOCは彼の最初の8年間の仕事の仕方に満足していたように思われる。というのは次の会長選挙が1933年ウィーンで行われたときに、バイエ-ラツールは彼自身が主張した秘密投票で、全く問題なく更に8年の任期を再選されたからである。

もし彼が、それからの年月オリンピックムーブメントがスポーツに関係のない利害の大渦巻きに巻き込まれることを少しでも勘づいていたら、会長職を引き受けたかどうか疑問に思われるかもしれない。この大嵐は今から見れば、それに先立つ論争がまるで見戯に等しく思われるほどのものであった。

1936年のオリンピック大会は、1931年に、ベルリンに決まっていた。

そしてもしバイエ-ラツールの再選の年に、ドイツでナチスが権力を握ることがなければ、そのあとはいつものアマチュア資格やプログラムについての議論があるくらいのことであつたろう。しかしナチスの政権獲得は、初めて否定しがたい鋭さで大会への政治の影響の問題を突きつけずにはおかなかった。

この状況のなかで、IOCの多数が支持した伝統的な中立の立場が本当に可能であつたかどうか想像してみても無駄なことであろう。しかしバイエ-ラツールがいつもの頑固さで、オリンピック憲章の遵守、なかでもナショナルチームの構成に当たってユダヤ人差別の禁止を主張したことは、少なくとも彼の功績とすることができるだろう。

ドイツにおけるユダヤ人の状況を考えれば、これはたんなる上品な虚構に過ぎず、IOC会長はその実態を十分には知らなかったと考えられること、そしてヒトラーが結局はオリンピックを自分の勝利のプロパガンダに代えてしまったこと、はまた別の話である。

ナチス政権はベルリン大会の準備の間、そして大会期間中は比較的抑制のきいた態度を示した。しかしその直後から組織的にオリンピックムーブメントへの影響力を強めようとした。そしてそれは全面的に失敗であったとは言えないのである。

例えば、ベルリンの国際オリンピック学院の設立、IOCオフィシャルブレッティンのカール・ディームのオリンピックシェルトシャウへの合体、「歓喜を通じての力」協会へのオリンピックカップの授与、1936年大会のフィルムに関するレーニ・リーフェンシュタールへのオリンピックディプロマの贈呈、ヴェルナー・クリンゲベルクのIOC事務総長就任等である。

IOCは、ベルリン大会の大成功によってIOC内の信望が極点に達していたレヴァルトが半分ユダヤ人であるために、ナチスの指示によって党员、ヴァルター・フォン・ライヘナウに道を譲って辞任せざるを得なくなるのを座して見守るしかなかった。

レヴァルトの執行委員会の後継者は熱烈なナチであるカール・リッター・フォン・ハルトであった。

1939年に、1940年冬季大会がスキー競技とスキーインストラクターのアマチュア資格を巡る意見不一致を理由にサンモリッツ開催を撤回された事実、そしてドイツ帝国のボヘミアとモラヴィア併合、1938年のポグロムナイト(ユダヤ人虐殺)にも拘わらずガルミッシュパルテンキルヘンが再び開催地に選ばれ、バイエ-ラツールがベルリン大会の前にはユダヤ人に対する差別反対の原則を言わなかった事実は、いまや優先順位がどこにあるかを示すものであった。

どんな対価を払っても大会を開催することとスポーツのルールを守ることが第一の目的となり、普遍的な人道的な原則の擁護の情熱は薄くなったと結論したくなる。

ヒトラーのポーランド侵攻やその結果のドイツに対する宣戦布告の後でさえ、最初はIOCがオリンピック大会を中止することは問題にならなかった。

しかし戦争のヨーロッパ全土への拡大は、1940年大会開催についての議論に終止符を打った。1939年11月22日、フォン・ハルトはバイエ-ラツールにドイツが冬季大会開催の任務を放棄すると通告した。

バイエ-ラツールは以下のような言葉をもって答えた。

「第五回冬季大会に1936年大会よりも更に印象的な性格を与えるために貴下がしてこられた素晴らしい仕事が今や無駄になったと考えるのは何と悲しいことでありましょう。」

1940年7月、ディームが帝国スポーツ総統ハンス・フォン・チャンマー・ウント・オステンンの指示でドイツ占領下のブリュッセルにIOC会長を訪ねた。総統は「国際オリンピック委員会の組織改正」をバイエ-ラツールと交渉することについてヒトラーとフォン・ハルトの同意を得ていた。この時、バイエ-ラツールはベルギージョッキークラブ会長としての資格でドイツ占領軍がすべてのサラブレッドを徴発したことに文句を言ったが、ディームの日記によれば「ドイツ人による乗っ取り」はほとんど彼からの抵抗に会わなかった。そしてディームは次のように書くことができた。

「オリンピックの問題については、彼は私の草案に賛成し、素晴らしいと言った。彼はIOC委員についての文章に手を入れただけであった。彼の承認は今後の交渉にとって非常に有効であろう。」

ナチスの第一の目的は、すでにレヴァルトの例で前もって行ったように、IOC内のドイツ人の地位の獲得に影響を与えることであった。彼らは、今やNSDAP、帝国体育国家社会主義同盟の傘下にある外部から独立したドイツスポーツのシステムの中に、指名について彼らのコントロールの及ばない国際機関の代表が入ることのないようにしようとした。

11月の半ば、フォン・チャンマー・ウント・オステン、フォン・ハルト、ディームの三人はIOC会長と更に話し合うため、ブリュッセルを訪れた。

内容についての結論は二つのソースから引き出せる。ディームは日記に書いている。

「V.チャンマーはバイエ-ラツールに会長として残ってほしいと言った。IOC委員についての変更はそれぞれの国の問題であり、自分はIOCが若返ってほしいと思っているのだと譲歩を示した。若返りは何年かにわたって進行中であった。(もしV.チャンマーが55才で選ばれたら、彼は自分のことを若返りといったであろう)」。

フォン・チャンマー・ウント・オstenは、ディームとは違うトーンで、ドイツ外務大臣に対し、バイエ-ラツールが改革に賛成したと報告している。

「独裁主義国家ドイツの希望が尊重されるという趣旨での改革についてである。即ち、第一に委員会の急激な若返り、第二に独裁主義国家が提案した代表は委員となるべきこと。」

彼は続ける。

「私はバイエ-ラツールが会長としての資格でこの改革を行い、組織改革が実現するまで指導の責任を負うよう求めた。」

確かに、IOC会長はナチスがIOCのコントロールを手に入れるための最も有効なテコであった。

しかしヒトラーのドイツが望む「改革」のための操り人形の役割を押しつけられねばならなかったのはショックである。とどのつまり、独裁主義国家は自分の代表をIOC委員に送り込み、その委員が他の国の代表の承認について決定権を握ることになる。

一見したところ、会長がこの提案を即座に拒否しなかったのは残念に思えるかもしれない。しかし彼は少なくとも、ただひとつ憲章修正の承認権をもつIOCセッションを戦争終結まで招集しないという先見の明を持っていた。

もしナチスが勝っていたら、どの道、彼らの望みどおりになっていただろう。

バイエ-ラツールは1942年1月6日から7日にかけての夜に死んだ。

兄弟と共にテブリッツシェーナウの城(ボヘミア)に住んでいた夫人、ヒトラー、外務省、IOC委員の多くはベルリンからの電報で知らされた。

ヒトラーは伯爵夫人に弔電を送り、葬儀に帰る彼女には兄弟の他、フォン・ハルト、ディームが付き添った。ディームはベルリンで彼女と会った。

バイエ-ラツールの家での葬儀にはたった三人のIOC委員が立ち会った。フォン・ハルト、ベルギーのガストン・ド・トラノア、オランダのアルペルト・シュメルペニック・ファン・デル・オイエである。ファン・デル・オイエがIOCの花輪を捧げ、追悼の言葉を述べた。三人ともドイツの勢力圏から来たのであった。

ディームは公式には国際オリンピック学院を代表していたが、日記にベルギー国内オリンピック委員会のメンバーとドイツ代表の追悼式典についての話し合いのムードを、次のように記している。「我々があまりに出すぎていて、一種の宣伝をしようとしている、という彼らの感情に我々は気づいた。」

祖国が占領されてから、バイエ-ラツールはIOCメンバーの間の連絡を中立国スウェーデンのエドストレーム副会長にほとんど任せていた。

このこと自体が、おそらくナチスに対する拒否の姿勢の表明とみてよいだろう。

エドストレームがいまや、正当にもIOCのリーダーシップを握ることになった。

2.3. IOCと執行委員会－構造的枠組み

2.3.1. メンバーシップ

1894年のそもそもの始めからIOCは着実に拡大してきた。バイエ-ラツールが会長に選ばれたブラハセッションの終わりには委員は65人を数えた。

第2次世界大戦前までは委員の数は62人から70人の間を変動していたに過ぎなかった。

しかし1939年、戦争前の最後のロンドンセッションでは、やって来ることの予感のせい、7人の追加メンバーを選んで73人とこれまでの最高になった。そのため1946年の戦後第一回セッションまでにメンバーが22人減ったことも、そうでなければ受けたであろうほどの打撃にはならなかった。

バイエ-ラツールの全任期を通じて、IOC委員のおよそ60パーセントはヨーロッパの国々でIOCを代表する責任を負っており、国内オリンピック委員会のある国のほとんどが少なくとも一人のIOC委員を送っていた。同じ原則がヨーロッパ以外の国にも適用された。

憲章によればIOCは自ら委員を選び、指名することになっており、その委員はそれぞれの国においてIOCを代表するとされている。そして委員は終身、完全に独立している。

各国にオリンピック委員会ができるに従って、スポーツへの一般の関心が増し、IOC内部の地位によって影響力に差が出るようになると、人によってはIOC委員をIOC内部で外部の利益を代表する者と思わなくなった。

そうしたわけで、エドストレームは自分がIOCに入る前から、将来は新しい委員を承認する前にその国のNOCと相談すべきだと提案していた。IOCの独立性を重んじていたクーベルタンは勿論、そのような相談をすることには批判的であった。バイエ-ラツールについて言えば、彼の融和を図る態度からしてクーベルタンとは少し違っていただかもしれない。

実際には、新委員の選出は執行委員会によってIOCに提案される。そしてIOCは大抵事前に公表されない指名について公開で投票した。

稀なケースでは郵便投票も行われたが、これには明確な定足数の規定がなかった。1926年、二人の新メンバーが委員の三分の一以下しか参加しない郵便投票で承認された。このタイプの選挙方法は1939年のロンドンで廃止された。

IOC委員は終身制であったが、第2次世界大戦中のセッションの長い中止期間を除いて死ぬまでつとめることはごく稀であった。いろいろな理由での辞任が多かったが、会長の辞任要求が無視された場合には、会費の未払いや無能力、不正行為等があったときに適用できる追放条項も何度か使われた。そうした例の一つはアメリカのアーネスト・リー・ヤンケで、あまり活動的ではなかったが1927年以来のメンバーであった。

彼はナチスドイツでのオリンピック大会をアメリカがボイコットするよう猛烈なキャンペーンを行った。そしてIOCが当時その利益となると考えていた考え方を攻撃した。IOCはドイツ政府の保証を信用し、ベルリン大会に固執していたのである。

まだヒトラードイツの組織的な成功とドイツ選手の好成績が続いていたが、IOCはガルミッシュ・パルテンキルヘンのセッションとそれに続くベルリンのセッションでヤンケの行為について議論し、追放を決めた。省みて、あまり気持ちのよい決定ではなかった。

当時のIOCとその会長(上参照)は盲目、或いは少なくとも近視ではなかったのかと問うてみたくなる。

1917年に滅びたロシア帝国のIOC委員でパリに亡命していた、ロシアのプリンス、レオン・ウールソフは1933年の死まで委員であったが、オーストリアの委員テオドール・シュミットは1938年3月3日のドイツのオーストリア併合宣言のあと直ちに、1938年4月号のIOCオフィシャルブレッティンからその名が削除された。シュミットは辞任しなかったが、ユダヤ人であるためアメリカに移住せざるを得なかった。

イリ・グート-ヤルコフスキーについてはいくらかましであった。ドイツ軍が彼の祖国を占領し、ボヘミアとモヴィアに帝国保護領を設立したほとんど丁度一年後、彼の将来の地位の問題が起こった。1939年6月早々、ロンドンで開かれる第39回IOCセッションでは1940年冬季大会のガルミッシュ・パルテンキルヘン開催を議論することになっていたが、チェコの委員であるグート-ヤルコフスキーはプラハでロンドンへの旅行の許可を貰うことができず、バイエ-ラツールに抗議した。バイエ-ラツールとエドストレームの兩人は彼がロンドンに来ることができるという電報を打った。おそらくドイツのIOC委員たちと合意ができたのであろう。

フォン・ライヘナウが述べているように、上からの指示によるものか、彼自身のイニシアチブによるものかは分からないが、グート-ヤルコフスキーは委員に留まることができた。ドイツの委員にとっては、クーベルタンクの古い戦友であり、45才からの委員で創立当時の委員の最後の一人の賛成を得られずに、1940年大会開催を危うくするのはあまりに大きなリスクであった。つまりドイツの委員たちにとっては、グートが旅行許可の再申請をするには遅すぎるというタイミングが最も望ましかったわけである。

IOCが引き込まれた危険な依存の渦巻きは1939年6月6日のIOCセッションの議事録に明らかである。これにはバイエ-ラツールと議事録署名人クリンゲベルクの署名があり、以下の文章を含んでいる。

「会長は、最近の中央ヨーロッパの変化に鑑み、イリ・グート-ヤルコフスキー博士の地位を明確にすることが必要であった、と発言した... 保護領の設立とズデーテンランドの帝国併合 [ドイツ版: ズデーテンランドの帝国への回帰] にしたがってイリ・グート-ヤルコフスキー博士が以前の地位を確保し、ボヘミアとモラヴィアの代表となるのは当然である。」

テキストは続く:

「会長はこの解決策がドイツ側の反対に一切あわなかったことを喜んだ。そしてこの話し合いの成功に対してドイツの委員たちに感謝した。」

2.3.2. セッション

1936年を例外として、IOCは1926年から1939年まで年に一回会合した。1936年はヤンケ事件のためにエキストラセッションをガルミッシュパルテンキルヘンで開いた。この時は66人の委員のうち15人しか出席しなかった。

ロサンゼルス大会の際の1932年のセッション以外、すべての会議はヨーロッパで行われた。1938年のカイロにしてもヨーロッパのすぐ近くである。

会議の場所は毎年決められていたが、後にはIOCセッションを開く利益が大きくなるに従って数年前に決められるようになった。例えば、1925年のセッションはド・ペンハ・ガルシア伯爵の招待を受け入れて翌年をリスボンに決め、1926年のセッションはアルベール・ゴウティエ・ヴィニヤール伯爵の招待で翌年をモナコとした。

1928年オリンピック大会のために会議場になったアムステルダムでは、第一回アフリカ大会が開かれるアレキサンドリアが1929年の会場として合意された。

しかし長い準備にもかかわらず、この大会は植民地勢力イギリスとフランスの反対で中止され、セッションは急遽ローザンヌに変更された。

1930年にはベルリンでセッションが行われ、続いてしばらく最後となるオリンピック kongress が開かれた。そこではじめて、次のセッションの会場について投票が行われた。

候補地はバルセロナ、ベオグラード、ウィーンであった。

バルセロナが1931年、ウィーンが僅差で1933年となった。1932年のオリンピックイヤーはロサンゼルスである。バルセロナでは、IOCは1934年セッションを40周年公式祝賀と共にアテネで行うことに決めた。

このセッションは5月の16日から19日まで続き、いろいろなイベントのプログラムが伴った。アヴェロフ記念堂とIOC初代会長ヴィケラスおよび1896年組織委員会メンバーの墓への献花に始まり、アクロポリスでの式典、古代スタイルの競技会と続き、オリンピアでの祝典で最高潮に達した。

そこでバイエラツールとオリンピア市長はクーベルタンを記念して1927年にギリシャオリンピック委員会が建てた柱のところでスピーチを行った。ギリシャオリンピック委員会会長は市長にオリーブの枝を贈り、1936年にオリンピック聖火を採火しリレーによってベルリンに運ぶ許可を求めた。これはカール・ディームのアイデアであった。

1935年のセッションは、ロサンゼルスでオスロが開催都市として選ばれた。

オスロではポーランドとエジプトのIOC委員の申し出で、1937年ワルシャワ、1938年カイロがそれぞれ会場と決まった。

ナイル河畔のセッションでは、ロンドンが1939年に決まり、すでに8年ウエイティングリストに載っていたベオグラードは1941年まで待つことになった。

ほとんど全ての会議がヨーロッパで行われたのはIOC委員の構成を見れば不思議ではない。その上、「海の向こう」のメンバーの三分の一弱が実際はヨーロッパに住んでいたのだから尚更である。そしてヨーロッパで行われるセッションもしばしば旅行は長く困難であった。そしてリスボンやオスロのような大陸の端のほうで行われるセッションは中央の会場で行われるセッションより出席者が少なかった。

インドや極東、南アフリカ、アメリカのIOC委員にとって、何日も、時には何週間もかかる海の旅は大変な経済的負担であった。そうしたわけで、そうした地域に住んでいる委員はセッションに出席することが少なかった。そして複数の委員のいる国では交代で出席した。そして数年後、彼らは重荷を誰かに引き継ぐためにIOC委員を辞任することが多かった。バイエ-ラツール会長の時代に開かれた15のセッションで平均すると42.7パーセントの出席率であった。最高の出席率と最低の出席率が両方とも1936年に記録された。

ガルミッシュパルテンキルヘンでは77パーセントが欠席した。反対にベルリンでは委員の72パーセントが出席した。

ヨーロッパ人の出席率は勿論非常に高かったが、職業上の義務に縛られていない人ばかりではなかった。何人かは祖国で政治家、軍人、財界人として重要な位置を占めており、毎年長く国をあけることは不可能であった。例えば、スイスのIOC委員、ギサン将軍は、サンモリッツ冬季大会を決める投票が議題に上っていたにもかかわらず、1939年のロンドンセッションに出席できなかった。さらに、IOC委員の年齢を考えれば、セッションに多くの欠席者があった最大の理由は年齢であったと言ってもよいであろう。

2.3.3. 執行委員会

IOCの一部として、その性格上オリンピックムーブメントのリーダーシップを担う存在として、執行委員会(EC) [英語では1955年以来理事会と呼ばれている] はクーベルタンの発案で1921年につくられた。クーベルタンの提案理由は、南アメリカに旅行を計画しており、長い間IOCの管理運営が出来なくなるだろうというものであった。

彼の考えでは新しい機関は臨時的なものであった。クーベルタンが予見せず、勿論望みもしなかったことだが、後から考えると少しも不思議でないのは、彼が最後に作り出したものは、IOC内部の新しい権力中枢に発展していったことである。

会議の準備と事後処理は、執行委員会にIOCの仕事に対する大きな影響力を与えた。

委員となったゴードフレー・ド・ブロネー、ジグフリード・エドストレーム、イリ・グート-ヤルコフスキー、メルキオール・ド・ポリニャック、アンリ・ド・バイエ-ラツール等五人はすべてIOCの積極的な活動家であり、引退するまで30年以上IOC委員であった。彼らの秀れた能力を考えれば、ECが単に技術的な下準備をするだけでなくIOC全体の代わりに重大な決定をするようになったのは少しも不思議ではない。

当然のことながら、クーベルタンはすぐにこの成り行きに苛立った。ECは彼自身の権威に衝突したし、本当はECがいつの間にか先細りになって消えていくのを望んでいたふしがあるからである。

私的な面でも彼の発案は不幸な結果になった。というのはIOC会長としてのクーベルタンとEC委

員長ド・ブロネーの意見の相違は、この二人の間の一時は大変親密であった友情を傷付けたからである。

ローザンヌセッションの議事録にあるように、クーベルタンが自分をECの委員に入れなかった事実は、この新しい機関の可能性を過小評価した印であるとともに、ECの権利義務をIOC全体のなかで規定しなかったのは彼の手抜きであった。

この仕事はEC自身に残された。1921年11月、パリで開かれた第一回会議は規定に関する審議から始まった。そして一年一回会合すること、IOC会長関連の財政問題に取り組むこと、憲章の規則の適用を強化すること、とくに大会組織委員会に関して強化することを決議した。バイエ-ラツールが副委員長になり、ポリニャックがセクレタリーになった。

ポリニャックの住まいのあるパリがECの所在地として選ばれた。しかしわずか一年後、スイスに住んでいる委員長ド・ブロネーの動議で、ECはローザンヌに移された。

何人かの委員は、移転がIOC会長との間に摩擦を生むのではないかと心配したが、クーベルタン自身が移転に何の異議も唱えなかったので安心した。

最初の四年間は執行委員会にとって試験期間であったと見なすこともできよう。その間にECは可能性や限界を試し、一方では会長との付き合い方、一方ではIOCそのものの付き合い方を試すことができた。1925年にIOC自身が正確な役割分担の問題に取組み、将来IOC会長がEC委員長も兼任すべきことを決めた。この規則はクーベルタンの後継者、バイエ-ラツールが会長になって実現した。彼はEC委員長もド・ブロネーから引き継いだ。ド・ブロネーはIOC副会長の座だけ維持した。その結果、ECは事実上IOC理事会の様な存在になった。プラハで採択された憲章改訂版では、さらにECはそのメンバーの中からIOC副会長を選ぶことも規定された。副会長は会長が出席出来ないとき、辞任したとき、死亡したとき会長に代わる。これは理事会に対する重大な付託である。

ECの責任事項の拡大から、最初のECが有効で有能であったことを証明したことが分かる。財政運営に加えて、IOCセッションの議題の作成、規則の執行、また新しいIOC委員の提案、オリンピック大会に対する影響力の行使、国際競技連盟との協力もその権限に加わった。その結果、IOC全体では柔軟に対応できない仕事が会長一人の肩だけにかかることはなくなった。この展開を疑いもなくバイエ-ラツールは歓迎した。彼は一人で決断することは好きでなかった。

それまで期限のなかったECメンバーの任期も1925年に決められた。任期は4年と決まった。このシステムでの最初の選挙は1927年モナコのセッションで行われた。

モナコではそれまで6人であったECメンバーの数が新たな憲章改正で7人に増えた。

それで執行委員会は従来のメンバーを外すことなくドイツ人、テオドール・レヴァルトを委員に選ぶことができた。レヴァルトを加えた「設立メンバー」、バイエ-ラツール、ド・ブロネー、ド・ポリニャック、エドストレームが第二代執行委員会に1927年から1931年まで留まった。これに、逆上って1924年にグート-ヤルコフスキーの辞任にともなって選ばれたイギリス人、レジナルド・ケンティッシュと、クーベルタンが辞めたあと1926年IOC委員になったアメリカ人、チャールズ・シェリルも含まれた。

バルセロナの第30回セッションで同じ人達が再選されたが、イギリス人委員ケンティッシュは同国人クラレンス・アバデア卿に交代した。

次のEC選挙でもまた一人だけが交代した。チャールズ・シェリルが辞任し、イタリア人、アルベ

ルト・ボナコサ伯爵が選ばれた。

1937年のド・ブロネーのアルジェリアでの死と、同じ年ナチスによってIOC辞任を強要されたレヴァルトの退任をうけてワルシャワセッションでの選挙となり、アメリカ人、アベリー・ブランデーとドイツ人、カール・リヒター・フォン・ハルトがECのメンバーになった。

1939年のロンドンにおける通常選挙では、ECはワルシャワでの構成と同じになった。

しかしそれに続く戦争の間は会合が開かれることはなく、バイエ-ラツールは必要に応じてメンバーと通信によって相談した。例えば、メンバーは戦争中大会を中立国から引き上げることが出来るかどうか、もし大会が開かれた場合、交戦国は参加が認められるかどうかについて意見を求められた。しかしバイエ-ラツールは1940年にセッションを、こともあろうにベルリンで開催せよとのブランデーとエドストレームの要求には同意しなかった。

IOC自体が保持した責任はオリンピック憲章に係わる決定、オリンピックムーブメントの基本法、オリンピック開催都市の決定であった。といって公式な規定上の権限が何時も文字通りに尊重されたわけではなかった。

例えば、オリンピック kongress の決定は、kongress には勿論規則上多くのIOC委員、国際競技連盟代表からなる評議員が執行委員会とともに出席していたわけではあるが、IOC 自体の追認なしで施行された。

規則制定の必要が何よりも強く感じられたのは、女子競技のオリンピックプログラムの増加、冬季大会の導入、アマチュア基準の確立についてであった。アマチュア問題はとくに、バイエ-ラツールの会長時代を通じて、IOCと多くの国際競技連盟との間の定期的な紛争の種であった。こうした紛争が特定のオリンピック大会を背景に起きると、大会組織委員会もまたIOCに対抗する当事者グループの一員に加わった。

2.4. 女性の登場

2.4.1. 最初の女性陸上競技連盟

第1次世界大戦以前は、クーベルタンが乗り気でなかったため、女性はオリンピック大会の二三の競技に参加でしただけであった。1900年のパリ、1904年のセントルイスでは、世界博覧会主催者の大会プログラムに対する大きな影響力のおかげで、女性がゴルフ、テニス、アーチェリーに参加することができた。1908年にはアイススケートが加わった。

しかし本格的な拡充は、イギリスとスウェーデンのIOC委員の積極的な働きかけによって、1912年のストックホルム大会に女性の水泳競技参加が認められるまで可能にはならなかった。

第1次世界大戦の直前から、とくに直後、女性の法的、社会的、政治的役割は、とりわけアメリカとヨーロッパで変わりはじめた。戦時中に彼女たちが得た自信と、ほとんどすべての職業につくことができるようになって獲得した大きな影響力、そして彼女たちの選挙権と被選挙権がスポーツに影響を与えた。

女性はオリンピック大会への全面参加を要求しはじめた。1920年のアントワープ大会に対するこの要求がIOCの抵抗、とくにクーベルタンの抵抗によって挫折すると、女性たちはスポーツにおけ

る男女同権を実現するために別の道を探り、オリンピックの主要競技、陸上競技を始めた。クーベルタンはことあるごとに女性の競技と女性自身による競技連盟の全面廃止を呼びかけていたのである。

女性の陸上競技の最初の芽は、第1次世界大戦前と大戦中にヨーロッパ、とくにオーストリアとフランスで萌え出た。フランスには女性スポーツクラブが設立された。

1917年、このクラブは第一回フランス女性陸上選手権大会を開催し、他の国がすぐこれに習った。女性スポーツの統合組織、フランス女性スポーツ協会連合(FSFSF)が同じ年の12月に設立された。フランス陸上連盟も女性に注意を向けはじめたが、当然のことながら数年間にわたって二つの組織の間の軋轢が続いた。

1921年3月にモンテカルロで数日間続く国際女性スポーツ祭が催され、主としてトラックとフィールド競技、そしてダンスとゲームが行われ、フランス、イギリス、イタリア、スイスのチームが参加した。

このイベントは新聞によって女性オリンピックとして広く伝えられた。この催しは次の年もその次の年も行われた。この第一回競技会の成功は国際陸上競技の発展に大きな衝撃を与えた。帰国後、イギリスの参加者はロンドンオリンピック陸上クラブを設立した。

10月30日にはパリで、国際女性陸上競技会がフランスとイギリスの間で行われた。

その翌日、イギリス、アメリカ、フランス、イタリア、チェコスロバキアの代表が国際女性スポーツ連盟(FSFI)を結成した。定款と規約の草案が作られ、FSFSFの前事務総長、1920年以来会長であったアリス・ミリアが国際連盟の会長になった。

一年後、1922年8月20日、FSFIはパリで国際陸上競技会を開催し、5カ国から65人の選手が参加、2000人の観客の前で11競技に18の世界記録を出した。

この競技会は第一回女性オリンピック大会と呼ばれた。開会式はオリンピックの式次第に則って各国の行進で始まり、アリス・ミリアは次の言葉を述べた「私は第一回世界女性オリンピック大会の開会を宣言する」。

この大会の成功は女性の陸上競技の発展をさらに促した。FSFIはこの女性オリンピック大会を四年ごとに開催し、会期も数日間に伸ばすことを決定した。

IOCはこの展開を見逃すわけにはいかなかった。IOCはこれを「悪用と行き過ぎ」と呼んだ。そして1923年、国際陸上競技連盟、IAAFにこの問題に取り組むようよう要求した。IAAFもこの件を憂慮し1924年7月のパリでの連盟コンgressで定款のなかに女性の陸上競技について責任をもつことを書き入れた。しかし依然として、オリンピック大会の陸上競技には女性の参加は許さるべきでない、という見解を取っていた。

アリス・ミリアのFSFI承認を求める1921年の要求を拒否していた国際陸上競技連盟は、女性連盟と接触する詳細な任務を帯びた委員会を指名した。FSFIはIAAFのこの決定をにべもなく拒否した。

二年以上に及ぶ交渉の結果、妥協が成立した。曰く、FSFIは女性陸上競技の連盟として独立を維持する、しかしIAAFのルールと規則に従う。国際競技会の開催を続けるが「オリンピック」という言葉は使わない。そしてついに、五つの女子陸上競技種目(100メートル、800メートル、4 X 100

メートルリレー、走り高跳び、円盤投げ) をオリンピックプログラムに加えることがIOCに提案されることになった。

常に自らの領域の外で「オリンピック」という言葉が使われるのを防ぐよう努めてきたIOCにとって、第二の点がとくに重要であった。そのためアリス・ミリアは1926年3月8日のEC会議に招かれた。そこで彼女は再び女性の大会でその言葉を使わないよう求められた。女性に対する干渉が成功したのに次いで、学生についてもこれは1927年に成功した。「学生オリンピック大会」は「国際大学大会」と改名された。

しかし労働者の大会については、IOCは強い抵抗に会った。「労働者オリンピック」は6年おきに1925年、1931年、1937年と行われた。

IAAFがIOCに提案することに同意した女性陸上競技についての動議は、もとIAAF会長、IOC副会長、シーグフリード・エドストレームによって1926年5月のリスボンセッションで提案された。議事録には以下のようにある。

「エドストレーム氏の提案により、国際オリンピック委員会は大会の限られた数の陸上競技に女性の出場を許すことを決定した。」

ハーグの第8回IAAF kongressには、エドストレームだけでなく、IOC会長バイエ-ラツール、二人のECメンバー、レジナルド・ケンティッシュ、テオドル・レヴァルトも出席していたが、交渉を担当した委員会の結論は再び激しい論議の的となった。

とくにフィンランドの代表、有名なコーチ、ラウリ・ピカラはオリンピックへの女性の参加に猛烈に反対した。一方ドイツのベルグマン夫妻は同じような激しさでそれと反対の意見を擁護した。

結局、IAAFは、12票対5票でスウェーデンのボー・エケルンドの提案した次のような妥協案を採択した。「女性の競技は1928年のオリンピック大会のプログラムに試験的に含まれる。」

第2回女性世界大会の機会に、1926年ヨテボリで開かれたFSFIの第4回kongressは交渉の結果に満足しなかった。アリス・ミリアはイベントの名を変える必要を説明し、わずか5つの競技だがオリンピック大会のプログラムに含まれたことは女性陸上競技にとってささやかな成功であると述べた。しかしドイツの加盟が認められてFSFIの副会長になった医者ヴァルター・ベルグマンは、そんな惨めなことならオリンピック大会に参加を拒否すべきであるとまで言った。

FSFIは結局、オリンピック大会に参加するかどうかは会員である個々の組織に任せることにした。その結果、女性世界大会でいつも国別ランキングの一位であったイギリスの女性はアムステルダムオリンピック大会に出場しなかった。

kongressは「女性スポーツのためのオリンピック委員会」の委員に12人を指名した。これは1928年のアムステルダム大会に女性種目を登場させることを審議するためのものであった。第2回の女性世界大会そのものは、彼女たちなりのオリンピック式典を行い、8カ国参加、12種目が行われ、5つの世界新記録をだし、三日間の競技に17,000人の観客を集め大成功であった。

2.4.2. オリンピック大会における女性の陸上競技

1928年のアムステルダムオリンピック大会で女性は4つの競技に参加した。

陸上のほか、体操の団体がプログラムに加えられた。フェンシングは1924年からプログラムにあった。これは各国の大学のフェンシング愛好者の影響力のお陰である。

1912年大会に導入された水泳競技は競技リストを完成した。

なお、女性はフィギュアスケートでは大会に参加していた(1908年以来)。

しかしテニスは男女とも競技連盟とIOCのアマチュア問題を巡る衝突のために落とされた。女性の競技種目の数は、テニスの3種目が除外されたために11から14に増えただけであり、参加国の数も20から24になっただけであったが、女性選手の絶対数と全選手の中に占める割合は1924年に比べて倍増した(136人から 290人に、4.4%から9.6%に)。

この数字は18の国からの101人の女子陸上競技選手、5カ国からの60人の女子体操選手を含んでいる。

ロサンゼルス大会が近づくにつれ、女性の種目についての「綱引き」が再び始まった。アムステルダム大会の間に、いまや会員として23の連盟を持つFSFIは kongressを開いた。これにはIAAF会長、エドストレームも出席し、オリンピックにおける「陸上競技のすべてのプログラムへの女性参加」を要求する会議のアイデアと支持した。

そこで開かれたIAAFの kongressでも、アリス・ミリアは彼女の連盟の要求を提出した。何回も投票が行われ、女性の陸上競技を受け入れることは16対6で原則的に承認されたが、すべてのプログラムという要求は拒否された(13対9)。

個々の投票では、100メートル、4 X 100メートルリレー、80メートルハードル、走り高飛び、円盤投げ、槍投げが1932年大会に承認されたが、200メートル、800メートル、砲丸投げ、走り幅跳びは拒否された。

IAAFのためらいが続いたのは、とくに女子800メートルの除外は、疑いもなくアムステルダム大会の経験の影響である。一人の日本選手と二人のカナダ選手が草の上に倒れ込んだが、これは明らかに全身疲労のためというよりは落胆のためであった。

この種のことは男子でも珍しいことではない。しかしこの事件は役員、医者、ジャーナリストの間に強い批判を巻き起こし、女子陸上種目の廃止の要求にまで高まった。

しかしわずか二日後、同じカナダの女子選手が 4 X 100メートルリレーで大幅に世界記録を破ることが出来た事実はまったく見過ごされた。

1929年4月のローザンヌにおける第28回IOCセッションは再び女性の参加問題に取り組んだ。このセッションでは1930年に予定されたベルリンでの kongressの準備が行われた。北欧の国々とフィンランドのオリンピック委員会は女子種目の全面的廃止を要求した。エドストレームの動議で、問題は執行委員会の議論に任された。

7月にヴィッテルで行われたECの会議では、提案されたオリンピックプログラム見直しについて女子の種目を体操、水泳、フェンシング、テニスに限るよう勧告された。バイエラツールは「陸上」は将来認めるようにしたいと考えた。

1930年5月末にベルリンで開かれたIOC kongressで、会長はECの提案を新しいプログラムについて作業していた委員会に付託した。長い議論が続いたが、体操、水泳、テニス、アイススケートはほとんど全会一致（26対1）、陸上は（17対9）、フェンシングは（19対8）のそれぞれ圧倒的多数で承認された。

しかしメッセルリの提案、ヨット競技に女性を参加させる件は大差で否決された。

実際にはそれまでも沢山の女性がヨットに乗っていて、成功も収めていた。例えば、アントワープ大会でイギリスのドロシー・ウィニフレッド・ライト夫人が、アムステルダム大会ではヴィルジニア・ヘリオ夫人が夫のヨットのクルーをつとめ両方とも金メダルを得ていた。1930年の禁止にもかかわらず、1936年のベルリン大会には三人の女性がヨットに参加したがIOCは異議をとえなかった。多分、基本的には今日でも同じだが、スキッパーの名前だけが問題だったからであろう。

Kongressの全体セッションで、委員会の勧告案にもかかわらず体操、水泳、テニス、アイススケートに女性参加を限定する案が再び提案された。しかしこれは全会一致で否決された。上に述べた6つの競技のリストを最終的なものとし、それ以上拡大しないとする動議もまた否決された。これでIOCは、最終的にこの件についてフリーハンドを得た。

1930年9月6日から7日にかけて、第3回世界女性大会がプラハで開かれ、17の国の選手が12種目の陸上競技、バスケットボール、ハンドボール、ハゼナ（一種のハンドボール）のチームゲームに参加した。オリンピックの開会式によく似た式典に続いて行われた試合には55,000人の観客が集まった。初参加のドイツチームは国別ランキングであっさりと一位になった。

1931年のバルセロナのセッションで、女性参加についてのKongressの漠然とした結論に照らしてバイエラツールが主導したさらに長い議論の末、IOCは個別投票の結果ロサンゼルス大会に関しては、小委員会がすでに決めたリストを承認した。例外はテニスで、国際ローンテニス連盟のアマチュア問題についてのIOCと異なる態度のために保留された。

経済危機とヨーロッパ人にとっての長い困難な旅のために、アメリカの西海岸の大会に参加した女性の数は1928年にエントリーした数の半分以下であった。しかし女性の参加率は9.6パーセントから9パーセントにわずかに減っただけであった。何故なら男子も同じ困難を経験していたからである。

体操の試合はなかったが、女性の陸上競技プログラムは1928年にIAAFで承認された6種目で構成されていた。それでもなお、大会の際に開催されたIAAF Kongressで、フランシス・メッセルリが代表するFSFIは、1936年大会を目指して再び女性の全プログラム参加を要求した。そして受け入れられなければ完全撤退すると脅しをかけた。

かつて一度IAAFはこの極端な提案を拒否していたが、今度は女性連盟が1932年9月の第7回ウィーンKongressでの立場を再確認する番であった。

1936年についてFSFIは12の陸上競技種目を要求した。

2.4.3. FSFIの終わり

しかしFSFIの星は光が衰えつつあった。第4回世界女性大会は再び参加国数で記録を更新し

たが、観客の関心は前回以来衰えていた。大会のすぐ後開かれた第8回FSFIコンGRESはドイツの最高幹部会メンバー、ハインリッヒ・フォス以下の提案を支持した。「世界女性大会の全プログラムをオリンピックプログラムの中に統合すべきである。そうすれば、世界女性大会は自然に必要なくなるであろう。」

予想されたように、もしIAAFとIOCがこの提案を拒否していたら、FSFIは女性のためのオリンピック大会をもう一度、今度は全てのスポーツを含む本当に完全なプログラムで開催する可能性を検討していたであろう。

しかし結局、25周年記念のIOCアテネセッションは再度の投票で僅差ながら女性の陸上競技の維持をきめた。ところが同時に、FSFIはIAAFの強力な挑戦に直面した。IAAFは自ら両方の性に責任を持つべきものと考えたのである。

1934年8月のコンGRESでIAAFはそのメンバーである連盟にFSFIを脱退するよう勧告する可能性について討論した。各連盟にとって二つの国際連盟の会員であることは組織的経済的に重荷となっていたのである。この問題は激しい議論の末、もう一度持ち越された。しかしFSFI自身が提案した世界女性大会の終結がFSFIの権威の危機をさらに高めたことは明らかである。

IOCへの手紙でアリス・ミリアは、以前の立場とは正反対の立場に立って、すべての女性種目をオリンピックから除き、FSFI自身が四年に一度女性オリンピックを開催するという提案を行った。

1935年はじめのオスロにおける第33回セッションで、IOCはこの手紙を実際には検討したが、「ミリア夫人の提案は関係国際連盟間の合意ができるまで審議するわけにはいかない」と結論した。

1934年のIOCの決定に基づいて1936年のガルミッシュパルテンキルヘンの冬季大会プログラムに第二の女性競技としてアルペンスキーが含まれたのに続いて、夏の大会の際にベルリンでFSFIとIAAFの両方がコンGRESを開催した。

ベルリン大会には26カ国から328人という記録的な女子選手が参加した(しかし参加率はアムステルダムとロサンゼルスと数字を下回り、8.1パーセントであった)。

両連盟の間の緊張にもかかわらず、大会を前に交渉が行われ、交渉委員会は三点の合意に達した。

- 1)世界記録の公認
- 2)1940年大会での完全な女性プログラムの実施
- 3)1938年ウィーンにおける世界女性大会

しかしIAAFは総会で2)と3)を拒否し、IAAFが女性陸上競技の唯一の統括団体であることを宣言、その論理的帰結としてFSFIの解散を要求した。IAAF自身は、ライバルであるFSFIへの手紙で述べているように、陸上競技プログラムの「拡充を達成するために全力を尽くす」であろう。しかしこれは「国際オリンピック委員会との合意によってのみ可能となる」。彼らは次のIOCセッションを待たなければならなかった。

FSFIは公式に解散したようには見えなかったが、1936年以降何の活動も行わなかった。第5回世界女性大会は行われず。その代わりに予定されていた会場、ウィーンで、第1回ヨーロッパ女子陸上選手権がIAAF主催で開催された。

1938年3月、カイロのIOCセッションで、委員は「国内アマチュア陸上連盟女子部門」からの一通の手紙を受け取った。手紙はオリンピック大会からすべての女子種目を除くように求めている。アリス・ミリアが三年前に同じ提案をしたときと同じように、IOCはこれが国際競技連盟の問題であるとの立場をとった。

同じ会議で、IAAFの提案に従い、男子1万メートル競歩の他に、女子の200メートル、走り幅跳び、砲丸投げの三種目がプログラムに追加された。しかしこの決定は1948年のロンドン大会まで実施されなかった。

カイロセッションは、東京大会では1936年ベルリン大会で実施された女子体操団体を除くことを決めた。日本の辞退によって開催都市となった1940年ヘルシンキ大会の組織委員会は、女子体操種目全体をやめる口実としてこの決定を使った。

この問題の真の理由は、興味深いことに、フィンランド女子体操連盟の態度にあった。フィンランド女子体操連盟はスウェーデン体操の伝統に従って、「この種の試合」を拒否していたのである。

2.5. アマチュア問題

2.5.1. 憲章上のアマチュア

女性の競技については、IOCはスポーツをする女性のためにオリンピックプログラムの拡張によって、多くのIOC委員が属している社会で起こっている発展にペースを合わせる、あるいは追いつこうとしたのであるが、アマチュア問題については歴史的な方向を頑なに守ろうとした。

とくにバイエルツールはその職にあった16年間、彼の理解した限りにおいてクーベルタンの遺産を守るために全力を尽くした。彼は国際競技連盟との深刻な衝突もものともしなかったが、そのために1928年のオリンピックプログラムから射撃が、1932年にはサッカーが、1928年以後（1984年まで）テニスが消えた。

1936年には問題は冬季大会に広がり、多くのスキーマーがFISのアマチュアであってもIOCのアマチュアではないため、その年の大会に参加できなかった。

二つの組織はその後も争いを続け、もし1940年の冬季大会が開催されたら、プログラムにスキー競技のない、ノルディックもアルペンもない大会になるところであった。

アマチュア問題は、IOCの歴史と解きがたく絡み合っている。1894年のパリでの設立コンGRESでも、オリンピック大会の復興そのものよりもアマチュアについての考え方のほうが大きな意味を持っていた。

クーベルタンの目的はアマチュア資格を管理する規則を使って国際試合を可能にし、実施することであった。だから彼にとっては個々の国際連盟の内部で誰がアマチュアとして競技できるかハッキリしていれば、それで十分であったし、会長職にある間そういう態度を通した。

クーベルタンの任期が終わりに近づくにしたがって、高度のスポーツとオリンピックに対する世間の関心の高まりからこの問題はよりデリケートなものになってきた。しかし彼は、すべてのスポーツに適用できる、関係者すべてが賛成する公式を見つけられる可能性については懐疑的なままであった。

1925年のプラハオリンピックコンGRESSでは、国際競技連盟が少なくともその制限内でオリンピック大会に選手を参加させることのできる枠組みをアマチュア規則に盛り込もうという試みがなされた。

プラハで開かれた技術コンGRESSでは、アマチュア問題と、すべての参加者がアマチュア規則に基づいて誓わなければならないオリンピック宣誓は、議題の冒頭の1と2にあり、この議題に関する議論は会議の大半を占めた。

IOCは「アマチュア憲章」の草案をつくり、それに基づいて問題となったケースを判定する機関を「審査委員会」とすることを考えた。しかし自分のアマチュア規則に干渉されることを嫌った国際競技連盟はそのような上部機関が作られることに激しく反対したので、オリンピックコンGRESSは結局、とりあえずはそれぞれのアマチュアの定義に関してIFの権威を認めることに合意した。さらに、以下の排除規定が採択され、すべての者を拘束することになった。

「以下の者はオリンピック大会に参加することはできない。」

1. 自分の競技或いは他の競技でプロである者、或いは承知の上でプロであった者。
2. 給与の損失に対し賠償または補償を受けた者。

アマチュアの原則はオリンピックムーブメントの中心思想として、いわば独立した存在であった。第2項とそれが引き起こした紛争は、19世紀にアマチュアの原則が生まれたときの第一の目的が階級的な障壁を設けることであったことを非常にハッキリ示すことになった。スポーツをするに十分な資産のないものはスポーツをすべきでない、或いは少なくともアマチュアの資格を得て貴族の間入りをする必要はないというわけである。

この二つの規則の上に、コンGRESSは国際競技連盟に対し、トレーナー、演技をして人に見せる体操家、スポーツインストラクター、スポーツ教師、コーチはその活動によって金銭を得ているならば選手或いは審判としてオリンピックに参加できないという制限を守るよう勧告した。試合への長い、疲れる旅もまた避けるべきである。選手はオリンピック大会参加以外には一年に20日以上旅してはならない。

コンGRESSに先立つIOCプラハセッションは、すべてのオリンピック参加者は以下の厳粛な宣誓にサインしなければならないと決議した。

「以下に署名した私は、名誉にかけて、私がアマチュアリズムのオリンピック規則に従ったアマチュアであることを宣誓します。」

しかしIOCにとって選手の名誉にかけた言葉だけでは不十分に思えたので、プラハでの結論に基づく規則で偽証を防ぐための更に厳しい宣誓が制度化された。

選手がオリンピック大会にエントリーするときには、各国競技連盟が当該国際競技連盟の規則に従ってその選手がアマチュアであることを証明する義務を負うことになった。

国際競技連盟の規則が大会参加資格の基礎となった。この証明書はNOCの副署がなければならない。またNOCは選手が国内競技連盟のアマチュア規則にも適合していることを確認しなければならない。国際競技連盟がない場合は大会組織委員会がその役割を果たす。

しかし、プラハで採択された排除基準と国内、国際競技連盟のアマチュア規定との間に存在した矛盾は、宣誓と証明のシステムが如何に複雑になろうとシステム自体を危険に晒さずにはおかなかった。

例えば、IOCの見解では、これはIAAF、FINA、FISAも同じだが、プロは生涯出場出来ない、ところがFIFAとISUは、場合によっては一年の待機期間が過ぎればアマチュア資格を復活することがある。

失った収入の補償をIOCはきっぱりと否定していたが、FIFAは特殊なケースに限って認めていた。一般原則として、IOCは試合の行き帰りの旅行は1年に14日を越えてはならないとしていたが、IAAFは3週間、場合によっては3週間以上の旅費の補償を認めていた。

この点に関して、FIFAとISUには何の規定もなかった。

いくつかの競技では、国内競技連盟のアマチュア規定が同じ競技の国際連盟の規定と一致していないことを考えれば、この問題が次第に注目を集めてきたこと、とくに新しい会長、バイエ-ラツールの注意と引いたことは驚くに当たらない。紛争は差し迫っていた。

2.5.2. テニス連盟離反

1924年のオリンピックテニストーナメントについての国際テニス連盟とIOCの意見の相違はすでに抜き差しならなくなっており、テニス連盟のルールより厳しいプラハでのアマチュア規定の採択は、ますます高まる一連の対立点の一つに過ぎず、両者の離反はますます広がって、1928年以後オリンピックプログラムからテニスが消えることになった。

争いの先鋭な局面は1926年3月19日のILTF総会とともに始まった。

総会は将来のオリンピック参加に四つの条件を付けた。

第一に、IOCにILTFの席を設けること。第二に、ILTFがオリンピックテニスの競技運営に大きな役割を果たす権利。第三に、男女のテニスプレーヤーに対する自分たちのアマチュアの定義を全面的に適用すること。最後に、オリンピックの年でもILTFの通常のプログラムから一種目も落とさないで実施すること。

IOCは、多少ためらいつつも挑戦を受けて立った。会長は、ILTFに対しその態度を改めなければ、少なくともメンバーである各国テニス連盟がオリンピックに参加するのを妨げるのを止めなければ、アムステルダム大会からテニストーナメントはなくなると通告した。

バイエ-ラツールの示したデッドラインは、オランダ組織委員会が大会のプログラムを時間に間に合わせるためにはぎりぎりの1926年末であったが、ILTFは無視した。

オランダNOC会長、IOC委員のアルファート・シンメルペンニク・ファン・デル・オエが問い合わせたところ、ILTFのガレー事務総長は、ILTF所属の各国連盟の参加不参加の問題を討論するのは1927年3月18日の総会だ、と答えた。

それでもなおテニストーナメントを救いたいと思ったバイエ-ラツールは、IOCメンバーと各国NOC会長を督励して大量の手紙によるキャンペーンを行い、各国のテニス連盟がIOCの線に沿って投票するよう働きかけたが、無駄であった。

ILTF総会でオランダ代表团は、時間稼ぎと、少なくとも自国におけるテニストーナメントを守ろうとして妥協案を出したが、過半数は得られなかった。結局、総会は自分たちの提案が受入れられな

い限り、オリンピック大会に参加しないと全会一致で決定した。

IOC会長が二人のILTF代表と話し合った後、第2、第3、第4の条件については譲歩の余地があることを示唆しても、テニス連盟からは和解を示すサインはなんら送られてこなかった。第1の点、IOCに席をという要求は組織の精神と矛盾するのでIOCにとって妥協の余地はなかった。

ガレーは、IOCがILTFのアマチュア規則を本当に認めるというハッキリとした保証を求めた。とりわけ、以前のプロがアムステルダム大会に参加することなどありそうになかったのに、アマチュア復帰の条文について承認を求めた。

バイエ-ラツールはこうした状況をよく知っていたが、そのような大幅な譲歩をする権限は与えられていなかったのもので、この問題とその討論は次のオリンピックコンGRESSまで延期することを提案した。

しかし差し出されたこの最後のオリーブの枝もテニスの役員は顧みず、ILTF会長が手紙の中でILTFはIOCによって大会から締め出されたのではなく、自ら不参加の決定をしたと強調するに及んで、IOC会長はILTFのアムステルダム大会ボイコットの決定は撤回出来ないことを認めざるを得なくなった。

アムステルダム大会の前夜に出された声明で、IOCは再び紛争における自らの立場を述べたが、それは専らアマチュア問題のせいになっていた。

「国際オリンピック委員会は[...]IOCがプロ選手のアマチュア復帰を認めないためにILTFが全ての会員に対しアムステルダム大会参加を禁じたことを大変残念に思う[...]。オリンピック大会でオリンピックのアマチュアリズムを守るために、またすべてのアマチュア資格を持つ選手に大会を開かれたものにしておくために、IOCはその資格がオリンピック規則に適合するアマチュアだけがオリンピック大会出場できることを想起するよう指摘する。」

2.5.3. 失われた収入の補償についてのIOCとFIFAの意見不一致

国際テニス連盟との紛争は、プラハでの最小限の合意の第一項、つまりプロであった選手には永久にオリンピックのアマチュア資格は与えられないという趣旨の条項、が火に油を注いだ。国際サッカー連盟FIFAとIOCの紛争の根は第二項にあった。

第二項によれば、例えば選手が国際試合やオリンピックに参加している間に失われた収入の補償は、アマチュアの理想と調和しない。

この点に関して、1920年代には工業国でさえ、現在我々が享受しているような法的な休暇取決めはなかったことを注意しておかなければならない。

一部の選手は雇い主によって試合に参加するための有給休暇を与えられていた。しかし他の選手は無給休暇を取らねばならなかったし、場合によっては仕事を辞めなければならなかった。これは家族に経済的責任を負っている選手には考えられないことであった。

社会的に低い階層のスポーツであったサッカーではとくに、選手が大会や試合に参加出来るかどうか雇い主の善意にかかっているような状況は改めなければならなかった。

そういうわけで、FIFAは1926年のローマでのCONGRESSで、有給休暇を認められなかった選手には連盟の財源から補償することとし、少なくとも参加の機会を平等にする決議をした。しかしこれをオリンピック大会にも適用しようとすれば、プラハのアマチュアの定義と明らかに矛盾する。この定

義によれば、雇い主が与えた有給休暇は罰せられないが、連盟による支払いは禁止事項に触れる。

プラハ kongress の決議に縛られるIOCは介入せざるを得ないのは明らかであった。

会長は規則によって、サッカーをオリンピックプログラムから排除するという脅しをかけて、FIFAの決議の即時撤回を求めることもできただろう。しかしそのような動きは、サッカー試合は経済的に大きな貢献をしていたので、オリンピック大会そのものの存在を危険に晒しかねなかった。それに加えて、もしオリンピックから締め出されれば、FIFAはオリンピックに対抗する自分たちの世界選手権を始めたであろう。

そうしたわけで、先ずFIFA会長、ジュール・リメが理事会メンバーと共に1927年8月8日のパリのECの会議に、交渉のために招かれた。

バイエ-ラツールは冒頭のスピーチで先ず、プラハの決定がどのようになされたかを長時間かけて説明し、IOCの立場を守った。しかし彼は最後に、この会議で双方にとって受け入れられる解決策を見いだすよう努力しなければならないという融和的な勧告で締めくくった。

長い議論の末、執行委員会は、失われた収入の補償がその選手に直接ではなく雇い主に支払われるという条件で、FIFAの新しい規則を認めると発表した。雇い主はその金を使って有給休暇とするわけである。この公式の方策によってプラハ決議の文言は遵守することが可能になり、また実際は有給休暇をもらっていないながら連盟から更に取りろうとする選手の詐欺を防ぐという利点を付け加えることになった。

二人の執行委員会メンバー、ジグフリード・エドストレームとレジナルド・ジョン・ケンティッシュが妥協案に同意することを拒否したばかりでなく、IOCは、NOCと競技連盟に対する弱腰を厳しく批判されることになった。またECは、そのような動きをすることで越権行為をしていると非難された。とくにイギリス NOCがひどく憤慨した。そしてイギリスサッカー連盟は事実上FIFAを脱退した。

1927年10月、執行委員会はローザンヌで再び会議を持ち、問題に取り組んだ。

ECは、越権行為という非難に対しては、セッションの間にはそのような問題について拘束力のある決定が出来ると反論した。大会の前にこの種の問題を解決するために会議を招集するのは実際的ではなかっただろう。

しかしECは、もう一度、失われた収入に対する補償についてのFIFAの個々の決定の詳細を示して、風波を静めようとした。

選手はすべての必要な書類を自分の国内競技連盟に提出しなければならない。国内競技連盟はFIFAに報告し、すべての関係事項を説明する。補償は妻帯者で90パーセント、独身者で75パーセントを越えてはならない。支払いは国際試合と国内選手権の準決勝と決勝のために旅行した場合のみ認められる。さらにFIFAもまたそれぞれの国の選手について旅行日の最大数を定めた。最大限は20日であった。

アムステルダム大会の間に開かれた次のIOCセッションで、FIFAとECの協定はIOC内部からの鋭い批判に晒された。

バイエ-ラツールは、雇い主を通じて補償するというFIFAの現在のルールはプラハでは討議されなかった新しいもののだとして決定を正当化した。執行委員会はそれがIOC規則と両立するという大

胆な決定を下したわけではなく、例外的な扱いとしてアムステルダムでサッカートーナメントができるようにしただけだ、とバイエ-ラツールは主張した。

長い激しい議論の末、結局IOCはFIFAがオリンピックルールに違反する形でアマチュア規則を変更したことに遺憾の意を表明した。

そうしたわけでIOCはECの妥協案を認めず、もしFIFAがIOC規則に適合するようそのルールを変更しなければオリンピックプログラムからサッカーを排除するとFIFAを脅した。

1929年のローザンヌセッションで、失われた収入に対する補償の問題は再び議題に上った。バイエ-ラツールはオープニングスピーチの半分以上を使って、アマチュア概念との関係で「失われた収入に対する補償」と「有給休暇」を定義しようとした。

IOCは二日にわたって議論したが、「最終」結論を1930年のベルリン kongress で出すという決定以外は何の決議もできなかった。

ベルリンで、テオドル・レヴァルト委員長の委員会がこの問題を検討し、以下のテキストを総会の投票にかけることができた。

「I. 所属する国際競技連盟の規定とルールによって資格を認定された選手は、オリンピック大会でアマチュアと見なされる。但し1925年のプラハオリンピック kongress で採択された決議に従って資格認定されることが必要である。すなわち...

オリンピック大会に参加する選手は以下の条件を満たさなければならない。

1. 選手は自分がエントリーした競技、或いは他の競技でプロであってはならないし、プロであったことがあってもならない。
2. 選手は給与の損失に対する賠償或いは補償を受け取ったことがあってはならない。

II. 給料の支払われる休暇を与えることは、支払いが雇い主によって行われ、その雇い主がいかなる競技連盟、協会、クラブによっても賠償を受けない限り、給与の損失に対する補償とは見なされない。」

草案の第I点は総会で、短い議論のあと、90対20で採択された。

しかし第II点は白熱した議論を呼び、三回にわたって論議された。

提案された修正案はどれも採択されず、kongress は「有給休暇」問題についての結論を執行委員会と代表団評議会(各オリンピック競技団体代表一名からなる)の合同会議に任すしか方法がなかった。この代表団評議会はわずか数日前に規則に入れられた新制度であった。kongress はこの委任について69対12で同意した。こうしてkongress はそのために招集された主要議題の一つに結論を出すことができなかった。

しかしレヴァルトの草案とその議論の方向から、もはや問題のポイントは、FIFAとECの妥協案の間接的補償手続きが受け入れられるかどうかではなく、有給休暇それ自体が収入の損失に対する補償の一形態と見なさるべきかどうか、であることは明らかであった。

おそらくこれが1930年10月11日にパリで開催されたECと代表団評議会の第一回合同会議にFIFAが代表を送らなかった理由であろう。

そこではホッケー連盟代表、フランツ・ライヘル提案に基づいて、比較的速やかに結論が出された。それによれば、選手は以下によって大会に参加できる。

「選手は給与の賠償或いは補償を受けたことがあってはならない。仕事や職業の通常の条件の

下に与えられる休暇、或いはオリンピックの際と同じ条件の下に承認された休暇は、失われた給与の直接的間接的賠償に至らない限り、第2項の規定の範囲内には入らない。」

この決定は結局、オリンピックの舞台からサッカー選手が一時的に姿を消すことを確定した。彼らはこの機会を捕らえて、その年に第一回世界選手権をモンテビデオ(ウルガイ)で開催した。

1932年のロサンゼルスオリンピック大会にサッカーがなかったことは、実際のところアメリカ人がどの道サッカーには関心がなかったもので、とくに問題にはならなかった。

1936年以降は、FIFAがそれまでに規定からアマチュアリズムに関する文言をすべて削除していたので、オリンピックプログラムにサッカー試合が復帰することになった。

しかし今や、IOCのアマチュア規定に適合する規則を持つ国内競技連盟のアマチュア選手だけが参加できることになったのである。

2.5.4. 「セミプロ」に対する戦い

こうしてアマチュア問題の二番目に大きな争点も1930年の決定で解決された。

しかしそのように決定しながら、オリンピックムーブメントはエリートのオリンピックアマチュアリズムの象牙の塔から踏み出す機会を逸した。このエリートアマチュアリズムは高貴な生まれ、或いは特定の雇い主の善意から生じる特権を擁護するものであった。そしてそれに続く時代、体裁を整えたアマチュアリズムが必ずしも真の高貴さを保証するものではないという現実を受け入れねばならなかった。

はやくも1932年、フィンランド人選手、ヌルミのケースが大きな注目を集めた。

ヌルミは旅費について嘘の報告を出し、それで得た金を財政的に困窮していたフィンランド連盟に寄付した。このため、ヌルミは国際アマチュア陸上競技連盟から生涯出場停止の処分を受けた。

このような規則悪用を防ぐため、IOCのECと代表団評議会は1933年6月初旬ウィーンで、次のIOCセッションのためにIAAFの提出した動議「セミプロ主義と戦う手段」を協議した。セッションは他のいくつかの修正と共に受け入れた。

その結果、選手の参加と旅行に関する通信と交渉は国内競技連盟だけが行うことになった。選手自身は支出を補う支払いやかかった費用の払戻しを受け取ることは許されなくなった。選手は必要な旅行記録証書を与えられるだけになった。

宿泊食費は一日当たり1イギリスポンド(ゴールド)が限度となった。

またアマチュアは国外スポーツイベント出場のために21日を越えて休むことは許されなかった。但し、オリンピック大会、国際選手権や国際試合はこの日数の計算から除かれた。この時また、オリンピック宣誓とオリンピック大会の前に全選手がサインしなければならないアマチュア宣言についても厳しい確認がされた。もし選手がたとえわずかでもアマチュア規則に違反していたら、国際、国内競技連盟、NOCはサインするのを拒否しなければならない。

NOCは、自国の選手に対してオリンピック宣誓の重要性について通告し、虚偽の宣言が選手だけでなくその国にとって如何に不名誉なものとなるかを指摘する義務を負った。

最後に、このカタログはアマチュアが慈善目的或いは愛国的目的以外の競技でプロと試合する

のを禁じていた。その場合でも当該国内競技連盟の特別許可が必要であった。

しかし予想通り、アマチュア資格についてのルールが複雑になっても違反の数は減らず、1934年5月7日のブリュッセルでの国際競技連盟との会合でバイエ-ラツールは再び悲痛な嘆きを繰り返さねばならなかった。競技連盟は彼の見解では既にアマチュアでない選手をアマチュアとし、選手はテーブルの下で賞金を受取り、職場では架空のポストについていた。

一週間あとのアテネのIOCセッションでは更に重大な問題が起こった。

不服申し立ての一つは今日の観点から見れば極めて不思議に思えるし、IOCの上流階級に対する相変わらずの態度を記録に留めるものである。

馬術連盟は、乗った馬の持ち主でない騎手は賞を自分のものにすることはできず、馬主に渡さなければならない、と告げられねばならなかったのである。

射撃選手もまた不満を訴えた。射撃競技は賞金試合の流行のために1928年のアムステルダム大会のプログラムから外されたのに続いて、1932年のロサンゼルス大会に参加した選手のうち9人は賞金のでる大会に参加した疑いがかけられていた。国際射撃連盟はこれを否定していた。

しかしこの悪弊は明らかにあまねく行われていたし、1936年ベルリン大会には射撃にぜひ参加してほしいという要望が強かったために、IOCは1935年、オスロの次の会議で、かつてあれ程強く反対した条項を更に緩めたアマチュア復帰条項に賛成した。

つまり1936年のベルリンでは1934年8月1日以降賞金を受け取っていない射手は参加できるようになったのである。しかし原則の問題として、IOCは既に他の競技にも広がっていた現金と高価な賞品の害をもう一度押さえ込もうとして、オスロ会議の終わりにこの件について一つの決議をした。

「IOCは、競技した選手に対して形を変えた賞金が報酬として与えられていることを知ったので、各国オリンピック委員会に対し、そのような賞が広がらないようにすること、選手がそれを受け取ればそのことによってアマチュア失格になることに選手の注意を喚起するよう求める。もしそのような賞が与えられた場合には、それをスポーツの発展のための基金として利用する競技連盟に返還することができる。」

2.5.5. スキーのインストラクター、ジムのマスター、スポーツライター、ステートアマチュア

1936年のガルミッシュパルテンキルヘン冬季オリンピック大会のプログラムにアルペンスキー種目が加えられて、アマチュアリズムについての議論に新しい舞台が開かれた。

四年前に、国際スキー連盟FISはパリのコンGRESで、支払いを受けてスキーを教えている選手はアマチュアと見なされ、国際試合に出場出来ると決めていた。

この決定について、ノルウェーのトマス・フィア-ンリーがオリンピックアマチュアルールに適合することを確かめるために、オスロの1935年セッションの議題にのせるよう働きかけたとき、バイエ-ラツールはこの決定についてアベリー・ブランデーからすでに聞かされていた。オスロでIOCは、スキーインストラクターはオリンピックでのアマチュアではなく、オリンピック大会への参加は許されない、と結論した。

IOCはバイエ-ラツールにそのようにFISに通告するよう指示した。

この禁止は即座に発効した。そしてこのことは、とりわけオーストリアとスイスのベストスキーヤーが

ガルミッシュパルテンキルヘンに参加できなくなることを意味した。

1936年2月14日、冬季大会がまだ続いている間に、国際スキー連盟は自分たちのアマチュアルールをIOCが認めないかぎり、次の冬季大会には参加しないと決めた。

そしてその代わりに1937年のはじめに、自分たちで世界選手権を開催すると決めた。

会長のノルウェー人、ニコライ・エスガードは次の日、ECの会議でこの決定について説明した。その後の往復文書のやり取りは二つの立場の間の距離を縮めることは出来ず、IOCは1936年ベルリンセッションで拒否を再確認した。

ベルリンでIOCはまた、前もって、国際陸上競技連盟、ハンドボール連盟、水泳連盟、漕艇連盟、ボクシング連盟からの手紙を受け取っていた。これらの連盟は長い時間を無駄にした議論に疲れて、今後アマチュア問題についての議論には加わらないと宣言していた。アマチュアリズムの理想の歪曲に対する戦いをさらに強めなければならないと考えていたIOCはそうした忌避を黙認するわけにはいかなかった。

それは丁度、エドストレームが、純粋なオリンピックの原則にのっとった場合の新しい危険の種に気がついたところであった。彼は「職業的なスポーツライター」がアマチュアルールによって大会参加を拒否されるべきでないかどうかを研究する必要があると主張した。

国際体操連盟FIGはジムのマスターの1936年大会への参加を認めていたが、エドストレームの提案で、この処置の適法性についての調査が、ワルシャワの1937年セッションの議題に上っていた。

IOCはこの問題をスキーのインストラクターの問題との関連で長い時間をかけて議論した。しかしFIGはジムのマスターがスキーのインストラクターとは違うことをはっきりさせることができた。マスターは学校で他の科目と一緒に基礎的な体育を教えている者と理解されたからである。

そこでエドストレームは第三の資格ルールをつくるように指示された。そのルールは二日後にアマチュア規則に付け加えられた。

「オリンピック大会に参加する選手は...

3. 体育またはスポーツを教えることによって報酬を得る教師であってはならない。この規則の例外となるのは教師としての通常の仕事の中に体育またはスポーツの基礎的な教育が含まれている場合である。但しこれが主要な仕事であってはならない。」

この明確化によってスポーツだけを教えているスキーインストラクターのような教師はアマチュアとは言えなくなった。IOCはまた1925年に採択された選手の厳粛な宣誓を拡充する必要があると考えた。

「下に署名した私は名誉にかけて、私がアマチュアリズムのオリンピックルールに従ったアマチュアであることを宣誓します。」という文言に以下の句が付け加えられた。

「そして私が、オリンピックルールが要求する条件を満たすことを。」

IOCはまた、スポーツに対する国の影響力の増大に大いに苛立っていた。

オリンピック選手が国から贈り物を受けているという事実だけでなく、彼らを国の威信を高めるために、或いは単に特定の政権の宣伝のために使いたいという欲求が、ステートアマの初期の形を

発生させていた。これはアマチュアについてのオリンピックの考え方に対する新たな挑戦であった。

実をいえば、IOCは、1937年にフランス自転車連盟とフランスNOCが何年も続いている失われた収入に対する補償の問題を提起したときに、プラハとベルリンでの決定に照らして何の行動も取る必要を認めなかった。しかしIOCはそのときすでに、アマチュア問題全体を見直し、次のセッションに報告を提出するための委員会を設けていた。

この委員会は1938年、カイロで10の個別の問題のリストを提出した。セッションは順にそれと取り組んだ。

「政治目的のためのスポーツの国営化」と「ステートアマ」の問題がリストの上位にあがっていた。しかしIOCはスポーツを国家宣伝のために使うことや国の費用で準備した選手に対してハッキリした立場を取れなかった。

その他の点については、1933年に採択された規則の個々の条項が見直され、修正され、拡張された。しかしそれと国が費用を持つスポーツとの関係は考慮に入れられなかった。こうしてトレーニングの目的のために「学問であれ、仕事であれ選手のなすべきことを二週間以上妨げるような実践をすること」は、オリンピック優勝者がプレゼントを受け取ることと共に禁じられた。

どんな競技であれアマチュアとして出場しようと望む者は、他の競技にプロとして参加することは禁じられた。同じように、「スポーツにおける業績によって」「ジャーナリズムの一部門や劇場や映画や放送に」地位を得た選手はアマチュアではない。

新しいのは、アマチュアはドーピングをしてはならないと述べたルールであった。しかし古い旅費規定は事実上変わらずに残った。

最後から二番目のポイントで、地元のスポーツ組織は「国際試合に参加したために欠勤した選手が元の職場に復帰することを保証するために雇い主と金銭的取決めをしてはならない」と決められていた。というのはテキストにも述べてあるとおり、オリンピック大会参加は雇い主にとっても「大変な名誉」と見なされるべきものだからである。

最後の問題の解決に当たって、IOCは失われた収入に関して小さな譲歩をした。

もし選手が家族にとって唯一の働き手であるなら、「個別調査の後に」雇い主を介して補償を支払うことができる。」

委員会は全会一致ではなかったが、14対8の過半数でバイエ-ラツールの提案したアマチュア条項の修正案を採択した。問題の文章は次の通りである。

「オリンピックに参加する選手は...

2. 給与の損失に対して賠償または補償を受けてはならない。第2項は以下の場合に適用されない。休暇が通常の職業上の条件の下に取られている場合、休暇が同じ条件でオリンピック大会の際に与えられた場合、但しそれが失われた給与の、直接或いは間接のカモフラージュされた償還となつてはならない。そして、個人的な調査の後、非常に例外的な許可が与えられて、家族にとって唯一の働き手である選手の欠勤の間の妻、母、父に対する補償が直接雇い主に支払われる場合。」

しかしカイロセッションのプログラムはアマチュア問題をまだ解決していなかった。

FISによって要求されているスキーインストラクターのアマチュア資格を巡る紛争は1936年の決定以来熾りつづけており、国際スキー連盟はヘルシンキのIOCセッションの一月前に、スキーインストラクターは、再びアマチュアとして参加できるという決議をした。

エスガード会長は、未だに1932年のスキーインストラクターの参加資格についての最初のFIS決議の根拠を納得していなかったのだが、今回は、もし提案が否決されたら辞任すると脅しをかけた。その結果アマチュアの考え方についてより狭い解釈の適用を望む多くの会員国から個人的に厳しく批判されることになった。

しかしIOCは国際スキー連盟のボイコットの脅しに屈することなく、1938年3月13日、1940年の冬季大会からスキー種目を除く決定をした。

2.6. オリンピック大会

2.6.1. 緒言

IOCの活動の焦点は常に大会であったし、現在もそうである。そしていつの大会であれその開催都市を選ぶのは最も重要な仕事であった。

具体的な準備はその都市の組織委員会の仕事になる。総じて言えば、IOC、EC、会長はこの段階ではオリンピック憲章のような基本的な事項にのみ介入してきた。

バイエラツールの時代に逆上れば、開催地の決定がどのくらい前に行われなければならないかについてのルールはなかった。そして立候補に伴う費用は今日の額とは同日の談ではない。立候補の届け出は時として、市長からIOCへの、市の長老たちの同意と、競技場がすでに在るか、これから造らなければならないかを通知する一通の手紙だけということもあった。IOC委員に働きかけようとか、肝心のIOCの会議に代表を送ろうとかいう習慣はなかった。

立候補届けは関心を持つ沢山の市、と言うか、少なくとも立候補の可能性のある市としてその名が挙げられた沢山の市からきた。しかしその頃には、IOCは最後には二つの真剣な候補だけが残るようにすべきだと考えるようになっていた。

一方、最初の立候補はたいいていの場合、その市の順番がきたら成功することを希望している、或いは少なくとも望んでいることを示す以上のものではなかった。

ブダペストは、1894年に最初躊躇していたアテネの代わりにバックアップ可能な会場として名前が上がっていて、その後ほとんど毎回立候補したが、選抜候補者リストに入ることはできなかった。

2.6.2. アムステルダム 1928年

2.6.2.1. 開催都市指定

アムステルダムが最初に名をあげられたのは、アントワープ大会の際のIOCセッションで、ロサンゼルスやパリを含む13の都市と一緒にあった。

1921年のローザンヌセッションは、クーベルタンの提案で1924年と1928年の開催都市を選ぶことを決めた。クーベルタンはこうすることによって会長として最後の大会をパリに持ち帰ることを望んだのである。その結果、長い間1924年大会の有力候補であったアムステルダムの開催は後に回さ

れることになった。

これには準備期間が長くなるという利点があったのは事実だが、一方でオランダの反オリンピック派に宣伝のための十分な時間を与えることにもなった。

はやくも1921年10月10日、70代の男爵、F.W.クリスチャン・ファン・トゥイル・ファン・セアルースケルケンの下に暫定組織委員会が設立された。男爵は1898年以来のIOC委員、1912年オランダオリンピック委員会設立以来の会長であった。会長就任以来、彼は首都への招致の主唱者であった。最初は1920年大会を目指した。

組織委員会が本格的に組織されて、ピーター・W.シャルーが副会長に、ゲオルグ・ファン・ロッセムが事務局長になった。ファン・トゥイル男爵は短い病のあと1924年2月13日亡くなった。オリンピックに関する二つの会長の地位はアルフェルト・シンメルペンニンク・ファン・デル・オエ男爵(1880-1943) が継いだ。男爵は次の年、新しく設けられた二つ目のオランダのIOC委員になった。シャルーは既に1924年ファン・トゥイルの席を引き継いでいた。

1923年以後、準備についての報告はIOCセッションと執行委員会の議題としていつも提出されていた。それにはほとんど欠点をみつけることはできなかった。議事録に残る最も印象的な計画変更の要求は、アメリカ人チャールズ・シェリルの200メートル競走を直線コースにせよというものである。この場合当然のことながらとくに発言の注目されるIAAF会長のエドストレームはこの提案を支持したけれども、IOCは受け入れなかった。

しかし賢明なオランダ組織委員会は、絶えず出てくるこの種の提案への回答を、競技場建設が進んで事実上実行できなくなるまで引き延ばした。

2.6.2.2. 大会についてのオランダにおける争い

1924年11月、ローザンヌにおける執行委員会会議は突然、1928年大会と1925年3月にハーグで予定された会議の移転について論議しはじめた。

この会合は実際には指定の日にパリで開かれたのだが、1924年大会に関心を示していたロサンゼルスに1928年大会を代わって開く可能性があるかどうか打診することを決めた。

この異常な動きは、オランダ議会が大会予算を拒否したためであった。

批判派は、これまでの反対派やこの際の新たな反対派と同じく、資金は差し迫った住宅不足などの社会問題の解決に振り向ける必要があるといった主張をした。宗教界からも抵抗があった。教会はオリンピックの異教的起源を不快に思った。そして日曜日に競技することと女性の参加を支持できないとした。しかし教育大臣、テオドール・ド・フィッセ(1851-1932) は、彼自身神学者であったが、断固オリンピックを支持し、反対派の勢いを削ぐために組織委員会と日曜日には競技をしないという取決めをした。

それでも予算案が第二議会で必要な多数を取れなかった時、ド・フィッセは辞任した。彼は三年後、大会開会式で説教するよう招かれたが、その時いささかの満足感を得たであろうことは疑いない。

オランダの人々の大多数は、ド・フィッセのように、オリンピックに賛成であった。

新聞は第二議会の決定を批判し、政治家のためにオランダの国際評価が傷ついたと述べた。クーベルタンはこのエピソードが起きたとき、会長の任期の終わりに近づいていたが、皮肉をいう言

う誘惑に勝てなかった。

「... 第9回オリンピックはしばらくの間、敬虔主義者たちのために非常に危険な状態にあった。彼らはこのオリンピック復興の異教的性格に対して武器を取って立ち上がり、法案通過阻止に成功した。そのため一時、このオリンピックはちゃんとスタートする前に、記録を破るのではないかと思われた一愚劣さの記録を一である。」

しかし開会式と閉会式の、クーベルタンノのスポーツ教とオリンピックの哲学的基礎の解釈による礼拝のような要素をつぶさに見れば、清教徒的な傾向を持つオランダ改革派教会側のオリンピック大会に対する批判的な留保はほとんど驚くに当たらないと結論しないわけにはいかない。

大会に対する支持は国内オリンピック委員会によって急速に盛り上げられた。

1925年5月9日、オランダの新聞は「すべてのオランダ人男女」に向けての献金のアピールを載せた。この呼びかけは直ちに、150万ギルダーの献金を集めた。

こうして、1925年5月末のプラハのIOCとオリンピックコンGRESSでは、もはや大会をオランダから引き上げることなど問題にもならなかった。そしてIOCはスタジアムの再建や選手村の提供のような問題について議論することができた。

2.6.2.3. プログラムの過密化

アテネ大会を除くほとんどの大会で、試合が非常に長い期間にわたったので、プログラムが問題になってきた。

その結果、競技種目のまとまりが観客にとってハッキリせず、本来のインパクトが失われた。そこでプラハのテクニカルコンGRESSは「プログラムの削減」と「大会の組織」の問題を討論し、適切な決定によって状況を改善しようとした。

しかしそれまでと同じように、会議は拘束力のあるルールの合意ができず、大会を二週間に制限する勧告と、必須競技の一覧表を造る試みで満足しなけりばならなかった。

アムステルダムに関しては以下のスポーツのリストが決定された。

「陸上競技

体操競技

自衛競技(ボクシング、フェンシング、レスリング)

水上競技(漕艇、水泳)

馬術競技(調教、野外騎乗)

複合競技(近代五種)

フットボール(サッカー)

芸術競技(建築、音楽、文学、絵画、彫刻)

自転車(ロード、トラック)

重量、ダンベル競技

ヨット(モノタイプクラス、6メータークラス、8メータークラス)

ゲーム競技(ホッケー、ローンテニス、水球)

馬術ゲーム(ジャンプ)

すでに説明したように、射撃とテニスはアマチュアルールに従わなかったためにプログラムから削除されていた。サッカーは差し当たりこの運命を逃れていた。

ボクシングについては、オランダでは公開ボクシング試合は違法であるため問題があった。そのためボクシング競技は観衆なしで行われることになる。

しかしリスボンの1926年セッションでシンメルペンニク男爵が提出したプログラムは、IOCは長すぎると考えた。それは大会の中心部分として1928年7月7日から22日まで16日間を予定していた。これに続く組織委員会からのもう一日増やす要求は拒否されたが、ECは大会開会式と閉会式の日も競技を行う妥協案に同意した。

1926年8月のハーグでの会議は、サッカーとホッケーを5月と6月にやるスケジュールを不本意ながらも承認した。

こうしてアムステルダム大会もまた、期間が延びてしまった。とくに1927年はじめに、大会の実際の核となる期間が三週間に戻されたからである。

結局、大会の期間は5月17日から6月13日までと7月28日から8月12日まで、プラハで決められた上限を越えて、6週間になってしまった。プラハの決議は「大会の期間は4週間を越えてはならない。可能なら3週間とする。すべての競技はこの期間内に終わらなければならない。」というものであった。

もし6月12日から8月12日までのオリンピック芸術展示を勘定に入れば、全体の期間はほとんど3カ月になる。執行委員会によって指名された芸術競技の審判がほとんどIOC委員だけであったことは、IOCがこの種目とメダルのデザインを軽視していたわけではないことを示している。しかし何故専門家が相談に預かっていないのであろう。

ECはハーグでの会議を利用してアムステルダムを訪れ、スポーツ施設を巡り大会準備の建設作業の進捗状況をチェックした。続く会議でエドストレームは自転車のトラックをスタジアムから取り除くよう要求した。多分、一つには自転車のためにスタジアムの使用頻度が増え、スケジュールを短くする妨げになるからであったろう。しかしシンメルペンニクはそのための経費を理由に断った。

IOC、執行委員会、大会組織委員会の間に、その他にはとくに大きな意見の相違はなかった。

1927年のモナコセッションで大会プログラムの詳細とその実施についてもう一度最後に議論された。結論として、アムステルダム大会はメダル授与式が大会最終日に行われる最後の大会になったこと、初めて女性が陸上競技に参加したこと、オリンピック聖火が初めてスタジアムに灯されたことに留意されるべきであろう。

2.6.3. ロサンゼルス 1932年

2.6.3.1. 開催都市指定

1920年、アントワープのセッションにIOCの創立メンバー、ウィリアム・スローンはロサンゼルスとウィリアム・ガーランドを伴った。ガーランドは素晴らしいプレゼンテーションによってIOC委員を説得し、1928年の大会をカリフォルニアに持ってこようとした。

しかし、1924年の大会が未だ決まっておらず、クーベルタンは既に1928年についてはこの段階では決定しないという考えを固めていた。

ガーランドは、しかし、大変良い印象を残したので、1922年1月の郵便投票でIOC委員に選ばれた。ロサンゼルス市のメモリアルコロシアムが完成すると、ガーランドは1932年のローマセッションで再び招致運動を行った。今回はIOCにとっても決断は容易であった。

パリが1924年大会に選ばれ、アムステルダムが1921年のローザンヌセッションで1928年大会に決まっていたので、セッションは9年も先立って、ロサンゼルス市を1932年大会開催都市とすることに同意した。セッションは喝采による熱狂的賛成で決し、その他の候補についてはあまり考慮しなかった。クーベルタンはこの件について次のように書いている。

「主張者（我々の同僚、W.M.ガーランド）の熱心さと情熱に加えて、ロサンゼルスは三枚の強力なカードを持っていた。第一に、オリンピック準備の進捗状況、これは成功のための貴重な保証である。次に、政治的、社会的イベントの観点から見た有利な状況。そして最後に、アメリカ合衆国のスポーツマンのアテネ以来の努力と過去のすべての大会における輝かしく数多くの参加に対して、何らかの感謝の意を表すべき時が来ていた。」

2.6.3.2. 東部諸州の懷疑

アメリカのアマチュアスポーツ組織はロサンゼルス市の選出にちっとも興奮しなかった。というのはアメリカのスポーツの中心は依然東部海岸地帯にあったからである。

そこに本拠を持つ役員は自分たちが軽んじられたと感じ、西部の同胞のこの種のイベントを実施する能力に疑問を持っていたので組織委員会を乗っ取ることすら考えたくらいである。「彼らは、この経験のない地方がこれほど大きなスポーツイベントを扱うことができるかどうか大いに疑問を持っていた。」とアベリー・ブランデーは回想している。

ブランデーのアメリカスポーツ界のリーダーとしてのキャリアは始まったばかりであった。彼は自分でロサンゼルスに「チェック」しに行き、組織委員会がよく機能していることを確かめることができた。IOCは最初から、東海岸の役員たちとは違った見方をしていた。

クーベルタンがパリの問題や、公共基金拒否が1928年のアムステルダム大会を危うくする危険に気がついた時には、いつもロサンゼルスが万一の時の頼みの綱となっていた。

実際のロサンゼルス組織委員会は1928年2月10日まで設置されなかったが、その前身として、第1次世界大戦の直後につくられた非営利団体、コミュニティー開発協会があった。何よりもこの協会はスタジアムがその一部である大きなレジャーセンターを建てていた。この協会の会長はガーランドであり、彼は今や組織委員会の会長となった。

2.6.3.3. 高い旅費とオリンピック選手村

IOCは1927年からロサンゼルス市の準備状況に定期的な関心を払いはじめた。

最初の段階では、この責任は明らかにガーランド自身あるいはコミュニティー開発協会全体が引き受けていた。会議では、ガーランドとシェリルが進行状況報告を行った。彼らはめったに、必要な長旅を厭わなかった。そして普通、組織委員会の事務局長“ザック”ファーマーのような地位の高い補佐官が同伴した。

1927年モナコで、彼らははじめて、大会がワシントンに移されるという噂を否定しなければならなかった。シェリルはこの時アメリカにいたガーランドに電報を打ってIOCを安心させるよう頼んだ。組

組織委員会とIOCとの間のコミュニケーションに関するかぎり、二人のアメリカ人の旅行を厭わぬ態度がヨーロッパとロサンゼルス間の大きな距離をうめていたが、IOCは選手にとっての長い高価な旅を心配していた。

組織委員会は当然のことながら、多くの参加選手と訪問者にアメリカの西海岸への旅をしてもらいたかった。そういうわけで、最初に焦点となったのは大会への最善の最も安上がりの旅をどう組織するかであった。

費用の問題は、1929年10月25日の「ブラックフライデー」で世界経済が危機に襲われたとき一層深刻な問題となった。しかし景気後退は大会開催を深刻な危機に晒すことはなかった。財源ははいやい段階からローンと政府保証によって確保されていたからである。

1927年のセッションで、シェリルがヨーロッパの参加者を汽船にのせパナマ運河経由でロサンゼルスへ連れてくる案を議題にのせた。次の年アムステルダムで、二人のアメリカ人はロサンゼルスが既に250万ドルも使っていることを指摘し、汽船会社、鉄道会社と運賃値引き交渉ができるよう早く参加者の数を見積もってくれと要求した。

しかし一年経ってもこの問題には少しも進展がみられなかった。エドストレームがガーランドに詳細な要求を出し、船と鉄道の運賃は少なくとも50パーセント引きになるよう、宿泊食費も安く納まるよう、直ちに交渉を始めることを期待すると通告していた。

1930年10月、執行委員会は次のような結果を知らされた。値引き交渉の結果、旅費の合計は一人およそ150ポンド（およそ3,000ドイツマルク、15-18,000フラン）になった。

ロサンゼルス滞在の費用を節減するため、組織委員会はオリンピック選手村をつくる提案をした。アムステルダム大会では同じ提案は拒否されたが、今回はほとんどの国が賛成した。選手村が建てられ大歓迎された。例えば、ドイツオリンピック委員会の報告書には次のようにある。

「オリンピック選手村がアメリカ人のホスピタリティーの第一印象をつくりあげた。

物惜しみせず、清潔で、部屋の備品は十分に備えつけられていた。この選手村で快適に感じないような者があれば、その人物の感受性の欠如を哀れまざらねばならない。素晴らしい環境、輝かしい太陽、涼しい風、晴れ渡った満天の星空、眼下の街の眺め、これだけでも滞在は深い喜びの源となる。スポーツの世界が一つになり、しかもスペース的にはお互いを煩わさない程度に離れていた。」

選手村は太平洋を見晴らす小高い丘の上にあり、700 の小さな木造小屋からなっていた。一軒当たり四人の選手が入った。同じように選手が一緒に住む施設は1906年と1924年に既に在ったが、とてもロサンゼルスと比べられるようなものではなかった。

この成功によって、オリンピック選手村はそれ以後の大会では必ずつくらねばならないものになった。そして間もなく選手村は、ほとんど開会式や閉会式と同じようにオリンピックムーブメントの欠かせぬ一部となった。

費用は一人一日 2ドルであった。女子選手は、1932年には入村できず、1936年ベルリン大会ではじめて入村することになるのだが、比較的上等なホテルに泊まり、同じように安い宿泊費を払っただけであった。差額は組織委員会が負担した。この時個々の選手の滞在費は一切合切で、アムステルダムで払ったものよりも大幅に安く済んだ。

2.6.3.4. ベルリンオリンピックコンGRESSとプログラムについての決定

オリンピック大会の競技プログラムは、大部分1930年のベルリンオリンピックコンGRESSの決議で決められた。そしてこのプログラムはロサンゼルスではじめて実施された。

コンGRESSの準備のために1929年春、ローザンヌでIOCセッションが開かれ、将来の討論のために以下のリストがつけられた。

プログラムの統一。大会期間の15日以内の制限(三回の日曜日を含む)そして一つの種目に一国から三人以内の制限。個人種目で個人と団体の順位を同時に付けることの禁止。そして最後に、女子種目の廃止。この最後の提案は執行委員会の会議で拒否されてきたものだが、オリンピックプログラムに責任を持つベルリン委員会の小委員会が草案を書き、全体会議の承認を求めて提出した。小委員会のメンバーは8人のIOC委員、13人のNOC代表、15人の国際競技連盟代表からなっていた。

会議はアマチュア資格についての最終結論は出せなかったが、プログラムに関しては、何十年も有効であり、いくつかは今日も適用されている重要な決定にこぎ着けた。

「大会の期間は開会式を含んで16日を過ぎてはならない」が最初の議決であった。

これはわずか数年前、1990年の東京におけるIOCセッションでハッキリと確認された。競技種目についてのIOC提案は委員会と全体会議で、無修正で採用された。

「オリンピック大会の公式プログラムは、IOCの同意による区分けに従って定められる。それは以下のものである。

陸上競技、体操、防衛競技(ボクシング、フェンシング、レスリング、射撃)、水上競技(漕艇、水泳)、馬術、総合競技(近代五種)、自転車、重量挙げ、ヨット。

芸術競技(建築、文学、音楽、絵画、彫刻)。

そして以下の運動ゲーム、即ちフットボール(サッカーとラグビー)、ローンテニス、ポロ、水球、ホッケー、ハンドボール、バスケットボール、ペロタのうちから組織委員会が開催可能なものを選ぶことができる。但し、大会の公式期間中に決勝が終わらなければならない。

各国際競技連盟は IOC執行委員会の同意を得て、それぞれの競技にどんな種目が含まれるかを決めなければならない。

IOCは、IOCの原則に適合しないアマチュアの定義を含むどんな競技種目もプログラムに含めない権利を留保する。」

各競技で行われる個々の種目に関しては、当該国際競技連盟がIOCに提案しなければならないのだが、この件に関して国際連盟に節度を守るように求めたコンGRESSの勧告はほとんど耳を傾けられなかった。大会の期間とプログラムが広いコンセンサスを得た一方、個々の競技で参加者数を制限しようとする試みは手厳しい反対に会った。

しかしバイエラツールは結局「一国三人の代表」の提案を押し通すことができた。

さらに、将来のメダル授与は、これまでのように最終日に開催国の元首が纏めて渡すのではなく、競技が終わったらすぐ会場で行われることになった。

2.6.3.5. 少ない参加とアメリカの圧勝

以上の決定はロサンゼルスで初めて適用された。大会期間がわずか16日になったことは、外国

からやって来る国にとって旅行を一度だけ組織し費用を捻出すればよいので有り難いことであった。

新しく採用された参加者の数の制限は、不況のために多くの国が少数の選手団しか送らず、参加しない国もあったので、必要ではなかった。多くの種目では参加制限数を下回った。しかし参加枠がもっと多かったら、いくつかの競技でアメリカの優勢の度合いはさらに大きかっただろう。

1920年、1924年、1928年には、アメリカチームは海と汽車による長い旅をしなければならず、選手は試合のためのコンディションを維持するのが難しかった。

しかし今回は、このハンディキャップはヨーロッパの側にあった。四日から五日の船旅、そして同じような汽車の旅であった。対照的に、アメリカの選手は長いトレーニングキャンプで完全な備えをすることができた。これが当然のことながら結果に反映している。オリンピック大会の競技レベルはかつてない程高く、非常に沢山の世界記録が生まれた。1932年のロサンゼルス大会は、高い水準のスポーツの時代の到来を告げた。

IOCが、すべてをアマチュア規則に則って行っただとはいえないアメリカ人の準備のやり方に異議を唱えなかったことは多少の驚きである。一方では、アマチュア原則に照らして、IAAFはヌルミを生涯出場停止にし、サッカーは大会から除外されていたのである。

因みに、IOCとFIFAがアマチュアの定義で合意できなかったことは、FIFA自身にとっても、ロサンゼルス組織委員会にとっても、まったく歓迎できないというわけのものでもなかった。カリフォルニアでは誰もサッカーに興味を持っていなかったし、ホッケーのように三つか四つのチームしか参加しないよりは、全く試合の無いほうがよかった。

チームスポーツと同じように、馬術や漕艇のように費用のかかる競技は、ヨーロッパの国々が莫大なお金のかかるロサンゼルスへの長旅に消極的であったために影響をこうむった。アムステルダム大会に比べれば半分以上、その次のベルリン大会に比べると三分の一の男女合計1400人程の選手がメダルを争った。

IOCセッションも良い例を残したとはいえない。66人のメンバーのうち参加はわずか18人、そのうちアメリカ人が3人、がロサンゼルスにやって来たにすぎなかった。

しかし素晴らしい組織、熱狂的な観衆、第一級の施設、競技の高い水準が多くの問題を忘れさせたし、次の評価は間違いなくヨーロッパからの参加者の間に共通のものであった。「我々が、ロサンゼルス大会がその壮麗さでこれまでの大会すべてを凌いだといっても、以前の大会を傷つけることにはならないだろう。」

観衆の高い関心はまた、ガーランドとその組織委員会の財政運営をある程度助けたし、公の補助金への依存を大幅に少なくすることを可能にした。

これは、経済危機がアメリカを襲い、大会直前にこのような時にオリンピック大会を開くことに批判のあったことを考えれば、非常に意味のあることであった。

1946年のローザンヌIOCセッションで、ガーランドはオリンピックムーブメントへの貢献と、とりわけロサンゼルス大会の組織運営に対して、1942年度のオリンピックカップを逆上って授与された。

2.6.4. ベルリン 1936年

2.6.4.1. 開催都市指定

大会の九年前にロサンゼルスで開催が決まるやいなや、沢山の都市が1924年のパリ大会の際に開かれたIOCセッションで1936年大会の開催都市を目指して名乗りを上げた。

それらの中に、ブダペスト、ブエノスアイレス、ローザンヌ、ローマなどがあった。

IOCはパリでも、三年後のモンテカルロでも、また1930年のベルリンでも決定をしなかった。しかし1931年のバルセロナセッションまでには真剣な立候補都市は四つに減っていた。そして万年候補のブダペストとローマはいずれまた立候補したいという意向を明らかにしていたので、最後の選択はバルセロナとベルリンの間で行われることになった。

決定をわずかな出席委員(67人中20人)にだけ任さないために、欠席委員に郵便による投票を認めることになった。期限は5月15日までとなった。郵便投票と出席委員の封印された投票の合計は圧倒的にベルリン(43対16)であった。

その前年にベルリンで行われたIOCセッションとオリンピック kongress が与えた好ましい印象がこの投票に影響を与えたことは疑いない。

投票結果が発表されると、ベルリンでは直ちに第XI回オリンピック大会の大会準備が始まった。世界経済恐慌直後の公的資金の頼りにならない状況と高い失業率に鑑み、大会の経費は主として競技連盟が負担しなければならなくなった。競技連盟はこのために基金調達努力を強化し、競技会には特別入場税を課した。

第一回の経過報告は、1933年1月24日の組織委員会結成前にロサンゼルスセッションでレヴァルトによって行われた。彼は組織委員会の会長になり、カール・ディームが事務総長になった。

1933年6月ウィーンで、カール・ディームはより詳細な報告をIOCに対して行うことができた。

2.6.4.2. 大会に対するNSDAP(国家社会主義ドイツ労働党)の矛盾した態度

しかしそのような細かいことのほかに、ウィーンではもっと重要な問題が提起された。それはその間に起こった政変のベルリン大会への影響の可能性、そしてIOCが予定通り行事を続けられるかどうかという問題である。

スポーツがNSDAPのイデオロギーのなかで、軍事教練と強く美しい「北方人種」の理想との関係で重要な役割を演じていたのは事実であるが、オリンピズムとオリンピック大会は「人種を問題にしない」点で忌避されていた。

初期の段階から、党はドイツ体操協会「ドイッチェツルナーシャフト」の反動的なサークルと緊密な関係を持っていた。協会は最後の1932年大会を含むオリンピックをイデオロギー上の理由と「民族的」な理由でボイコットしていた。

しかし1928年アムステルダム大会のドイツチームの成功で、有権者の投票の方により関心のある現実的な傾向のNSDAPの政治家は密かに心変わりを始めていた。

彼らはロサンゼルスでのドイツチームの不振を批判し、ドイツの三倍のメダルをとったファシストイタリーを模範として賞賛した。

ナチスの新聞がレヴァルトとディームをドイツの大会招致の煽動者として激しく攻撃したとき、彼ら

は全力で自らを守らなければならなかったが、この衝突は勿論、IOCの注意を引かずにはおかなかった。

一方バイエ-ラツールは、まだロサンゼルスにいる間に、ナチスに親しいことを知っていたドイツのIOC委員、カール・リッター・フォン・ハルトに、ドイツでオリンピックを開催することについてのヒトラーの意向を打診してくれるように頼んだ。

他の二人のドイツ人委員はこうした使命には全く不向きであった。レヴァルトはドイツ民族党(ドイツェフォルクスパルタイ)に属し、一度国務大臣を勤めたことがあった。アドルフ・フリードリヒ・ツウ・メクレンブルク公爵は貴族で生涯ナチスを軽蔑していた。フォン・ハルトは1932年9月14日、ヒトラーの官房庁に会見を申し込んだ。9月24日付けの回答は、ヒトラーの選挙キャンペーンのために会見は断ってきたが以下の情報を伝えてきた。

「NSDAPはオリンピック大会のような国際競技会開催に反対しない。またこれらの大会に有色人種が参加することに反対しない。」

フォン・ハルトはこの手紙の写しを10月26日、IOC事務局長アルベール・ベルデーズに送り、バイエ-ラツールにこのホットとするニュースを伝えるよう頼んだ。

1933年3月5日のドイツ国会選挙のまさに次の日、レヴァルトはヒトラーに会見を申し込んだ。驚いたことに、早くも3月16日に会見が受け入れられた。

レヴァルトは組織委員会のプランを示し、帝国大統領のヒンデンブルクが2月早々に大会の後援に同意を与えていたことに言及した。レヴァルトは「総統」の支持の確約を得た。同じ日の日付の官房庁宛の手紙で彼は政府に対する要望を記した。レヴァルトはとりわけ、最近設置されたヨーゼフ・ゲッペルスの宣伝省の助力を要請した。

この手紙に対する官房庁の回答はほとんど全ての点でイエスであった。ヒトラーとゲッペルスは1936年のオリンピック大会が政権の国内外のイメージアップに貢献する巨大な可能性を明らかに理解していた。

煽動的なナチスの新聞、「アングリッフ、攻撃」と「フェルクシジャー・ベオバハター、民族の観察者」はレヴァルトとディームに対する攻撃を強めた。とくにレヴァルトの父方がユダヤ人であることが、彼らに安直な武器を提供した。彼らは二人の辞任を求めた。

レヴァルトは官房庁に抗議し、ヒトラーの命によって彼に対する新聞の攻撃を禁止させることに成功した。

2.6.4.3. レヴァルトの組織委員会会長職維持のための戦い

フォン・チャンマーは、レヴァルトとディームに対する最初の勝利に続いて、組織委員会会長の座をレヴァルトから奪おうとして、新聞のインタビューであからさまにそう言った。レヴァルトにはIOCに介入を求めるほか選択の余地はなかった。

彼はバイエ-ラツールに接触した。バイエ-ラツールは直ちに応じて、三人のドイツ人IOC委員に5月3日手紙を送り、IOC憲章について「啓蒙」した。

次第に声高になってくるオリンピック大会に対する反対と、その結果国際競技連盟の間にひろまった不安に触れたあと、彼はドイツの指導的なスポーツ指導者の辞任に懸念を表明し、とりわけ、

「オリンピック大会の組織を自分の権限の範囲に属する」として乗っ取ろうとする新しいスポーツコミッサー(大臣)の意図を批判した。これは「我々のルールとオリンピック大会の組織的構造を完全に無視する」ことを意味する。

バイエ-ラツールはドイツのIOC委員に、オリンピック憲章に含まれている儀典と組織の詳細についてヒトラーに通知するよう要求した。つまり「大会は国ではなく都市に開催権を与えられるのであり... 大会には政治的、人種的、民族的、宗教的性格はなく...

組織委員会はIOC直属であり... もしこれらの条件が首相の同意を得られなければ、ベルリンの立候補を取り下げてもらうのが望ましい。」

さらに彼は、ドイツ政府が1933年6月始めのIOCセッションで「オリンピックルールの厳密な遵守を妨げないという書面による保証」を提出するよう要求した。彼はこれらの条件のすべてを5月10日の第二の手紙で繰り返した。

三人の反応は、それぞれの新政権との関係を反映していた。

フォン・ハルトは5月16日のIOC会長への手紙で会長の懸念に関する困惑を表明した。

彼はドイツで起きている「民族革命」を称賛した。そしてドイツ政府の書面による宣言は必要ないとした。彼の見解では「ドイツ政府もスポーツコミッサーもオリンピックの儀典のルールを変えたり、他の解釈をしたりする意図は毛頭ない。」のであった。

バイエ-ラツールの返事は当然のことながら簡単明瞭なものであった。彼は政府の保証を要求し、「ドイツの大会」を黙認することを拒否した。

メクレンブルク公爵は5月13日、IOC会長に対し、この件についてフォン・チャンマー・ウント・オステンに話したと返事した。その会話の中で彼も「IOCの規則と基本的な考え方を説明したが、それは一部、現在のドイツの指導者の態度と鋭く対立するものである。」と書いた。しかしメクレンブルク公爵は、レヴァルトの忠告を基に「IOCの主権と何とか衝突しない」妥協の道が見つかるだろうと考えた。しかしそれにはスポーツコミッサーの立場もまた考慮に入れなければならない。

バイエ-ラツールは公爵への返事の中で、再びドイツの拘束力ある宣言を要求し、大会をドイツ以外へ移す可能性と、それが憲章上まだ可能なことを仄めかした。

つまり、バイエ-ラツールの見解によれば、大事なことは大会の開催を本当に確保することであって、何処で開くかは二の次の問題であった。

レヴァルトは、ヒトラーがIOC会長の「傲慢な調子」に怒って彼との会見を拒否し、大会名誉会長職の申し出を断った時、この会長の脅しを楯にした。

5月15日の返事にレヴァルトは書いている。「残念なことに」「バイエ-ラツール伯爵の手紙の調子は彼にも不穏当に見える」し、最初は手紙を渡すのをためらったけれども、最終的には、彼もIOC規則と多くの国が「大会のドイツからの引き上げ」に賛成していることをドイツ政府に隠しておくべきではない、という結論に達した。

レヴァルトは、組織委員会の副委員長、ベルリン市長ハインリッヒ・ザームを伴って、前もって国務長官ハンス・プフントナーと会見するために、内務省を訪れた。その訪問でレヴァルトは自分が、ウィーンでバイエ-ラツールに彼の手紙に対する激しい言葉の拒否を伝えるよう期待されていることを知った。その言葉はスポーツコミッサー自身によるものであった。レヴァルトは何としてもこうしたやり取りが起きるのを避けねばならなかった。この種の回答はベルリンでの大会を不可能にすることは確実だからである。しかしおそらく彼はそれほどはっきりとは伝えなかったのだろう。

いずれにせよ、彼は組織委員会会長にとどまることを許された。一方政府はドイツオリンピック委員会会長と組織委員会理事にフォン・チャンマー・ウント・オステンを置くことで満足した。これが多分、ツー・メクレンブルクが彼の手紙の中で触れている「レヴァルトの妥協的提案」であったのだろう。この提案については、エドストレームが4月21日に既にIOC会長にやや漠然とした言葉で伝えていた。

エドストレームはロンドンへの商用の帰途、ベルリンへの回り道をしてレヴァルトを訪ねていたのだ。このときレヴァルトは不在であったので、エドストレームは代わりにディームと話した。ディームから聞いたところでは、レヴァルトは組織委員会会長には留まるが、NOC会長は新政権の代表に譲らなければならないだろう、この妥協によってレヴァルトとディームが生き残れるということであった。

エドストレームはまた、参考として、バイエ-ラツールのドイツの委員に宛てた手紙の写しを受け取った。そして彼は5月8日の返事の中で会長に対する支持を表明した。「私は貴方がこの決然たるステップを取られたことを嬉しく思います。今やヒトラー氏は本当にオリンピック大会を望むのかどうか決心することができるでしょう。」

2.6.4.4. ユダヤ人選手の参加問題

バイエ-ラツールはドイツのIOC委員に要求した保証を更に明確化した。彼のドイツの同僚に宛てた最初の手紙は、「人種」差別の禁止について言及しただけであったが、5月16日には、反ユダヤ感情を持っていないことを知っている19人のIOC委員に宛てて、ウィーンではユダヤ人選手の参加の権利に関する宣言を受け取ることを期待しているという趣旨の手紙を書いた。

この件に関して、数日後、ナチスの内務大臣、ヴィルヘルム・フリックとスポーツコミッサー、フォン・チャンマー・ウント・オステンとの間に議論が行われた。

5月31日、フリックは自分の次官に対し、「原則として、ドイツのユダヤ人は大会でドイツチームから排除されることはない。」と通告した。

これが1933年6月にECがウィーンで会合し、その後にセッションがもたれた時の状況であった。

ECにとってもセッションにとってもこの問題に取り組むのははじめてであった。ドイツ代表団には三人のIOC委員のほかに、組織委員会のディーム事務総長とスポーツコミッサー代理としてアルノ・ブライトマイアーが含まれていた。

ディームがベルリンの準備状況について中間報告をしたとき以外は、委員でない二人は勿論会議に参加することは許されなかった。しかし二人は式典には参加できたし、会話に加わることもできた。

議事録によれば、執行委員会は6月5日に「1936年のベルリンにおける第十一回オリンピック大会の問題」について最初の論議をした。しかし議事録には議論の詳細は記載されていない。おそらくレヴァルトとの会話に基づいて書いたと思われるディームの6月5日の日記がおおよその内容を伝えてくれる。

「レヴァルトがフリックの手紙を執行委員会の会議で読み上げるようにしたので、36年大会は我々にとって確実なものになったように思われる。ドイツの組織の承認には何の問題もなかった。焦点はユダヤ人問題であった。フリックの手紙は原則としてユダヤ人を除外することはないと宣言していた。IOCはそれを信用した。この手紙の写しはファイルされ、その立場は勿論公にされ

た。これを秘密にしておくことなど考えられなかった。ユダヤ人の除外は大会の中止を意味した
だろうからである。アメリカ代表(シェリル)は沢山の手紙と電報を示した。即ちドイツの誓約がな
ければドイツはオリンピック委員会に留められないということであった。」

二日後、この問題はバイエ-ラツール再選の直後のセッションの最初の会議で扱われた。バイエ-
ラツール会長は状況を簡単に説明し、ドイツ人委員は「担当大臣」に全ての段階で情報を伝えて
きており、今日以下の宣言をすることになっていると言った。

「国際オリンピック委員会会長はドイツ代表に対し、彼らが組織委員会と参加資格規則に関する
憲章の遵守を保証することができるかどうかを質問している。

三人の委員を代表してH.E.レヴァルト博士は政府の同意を得て以下のように回答した。1)ドイツ
オリンピック委員会は委託された権限を以下のメンバーからなる特別組織委員会に付託した。

H.E.レヴァルト博士、会長、
アドルフ・フリードリヒ・メクレンブルク-シュヴェーリン公爵、
リッター・フォン・ハルト博士、
フォン・チャンマー氏、ドイツオリンピック委員会会長、
ザームベルリン市長、(国會議員?)
ディーム氏、事務総長

2)全てのオリンピック規則は守られる。

3)ドイツのユダヤ人は、原則として、第十一回オリンピアードの大会のドイツチームから排除される
ことはない。

残念なことに、ディームの日記の記述から発見が期待されたフリックの手紙の写しが、EC会議の
ファイルの中にないので、このIOCでの宣言が、大会のベルリン開催を確保するためにナチスの
内務大臣が自ら書いた手紙ですでに述べた譲歩をさらに広げたものかどうかを正確にいうことは
できない。

この問題の基本的な状況についての証拠は、IOC資料館に残るレヴァルトの上記宣言に関する
草稿と、アメリカ人、シェリルが6月12日パリからアメリカのラビ、ワイズに宛てて書いた手紙に見る
ことができる。シェリルは手紙の中でドイツ人のさらなる譲歩を自分の功績に帰している。

これに照らしてみれば、ウィーンでのものごとの展開がおおよそ次の様なものであったと想像され
る。すなわち、ECの会議はフリックの手紙を受理したが、委員は十分に満足すべきものとは思わな
かった。とくにシェリルは明らかにさらに正確な文言を求めた。これはドイツのユダヤ人に対する特
別な同情のためではなかった。それどころかシェリルは反ユダヤ主義者で、ヒトラーの賛美者であ
った。しかし彼はアメリカ合衆国で高まりつつある抗議運動の風向きを考慮に入れねばならなかつ
た。

そのうえ、レヴァルトはウィーンのドイツ大使館を通じてベルリン政府の同意を取り付けて宣言を
書いた。これがセッションを満足させたのである。

しかし、本質的な改善はほとんどされなかった。というのは、ディームの開催準備の経過報告はド
イツの保証についての議論に先立って行われたが、6月7日の日記に次のように記している。なお
この議論に彼は加わることを許されなかった。

「政治問題は前もって決着していた。委員はドイツが必要な保証をしたというバイエ-ラツールの言葉を聞いたが、正確な文言を求めた。すなわち原則として、ユダヤ人が排除されない、という言葉である。アメリカ人、シェリルは次のように言った、自分はオリンピック大会でドイツが、絶対に、自国のユダヤ人を他の国からやってくるユダヤ人より悪い扱いをしないように望む。」

ベルリンはこうして大会開催の権利を確保したし、憲章に従って、レヴァルトはIOCに対しガルミシュ・パルテンキルヘンが冬季大会を開催することを発表することができた。

論文ではしばしば、IOC、場合によってはバイエ-ラツールが、ナチスに対して弱腰であった、慙懣であったと判断されてきた。しかしIOC会長も、ほとんどの彼の同僚も、1933年6月の時点で、ヒトラーとその党の大臣や国務長官らが協定や契約に従うつもりがないことを知るはずがなかった。

IOCがドイツから大会開催権を取り上げなかったのは、ドイツがオリンピックムーブメントに復帰して以来十年近く、共に働き信頼関係を築いていたレヴァルトとその周辺を信頼したからであるのは疑いのないところである。

党の支配するドイツの新聞、「フェルキッシャー・ベオバハター」がウィーンでの決定に関して「新しいドイツにとっての成功」と書いたのは、せいぜいのところ半分しか真実ではなかった。何故なら、当時、IOCもまた、オリンピックの原則に固執することによって、ナチス政権から望ましい譲歩を何とか勝ち取ったと成功をうたうことができたからである。

2.6.4.5. 増大するナチスの影響力

1933年7月5日、ベルリン組織委員会は委員会自体に対して新しい規則を施行した。理事会と委員会は拡張されて、多くの政府代表と軍代表を含むようになった。

これ自体は異常なことではなかった。1894年のオリンピック委員会設立の kongress の決議のなかでもハッキリと呼びかけられていたが、オリンピック大会の実施は(1896年以来) 国の援助なしには不可能であった。

問題は、新しいメンバーの大部分が熱心なナチス信奉者であり、彼らのイデオロギーがオリンピックの理念から遠く離れたもので、彼らの組織委員会での仕事に影響を及ぼした点である。IOCが信頼する代表は今や「閉じ込められ」、独立を守るのに汲々とせねばならなかった。彼らの困難は、大会が政府の援助を受けただけでなく、経済的に公債に大きく依存していたために一層深まった。

ヒトラーの指示によって、1933年秋から、当時世界最大のスポーツ施設建設と、組織と執行の両面で前例のない完璧さを可能にするに十分な財源が得られるようになった。

1933年8月、スイスのシャフハウゼンで組織委員会事務総長ディームとクーベルタンとの会合が行われた。クーベルタンとディームは「芸術の総作品」としてのオリンピック大会という理想を分かち合い、文化的デザインについて話した。

ディームと組織委員会、そして宣伝目的のために政府は、クーベルタンが大会に参加するよう懸命に説得した。しかし幾分躊躇ったあと、クーベルタンは参加を断った。

彼自身の参加は、1935年8月4日のラジオのシリーズ番組の開始挨拶と、オリンピアでの聖火リレー出発にあたっての挨拶のメッセージ、そしてオリンピック開会式で放送されるベルリン市へのメッセージに限られた。

2.6.4.6. ユダヤ人問題とボイコットの脅威

この間、1933年後半、ドイツスポーツの「再編成」が続いていた。

「指導者原則」(フューラープリンチップ)がスポーツ連盟とクラブに導入され、フォン・チャンマー・ウント・オステンが帝国スポーツ指導者(ライヒスシュポルトフューラー)に任命され、ユダヤ人(非アーリア人)は全てのスポーツ組織から追放された。

これは外国に知れずにすまなかった。そして数多くの抗議とベルリン大会ボイコットの呼びかけが起こった。これはとくにアメリカで強かった。

この傾向に対抗するため、レヴァルト、ディーム、フォン・チャンマー・ウント・オстенはオリンピックの五つの輪を描いた特別機に乗って宣伝の旅を何回も行った。この旅の際、彼らは多くのIOC委員と各国オリンピック委員会を訪ね、贈り物をした。

バイエラツールは事態の推移を心配し、1933年10月29日、レヴァルトに説明を求めた。レヴァルトはフォン・チャンマー・ウント・オстенと内務省の国务長官、プフントナーに相談し、11月23日、IOC会長に以下の回答を寄せた。

「ドイツ政府もドイツオリンピック委員会も総統に任命されたドイツスポーツの指導者であるフォン・チャンマーも、オリンピック大会へのユダヤ人選手の参加に反対したり、ユダヤ人選手を体操クラブやスポーツクラブから追放するような命令を出したことはない。体操クラブやスポーツクラブが独立の団体として、それぞれの判断でユダヤ人の加入を拒否している限り、何人も認めるように如何ともしがたい。

アメリカ合衆国自体にもユダヤ人メンバーを認めないクラブが何百となくあることは天下周知の事実である。」

何がレヴァルトに、父がユダヤ人であり、彼自身ナチズムの全体主義的目的の犠牲になって組織委員会会長の職を失ったレヴァルトに、このような主張をさせたのかを想像するのは難しい。彼はすべてのスポーツクラブがユダヤ人メンバーを追放しているのを知らなかったのだろうか？ すべてのスポーツクラブが法的には独立であっても、ユダヤ人の会員を認めたら直ちに禁止あるいは解散させられることが、彼にはハッキリ分かっていなかったのだろうか？ 一体、ユダヤ人選手は何处で、何時、オリンピック大会に参加する準備をできると言うのだろうか？

同じように事態を憂えて問い合わせてきたイギリスのIOC委員、クラレンス・アバデア卿に対して、レヴァルトは、ドイツには他の多くの国と同じようにユダヤ人のトップアスリートは数少なく、オリンピックに参加したものも少ないとして、問題を相対化しようとした。続いて1934年5月にアテネで行われたIOCセッションで、ガーランドと共にユダヤ人の扱いによって起こったボイコットの脅しを議題に入れさせたのはアバデア卿であった。

バイエラツールは、自分はこの問題について、ドイツの委員と断えず手紙で連絡していたと報告した。フォン・ハルトは「ウィーンでの約束は忠実に守られてきた」と述べた。「非アーリア人」にオリンピックに対して準備する可能性はあり、ユダヤ人の組織は適当な選手を推薦するよう求められていた。

これらの指示は本当であった。いくつかのクラブは努力して、ユダヤ人選手を英才コースに招い

た。しかし、オリンピックに出るようなトップレベルの選手はこの方法では発見されなかった。そこでフォン・ハルトは「1936年の大会に参加するよう招待されていた有力ユダヤ人選手」の一群の名前をあげた。この中に有名なヘレーネ・マイヤーとルディー・バルがいた。しかし二人とも血筋からいって半分ユダヤ人で、母親はユダヤ人ではなかった。またユダヤ教徒でもなかった。

1935年9月15日のニュールンベルグ法の後でも、二人はドイツ市民権とそれに付随した権利を保持していた。そしてバルは1936年大会の後でさえナショナルチームでプレーを続けた。この件にはIOCの目をくらす企みがあったという印象を拭いがたい。とくに「非アーリア人」という言葉の繰り返し繰り返しの使用がその印象を強める。フォン・ハルトに続いて、レヴァルトも同じ言い方をした。

彼らは明らかにバイエ-ラツールに対してはうまくやっていた。バイエ-ラツールはこの件に付いての一番の懸念を再び強調したときに、ユダヤ人という言葉と非アーリア人という言葉を区別せずに使った。

「オリンピック大会には道徳的欠陥があってはならない。そして大会は、反ユダヤのためにせよ、ユダヤ人支持のためにせよ、主催者のためであれ、その他の誰のためであれ、一切の政治宣伝に使われてはならない。ドイツの非アーリア人がトレーニングし、試合し、参加できるという約束はここにハッキリと厳粛に繰り返されている。」

IOC会長の要求に対し、レヴァルトとフォン・ハルトは再び以下の声明を含む宣言を書面で提出した。

- 「1. 必要な能力があるかぎり、非アーリア人のスポーツマンをドイツオリンピックチームに入れるという、1933年にドイツがウィーンで行った誓いは厳格に守られ、準備のための設備はすべてのスポーツマンに与えられる。」

しかし議論は、公開され公の目的のために使用された二つの議事録が示すよりもはるかに厳しく、込み入ったものであったに違いない。

その夜、ディームは自分の日記に次のように書いた。「IOC委員は明らかにドイツ大会開催を欲した。そしてレヴァルトの絶大な人気が決定的な要因であった。我々は大会を彼一人に負っている。もし彼がいなければ、我々はオリンピックを失っただろう。」

2.6.4.7. 聖火リレー

勿論、アテネのセッションでは来るべき大会の準備についても議論された。とくに1928年大会で開会式に導入されたオリンピック聖火を、オリンピアからベルリンまでトーチリレーすべきだというディームの提案が論議された。

トーチリレーのアイデアは1931年に生まれていた。トーチリレーは古代と現代を結び付け、国々をオリンピック共同体の中に統一する絆を反映するオリンピズムのシンボルとなるべきものであった。クーベルタンとバイエ-ラツールの二人が計画に賛意を表明したのち、1934年5月18日、聖火リレーはアテネのIOC総会に提案され、その日のうちに承認された。そのあと数日間、IOCは、とくにペロポネソスで創立の40周年を祝うことになっていたためギリシャに留まったが、聖火リレーの計画は熱い議論の対象であり続けた。

ギリシャオリンピック委員会の中に、このアイデアに対する情熱をかき立てるのは難しいことではなかった。そしてディームとギリシャオリンピック委員会の事務総長ジャン・ケティアスはこの計画のために手を携えて働いた。

アテネではまた、ベルリンの勝者をメダルと共に月桂樹の冠で表彰する実験の許可が与えられた。

2.6.4.8. むし返し:ドイツのユダヤ人とオリンピック大会

アテネでの保証を実践することを文書で証明するために、フォン・チャンマー・ウント・オステンは7月18日、「ユダヤ人和其他の非アーリア人のスポーツ実践についてのガイドライン」を出した。

再び数人のユダヤ人が準備コースに参加したが予選を通らなかった。

表向きは、クラブが非アーリア人の加入を認めるかどうかはクラブが自由に決められることになっていた。そしてユダヤ人のスポーツ協会に練習グラウンドを使用させるかどうかは、他のクラブが申し込んでいない限り、自治体が決められることになっていた。

これらのすべての融和策と厳粛な宣言は、ユダヤ人、従ってユダヤ人選手に対して現実に開かれている可能性と際立った対照をなしていた。この可能性は日々より厳しく狭められていった。そのため外国での抗議は一層の高まりを見せていた。

今や、他の国に大会を移すには遅すぎた。そしてドイツのIOC委員と政府機関によって与えられた保証があることは、オリンピック憲章のなかに大会をキャンセルする十分な根拠がないことを意味した。

IOCはアメリカやイギリスやその他の国の批判やボイコットの呼びかけに対して、ドイツの「保証」を弁護しなければならないという不愉快な立場に立たされた。

純粋な、非政治的なスポーツが存在するという幻想にしがみついているかぎり、バイエ-ラツールとその同僚と一緒にレヴァルト、ツー・メクレンブルク、そしてディームーは、多かれ少なかれナチスの思いのままにならざるを得なかった。ナチスは厚顔に、冷酷にスポーツを悪用し、オリンピック大会を彼らの政治目的のために利用した。

形式上の状況は如何に正常であったとはいえ、大会の一年前、ベルリンでのオリンピック大会をほとんどお終いにしかねない事態が起こった。

IOC委員のチャールズ・シェリルは、確信的な反共主義者、反ユダヤ主義者でムッソリーニとヒトラーの賛美者であったが、大会ボイコットに反対する彼のキャンペーンを支持するドイツの明確な保証を強く求めていた。彼はヨーロッパへの旅の途中、1935年8月24日、ヒトラーに接見された。その時、彼は独裁者にウィーン宣言を更新するよう求めた。

ヒトラーはその内容を知らなかったといい、そのような宣言はゲストとしてやって来るチームのユダヤ人にのみ適用されるので、ドイツのユダヤ人に適用されるのではないと言い張った。シェリルが大会取消の危険を仄めかすと、ヒトラーは自身の立場を固守し、その場合はドイツのオリンピック大会になるだけのことだと言った。

しかしヒトラーはウィーン声明のテキストを調べさせることに同意した。

1935年8月30日、シェリルはガルミッシュパルテンキルヘンからバイエ-ラツールに報告し、ヒトラーとの会話を知らせてバイエ-ラツール自身が個人的に彼に会うよう求めた。

「ご自身で総統にお話しになるようお願いします。そして総統に、1933年6月の内務省の手紙、1936年のドイツチームからのドイツのユダヤ人排除に関して、貴方がウィーンでベルリンから受け取った手紙を見せて下さい。貴方は貴方の生涯で最も大きなショックを受けることになるのは必定です。」

この間、ヒトラーはウィーン宣言の正確な意味を教えられ、そしてそれを根拠にドイツは「ドイツ市民権を持つユダヤ人選手をオリンピックの水準に引き上げる義務はないのだ」と告げられた。結局、「誰がドイツチームに入れるか」を決めるのは帝国スポーツ指導者であった。この基準によって、ただ一人水準に達していたユダヤ人選手、走り高跳びのグレーテル・ベルグマンは、後にドイツチームに参加するチャンスを奪われねばならなかった。こうした官僚的形式主義にも決して不案内ではなかったヒトラーは、ニュールンベルクの国家社会主義ドイツ労働党(ナチス党)党大会(9月8日から14日)に外交官特権をもつゲストとして招かれていたシェリルに、ドイツはオリンピックのルールを守るという言葉伝えた。そこでアメリカに帰ったシェリルは、アメリカの大会参加キャンペーンを続けた。

大会に反対するキャンペーンは、とりわけアメリカで勢いを増していた。とくに1935年9月15日、党大会直後、いわゆるニュールンベルク法が施行されてから激しくなっていた。この法律の下では、ユダヤ人はドイツ市民権を与えられず、ドイツ人とユダヤ人の結婚は禁じられ、懲役刑が科せられた。

1935年10月末、IOC会長はヒトラーに会見を求めた。ヒトラーは11月5日に接見した。

ヒトラーとそのスタッフは前もって、彼らが会う人物について入念なブリーフィングを受けていた。

彼らはバイエ-ラツールが何度もドイツでユダヤ人がトレーニングのチャンスを与えられていると保証してアメリカ人の同僚を宥めようと試みたことを知っていた。

そしてバイエ-ラツールが、必要とあらば、1936年の大会をボイコットするのが如何に馬鹿げたことかをアメリカの大衆に説得するために、自らアメリカに旅することを厭わないことを知っていた。

レヴァルト、フォン・チャンマー・ウント・オステン、ディームそしてフリックが同席したバイエ-ラツールとヒトラーの会話の記録は残っていない。

しかしバイエ-ラツールが11月17日にアメリカのIOC委員に書いた手紙から、彼がユダヤ人選手が適切な方法でトレーニングできる保証を再び与えられたという結論を出して間違いないだろう。

「すべて我々の要求どおりになった。つまりヘレーネ・マイヤーとバル兄弟はドイツチームに参加するよう求められている。他のユダヤ人選手もプレオリンピックトーナメントに参加した。アメリカオリンピック協会の小冊子に報告されていることはすべて正しい。」「ヒトラーはさらにそれ以上のことをした。私の要求で、長い論議のあとこの国を訪れる外国人にとって不愉快なポスターをすべて、ベルリンとミュンヘンとガルミッシュから撤去するとヒトラーは約束した。」

IOC会長がここに述べているポスターの件は、大局から見ればあまり重要ではないだろうが、それでもこれはドイツで組織的にかき立てられていた反ユダヤ感情が主としてどういう角度から見られていたかに光を当てるものであるし、オリンピックの調和を乱す源となりかねないのがナチのフォン・ハルトだけでないことを明らかにする、よすがとはなる。

1935年4月、ガルミッシュパルテンキルヘンを訪れたディームは、多くの場所の入口に「ユダヤ人

お断り」の言葉が書かれた掲示を見た。彼はフォン・ハルトにこうした敵意を露にしたものを取り去るよう手紙を書いた。

フォン・ハルトは求めに応じたが、国務長官、プフントナー宛の1935年5月14日の手紙に、彼の気持ちが無処にあるかをハッキリ明かしている。

「国務長官殿、私がユダヤ人を助けるために心配しているのではないことを確認してくださるようお願いします。私の懸念はオリンピックの理念とオリンピック大会にだけ向けられています。何年ものあいだ私はボランティアとして私のすべての時間をそのために捧げてきました。もしオリンピック大会が上に述べたような理由によってドイツで行われなくなったりしたら、私にとって生涯最大の失望となるでしょう。」

5月28日のレヴァルト宛ての手紙の中で、彼はさらに計算された言葉で自分を表現している。

「私は... 国際オリンピック委員会に対して帝国政府がした約束についてこの機会に率直に申し上げたい。私はリーベル高等法院判事が言及している掲示は、もし我々がオリンピックを開催するのであれば、あり得ないことであると述べた。そしてもしこれらの掲示が直ちにに取り除かれなければどうなる恐れがあるかについて概略申し述べた。私はこのナンセンスが直ちに終わりにされなければ、ガルミッシュ大会が失敗し、ベルリンオリンピックが取消になると話した。」

2.6.4.9. アメリカをボイコットさせようとして失敗したヤンケの試み

バイエ-ラツールのヒトラーとの会見のあと、フォン・ハルトはアメリカの大会参加を勧めるためにIOC会長のアメリカへの旅の経費を賄うことを示唆した。

しかし当時アメリカオリンピック委員会会長であったアベリー・ブランデーは、シェリルやガーランドと共にアメリカの参加を支持していたが、この提案はかえって逆効果になる恐れがあるとして断った。

三番目のアメリカIOC委員アーネスト・ヤンケだけがそれまでベルリン参加についての意見を表明していなかった。そして1935年11月に、バイエ-ラツールとレヴァルトからボイコット反対キャンペーンに支持を求められた時、彼は公開書簡で回答したが、その中で自分は良心に従って、アメリカが大会参加を犠牲にすることを呼びかけている人達と連帯すると述べた。しかし親ベルリンググループは遂に勝ちを制し、12月初めのAAU会議でアメリカチームを派遣する決定がなされた。

バイエ-ラツールとレヴァルトは直ちにヤンケを厳しく攻撃した。レヴァルトはヤンケにはオリンピックの理念を根拠に議論する権利はないと主張した。IOC会長はヤンケにIOC委員をやめるようにとまでいった。

ヤンケは1936年2月7日再びバイエ-ラツールへの手紙で自分の立場を弁明し、辞任を拒否した。その結果、ガルミッシュパルテンキルヘンのIOCセッションでは、出席者が少なかったため追放の投票は行われなかったが、ヤンケとの往復書簡のコピーを全メンバーに配付することを決めた。ベルリンのセッションの時までにヤンケは辞任しなかったため、彼はそこで全会一致で追放された。この投票で、ガーランドはヤンケの行動に賛成していなかったが棄権した。アベリー・ブランデーはヤンケの後任としてIOC委員に選ばれた。

2.6.4.10. ナチスの宣伝の道具に使われたオリンピック

バイエ-ラツールのヒトラー訪問とアメリカの大会参加決定のあと、抗議の波は退潮し、ドイツの準備状況と参加国が主な関心の的となった。

1936年2月6日のガルミッシュパルテンキルヘン冬季オリンピック大会開会の直前、さらにもう一度、IOC会長と総統との短い会見があった。この会見にはフォン・ハルトも地元組織委員会会長として同席した。

バイエ-ラツールはヒトラーに、今やIOCが大会の全責任を負うこと、大会がいかなる政治宣伝もなしに行われるべきこと、国家元首は開会に当たって規定の文言だけを宣言すべきことをひるむことなくハッキリと告げた。伯爵は開会式の式次第を紙に書いてヒトラーに手渡した。ヒトラーは皮肉っぽく次のように答えたと言われている。

「私はこの文言を暗唱できるよう全力を尽くします。」

冬季大会そのものは組織の面でも、競技の成績の面でも、そして一般大衆の参加という面でも成功であった。

国際的に激しく非難されたドイツのロカルノ条約破棄やそれに続くドイツ軍のラインラント非武装地帯進駐にもかかわらず、ベルリン大会は今や支障なく開催されていたが、その間、ナチス政権は、形式的には規則に反することなく、再三再四大会を自分たちの宣伝に使うことに成功した。

1936年7月29日の第36回セッション開会に当たって、バイエ-ラツールとレヴァルトだけでなく、ヒトラーの代理、ルドルフ・ヘスやフォン・チャンマー・ウント・オステンも演説した。ヒトラーは開会式の夕方、IOCのために催されたレセプションで、更に大きな宣伝効果をあげた。1935年12月11日に、フォン・チャンマー・ウント・オstenはヒトラーに、1936年大会を記念して古代オリンピックの遺跡発掘を完成するための経費を出すことを提案していた。これはディームが1934年と1935年、オリンピアを訪れた際に既に持ち出していたアイデアで、レヴァルトの賛成を得ていた。

ヒトラーは必要な大枚30万ドイツマルクのクレジットを承認し、セッションの開会前のIOC委員を招待した朝食会でこの決定を発表した。

「私は、1936年のベルリンにおける第11回オリンピアド祝賀の永遠の記念として、古代オリンピックの祝祭と競技の施設の発掘をもう一度取り上げ、完成することを決意した。」

オリンピアの発掘作業は1936年8月15日に始まり、大戦の勃発以後も続けられた。

1952年、ディームの75才の誕生日に、ドイツスポーツ連盟はスタジアム発掘完成に必要な金を献金した。1961年、アテネの第59回IOCセッションと第1回国際オリンピックアカデミーが行われた際に、ディーム臨席のもと、オリンピアのスタジアムが厳かにオープンされた。

IOCの力では防ぐことのできない多くの違反はあったが、儀典上のハッキリした違反が起きたときは、バイエ-ラツールは介入する勇氣を持っていた。

大会初日、ヒトラーは白人アーリア人種で最も良い成績を上げた三人の選手を自分のボックス席に呼んで個人的な祝福を与えた。IOC会長はフォン・ハルトを通じて、これはオリンピックの規則では許されないことを告げた。ヒトラーは謝罪し、それ以後、ドイツ人メダリストだけを私的に祝福した。

2.6.5. 東京／ヘルシンキ 1940年—開かれなかった大会

2.6.5.1. 開催都市指定と最初の準備

1940年大会の開催都市指名についての最初の痕跡はロサンゼルス大会の際に開かれたセッションの議事録に見られる。しかしそこでは、後に熱心な候補者となるヘルシンキ、東京、ローマのうち一つの都市だけが名前を挙げられている。それはフィンランドの首都、ヘルシンキであった。

その後二年間、この問題は非公式に論じられていたが、1935年、決定をしなければならないオスロのセッションで、IOC委員の杉山丈太郎、アルベルト・ボナコッサ伯爵、エルンスト・クログウスがそれぞれ、東京、ローマ、ヘルシンキの招致演説をした。しかし、投票はまた延期された。

ベルリンセッションの数週間前、ムッソリーニは、二人のIOC委員の訪問を受けて、1940年に紀元2000年を祝う日本の求めに応じてイタリアが招致を断念することに同意していた。そのため日本とフィンランドの首都だけがベルリンで争うことになった。

支持、不支持の議論が再び交わされた。バイエラツールは両方の都市に対する推薦を発表することができたが、日本に対する好意の方がより鮮明であることが明らかになった。東京を押すIOCの最終決定はまた、大変な距離を埋め合わせる日本の寛大な旅費援助の申し出によって影響されたことは明らかである。

それに将来の枢軸国、日本、イタリア、ドイツの間の協力関係は既に露になっていて、それらの国のIOC委員は東京支持のブロックを形成していた。

この結果は勿論、日本で大きな喜びと同意をもって受け止められ、日本のIOC委員は皇室からの御下賜金をもって成功をねぎらわれたほどである。

東京の組織委員会は1936年12月9日に結成され、1937年5月からはヨーロッパやアメリカに準備状況を知らせるため、フランス語、英語、ドイツ語、スペイン語(隔月)のブレッティンを発行した。

技術顧問、クリングベルクはIOCに対する最初の報告を1937年6月の第37回セッションで行った。そのなかで、彼は予定される競技名を発表し、選手村の宿泊の援助に選手一人当たり一日1.5ドルの数字をあげ、海上運賃に一人当たり500円の補助を約束した。これは運賃をおよそ1700円に減額するものであった。また大会の正確な日付もワルシャワで論議された。そして8月末から9月はじめのスケジュールが投票で決定された。

2.6.5.2. 日中戦争—オリンピックへの脅威

1937年7月7日、日中紛争は公然たる戦争へと拡大した。日本軍は中国へ侵入し中国領を占領した。アメリカは蒋介石の率いる中国政権を支持し、間もなく日本でのオリンピックに反対する抗議の波が感じられるようになった。

そしてIOCは1938年3月半ばのカイロとナイル河上でのセッションで立場を明確にしなければならなくなった。中国のIOC委員、チェンティン・ワンの、大会を他の場所に移すよう明確に求めた電報が読み上げられたあと、バイエラツールは、現在の状況ではオリンピック憲章によってそのような動きを正当化することはできないという見解を表明した。

多分さらに当たり前といえば当たり前だが、日本のIOC委員、加納治五郎も日本で大会を開催すべきでないとは一向に思っていなかった。

IOC全体としては、結局のところ、予定された大会の期日迄に敵対行動が終わっていない場合のみ、日本は大会を返上すべしという見解に落ちついた。

それからセッションは当初の議題に返り、東京での準備状況を議論した。冬季大会については既に二日間論じられていた。東京大会の事務総長、永井松造とクリングベルクは大会の財政の詳細、プログラムと施設の計画を報告した。

聖火リレーについては、スウェーデンの自然科学者でアジアの専門家、スヴェン・ヘディンが計画を作り上げていた。オリンピアから東京への道はディームの助言によって大部分陸上ルートになっていた。これをスウェーデン人の同僚、クラレンス・フォン・ローゼン伯爵が説明し、結論はでなかったが、IOCによって論議された。

また、大会の期日についてさらに議論された。主催者はワルシャワでの決定に不満だったのである。クリングベルクが提出した気象データによれば8月の東京はあまりに暑く、湿度が高い。彼は9月末から10月はじめをより適切な時期として提案した。

IOCが遅い会期(9月21日から10月6日)に投票するとアメリカの委員、ブランデーは猛烈に抗議した。彼の意見は本国で広い支持を得た。新しい会期はアメリカの大学の学期の真ん中に当たったので、大学生であるアメリカの選手は東京大会を取るか勉学を取るかの選択を迫られることになるのである。その結果はおそらくアメリカチームの顕著な弱体化となったであろう。

日本、イタリア、ドイツの委員は遅い会期に投票したので、IOCのなかにファシストブロックができたと言われた。しかしワルシャワに出席していたこれらの国の五人のIOC委員がまとまって投票しなかったとしても、投票の結果は17対8の一方的なものだったので、結果に違いはなかっただろう。

IOCは、とりわけ英語を話す国々で兆し始めた日本でのオリンピックに対するボイコット運動にもかかわらず、一度選んだ会場、東京に固執した。とはいってもIOCは、中国における戦火の拡大を非常に心配していた。

「公式の」セッションが終わったあと、さらに3月18日、秘密の執行委員会がもたれた。ECは日本が大会を放棄した場合必要な決定をする権限を与えられていた。

ヘルシンキとオスロが夏と冬の大会または夏か冬の大会を開催することに同意していた。そしてもしフィンランドの首都にとって準備時間があまりに短いという事態になったら、ロンドンが最後の瞬間に何時でも肩代わりすることになった。

バイエ-ラツールはセッションの終わりに「日本の人達へ」と題するラジオ演説で、状況の深刻さに言及し、大変回りくどい言い方ながら、もし軍事紛争が直ちに終わらないならば、大会を返上するよう責任ある人々に訴えた。

2.6.5.3. フィンランド、大会を肩代わり

1938年7月15日、日本はどうとう大会を返上した。そしてエルンスト・コルギウスがバイエ-ラツール会長に大会をヘルシンキで開催できだろうと通知するや、フィンランドでは熱烈な歓迎の声が起こった。丁度二年前、日本で起きたのと同じような歓迎ぶりであった。新聞は号外をだし、必要経費を保証する基金の応募は直ぐに満額に達した。

8月18日には組織委員会がつくられ、ヨハン・ウィルヘルム・ランゲルが会長に任命された。彼は

郵便投票によって直ちにIOC委員となった。郵便投票はこれが最後になった。V.A.M.カリコスキ中佐が事務総長に選ばれた。執行委員会は9月3日までに、1940年ヘルシンキ大会のプログラムに取り組むことができた。

フィンランド国家とヘルシンキ市は三億フィンランドマルクを提供した。この金で組織委員会は1934年のスタジアムのスタンドの収容人員を6万人に拡大すること、他の必要な競技施設、それにオリンピック選手村の建設ができることになった。

また聖火リレーのルートも検討された。オリンピック聖火はベルリンを経由してヘルシンキに到着するはずであった。プレスサービスは全部で10号まで出たが、準備状況を8か国語で報告した。

クロギウスとカリコスキが1939年6月にセッションで報告を行ったとき、彼らは招待状と詳細なプログラムを提出することができた。IOCは非常な満足を示し、準備期間が短かったことを理由にホッケーを行わないことに同意した。

1940年の冬季大会も国際スキー連盟(FIS)との紛争にもかかわらず、開催可能に思われたので、会場はガルミッシュパルテンキルヘンが適当とされた。IOCは将来に確信を持っていた。会長バイエ-ラツールは1940年大会に関してIOCは政治的影響から自由な決定を下すことができたという意見であった。

1939年9月4日、ヒトラーのドイツがポーランドを攻撃した3日後、フィンランド組織委員会は会議を開き、事態にかかわらず仕事を続けることを決めた。その後直ぐ、フィンランドも軍事紛争に巻き込まれずにすまないだろうということがハッキリしてきたが、組織委員会は数週間後、大会開催に向けて進む決意を再確認した。

その間、当然のことながら事態についてもっと現実的な見方をしたバイエ-ラツールは、戦争中でも大会を開催すべきか、もしそのような大会が開催されたとして選手は政府から参加を許されるだろうかについて、各国オリンピック委員会と国際競技連盟に回状を回して意見を聞いた。

しかしヘルシンキで開催を準備する人達はこの質問への回答によって自分たちの運命が決められることを望まなかった。ドイツが冬季大会を1939年11月22日に放棄したのに対しても、フィンランド組織委員会は最初、大会開催を諦める動きを見せなかった。

1939年11月30日、ソ連がこの小さな隣国に攻撃をしかけて始まり、1940年3月12日、一方的な休戦によって終わったフィンランド・ソビエト冬戦争の敗戦の後でさえ、彼らは大会を諦める動きを見せなかった。フィンランド組織委員会がついに諦めたのは、1940年春、ドイツ軍がスカンディナ비아占領をはじめた時であった。

彼らは自分たちの決定を1940年4月23日、バイエ-ラツールに打電した。

そしてバイエ-ラツールは1940年5月2日の回状で、IOC委員に通知した。

この手紙で彼は真の理由、戦争を名指しすることをせず、単に、組織委員会が大会を開催することが不可能であり、オリンピック憲章の第2条によって第XIIオリンピックの大会は行われな
い、とだけ述べた。

2.7. オリンピック冬季大会

2.7.1. 冬季大会の導入

既に述べたように、クーベルタンはオリンピック大会全般への女性の参加を防ぐことに成功しなかったが、それ以上に、冬季大会の導入反対にも成功しなかった。

フィギュアスケートがプログラムにのる最初の冬の競技となった1908年のロンドンでのささやかな始まりのあと、1920年のアントワープでアイスホッケートーナメントが付け加えられた。

1921年のローザンヌでのオリンピックコンGRESSは、将来、オリンピック大会と関連して冬の競技ウィークが開催されるべきことを決めた。しかしこれは当該開催国が必要な地理的条件と組織上の条件を満たすときに限る、とされた。

結局、1925年、IOCはプラハで夏とは別のサイクルの冬季大会を導入することを決めた。これはオリンピック大会と同じルールで、同じ年にIOCの決める場所で行われるが、その決定に当たっては夏の大会の開催国が第一優先権を持つとしている。

次のコンGRESSと国際スキー連盟は、1924年の国際ウィンタースポーツウィークをさかのぼって「第1回オリンピック冬季大会」と認めて欲しいという希望を表明していたが、この希望はIOCの1926年のリスボンセッションで満たされた。

2.7.2. サンモリッツ 1928年

1923年のローマでの第22回IOCセッションで、オランダの委員が、自分の国は気象上の理由で国際ウィンタースポーツウィークを開催することができない、だから他の国、例えばスイスのような国に急場を凌いでもらいたいと述べた。さまざまな関心ある国がオランダオリンピック委員会に接触し、オランダオリンピック委員会はそれをIOCに伝えた。

プラハのセッションでスイスの委員、ゴッドフレー・ド・ブロネーがスイスによる招致を発表した。

1925年11月のパリでの執行委員会－バイエラツール新会長の下での第1回会議－でブロネーは開催可能な場所として三つのスイスのリゾートの名をあげた。サンモリッツ、エンゲルベルク、ダボスであった。

スイスオリンピック委員会が早い決定を求めたので、バイエラツールは郵便によってIOC委員にサンモリッツに投票させようとした。ところがエドストレームの提案でECは直ちにアップーエンガディンのリゾート(訳注:サンモリッツ)に決定してしまった。そしてスイスオリンピック委員会が必要な保証を準備出来次第、IOCに通知されることになった。

しかし、1926年3月、パリでの次のEC会議で、スイスの三つのリゾートからの招致と保証がすべて提出され、決定はその年のリスボンでのIOCセッションに付託された。

サンモリッツとダボスが凌ぎを削った長い議論の間には二つのリゾートで競技を分ける案さえ考えられたが、最後にIOCは22対1という投票によって、はっきりとサンモリッツを選んだ。そのあと、オリンピックのスケート種目をダボスで行いたいと強く求める国際スケート連盟(ISU)からの圧力もあったが、考えが変わることはなかった。

冬季大会の期間は二つの日曜日を含む最大8日間と定められた。しかしIOCも冬季大会組織委員会も決して決定には固執しなかった。

冬季大会のプログラムに関しては、ブラハコングレスは議論の根拠を前年の国際ウィンタースポーツウィークに置くことができた。シャモニーでは16か国からの300人程の参加者が五つの競技の14の種目で競技した。

フィギュアスケートは男子、女子、ペアで行われたが、他の競技は男子だけであった。スピードスケート(500m、1,500m、10,000m、そして四種競技)、アイスホッケー、ノルディックスキー(18km、50km、ジャンプ、複合)、そして最後にボブスレーであった。

コングレスはトボガンをメインプログラムの五つの競技に加えた。

そしてこの結果はオリンピック憲章に書き込まれた。国際競技連盟によって統括されていない競技、例えばこの時はスケルトン(小型橇)やスキーヨーリング(馬に引かせる橇)であったが「デモンストレーション」のタイトルでのみ含まれるという但し書きがつけられた。また特別に軍隊スキー競技も行われるであろうと書かれた。

しかしこの点について、憲章は明らかに非常に柔軟なガイドラインと見なされていた。つまりスイス組織委員会が1926年7月にハーグでプログラムの草案を提出したとき、二人乗りボブスレー競技、トボガン、そして国際スキー連盟(FIS)の要求によって軍隊パトロールスキーレースはリストから外された。

しかしこれは1928年のプログラムについての論議の結論ではなかった。1927年はじめに続いて行われたEC会議で、軍隊パトロールについてさらに熱い議論が戦わされた。

エドストレームはこのようなタイプの軍隊競技はオリンピックの理念と関係ないと考えその主張は優勢だったが、最終的に、この競技はスイスの提案したカーリングに代わってデモンストレーション種目として承認された。

スケルトンレースはスイスがプログラムに含めることを希望した。しかし国際競技連盟がないので憲章によれば許されないはずであったが、執行委員会はこれを承認した。

イギリスの委員、レジナルド・ケンティッシュはこの競技を国際ボブスレー連盟によって行うことはできないので、別の競技連盟をつくる必要があると反対した。しかしこの反対は単なる技術的問題だとして、ECに却下された。

ケンティッシュの疑念は、スケルトン連盟はそれ以後も設立されず、サンモリッツの競技たった一回だけで終わってしまったことで、正しかったことが証明された。

1927年4月のモナコにおけるIOCセッションで、ボブスレーとスケルトンに各国二台のエントリーが認められて、プログラムは14種目に決定された。1928年2月11日から19日の間に行われた大会には、25か国から500人足らずの選手が参加した。

2.7.3. レイクプラシッド 1932年

IOCが、冬と夏のオリンピック大会をどの程度ひとつの単位と考えていたかは、バイエラツールがアムステルダム大会期間中のセッションで、1932年冬季大会開催の可能性のある都市を招くに当たって、北アメリカオリンピック委員会やアメリカのIOC委員ではなく、1932年ロサンゼルスオリンピック大会の組織委員会を招待した事実を示されている。

ローザンヌの第29回セッションでIOCは레이크プラシッド、ヨセミテバレー、레이크タホ、ベアーマウンテン、デュルス、ミネアポリス、デンバーの立候補を受けた。

このうちのいくつかは地元の招致委員会の代表を送った。

カナダの都市、モントリオールの立候補が受け入れられるかどうか議論となったが、バイエラツールはアントワープ以来の歴史的な経過と、とりわけオリンピック憲章に触れる長い演説をして、受け入れられないという意見を支持した。

それにもかかわらず、何人かのIOC委員はモントリオールを支持した。アメリカの立候補都市の組織能力が信頼できなかったからである。ノルウェーのIOC委員、トマス・フィアーナリーは、アメリカの都市が本当に冬季大会を開催する能力ないことが分かった場合、いささか唐突だが、ノルウェーが肩代わりしてもいいと発言した。

エドストレームはレイクプラシッドを支持し、ウィンタースポーツの競技会を25年にわたって開催している経験に言及した。このリゾートは東海岸に近く、ヨーロッパ人にとっては行きやすかった。各競技連盟もここに票を投じた。

レイクプラシッドの代表、ドッドフレー・デューイはヨーロッパのウィンタースポーツのリゾートを長い間旅して研究していたが、求めに応じて、スケルトンのコースの建設と宿泊費（ファミリーメンバーも）がサンモリッツを上回らないことを約束した。

そこでIOCはレイクプラシッドに全会一致の投票をした。

後に、スケルトンのコースの建設は結局非常に高くつくことが判明したし、エントリー数が必要数を満たしそうもなかったので、1930年のベルリンセッションはあっさりとスケルトンをレイクプラシッドのプログラムから外した。

バイエラツールはレイクプラシッドの準備が順調なペースで進んでいることを自分で確かめるために、1930年の夏、現地を訪ねた。そして10月のパリでの執行委員会の会議で肯定的な報告をすることができた。

第Ⅲ回オリンピック冬季大会は、1932年2月4日から15日まで、17か国から男女300人の選手が参加して行われた。1928年と同じように14の種目でメダルが争われた。

二人乗りボブスレーがキャンセルされたスケルトンに代わった。加えて、五つのデモンストレーション種目が行われた。女子スピードスケート、500m、1,000m、1,500m、カーリング、犬橇レース、であった。犬橇レースは、ボブスレー・リュージュ連盟会長、ルノー・ド・ラ・フレゴリエール伯爵が、1928年、サンモリッツでのECと各種ウィンタースポーツ連盟の会長との会議ですでに提案していたものである。

2.7.4. ガルミッシュパルテンキルヘン 1936年

1936年を目指して、夏の大会開催地として選ばれた国が開催不可能になった場合に備えて、モントルーと再びサンモリッツが、1930年のベルリンでのIOCセッションで冬季大会に予備立候補の届け出をした。

しかし1931年のバルセロナでのIOCセッションのあと、ベルリンが郵便投票で1936年大会の開催都市に選ばれたとき、ドイツオリンピック委員会はオリンピック冬季大会開催の優先権を行使することを発表した。しかしロサンゼルスオリンピックの際のセッションで、ドイツの委員、テオドル・レヴァルトは、深刻な経済状態に照らして、注意深く確約を避けた。それでもなお、彼はガルミッシュ

とパルテンキルヘンというごく近い二つの場所を使う形の会場の可能性を仄めかした。

ドイツの躊躇いに促されて、カナダのジェームズ・メリックは、オリンピック大会の開催国が冬季大会開催にも優先権を持つというルールについて議論を始めた。メリックは夏のオリンピックを開催することのできない多くの小さな国も、冬季大会を開く能力は持っていることを指摘し、二つのオリンピックのサイクルを完全に分けることを主張した。

長い議論のあと、バイエ-ラツールはオリンピック憲章の原則の変更は議題にないし、そのような変更はクーベルタンに対する反逆になると訴えるしかなかった。

クーベルタンはこれらの基本原則は不変であるとしていたが、この議論は冬季大会を導入するという変更が既に行われている以上、あまり説得力のあるものとは言えなかった。それにクーベルタンは、冬季大会導入の変更についてはほとんど気かけなかったのである。メリックが1933年のウィーンでのセッションで再びこの議題を持ち出したとき、問題は執行委員会ですらに検討されることになった。

いずれにせよ、ウィーンではもはやドイツの躊躇いという問題はなかった。

ナチスはオリンピック大会を積極的な宣伝に使うことの大きな可能性を認識しており、あらゆる手段を尽くして組織委員会を支持していた。ドイツのIOC委員たちは今や、ガルミッシュパルテンキルヘンを公式に開催場所に指定し、自分自身IOC委員でありながら、ヒトラーの賛美者でもあったカール・リッター・フォン・ハルトが組織委員会会長になることになっていた。

オリンピックのルールがナチスドイツによって無視されるのではないかという恐れが、ドイツ政府の保証によって鎮められると、ベルリンを開催都市として再確認していたIOCは、今度はガルミッシュパルテンキルヘン承認を発表した。

ガルミッシュパルテンキルヘンで1936年2月6日から16日まで行われた第IV回オリンピック冬季大会には、28か国から750人程の選手が競技に参加した。

カーリングと共に軍隊スキーパトロールがデモンストレーションとして三度目の登場をした他、4 X 10kmのノルディックスキーリレー、アルペン複合(滑降と回転)が公式プログラムに新種目として含まれた。また1934年のアテネでのIOCの9対8の投票による決定で女子のアルペン複合も導入された。

アルペンスキーの導入はアーノルド・ルンの生涯をかけた願いの達成であった。

しかし彼の喜びは、アマチュアリズムの章で述べたスキーインストラクターのアマチュア資格をめぐるFISとIOCの紛争によって曇らされていたことは疑いない。この紛争の結果、とりわけオーストリアとスイスのベストスキーヤーが大会出場を禁じられた。そしてFISは一方的に1940年の冬季大会不参加を決定した。この大会は結局、戦争の犠牲になって行われなかった。

2.7.5. 札幌／サンモリッツ／ガルミッシュパルテンキルヘン

1940年の冬季大会をどこで開催するかという問題が初めて論議されたのは、1935年のオスロでのIOCであった。ここでは、それぞれの首都が1940年のオリンピック大会開催地に立候補している、イタリア、日本、フィンランドのオリンピック委員会が冬季大会も開催したいという希望を表明した。

アルベルト・ボナコッサ伯爵は、早くもイタリアの候補地としてコルチナダンペッツオーの名をあげることができた。エドストレームはもし東京が指名された場合、日本は冬季大会開催に困難を感じ

るに違いないのでより小さい国に委託すべきだという意見を表明した。次の年のベルリンセッションで東京が成功を収めたとき、日本人はまだ冬季大会の場所について具体的な提案をできなかった。暫定的に日光と札幌の名があげられたが日光は高さが十分でないことが判明した。サンモリッツ、オスロ、カナダは、もしオリンピック大会の開催国が冬季大会開催の権利を放棄したいと望むなら、1940年の冬季大会を引き受ける用意があることをIOCに通知した。

1937年のワルシャワでのセッションで、冬季大会についてさらに激しい、そして今度は根本的な議論が行われた。そのなかで、エドストレームは、あまりに多くのウィンタースポーツ連盟がオリンピックの原則、すなわちアマチュアリズムに抵触しているので、冬季大会を廃止すべきだとの提案さえした。この動議は26対1で否決された。賛成の1票はエドストレーム自身のものであった。しかしIOCは1940年の冬季大会は競技連盟がIOC参加規則を守る場合に限り開催されると決定した。

日本が優先権を行使するかどうかについての疑いが表面化して、夏の大会を開催する能力はないが、冬季大会の開催能力はある小さな国の問題が再び論議された。

フィアーンリーは再びオスロを提案し、憲章の改正を呼びかけた。その理由は、そうしないと、ウィンタースポーツの生みの親であるノルウェーは冬季大会を開催できるまでにあまりに長い間待たなければならないだろう、というものであった。

バイエ-ラツールは、五年前にあれほど激しく反対したのと対照的に、今や改正に賛成であった。

改正を次のセッションの議題にとりあげることに賛成し、オスロを万一の場合の頼りになる候補者と呼んだ。その時、副島道正伯爵が札幌を冬季大会の会場として提案し、とりあえずこの議論に終止符を打った。彼の提案は満場一致で承認された。

1938年3月、IOCがカイロで会合した時、日中戦争は既に日本のオリンピック大会自体の開催能力に対する疑いを引き起こすまでになっていた。しかしながら、日本のIOC委員と組織委員会のテクニカルアドバイザー、ドイツ人のヴェルナー・クリンゲベルクは、そのような恐れを鎮めるのにおおよそのところ成功していた。冬季大会については事務総長さえ決まらず、日本の組織能力についても疑問が起きていた。日本はまだ冬季大会開催に関心を持っているかとあからさまに聞かれたとき、加納治五郎は強く「イエス」と答えた。

こうして日本が依然開催国と見なされている大会の上には、FISのボイコットの脅しによってさらに黒い雲が垂れ込めていた。FISはスキーインストラクターのためにアマチュア資格を獲得しようと企てていたのである。

スキー競技は冬季大会の中心なので、スキーインストラクターについての態度を変えようとしないうちにIOCは三つの最悪の選択肢のうちから少しでもましなものを選ばなければならないという難問に直面していた。つまり冬季大会を全面的にやめるか、少なくとも1940年大会だけ中止するか、1940年大会を開催するがスキーなしのプログラムとするかである。

ナイル河の蒸気船に集まったIOC委員は、1938年3月13日、FISの圧力に屈しないことを決めた。スキー連盟の巻き添えにして他のウィンタースポーツをひどい目に合わせないために、彼らは第三の選択肢を断固として選んだ。

三日目、冬季大会の開催都市指名に関するルールが論議され、憲章の関連ある条項については、全会一致で会場の決定権は以後IOCのみが持つように修正された。当該NOCも、その場所が冬季大会を全体として開催できるという十分な保証を提出しなければならないことになった。

IOC委員の中には依然として日本が辞退することになるのではないかと恐れている人がいた。結局彼らが正しかったことになるのだが、そのためにセッションのあとに秘密会が持たれた。前にも述べたように、その会議では、辞退があった場合執行委員会には必要な決定をする権限が与えられていた。

フィアーンリーは再び、オスロを冬季大会の代替地として押した。彼はまた、その時にはIOCが例外措置としてFISのスキーインストラクターについてのルールを受け入れるよう希望した。アベリー・ブランドージとクラレンス・アバデア卿は、1940年以後FISが態度を変えることを当てにして、そのような例外を認めることに同意したが、バイエ-ラツールは、アマチュアルールは変えることができないという厳格な意見に固執した。

1938年7月15日から16日の間の深夜に、日本は遂にオリンピック開催権を返上した。

そこでバイエ-ラツールは18日朝、フィンランドのIOC委員エルンスト・コルギウスに救いを求めた。そして次の日、ヘルシンキが1940年のオリンピック大会を引き受けるという保証を得た。冬季大会については、フィンランドは引き受けようとしなかった。一つの理由はボブスレーのコースを作れると思わなかったためである。

その時オスロの可能性はもはやなかった。というのはこの間に、FISがノルウェーの首都をスキーの世界選手権の会場に指定していたからである。冬季大会に直接対抗することを意図したものであった。

その結果、IOC指導部はスイスオリンピック委員会と交渉を始めた。そしてサンモリッツ市が大会開催に同意した。そのプログラムはフィギュアスケート、スピードスケート、アイスホッケー、ボブスレー、リュージュ、デモンストレーションとして軍隊スキーパトロール、スキージャンプ、スキー回転であった。

9月3日、ブリュッセルでの執行委員会は冬季大会を1928年以来再び、エンガディンの世界的に有名なリゾート(訳注:サンモリッツ)に委託し、そこでは直ちに準備が始まった。

1939年3月18日、ローザンヌで、大会開催に関する技術的問題についてバイエ-ラツールと組織委員会の間で議論が起こった。そして二ヵ月後、新聞にスイススキー連盟の圧力のためにスキーのデモンストレーションは行われないという記事が出始めた。

そこでIOC会長は、ECのメンバーであったカール・リッター・フォン・ハルトの斡旋でドイツオリンピック委員会と連絡をとって、もしもの場合、ガルミッシュパルテンキルヘンが引き受けてくれるかどうか打診した。

5月8日、帝国スポーツ総統ハンス・フォン・チャンマー・ウント・オステンはヒトラー官房長ハンス・ラマーにこのことを告げた。ラマーは直ちにヒトラーに報告した。

ヒトラーは勿論、平和愛好国ドイツを世界に宣伝するような機会を見逃そうとはしなかった。彼はポーランド攻撃の準備に忙しかつたにもかかわらず、同意を与えた。

1939年6月6日、第39回IOCセッションがロンドンで始まった。そこで長い議論のあと、IOCが憲章の解釈と大会のプログラムについて唯一絶対の権威を持つことが再確認された。組織委員会はそのルールに従わなければならない。スイスオリンピック委員会は電報で、要求されているスキ

一のデモンストレーションを実施できるかどうか6月8日までに最終的に回答するよう求められた。

その間、ガルミッシュパルテンキルヘン、レイクプラシッド、モントリオールのすべてが、可能な代替地として名前を挙げられていた。

指定の日までに返事が来ないので、締切りを一日延ばすという第二の電報が打たれた。

フィアーンリーのいっそ1940年冬季大会をやめにして自分たちの置かれた不愉快な状況から抜け出そうという提案は、27対2で否決された。

スイスオリンピック委員会から6月9日午後、スキーマのデモンストレーションは計画されてないという返事が来たとき、IOCは大会をサンモリッツから引き上げ、全会一致をもってガルミッシュパルテンキルヘンに移した。

この決定に至るについては、1933年、1934年のセッションで問題になったドイツにおけるユダヤ人の迫害は何の役割も果たさなかった。丁度6カ月前には「帝国のユダヤ人迫害の夜」でそれが誰の目にも明らかなクライマックスに達していたにもかかわらず。またズデーテン併合があったにもかかわらず。

ドイツではフォン・ハルトを会長、ディームを事務総長に組織委員会が作られた。組織委員会は直ちに動きはじめた。スキーマインストラクター問題についての投票のためのFIS特別会議招集が失敗したのに続いて、ディームはスキー種目に代えて、12,000人のスキーマヤーによるデモンストレーションを企画した。これには1,500人の外国人スキーマヤーの参加が予定されていた。そして各国連盟が経済的理由からオスロのFIS世界選手権だけに参加することのないよう、彼らの旅費が負担されるはずであった。

また、初めて女子のスピードスケートが行われる筈であった。IOCは1939年のロンドンセッションにおいて16対11でプログラムに入れることを決定していた。同じセッションで、1944年の冬季大会の開催都市を決める投票が行われ、イタリアのリゾート、コルチナダンペッツオーが二回目の投票でモントリオールをやぶった。しかしこの計画も、1939年9月1日、ヒトラーの命令によりポーランドが攻撃され、第2次世界大戦が始まって虚しくなった。

それにもかかわらず、IOCはドイツ組織委員会が返上する1939年11月22日まで、冬季大会が計画したようにすすめられることを期待しつづけていた。

2.8. 地域大会

2.8.1. 緒言

前に見たように、IOCは従来、オリンピックにとって潜在的脅威となるものを防ぐ点では極めて用心深かった。スタイルや国際的規模や実施される競技でオリンピックに似ている形のスポーツ大会、そしてとくにそこでオリンピックの名が「悪用される」場合には厳しく介入しようとした。

しかしIOCは、多くの地域、非常に遠い距離がオリンピック参加を妨げているような国々では未だにオリンピックの意味におけるスポーツは育てないことをよく知っていた。その発展を助けることはIOCが非常な努力を払った仕事の一つであった。とくに1920年代には、IOC委員を送って大陸や亜大陸のスポーツ大会のいろいろな組織委員会を助け、アドバイスし、後援をする努力をした。

スポーツ発展のための援助の一つのタイプに対する関心からIOCは、これもまた世界的に活動していた組織であったYMCAと接触するようになった。1920年のアントワープセッションのゲストとして出席したYMCAのスポーツ局長、エルウッド・S.ブラウンは、スポーツ後進地域の大会で彼の組織の「オールスポーツフォアオール」のプログラムを如何に推進するかについてのアイデアを説明した。

ブラウンは1921年に上海で開催予定の極東大会、1922年にリオデジャネイロで開かれる南アメリカ大会、そして1914年に予定されていたが戦争のために中止されたインド大会の例を引き合いにだした。彼のYMCAとIOCの協力の提案は委員たちの拍手をもって迎えられた。ブラウンは1921年、1922年、1924年のセッションに出席したが、これは多くのIOC委員より良い出席率であった。そこで彼はその時々開催の迫っている地域大会の準備状況について報告した。

これに続く時期に、IOCは地域大会を後援しただけでなく、地域大会を発足させるに当たってますます大きな役割を果たすようになった。IOCは公式の代表を送り、とくにバイエ-ラツールは地域大会に特別の関心を払った。

バイエ-ラツールは二回目の世界旅行の途中南アメリカの国々を訪れ、そこでのスポーツの発展について多くの議論を重ねたあと、1924年のパリでのIOCセッションで自ら四つの会議、極東大会、ラテンアメリカ大会、中央アメリカ大会、パンインド大会についての会議の議長をつとめた。この会議にはそれぞれの地域に関係のあるIOC委員が出席した。

10年間以下に述べるような非常な努力をしたあと、1934年、IOCは次の地域大会に責任を持つことになった。

「パンインド大会(第1回西アジア大会)ニューデリー、1934年2月27日から3月3日、第10回極東大会、マニラ、5月12日開会予定
第3回中央アメリカ大会、サンサルバドル、1934年12月
バルカン大会、ソフィア」

参加国のIOC委員はこれら全ての大会の組織委員会で積極的に活動した。

開会式と閉会式はオリンピックの式典に習い、主催国の国家元首が開会を宣し、バイエ-ラツールの祝電、時にはクーベルタンンの祝電さえ読み上げられるのが常であった。

2.8.2. 極東大会

第1次世界大戦以前にも、クーベルタンは極東陸上協会に連絡をとっていた。極東陸上協会は当時アメリカの占領下にあったフィリピンのマニラで1913年、YMCAと協力して第1回東洋オリンピック大会を開催していた。

この大会をクーベルタンに「オリンピックの幼稚園」と説明した主催者は、おそらくIOCの要請によって、大会をIOCの監督下に置き、その後「オリンピック」という名を使うのをやめた。第2回は極東選手権という名を使い、その後極東大会の名を確立した。

1927年まで、大会は二年ごとに三つの太平洋の主要都市、マニラ、上海、東京で順に開催された。しかし1930年以後は、四年ごとに各オリンピックの三年目に開催された。

四つのオリンピック競技、陸上、水泳、テニス、サッカーの他、極東大会はバスケットボール、バレーボール、野球を1913年の発足当時から行っていた。これらの競技がそれぞれオリンピックのプログラムに採用される1936年、1964年、1992年よりはるか以前のことである。女性に関しては、1927年、第Ⅷ回上海大会でテニスのシングルスとバレーボールが行われた。これは1928年IOCセッションのバイエ-ラツールIOC会長が議長をつとめた極東大会委員会に提出された報告に見える。

これを聞いて啓発されたバイエ-ラツールは極東大会の結果をオリンピック大会の結果と同じようにIOCブレットインに掲載させた。

とくに成功したのは1930年、東京で行われた第Ⅸ回極東選手権大会で、この成功が1940年のオリンピックに東京が選ばれる理由の一つとなった。

開会式で加納治五郎はIOC会長からの祝電を読み上げ、競技はせまい範囲にまとめられた競技場で行われ、合計30万人の観客が詰めかけた。競技水準は次第にオリンピックのそれに近づいていた。ルールもこの機会に行われた極東陸上協会の kongress の決定で、オリンピックのルールに一致するようになった。

1936年のベルリンIOCセッションで地域大会についての一の実績評価が行われた。

バイエ-ラツールはIOCに対し、極東大会の主催者、極東陸上協会は解散し、その後身、東洋アマチュア陸上協会は中国をメンバーに入れていないことを報告した。

彼の意見では、もはや極東大会には正当性はなく、十分な水準に達した選手はオリンピック大会にのみ参加すべきであった。また極東からも参加する西アジア大会が始まる可能性もあった。しかしIOC委員である日本の副島道正伯爵と中国のチェンティン・ワンは自分たちの間で極東大会を存続させる道を探ろうとした。この動きは第2次世界大戦によって妨げられた。

2.8.3. 西アジア地域大会

1924年のパリセッションで、計画されながら1914年第1次世界大戦のため中止されたインド大会の十年後に、パンインド大会開催の可能性がこのために招集された会議で討議された。しかし第1回西アジア陸上大会がニューデリーの新しく作られたスタジアムで1934年3月開催されるまでには更に10年待たねばならなかった。この大会の推進者はインドのIOC委員グル・ドゥット・ソンディで、インド、アフガニスタン、セイロン、パレスチナの選手が参加した。この際、この大会のための協会が設立され、イランが参加した。

第2回西アジア大会は1938年パレスチナで開催される予定であったが、これも軍事紛争のため、中止になった。

2.8.4. ラテンアメリカ地域大会

1922年、リオデジャネイロの南アメリカ大会はブラジル建国百年祭の頂点となるはずであった。

IOCが後援をし、もしこの大会が成功すれば二年ごとに繰り返される筈であった。1922年のパリセッションで報告したYMCA代表、ブラウンは計画に伴う困難について説明した。南アメリカ亜大

陸の多くのカトリック国は、プロテスタントのYMCAが主役を演ずるこのイベントには乗り気でないだろう。事実参加国は少なかった。

1924年のパリセッションの際、参加国は1925年のプラハセッションまでに、次の大会のプログラムと会場について意見をまとめるよう求められた。この期日は虚しく過ぎてしまった。アルゼンチン、ペルー、チリ、パラガイ、そしてYMCAは第2回南アメリカ大会の会場を一気に決めてしまおうと、1928年 7月31日、アムステルダムで会合した。

しかし1922年の経験と、亜大陸の広大さと、ほとんどのメジャースポーツで南アメリカ選手権が確立されていることから、彼らは反対に、自分たちの大会を開催する努力はしないと決定してしまった。この決定は、この地域の選手がオリンピックに沢山参加したことによって支持される形となった。

もっと成功したのは中央アメリカ大会で、やはり1924年のパリで出発した。第1回大会は1926年、メキシコシティで、第2回は四年後ハバナ(キューバ)で開催が予定された。このように最初からオリンピックの四年サイクルでオリンピックアードの中間年に競技が考えられていた。1924年12月にメキシコに「国の評議会」がつくられ準備を始めたのに続いて、コロンビア、コスタリカ、キューバ、グアテマラ、ハイチ、ホンデュラス、ジャマイカ、ニカラガ、パナマ、サルバドル、そして主催国メキシコが参加して、1925年10月同じ場所で「全体評議会」が行われた。

この会議で、第1回大会を10月12日から11月2日までの三週間とし、プログラムを決めた。プログラムは五つの競技グループ、つまり「陸上」(トラック、フィールド)、「フェンシング、射撃」、「水泳」(男子、女子)、「馬術」(ポロ)、そして「ゲーム」(男女のテニス、バレーボール、野球、バスケットボール、サッカー)から選んだ10種目からなり、「ハリペオメキシカーノ」のデモンストレーションも含まれた。

中央アメリカの主催者とIOCがこの大会をオリンピックムーブメントと密接に結び付けようとしたことは、いくつかの点から明らかである。すなわち、大会の運営委員会のテクニカルディレクターはIOCによって指名され、各国の委員会はIOC委員を含み、バイエラツールは大会の名誉審判団に指名された。そして第1回大会の「一般ルール」とプログラムがIOCブレッティンに掲載された。そこには例えば次のような文言が見える。

「中央アメリカ kongress の会議で承認され、1924年7月4日、パリの国際オリンピック委員会で公認、後援されることになった。」

さらに1928年8月1日、IOCセッションの行われているアムステルダムで、中央アメリカ大会についての特別会議が開かれた。この会議には、コスタリカ、パナマ、サルバドル、グアテマラ、メキシコ、ハイチ、それにYMCAの代表が参加した。会議では、この大会がオリンピックの準備に大変適しているとされた。議論の主な焦点は1930年にハバナで予定される第2回大会であった。第2次世界大戦までに、この大会はさらに二回開催された。竜巻のため一年延びた1935年のサンサルバドル大会。そして1938年のパナマシティでの中央アメリカ・カリビアン大会である。

1938年にはまた、IOCが1936年のベルリンセッションで討議していた、第1回ボリビア大会がコロ

ンビアの首都ボゴタで開かれた。この大会は、自由の戦士、シモン・ボリバルの思い出に捧げられ、シモン・ボリバルに多くを負う国々、植民地勢力からのラテンアメリカ開放運動によって19世紀初頭に生まれた国々の選手を対象とした。

2.8.5. アフリカ大会

IOCの努力がもっぱらアジアと南アメリカに注がれていたのに対して、クーベルタンは1923年のローマセッション開会の演説で、未だ空白の大陸アフリカを思い起こし、アフリカの「征服」に彼の会長職の最後の目標を置いた。「それ故に、躊躇わずアフリカの参加を助けよう。資格のある勢力の代表がわれわれと話し合うためにここにやって来た...」

セッションに関連して、植民地勢力の代表がローマで会合し、アフリカ大会をアフリカ大陸のいろいろな都市で二年ごとに開く計画を討議した。

この委員会は、大会には「原住民」だけが参加できるようにすべきだという、クーベルタンの提案を拒否した。クーベルタンは特別の組織委員会を作り、地域的な性格の強い単純なプログラムでやるべきだと考えていた。委員会はそれに加えて、アフリカに少なくとも二年以上住んでいる植民者も参加できるような競技も用意すると決議した。

IOCは結局、1923年4月9日、第1回アフリカ大会を1925年アルジェーで、第2回大会を1927年にアレキサンドリアで開催すると決定した。

しかし1924年のパリでの次のセッションで、IOCはアルジェーにおける運営上の困難から、アフリカ大会の開催を1927年のアレキサンドリアまで延期せざるを得なかった。

1926年4月、詳細な招待状がIOCブレッティンに掲載された。大会自体はオリンピックプログラムの縮小版で、陸上、自転車、体操、重量挙げ、フェンシング、グレコローマンレスリング、イングリッシュボクシング、ローンテニス、サッカーであり、それにエジプトのナショナルスポーツ、ナブート（「剣道」）と「馬のファンタジー」がアフリカ生まれの男子アマチュア選手だけに参加が認められた。

しかしそれに加えて、1923年のローマの決議に従って、二年以上エジプトに住んでいるアフリカ生まれでない選手のための競技も行われることになった。

しかしスタジアムの建設が計画どおり進まないで、1926年はじめ、ボナラキはIOC会長、バイエラツールに大会を1929年まで延期するよう要請せざるを得なかった。

代わって開催する国も見当たらなかったのも、執行委員会とセッションは同意するしかなかった。エジプトのIOC委員の示唆で1927年と1929年のセッションで再び長時間にわたって参加資格の問題が論じられた。その結果、アフリカ生まれの選手と共に、アフリカに住んでいる選手も制限なく参加できることになった。

この間、スタジアムが完成に近づいていた。そしてファード国王による大会の公式の開会が1929年4月5日に予定された。IOCセッションがアレキサンドリアで3月31日開始が予定され、一緒に開催される文化プログラムも既に準備を終わっていた。

その時、わずか数週間を前に、植民地勢力のイギリスとフランスがイベント開催に待ったをかけた。執行委員会は急いでセッションをローザンヌに移した。

そこでは最近の一連の出来事が論じられ、北アフリカ大会、或いは地中海大会の可能性が提起された。ボナラキは欠席していたが、彼の疲れを知らぬ貢献を感謝された。

アフリカ大会は差し当たり失敗した。そしてアフリカ大会を開催しようとする努力は第2次世界大戦終了の後まで再びなされることはなかった。